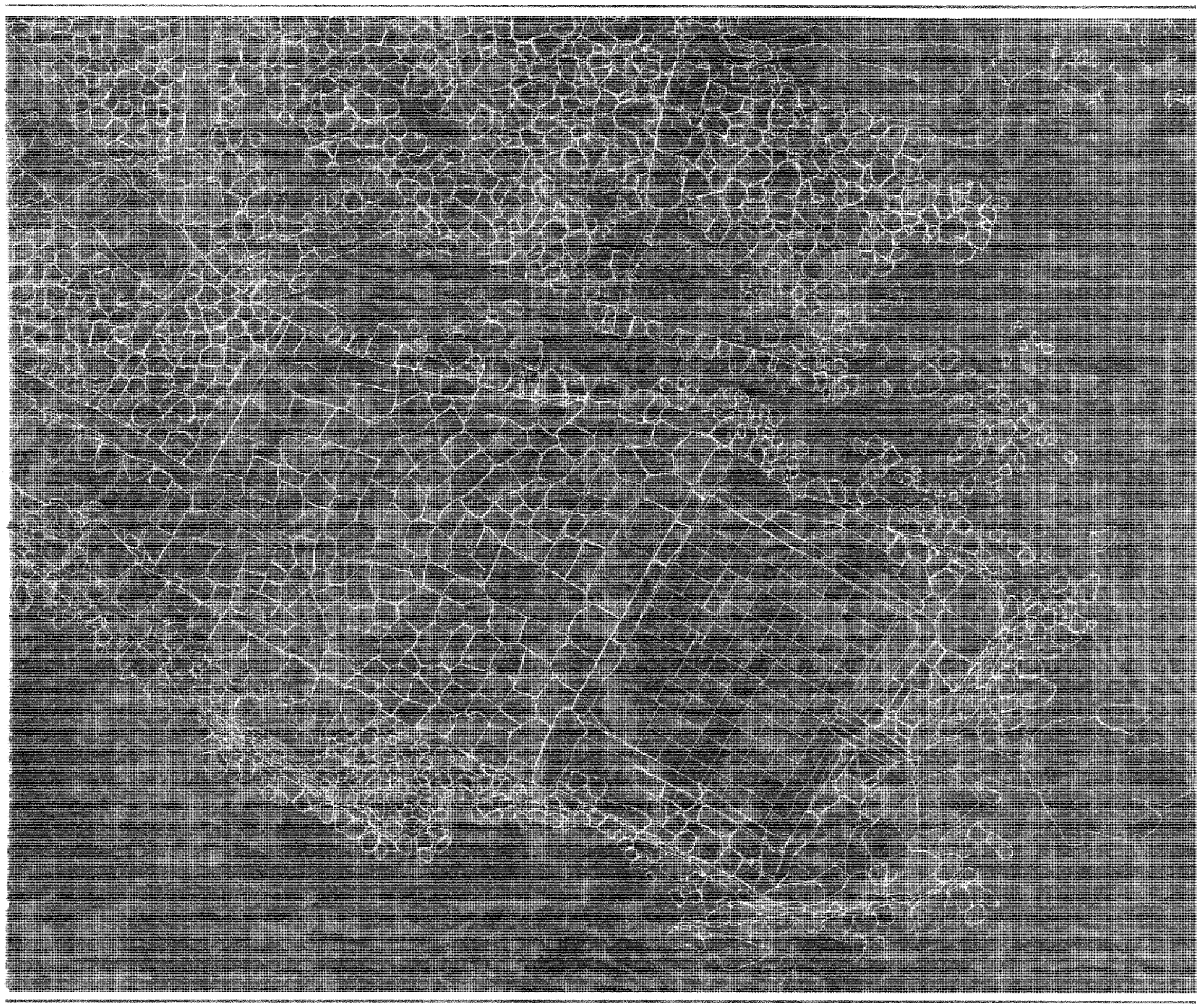
沖縄県文化財調査報告書第88集

首　里　城　跡

歓会門・久慶門内側地域の
復元整備事業にかかる遺構調査



昭和63年3月

沖縄県教育委員会

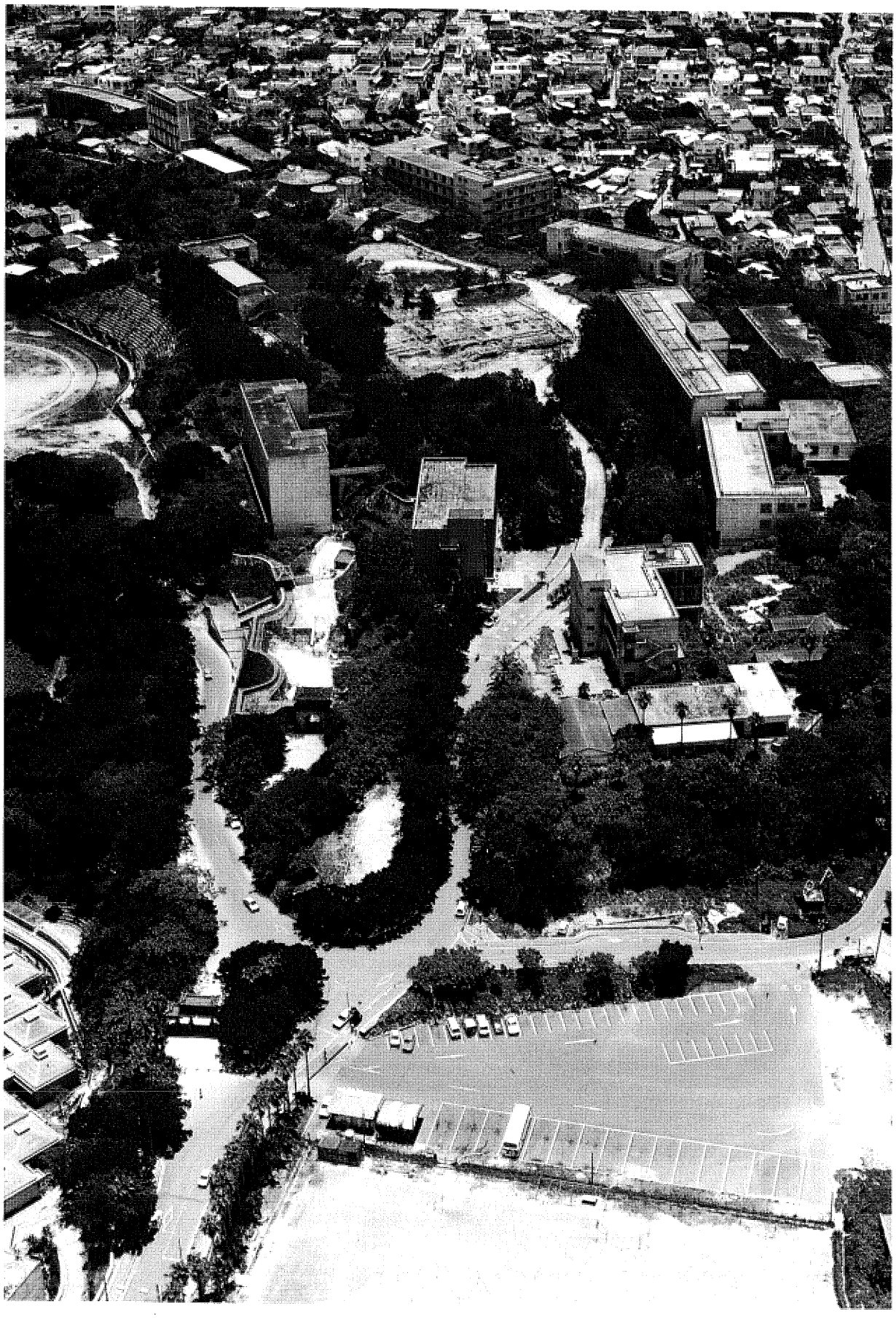
首　里　城　跡

歓会門・久慶門内側地域の
復元整備にかかる遺構調査

昭和63年３月

沖縄県教育委員会

図版１　首里城跡　上空写真（1986年７月）撮影

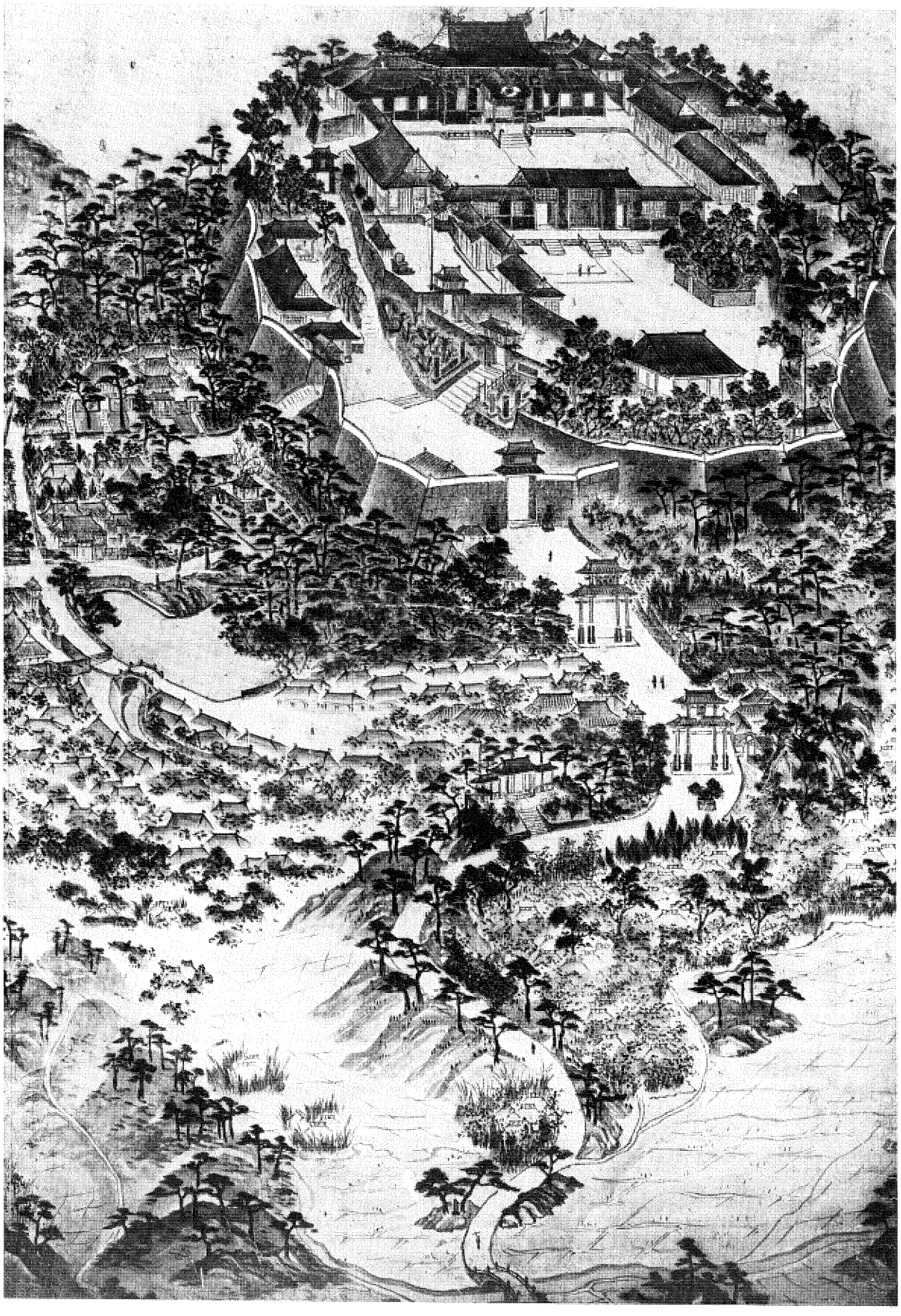


図版２　首里城跡　上空写真（1987年11月）撮影

久慶門から寒水川井戸（スンガーガー）に至る地域

瑞泉門に上る階段の左脇石垣の根石と土留石垣

図版3　調査地近景



図版４　首里城の図

序　　文

首里城は、沖縄県が発足した1879年（明治12）までの約５00余年にわたって琉球王国の王宮だったところです。

戦前までその偉容を誇っていた首里城も去る沖縄戦では集中砲火を浴びることになりました。その際、城内にあった国宝建造物をはじめ貴重な文化遺産の数々が破壊されてしまいました。さらに戦後になって首里城跡には琉球大学が開学し、所狭しと校舎が建設され、せっかく戦禍をくぐり抜けてきた城壁の一部などもこの時の造成工事によって地中深く埋められてしまいました。

沖縄県では復帰後すぐに戦災文化財の復元整備計画を立て、昭和47・48年には沖縄開発庁の補助を得て歓会門を復元整備いたしました。事業はその後も継続し、歓会門と久慶門の接続石垣工事が昭和51年３月に、そして久慶門の遺構調査が昭和51年７月から８月にかけて行われ、その成果を踏まえて久慶門の復元整備が実施され昭和58年に完成いたしました。昭和59年度からは、歓会門・久慶門に挟まれた内郭の復元整備が新たに四ヵ年計画でスタートしました。今回取り扱う遺構・遺物はこの整備事業に先立って実施された発掘調査によって得られたものであります。首里城城郭等復元整備事業については、今後、歓会門前の広場、歓会門から木曳門間の城壁、久慶門の東に接続する城壁の一部を五年間で復元整備していく予定であります。

国指定史跡首里城跡は、先人の残した貴重な文化的遺産であります。この素晴らしい文化財を復元整備し、保存活用を図っていくことは私たちの大きな仕事の一つであると思います。そのような意味で本事業が年々実をあげてきていることはまことに喜ばしいことであります。

本書は、昭和59年度に行った発掘調査の概要をまとめたものであります。この報告書が今後の首里城の復元整備及び、保存・活用の参考に供することができれば幸いであります。

おわりに、本事業の遂行にあたり御援助を賜りました沖縄開発庁、ならびに、本書の発刊にあたり御協力いただきました関係者各位に対して厚くお礼申しあげます。

昭和63年３月

沖縄県教育委員会

教育長　池田光男

例　　言

1．本書は昭和59年度の首里城城郭等復元整備事業で実施した遺構調査の成果を記録したものである。

2．本事業は沖縄開発庁から補助を得て、沖縄県教育委員会（文化課）が実施した。

3．調査及び資料整理にあたり、伊東太作氏（奈良国立文化財研究所）、森郁夫氏（現京都国立博物館）、大城逸朗氏（沖縄県立教育センター）、嵩元政秀氏（興南中学校）の諸氏から指導、助言を賜った。

4．第VI章第14節動物遺存体Aは金子浩昌氏（青山学院大学）に執筆をお願いした。

5．本書の掲載した地形図は国土地理院発行のものを複製したものである。

6．調査時の遺構の実測は20分1で行い、本書ではA5版用に随時縮小して掲載した。各図には各々スケールをふしてある。

7．本書の執筆は下記の分担で行い、編集は当真嗣一、上原静があたった。

第Ⅰ章第1・2節	当真	第Ⅰ章第3・4節	上原
第II章		第III章	
第Ⅴ章		第IV章	
第VI章第1～7・9節		第VI章第8・10～13・16～20節	
第VII章		第VI章14B・15節	大城聖子

8．本書の遺物写真は矢沢秀雄氏がすべて撮影したものである。

9．本書に記載した遺構原図、遺物等の諸資料はすべて県教育委員会（文化課）に保管されている。

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　序　説……1
　第１節　首里城城郭等復元整備事業に至る経緯……1
　第２節　調査に至る経緯……4
　第３節　調査の組織……6
　第４節　調査の経過……7

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境……10
　第１節　地理的環境……10
　第２節　歴史的環境……12

第Ⅲ章　調査の概要……14

第Ⅳ章　層　位……16

第Ⅴ章　遺　構……21
　第１節　遺構の全体概観……21
　第２節　井　戸……22
　第３節　石　畳……23
　第４節　石　垣……25
　第５節　石階段……28
　第６節　排水溝……30
　第７節　上水道石管……32
　第８節　水　槽……34
　第９節　石組遺構……34
　第10節　造成地業……35

第Ⅵ章　遺　物……36
　第１節　輸入陶磁器……36
　第２節　須恵器……44
　第３節　瓦質土器……46
　第４節　特殊陶器……46

第５節　黒釉陶器……46
第６節　沖縄産陶器……46
第７節　近代の磁器……63
第８節　土　器……70
第９節　瓦　類……77
第10節　塼……86
第11節　金属製品……90
第12節　骨製品……91
第13節　石製品……94
第14節　動物遺存体……103
第15節　古　銭……129
第16節　ガラス製品……136
第17節　円盤状製品……139
第18節　貝製品……144
第19節　プラスチック製品……144
第20節　玉……144

第Ⅶ章　結　語……145

首里城関係年表……148

挿　図　目　次

第１図　位置図（沖縄島、那覇市）……2
第２図　首里城跡位置図……3
第３図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）……8
第４図　発掘調査地区図……9
第５図　末吉～繁多川間の横断図……10
第６図　首里城平面図……11
第７図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図……13
第８図　首里城平面図……15
第９図　Ｄトレンチ壁面図……17
第10図　歓会門久慶門内側の遺構平面図、断面図……19
第11図　歓会門・久慶門内側の平面図……21
第12図　井戸地区平面図（井戸、石畳、石垣）……22
第13図　久慶門の前を横切って右脇門に向かう石畳平面図……23
第14図　孔子廟に伴なう石畳平面図……24

第15図　久慶門内側の右脇石垣平面図（西側袖石垣）……25
第16図　久慶門内側の左脇石垣平面図（東側袖石垣）……26
第17図　1．寒水川井戸東壁面　2．歓会門内側右脇土留め石垣　3．上水管南側土留め石垣……27
第18図　瑞泉門に上がる石階段平面図……28
第19図　歓会門前から久慶門の前の石畳に通ずる石階段平面図……28
第20図　久慶門前から寒水川井戸の左脇を通る石階段平面図……29
第21図　久慶門内側の右脇石垣の石積階段と排水遺構平面図……29
第22図　久慶門前地区平面図（排水溝、石積遺構、石垣）……31
第23図　上水道石管平面図……32
第24図　水槽地区平面図……33
第25図　石組遺構平面図……34
第26図　Hトレンチ壁面図……35
第27図　青磁器……37
第28図　青磁器……39
第29図　青磁器（1～9）高麗青磁器（10、11）瓦器（12、13）……41
第30図　青磁器……43
第31図　陶質土器1～10　須恵器11～13　陶器14、15、22　特殊陶器16～21……45
第32図　沖縄産陶器……48
第33図　沖縄産陶器……50
第34図　沖縄産陶器1～17、20～27　黒釉陶器18、19……52
第35図　沖縄産陶器（大鉢）……54
第36図　沖縄産陶器……56
第37図　沖縄産陶器（1～6）備前焼（7）……57
第38図　沖縄産陶器……59
第39図　沖縄産陶器……60
第40図　沖縄産陶器……62
第41図　印判染付磁器……66
第42図　印判染付磁器……67
第43図　印判染付磁器……68
第44図　印判染付磁器……69
第45図　土器……72
第46図　陶質土器……75
第47図　陶質土器……76
第48図　瓦……79
第49図　瓦……80
第50図　瓦……81
第51図　瓦……83
第52図　瓦……84

第53図　瓦……85
第54図　塼……88
第55図　塼……89
第56図　角釘１～11、煙管12～14、鉄鏃15、鎧の金具類16～21、棒状製品22、金具類23～26、プラスチック製品27～30、玉31～33……92
第57図　歯刷子１～10、かき編針11、棒状製品12・13、ヘラ14～16、その他17……95
第58図　石球１～３、砥石４……96
第59図　硯……97
第60図　石碑……100
第61図　石碑１、礎石類２・３、石碑の台石４……101
第62図　石製樋１～４、土管５……102
第63図　古銭……131
第64図　古銭……132
第65図　ガラス製品……138
第66図　円盤状製品……141
第67図　円盤状製品……142
第68図　金属製品１・２・４、ランプのかさ３、貝錘５～７、夜光貝（有孔）８・９……143

図　版　目　次

図版１　首里城跡、上空写真（1986年７月）
図版２　首里城跡、上空写真（1987年11月）
図版３　調査地近景
図版４　首里城の図
図版５　内郭の写った古写真……５
図版６　発掘調査地を東側から望む……９
図版７　久慶門の内側（東上方から）……18
図版８　孔子廟前の石畳出土状況……24
図版９　久慶門前から東側地域の排水溝……30
図版10　魚類……112
図版11　ウミガメ類、ニワトリ、キジバト……113
図版12　イヌ、ジュゴン……114
図版13　ウマ……115
図版14　イノシシ、ブタ……116
図版15　イノシシ、ブタ、ウマ、ウシ、イルカ類……117
図版16　ウシ……118
図版17　ウシ……119

図版18　ウシ ……120
図版19　貝殻 ……128
図版20　玉、プラスチック製ハブラシ、セルロイド製品 ……144
図版21　調査前と着手時 ……149
図版22　調査地近景 ……150
図版23　寒水川井戸 ……151
図版24　上：寒水川井戸前方の石畳　下：寒水川井戸地域の石畳 ……152
図版25　上下：久慶門前を横切って右脇門に向かう石畳 ……153
図版26　上下：孔子廟前の石畳とコンクリート製階段 ……154
図版27　上：調査地区南側土留石垣　下：寒水川井戸地域の南側土留石垣 ……155
図版28　上：寒水川井戸正面石垣　下：寒水川井戸南側土留石垣 ……156
図版29　石垣 ……157
図版30　上：歓会門内側地域の調査状況　下：歓会門内側の南脇石垣 ……158
図版31　上：瑞泉門に上がる階段根石　下：歓会門～久慶門に至る石階段 ……159
図版32　上下：久慶門の前から寒水川井戸の脇をとおる石階段 ……160
図版33　上：久慶門前の石畳、排水溝　下：寒水川井戸前の石畳、排水溝 ……161
図版34　排水溝 ……162
図版35　排水溝 ……163
図版36　調査地区南側土留石垣裏に検出された上水道石管施設 ……164
図版37　久慶門前石畳下に検出された上水道石管施設 ……165
図版38　水槽と陶管 ……166
図版39　造成層 ……167
図版40　調査状況 ……168
図版41　青磁器 ……169
図版42　青磁器、白磁 ……170
図版43　青磁器、瓦質土器 ……171
図版44　青磁器 ……172
図版45　沖縄産陶器 ……173
図版46　沖縄産陶器 ……174
図版47　沖縄産陶器 ……175
図版48　沖縄産陶器 ……176
図版49　沖縄産陶器 ……177
図版50　沖縄産陶器 ……178
図版51　沖縄産陶器（擂鉢） ……179
図版52　沖縄産陶器 ……180
図版53　印判染付磁器 ……181
図版54　印判染付磁器 ……182
図版55　印判染付磁器 ……183

図版56　染付磁器 ……184
図版57　須恵器１～３、特殊陶器４～９……185
図版58　磁器１～３、陶質土器４～12、土器13～21 ……186
図版59　土器口縁部１～15、底部片24、叩きのある胴部片25・26……187
図版60　陶質土器、土ナベ１～４、蓋５～８、壺９～10、水注11～15 ……188
図版61　瓦 ……189
図版62　瓦 ……190
図版63　瓦 ……191
図版64　瓦（軒丸瓦） ……192
図版65　瓦（軒平瓦） ……193
図版66　瓦 ……194
図版67　塼 ……195
図版68　塼１～７、10、11　レンガ８、９、12 ……196
図版69　金属製品 ……197
図版70　骨製品 ……198
図版71　硯 ……199
図版72　石碑１、２　台石３ ……200
図版73　石球１～３　砥石４　石製樋５～８　陶製土管 ……201
図版74　貨銭 ……202
図版75　貨銭 ……203
図版76　ガラス製品 ……204
図版77　円盤状製品 ……205
図版78　円盤状製品 ……206
図版79　金属製品１～３　貝製品４～６、８、９　ガラス製品（ランプの傘）７ ……207

第Ⅰ章　序　　説

第１節　首里城城郭等復元整備事業に至る経緯

首里城跡は、沖縄県が発足した1879年（明治12）までの約500有余年にわたって琉球王国の王宮だったところである。琉球王国最後の国王である尚泰が退去した後、首里城には熊本鎮台分遣隊営所が置かれた。その後明治35年、当時の首里区長は首里城跡を公園として利活用すべく陸軍省に譲渡申請を行なった。そのことがあって陸軍省は明治36年建造物のみ払下げを行なった。土地については、当初30年間の期間付きで無償貸与を決定したが、明治42年になると、有償払下げを決定し、以後首里区有地となった。

一時期公園として利活用された首里城も、厳しい社会情勢を反映して次第に保存管理が困難となり建造物の朽爛も甚だしく、取り壊されるという危機に瀕した。そのことを聞くにおよんだ伊東忠太、鎌倉芳太郎の両氏は、関係者へその保存の必要性を訴えた。彼らの努力が実り、やがて首里城正殿は旧に復し、1924年（大正13）沖縄神社を創建し正殿を拝殿とすることになった。翌1925年（大正14）には国宝に指定されることになり、国の補助によって1927年（昭和２）には本格的解体修理が実施され、1931年（昭和６）に工事の完成をみた。その時の工事図面類23面が現在文化庁文化財保護部建造物課に保管されている。

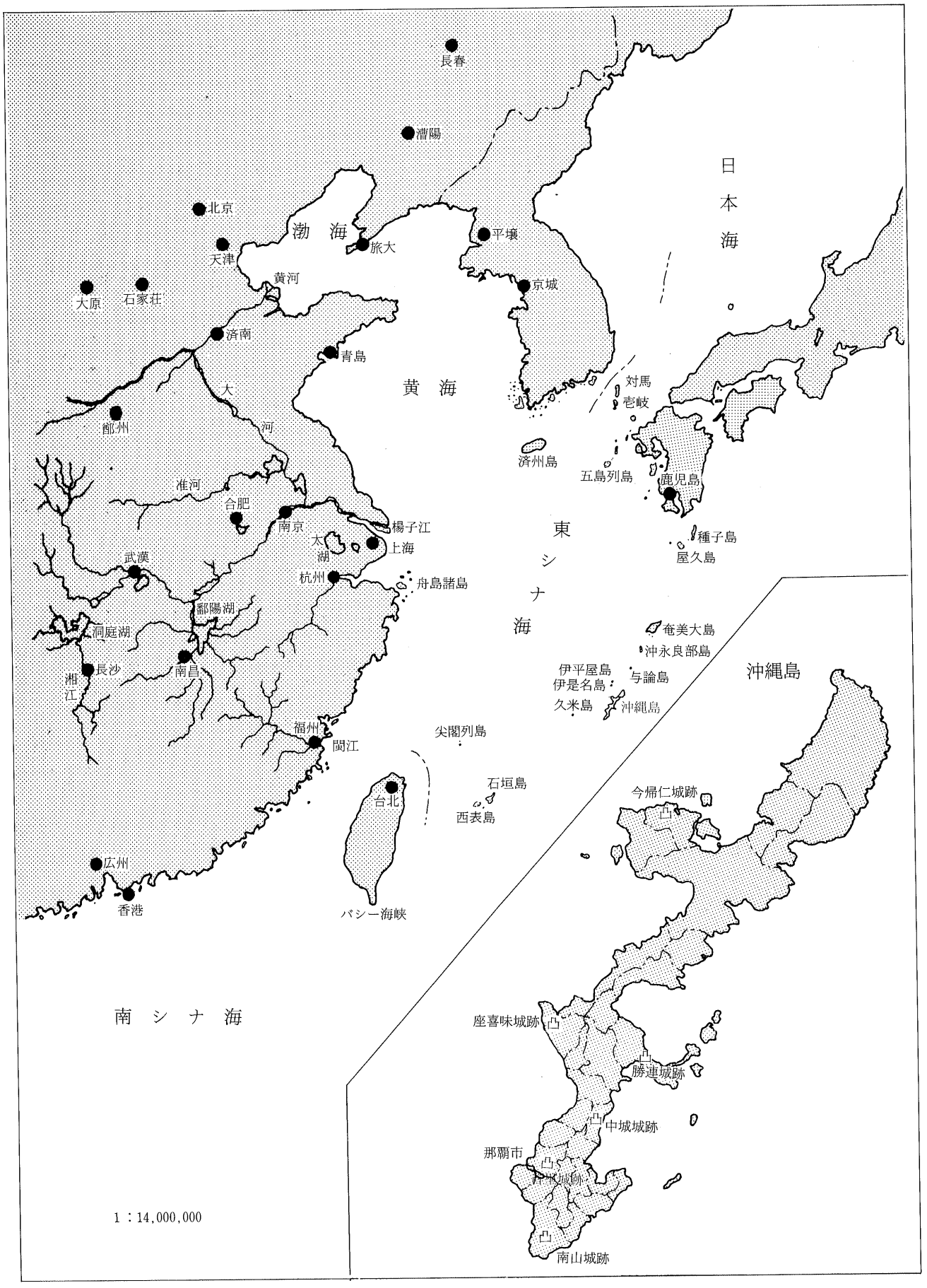
戦前までのその偉容を誇っていた首里城は、城内の地下に日本軍の沖縄総指令部隊壕がつくられたこともあって、去る沖縄戦で集中砲火を浴びることになり国宝建造物をはじめとする貴重な文化遺産の数々が焼失してしまった。

さらに戦後になって首里城には、琉球大学が開学することになって城内所狭しと校舎が建設され、せっかく戦禍をくぐりぬけてきた城壁の一部も造成工事などによって地中深く埋められたり、あるいは破壊をよぎなくされた。

昭和47年の沖縄の本土復帰の時に、これまで琉球政府文化財保護委員会によって重要文化財に指定されていたものを国指定の文化財として指定替えされることになった。首里城跡もこの時、国の文化財として史跡指定を受けることになった。

沖縄県では復帰後すぐに戦災文化財の復元整備計画を立て、昭和47・48年には沖縄開発庁の補助を得て歓会門を復元整備した。事業はその後も継続し、歓会門と久慶門の接続石垣工事が昭和51年３月に、そして久慶門の遺構調査が昭和51年７月から８月にかけて行われ、その成果を踏まえた久慶門の復元整備が昭和58年にそれぞれ完成した。昭和59年度からは、歓会門・久慶門内郭の復元整備が新たに四ヵ年計画でスタートした。本報告書は、この四ヵ年事業の際に復元整備事業に先駆けて実施された遺構調査の成果についてまとめたものである。

なお、沖縄開発庁補助による首里城城郭等復元整備事業は、今後の計画として歓会門前の広場、歓会門から木曳門間の城壁、久慶門の東に接続する城壁の一部などを五ヵ年間に実施していく予定である。



第１図　位置図（沖縄島、那覇市）

1:50,000 那覇
1000 m
0
1000
2000
3000
那覇市
那覇港
浦添市
宜野湾市
首里
豊見城村
大里村
南風原町
与那原町
西原町
浦添城跡
米軍施設
米軍住宅地
那覇新港
港町
曙
仲西
勢理客
内間
大名町
石嶺町
鳥堀町
大名
宮城
新川
真地
仲井真
津嘉山
本部
嘉数
長堂
金良
照屋
山川
平良
伊良波
名嘉地
田頭
高安
饒波
宜保
豊見城
新部落
琉球団地
宇栄原団地
旭町
明治橋
那覇大橋
国場川
真玉橋
根差部
嘉数送信所
長堂
伊良波
平良
大山
宇地泊
真志喜
大謝名
伊祖
城間
宮城
大平
前田
幸地
石川住宅
空寿崎
牧港
牧港川
大道
三原
松尾
久茂地
前島
若狭
職業訓練校
波之上宮
泊港
泊浄水場
天久
天久
安謝
安謝川
仲間
浦添
大平
浦添
大平川
浦添
大名町
大名
宮城
宮平
兼城
津嘉山
高津嘉山
古堅
仲間
長翁
普天間飛行場
大見武
大名
新川森
高良
高良
知念森
琉球
新部落
宇栄原
山原
明治橋
米軍施設
米軍施設

第2図　首里城跡位置図

第２節　調査に至る経緯

戦後、県は第１節でも述べたとおり戦災によって失なわれた文化遺産の修復工事に取組み一定の成果を挙げてきた。とくに昭和47年の本土復帰と同時に首里城及び戦災文化財等の復元整備事業に着手し、それを推進することになった。整備地域について挙げれば、まず歓会門と久慶門などの城門及びその接続石垣の工事を昭和58年度までに完成している。

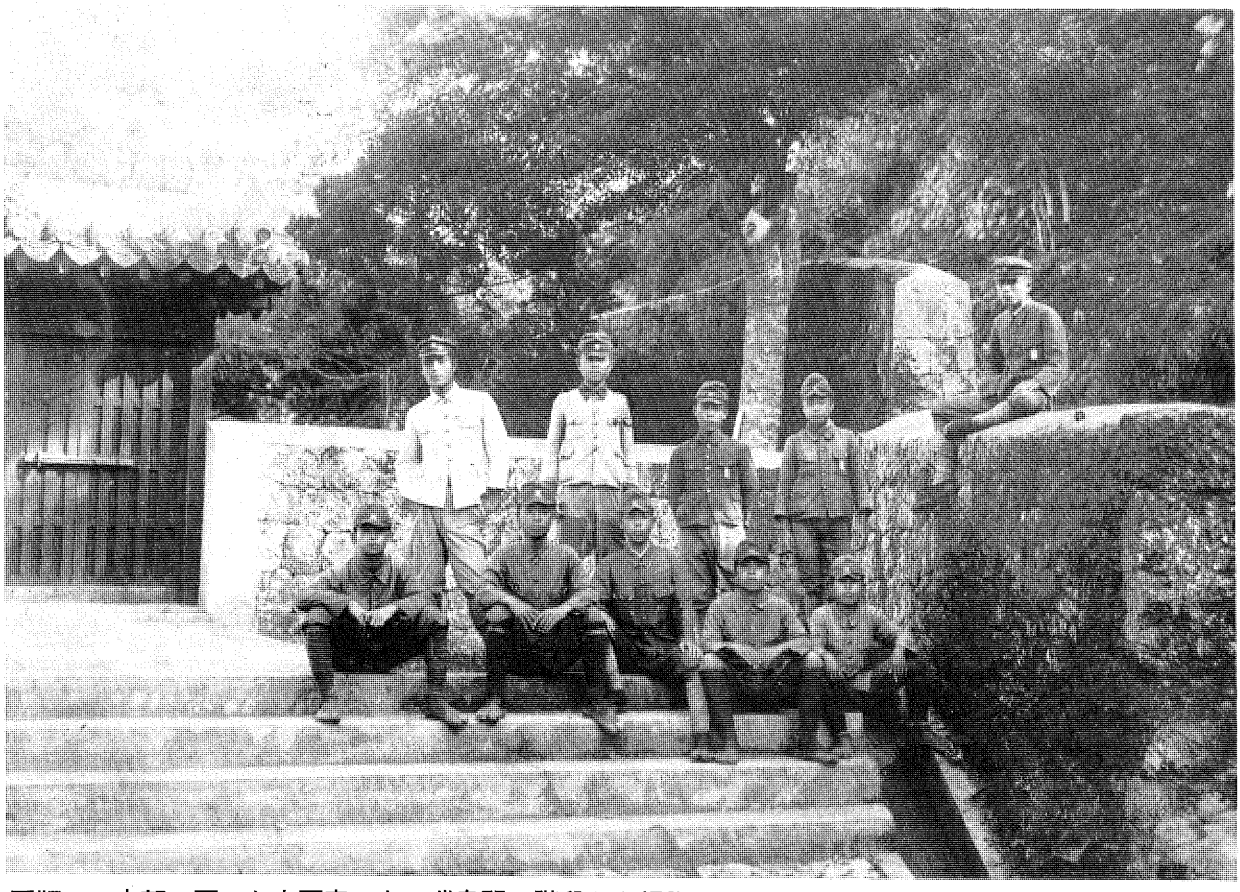
昭和59年度からは従来から使用されていた補助事業名を変更して首里城城郭等復元整備に改称して新たに四ヵ年計画で歓会門・久慶門内郭の復元整備に着手することになった。

歓会門・久慶門内郭の位置については第４図に示された通りであるが、当該地域については第二尚氏の尚真から尚清王代にかけて拡張された部分と言われ、一般的には首里城北側外郭として理解されているところである。

ところで、これまでの戦災文化財等復元整備事業では整備に伴う遺構調査が一度も実施されたことはなかった。そのせいか当初、関係者の間では遺構調査の必要性や重要性について強く認識されていなかった。それは「戦災を受けるまでちゃんとあったものであり、戦後になって埋め込まれた土を取り除けば、復元出来るはずだ」と言う考えに基づいていた。このような情況の中で整備事業費の一部として遺構調査費を計上し調査を実施していくことは大変な努力を必要としたが、やがて関係者の努力が実り正式に遺構調査費用が計上され当該地域の発掘調査が開始されることになったのである。

補助事業を実施する沖縄県では首里城跡が国の文化財として史跡指定をうけているために昭和59年９月３日文化庁長官宛当該地域における現状変更申請書を提出し、同年10月４日に許可された。発掘期間は昭和59年８月20日から同年12月14日までで発掘区域は復元整備予定区域の歓会門･久慶門内郭の約1,400㎡である。

発掘調査は先ず、バック・ホーを使用して戦後の造成層を除去することから始まった。当該地域における造成層の厚さは予想以上に厚く平均２ｍ以上もあった。結局、戦争前の旧地表面まで露出させるために、６ｔトラックの60台分の土砂を除去しなければならなかった。発掘調査がすすむと、やがて城壁の一部と石畳道等が掘り出され、その全容が次第に明らかになってきた。



図版５　内郭の写った古写真　上：瑞泉門の階段から撮影　昭和９年　下：孔子廟前にて撮影　昭和17年

（写真提供　勝連盛重氏）　（写真提供　八木元彦氏）

第3節　調査の組織

この発掘調査の組織は次のとおりである。

補助主体　沖縄開発庁

調査主体　沖縄県教育委員会	教　育　長	米村幸政	昭和59年
	〃	池田光男	昭和60～62年
	文化課課長	比嘉賀幸	
調査事業事務	文化振興係主事	当間　勉	昭和59年
	主事補	仲村とも子	昭和60年
	主事	運天政弘	
調査担当	主幹兼文化財係長	当真嗣一	
	専門員	上原　靜	
調査補助	文化財調査嘱託員	大田宏好	

発掘調査作業員　呉屋正一　玉城善徳　幸地ヨシ子　小橋川政枝　小波津ヨシ子
玉城富子　城間弘子　麓　幸子　幸地克信　宮平知二
山川宗孝　新崎竜哉
マイク・クイーン（ボランティア参加）（昭和59年発掘）
矢野恭次　知念絹江
（昭和60年工事に伴う発掘）

資料整理作業員　仲持正範　嘉数ひとみ　池原喜美江　西銘定子　池田悦子
城間広子　内間ゆかり　川満倶仁子　宮城好美　島尻博子
下地洋子　幸地安江

報告書作成作業参加者　内間　靖　当間勇治　大城聖子　池田悦子　上原富士子
西銘定子　矢沢秀雄　崎原美智子　大城かおる

当報告の石器の石質同定は大城逸朗氏（沖縄県立教育センター）によるものである。
当報告の獣魚骨の種の同定は金子浩昌氏（青山学院大学講師）によるものである。
大形石碑の拓影は崎間麗進氏（沖縄拓本研究会）によるものである。
当報告の古銭の分類では嵩元政秀氏（興南中学校教頭）の教示をうけた。
遺構の解釈、整備にあたっては聞き取り調査を実施し、次の各氏の参加協力を得た。

多和田真淳　真栄平房敬　佐久川完定　浜比嘉宗正　渡慶次真弘
仲吉朝佑　石川逢英　高良清昌　勝連盛重　上江洲安英
外間正幸　久高友章　又吉真三　八木元彦　屋宜宣善
金城正順　城間宏安　上村朝順　島　秀範　（順不同）

第4節　調査の経過

発掘調査は昭和59年8月20日から同年12月14日の約3ヵ月間にわたって行われた。

調査地区の発掘着手前の状況は琉球大学の客土された造成平面になり、これまでの復元整備がなされた歓会門から久慶門にいたる部分の石垣部分のみが、復元工事により除かれ、旧地面をみせていた。そのため城壁側と客土された差のある地域では大きな溝の様な形状をなしていた(図版21)。とくに調査地の東側、久慶門側は、その差の部分が著しく厚さが約2mの斜面で区切られるようにあった。すでにこの地区では露出した地山には一部に石畳がのぞいていた(後に孔子廟前の石畳であることが判明)。また久慶門の南側造成面上には、かつての琉球大学設計実習プレハブのコンクリート基礎があり、歓会門側の南側面には約60cmの地盤上にプレハブの現場小屋が3棟存在し客土上にも構造物が認められた。

発掘調査はこの様な構造物や客土の厚い状況から、ユンボ、トラックなどの機械を用いて、その除去から行った。とくに土の搬出の都合から、調査地区の東側の久慶門側から行い、順次歓会門側に移動するかたちで実施したのである。

表土剝ぎと同時に久慶門側の東隅からはやくも石畳が検出され、またそれと同時に、瓦礫のなかに遺物も認められるようになり、手作業による検出と採集を平行して行った。このようにして、10月末までにはすべての石畳や石垣、井戸などの遺構の露出作業を行ったが、そのほとんどが久慶門側一帯の低い部分に偏在し、歓会門側一帯はほとんど面としてその遺構は破壊され残っていなかった。遺構の平面露出後は、部分的に落込みの予想される箇所や遺構下の状況を確認するため断割りを行うことにした。その断割ヵ所は遺構の破壊を受けている部分をとくに選定した結果下記の12箇所になっている(第4図)。各トレンチは次の目的をもってなされている。

Aトレンチ……久慶門内側の東側土留め石垣の根石の残存状況確認のためのトレンチ。

Bトレンチ……孔子廟の石畳の下層を確認するためのトレンチ、久慶門側まで伸びている箇所で特に破損した部分を選び選定する。

Cトレンチ……久慶門の床に直行する石畳と石垣下の溝の状況確認のためのトレンチ。

Dトレンチ……石畳下の状況確認のためのトレンチ。久慶門の南側に位置し、全体的に石畳が残存するところであるが、当箇所のみは爆弾によって破壊され石畳が無く無ったところである。

Eトレンチ……久慶門内側の西側城壁に隣接した箇所である。この部分は表土剝ぎ段階から瓦礫が集中し、黒色土が認められたところで、その下層の遺物包含層を確認するための目的で入れたトレンチ。

Fトレンチ……Aトレンチに対応するもので、久慶門内側の西側土留め石垣の存在を確認するために設定する。

Gトレンチ……久慶門の石畳から龍樋前の階段にいたる階段下の状況を確認するためのトレンチ。上の遺構を新に破壊しないように琉球大学のパイプによって破壊されたところをわざわざ選びトレンチを設定した。

Hトレンチ……歓会門から龍樋にいたる中間に位置するところで、その部分の石畳の遺存状況と、隣接して露出した岩塊の転石の有無を確認するためのトレンチ。

Iトレンチ……歓会門内の南側城壁の確認及び歓会門の城壁との接点の状況確認を目的に城壁沿いに

第３図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）

昭和63年度までにすべて撤去される予定。

設定したトレンチ。

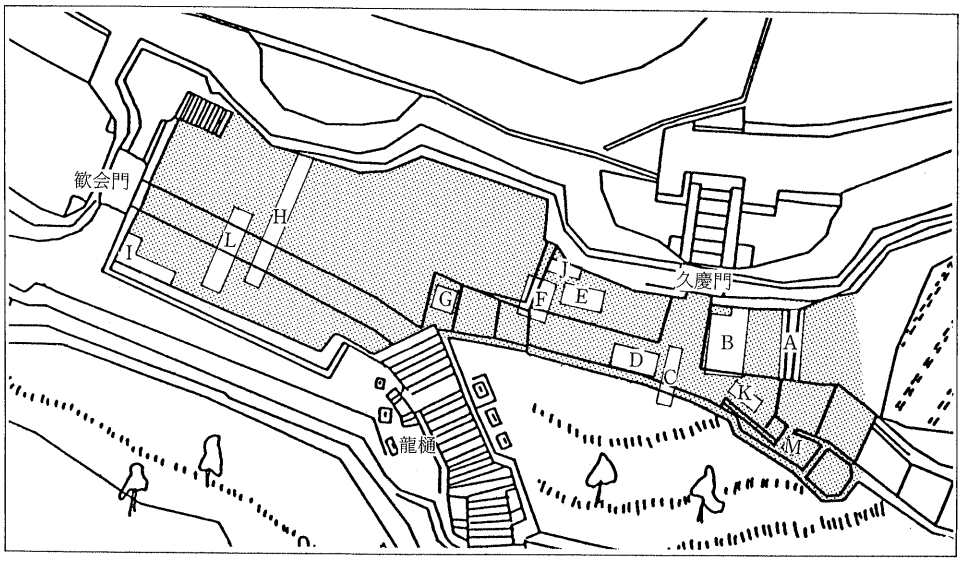
Jトレンチ……石垣にとりついた階段および溝があったという古老からの聞き取りをもとに、それを確認する目的で設けたトレンチ。

Kトレンチ……Bトレンチの南に隣接した箇所で、石畳が破壊されている部分を選定し、その下の状況を確認した。

Lトレンチ……Hトレンチで確認した岩塊の性格を再確認するために設定したトレンチ。

Mトレンチ……寒水川井戸前庭部の石畳部のトレンチ。井戸の水位の保存の原因を調べるため設定した。

以上、各トレンチからは12月初頭までに種々の遺構や造成面などが確認され、以後、それら遺構を20分の1の実測図におさめる作業を行い60年1月の末に全ての作業を完了した。



第4図　発掘調査地区図（スクリーントン地域）　A～Mは断割トレンチ

図版6　発掘調査地を東側から望む

第II章　遺跡の位置及び環境

第1節　地理的環境

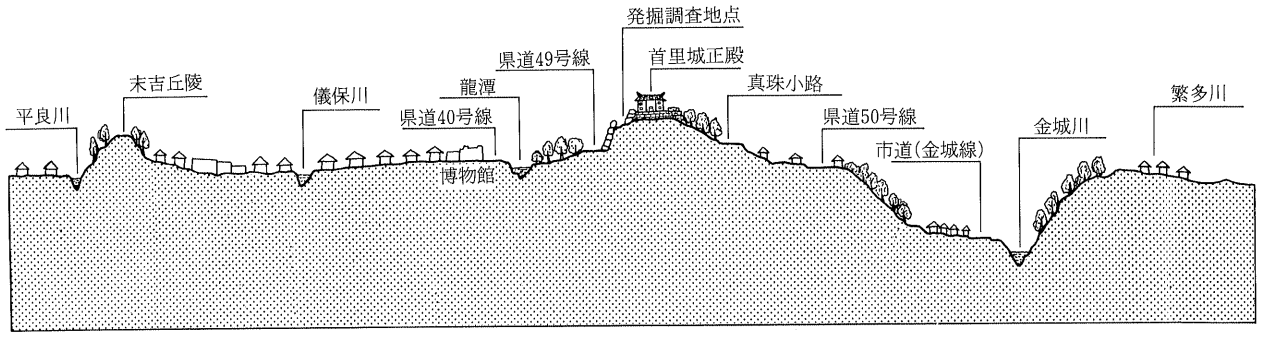
首里城跡は沖縄県那覇市首里当蔵町3丁目1番地（旧琉球大学の跡）に所在する。今回報告の対象となる地域は、首里城の大手門にあたる歓会門の内側、久慶門と寒水川井戸に挟まれた地域で、俗に北側外郭と呼ばれている地区である。

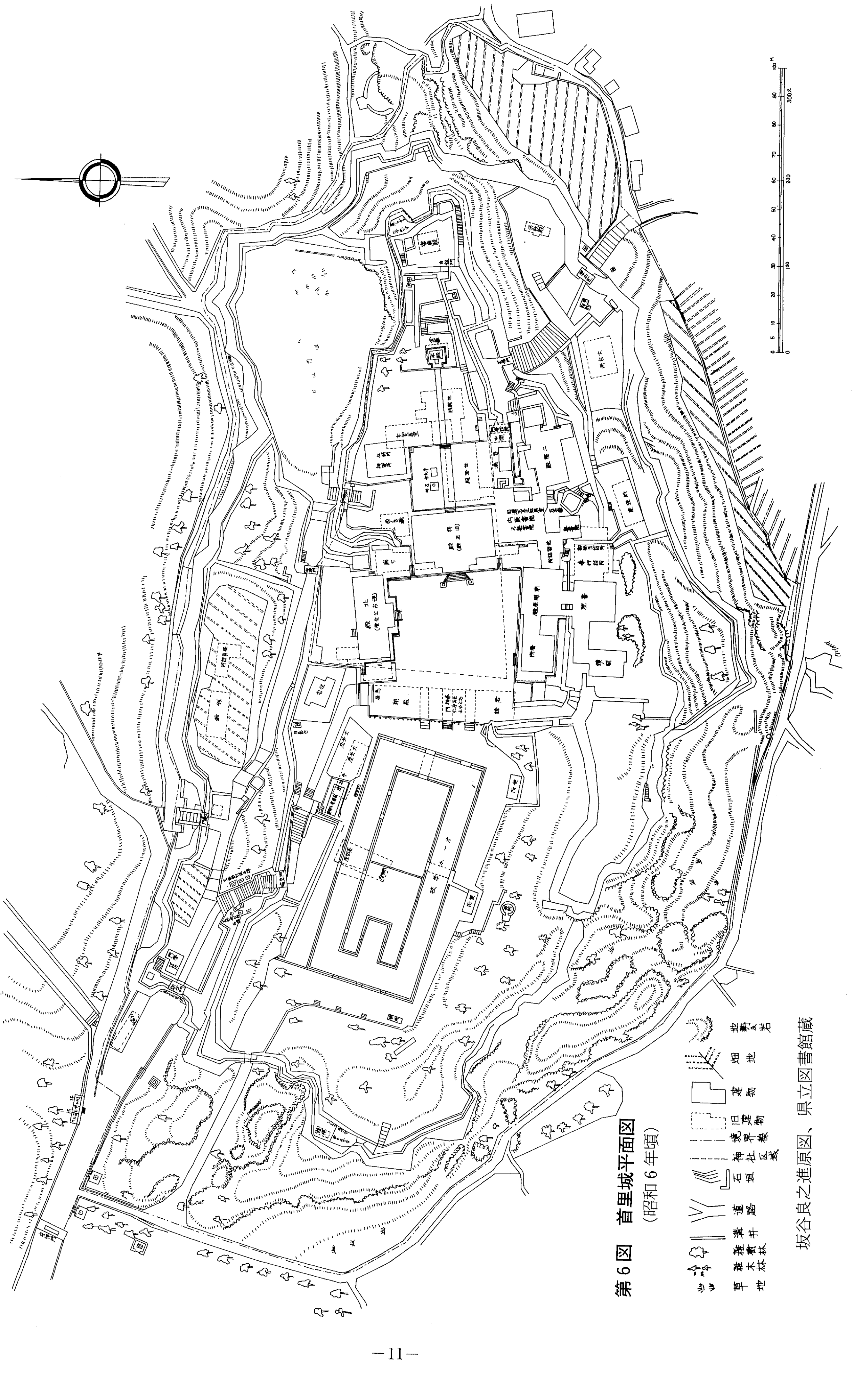
城跡のある首里は、標高70～135m程度の琉球石灰岩台地の上に形成された町である。町全体は、北に琉球石灰岩丘陵(ニシ森ー虎瀬)、南に金城川、東にナゲーラ川、西に真嘉比川と丘陵や川などの自然の障壁によって囲まれ、都城が立地するのに相応しい地形を呈している。首里城はこの首里の南の縁にあたり高い所に営まれており、周囲は石灰岩の崖で囲まれ、北には首里城以前の都城だったとされる浦添城、南西の足下に琉球王国大航海時代の港那覇港を望む位置にある。

付近の山林及び平野部を形成する地質は新第3紀鮮新世の頃海底に堆積して出来た島尻郡層の泥岩及び砂岩を基盤として、それを覆うように更新世の琉球石灰岩が分布する。そのため、首里城及びその周辺は湧水が発達している所として知られている。今回発掘した所にも水量豊かな寒水川井戸があり、発掘区に隣接した龍樋や寒水川井戸から湧き出る水は地下の導水管を通って久慶門両脇の樋から流れ、やがて城外の円鑑池、龍潭へと落ちていく。

発掘地区の特徴について述べると、本地区は首里城の北西の縁にあたり北面する斜面部の中腹に位置している。この地区は現在標高111～112m程のほぼ平坦な平場であるが、もともと首里城内郭の標高124mを最高点として、北に向かって傾斜する斜面部（旧地形は約17度を示す）の中間地点を埋め立てて造成されていることが今回の発掘調査の結果からわかった。すなわち標高103～105mラインの等高線上に琉球石灰岩の大きな岩塊を積み上げて土留め擁壁を築き、約4mの厚さの埋め土をして土木造成事業を行っているのである。この大がかりな土木事業は第二尚氏初期の尚真、尚清の時代に実施されたものとみる人もいるが、はっきりしない。

第5図　末吉～繁多川間の横断図





第6図　首里城平面図
(昭和6年頃)

坂谷良之進原図、県立図書館蔵

第２節　歴史的環境

首里城の周辺に人々が生活するようになるのはそう遠いことではない。これまでの調査結果では、首里山川町所在の山川貝塚が最も古い時代の遺跡だとされている。今からおよそ2,500年前の沖縄貝塚時代中期に遡る時代である。その後は長い空白期間が続き、次の儀保町にあるニシ森にグスク時代の人々が住み着くようになるのが13世紀になってからであった。しかしこのニシ森遺物散布地については現在大きな破壊を受けていて保存状態が悪く、そこに住んでいた人々の生活の様子についてはよくわかっていない。首里に人々が集まり、町として発展していくのは首里城が創建されて以後のことである。

首里城の来歴については詳らかでない。文献の上ではっきりするのは、沖縄最古の金石文である「安国山樹華木記碑」（1427年、宣徳２）に尚巴志が王城外の安国山に池（現在の龍潭）を掘り、華木を植えたと記録されていることから、すでに尚巴志の代には王城として確立していたものとおもわれる。

今、時代を追って首里城の形成過程を記すとおよそ次の通りとなる。

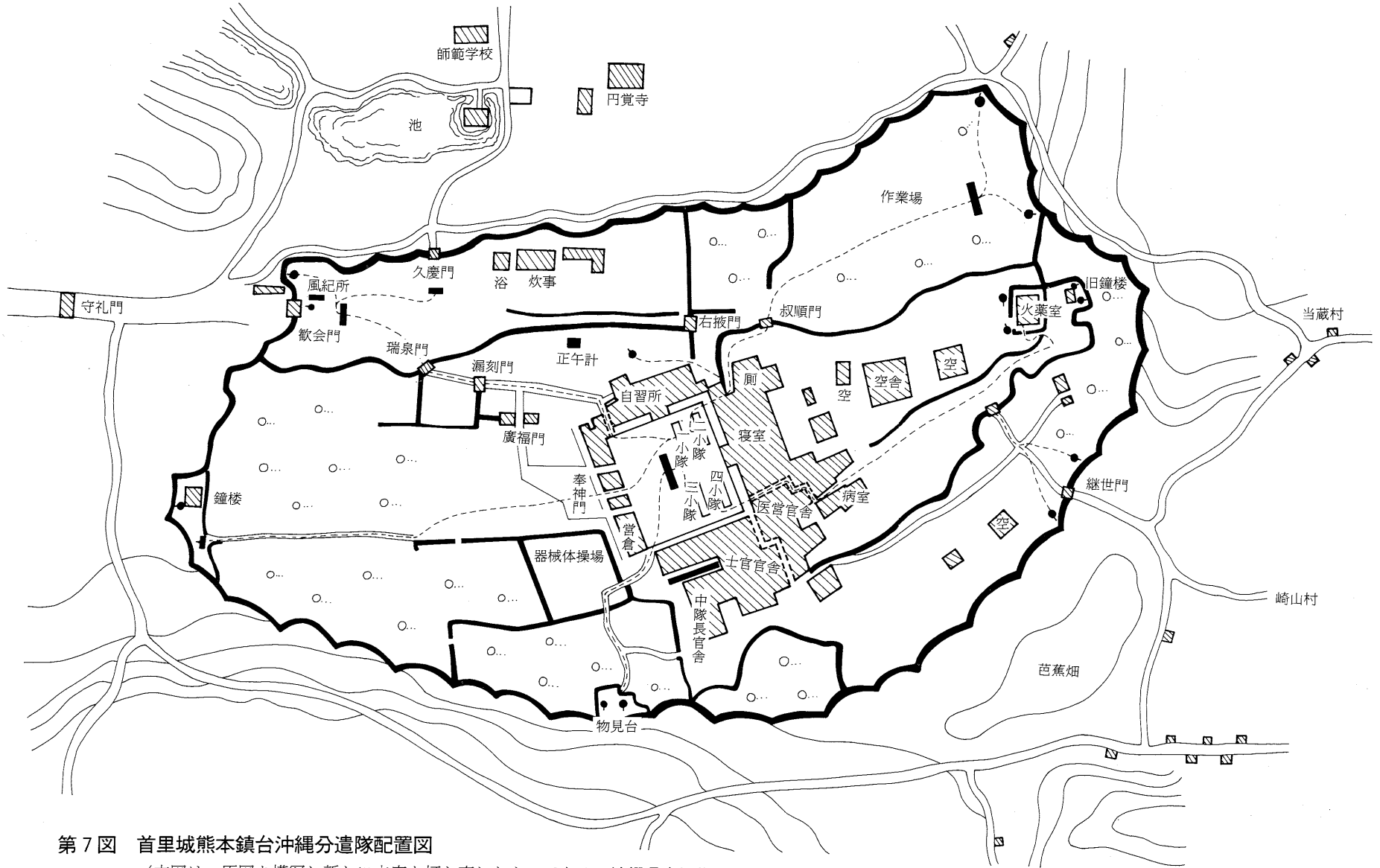
首里城が何時頃創建されたかということについては前述したとおりよくわかってない。一説には、14世紀の後半察度王のころ「数丈の高楼を建造し以て遊観に備う」という記録があることから、その高楼を首里城の正殿に見立て、察度王統の頃王城としての歴史が始まるという考え方もある。ところが近年実施された首里城正殿の発掘調査では、首里城の創建はもっと古く遡り、遅くとも14世紀前半から中葉にはすでに創建されていたのではないかということが明らかになってきた。

第一尚王統を確立した尚巴志王の時代には、城の拡張を行うと同時に龍潭を掘削して安国山を築き王都を整備したことが記録（「安国山樹華木記碑」）にみえている。伊東忠太、鎌倉芳太郎らの研究によれば、この時期に瑞泉門から京ノ内西面の城門に至る線以西の埋め立てを行い、京ノ内の城郭を中心として瑞泉門、淑順門、美福門に連なる区域が修築及び築造されたといわれている（伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』）。

第二尚氏の初め、尚真・尚清王にかけては、琉球王国の中央集権が確立される時期であるが、それと共に城と城下の整備も積極的に進められた。歓会門と久慶門、それに連なる接続石垣及び本調査地もこの時期に拡張されたといわれている。その後の首里城については、おそらく地震、台風等の被害も受けその都度城壁等の修理も行ってきたと思われるが、これといった大きな土木事業は見られなかったようである。

1879年（明治12）に琉球王国最後の国王尚泰が首里城明け渡しによって首里城を退去した後、城内には熊本鎮台沖縄分遣隊が明治29年に撤退するまでの17年間駐屯した。その後も城内には、文教施設などが設置されるなど、首里城は今日まで幾多の変遷をたどってきた。

今回の発掘調査では、当初の築城時にかかる遺物から明治、大正、昭和の今日に至るまでの遺物が多量に出土している。



第７図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図

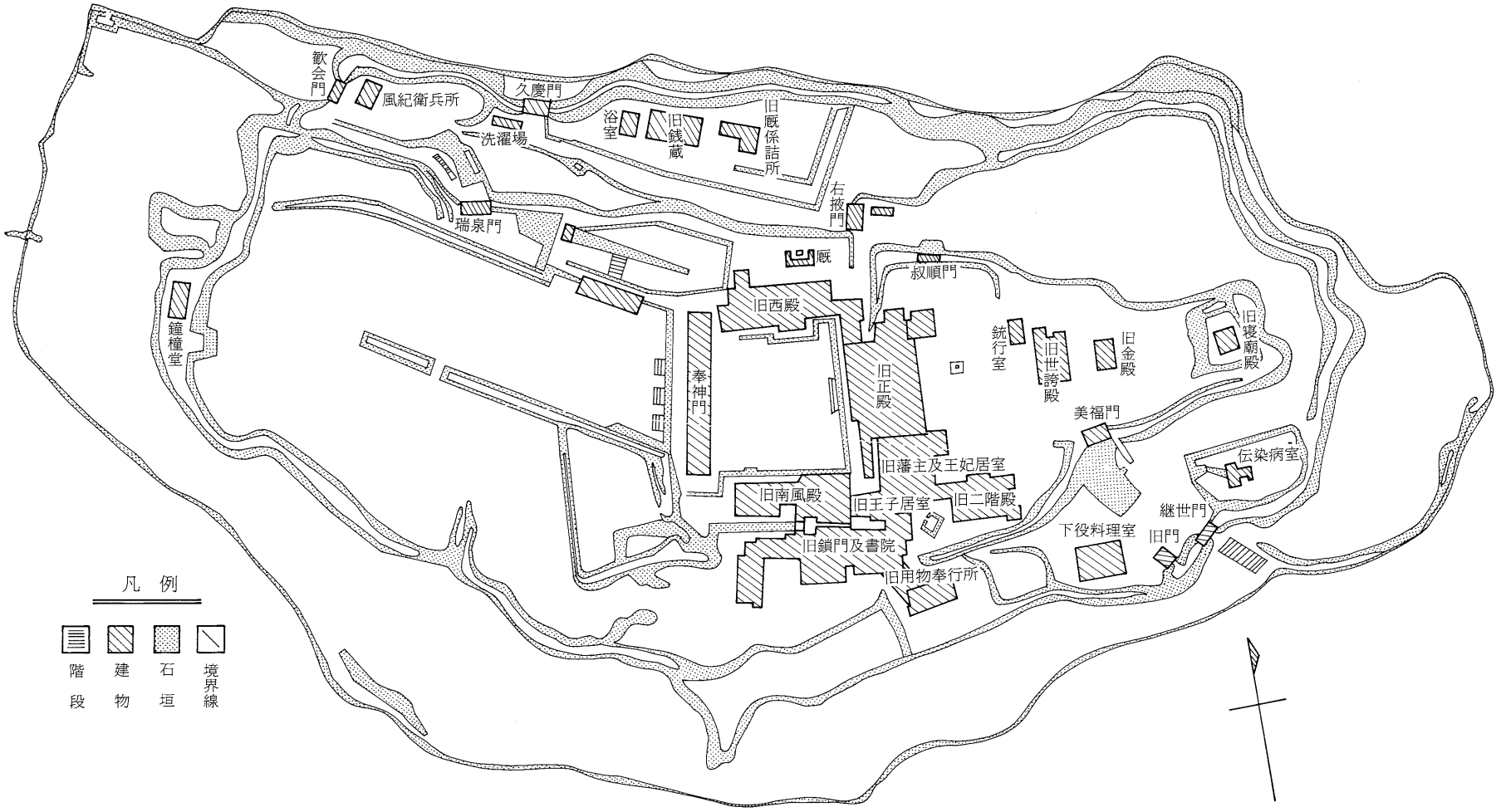
（本図は、原図を模写し新たに文字を打ち直したものである。沖縄県史編集室蔵）

第III章　調　査　の　概　要

調査地区は文献上、尚真・尚清王代の15世紀後半から16世紀前半にかけて外郭として拡張されたといわれている。現存する数枚の首里城古絵図（図版４）を見比べると当郭内には番所をはじめ幾つかの施設が描かれ、それぞれの絵に若干の違いが認められる。もしその違いが事実を写すのであれば、その変遷を表し、数度の立替えがあったことが推測できる。その後、時代が降りて明治12年になると首里城明け渡しが行なわれ、熊本鎮台分遣隊駐留基地となっている。その当時の配置図（第７図）からみると当郭内は浴場、洗濯場となり別の用途ないし立替を予想させる施設の存在を知ることができる。さらに時代は降りて、大正、昭和初期には小学校、工芸学校の広場や庭園（図版５、上）となり、あるいは水飲み場、孔子廟、さらに番所などの家屋などが建てられ、つぎつぎ修改築をくりかえしている。そして昭和20年の沖縄戦でそれら地上物は灰じんにきしてしまっている。戦後になって琉球大学建築のための削平と客土の造成がなされ仮設校舎が建てられた(第３図)。しかし、34年後の今日で大学のキャンパスも西原に移転し荒廃したが、昭和47年度より戦災文化財等復元整備事業のための整備工事がすすんでいる。以上が文献、古図、写真などの記録から知りうる調査地区の構造物に関する大まかな沿革である。

発掘調査の結果、上記の連綿とつづいた当地区の城普請の一端をそれぞれ明らかにすることができた。当初、琉球大学造成時の厚い客土を取りのぞくと、客土直下に沖縄戦で爆弾破壊を受けた戦争直後の生々しい遺構面が検出された。とくに久慶門側の地表面の低い部分では石畳、石垣、排水溝、井戸などが遺存していた。これらの遺構は昭和７年に描かれた平面図と比較すると、石畳の施設面積は広くなり、また所によっては古い石垣が取り壊されていたり、あるいは新しく階段がとりついていたり、はたまた磚敷の排水溝、コンクリート製の排水溝、金属製パイプ等が石畳下に埋没されるなど、随所で改変の跡が確認された。当郭内の下層部における土木技術の様相を追求するため一部地域で断ち割りの試掘を行ったところ、下層部で上水槽、上水溝、暗渠や重複する石畳、石垣、数度にわたる造成層などを新に確認することができた。

遺物は輸入陶磁器、染付、白磁、高麗系瓦、大和系瓦などグスク時代の遺物をはじめとして、新しくは明治期の磁器や明式瓦及び沖縄産陶器、骨製品、ガラス製品などその種類は多岐にわたっている。とくに、前者の古式に属するものは首里城内の内郭から投じられた性格のものであった。一方、後者のものは量的には多く、明治以後の遺物が主体を占めている。その遺物を用途からみると建物の屋根瓦、日常食器類、日常調理道具類、調味料、染料、裁縫具などがあり、これらを遺構と考え合わせると当該地区の性格の一端が、あらためて首里城外郭の重要表玄関にあたっているということと、龍樋、寒水川井戸の湧水の貴重性を明示していることが理解できる。



第８図　首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）

第Ⅳ章　層　位

首里城跡はこれまでにも記したように、沖縄戦による砲火や戦後の造成などで直接的な破壊を受けたために城としての文化層ないし生活層が層序として確認できるのは、造成層下の極めて僅かの部分だけであった。戦争前までよく保存されていた石畳、石垣、井戸などの遺構を被覆する土層は戦後になって、盛土整地された瓦礫層である。この盛地整地層は久慶門側で厚く、約２ｍを測り、歓会門側では薄く約50cm程堆積している。ここでは検出された石畳や石垣，排水溝、造成地など城普請にかかる遺構確認のために設定した13ヵ所のトレンチの状況を述べることにする。

Ａトレンチ　土留め石垣の根石の残存状況を確認するためにあけたトレンチで、確認されている根石の数は５個であった。その根石の上に石畳が敷かれているため、そのほとんどが石畳を造成する時に破壊されたものとみられる。

当該石垣の根石はクチャ混じりの赤土層上に存在し、さらにその下に基盤のクチャ層が広がっている。つまり当石垣は直接地山に構築したものではなく一旦造成された後に、その上に土留石垣として築かれたものである。

Ｂトレンチ　孔子廟が建てられた時期の石畳の直下層で検出された石畳の確認をするため調査したトレンチである。上層の石畳から約26cm下で拳大の礫が確認された。その石敷になじむようにして、石組遺構が認められた。石組遺構内には石灰岩塊が混入していたが床面にはヘドロ状の灰色の粘性土が堆積していてベトベトしていた。その中からはガラス片、ブリキ、赤瓦、明治のコイン、近代陶器など出土した。

Ｃトレンチ　南の石垣下の状況を確認するために設定したトレンチであるが、堆積土は沖縄戦による爆弾の破壊で完全に瓦礫層になっている。上水管も一部破壊されているが大部分は存在している。遺構の詳細については後述する。

Ｄトレンチ　当該地では石畳下の状況を知るために設定した。爆弾によって石畳が破壊されたところで、穴の中心部からは爆弾の破片が集中して出土している。堆積層は３枚で、Ⅰ層は暗褐色石灰岩礫混じり土層である。とくに東側は石灰岩塊、瓦、陶器、ガラス片が混入し落ち込みをなしていた。Ⅱ層は褐色の粘土層が広がっている。さらにその下はⅢ層になる。Ⅲ層は黒褐色土層で、グスク系土器、青磁、白磁、炭化物、獣骨等が出土し、近代の攪乱は認められなかった。

Ｅトレンチ　遺存良好の石畳に隣接して、瓦礫が多く集中し土層も炭化物のため黒色を呈していたところである。地表面下1.2mの深さで石組方形の水槽が検出された。水槽を埋めた礫は大きさが25～30cm大のものを主とし投げ込まれた状態であった。出土遺物は瓦類が最も多く、他にガラス、ビニール製品がみられた。

Ｆトレンチ　土留め石垣の根石を確認するために設定したところで、土留石垣の角の部分は遺存していたが、それより先の城壁側では残されていなかった。しかし当土留石垣のほぼ中央部あたりに接するように、コンクリートの壁をもつ水槽が検出された。水槽の上部は破壊を受け、壁も剝離が多くみられた。隣接して認められたＥトレンチ同様に水槽の中に土砂が多く混入していた。

Gトレンチ　久慶門から寒水川井戸側にいたる階段部のところで、保存状況が悪い石畳を除去し、その下位を掘り下げたところ、その下位は大きさが40～60cm大石灰岩のみを投入した造成層からなっていることがわかった。さらにその下の状況確認を試みようとしたが試掘壁の崩壊の恐れが強く認められたため、当レベルで作業を終了した。

Hトレンチ　石畳や隣接する岩塊の性格を確認するために設定したものである。調査の結果は当時のレベルから50cm以上の厚さで削平されていることがわかった。そのため石畳は既に破壊を受けて遺存しないことがわかった。さらに露頭している岩塊についても転石ではなく基盤石灰岩であることが明らかになった。試掘は地山まで深い所で3mをはかりその間4枚の堆積層を確認した。当層については人為的造成のため詳細は遺構の項で記述する。

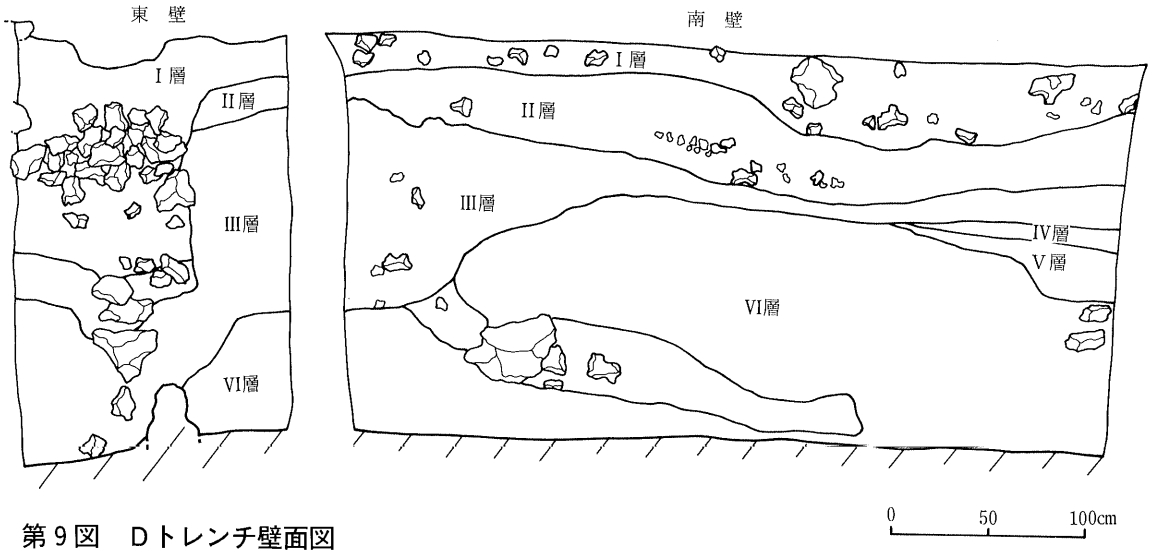
Iトレンチ　歓会門内側の南側城壁に沿って試掘を行ったたところ、自然の岩を調整しながら、その間を埋めるようにした布積みをした石垣を検出することができた。布積み石垣は基盤のクチャ層の上に存在していた。

Jトレンチ　久慶門内側の西に位置する土留め石垣に取り付いていた石段と排水溝の確認を目的としたが、地表下約1.5mまで掘り下げてみたが、下層は石灰岩塊からなり、遺構は存在しなかった。

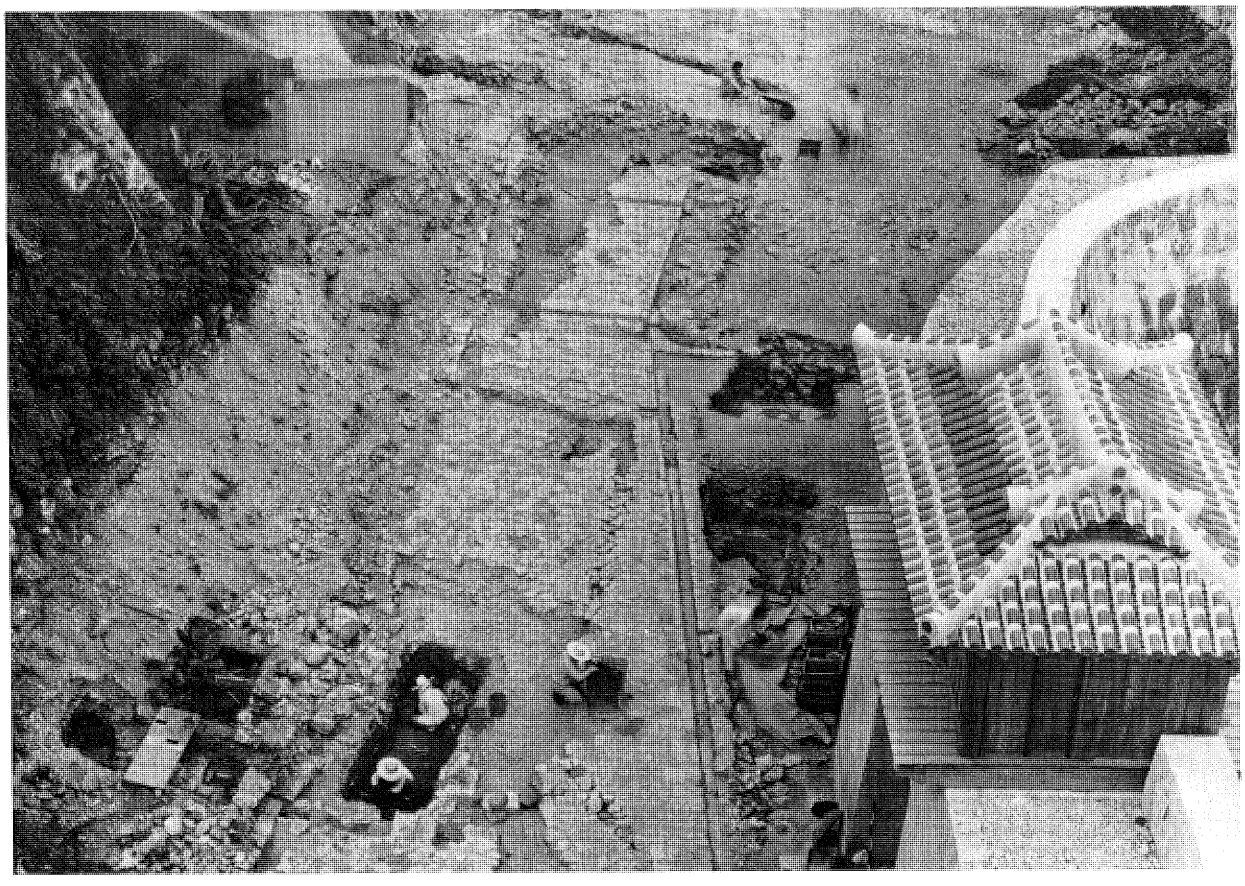
Kトレンチ　久慶門と寒水川井戸の中間にあたる石畳下に設定したもので、石畳直下は沖縄製陶器片の混入した土層が広がり、さらにその下は黄褐色土混じりの石灰岩塊が堆積している。さらに同トレンチの一角で磚敷き暗渠を検出することができた。

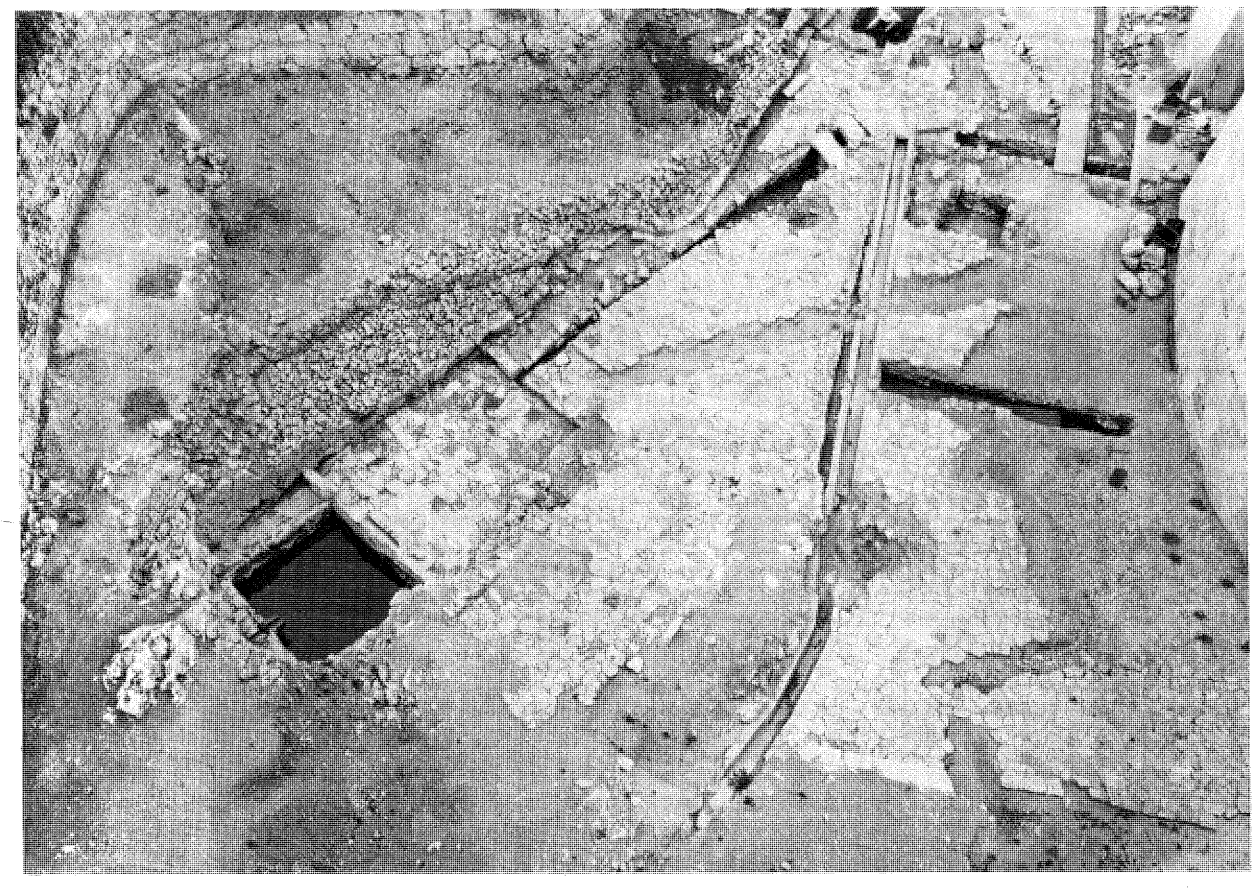
Lトレンチ　Hトレンチの西側に平行するように試掘したものである。基本的には3枚の堆積層を確認し、基盤のクチャ層に達した。当トレンチの南隅から基盤のクチャが存在し北に傾斜していることがわかった。3枚の堆積層はそれに沿うようにあり、徐々に上層で水平堆積するようになっている。なお、Hトレンチの㈢層に相当する石灰岩塊層は当トレンチ側にはなく、さらに北側に広く展開するものであることが判明した。

Mトレンチ　寒水川井戸の前庭に位置する石畳を除去してその下を発掘した結果、石畳直下に偶然にも石製の管を検出することができた。井戸から久慶門方向に敷設されている。発掘中も常に水の湧出しがあった。なお、当遺構の終始点については、上層遺構が良好に存在しているために追跡はできなかった。



第9図　Dトレンチ壁面図





図版７　久慶門の内側（東上方から）

上：久慶門の赤瓦が見える。下：寒水川井戸は水をたたえている。

第10図　歓会門・久慶門内側の遺構平面図・断面図

第Ⅴ章　遺　　構

第１節　遺構の全体概観

今回発掘調査が行われた地域は前述したように歓会門の内側、歓会門と久慶門及び寒水川井戸に挟まれた区域で、瑞泉門に至る石段の前方に広がる郭である。この郭を中心とする北側外郭については、首里城の第二次拡張期にあたる尚真王、尚清王の時代に埋め立て拡張されたところだといわれている。

本地区には、国宝建造物の歓会門をはじめ久慶門、寒水川井戸及びそれらを連結する石畳道等が昭和19年まで良く保存されていた。ところがこれらの全てが沖縄戦によって破壊を受け、その後琉球大学のキャンパスとして造成されるにおよんで旧地表面から２～３ｍもの厚さで土砂によって埋められてしまった。

発掘調査は、まず、この琉球大学造成時の土砂を取り除くことからはじまった。調査の結果は、地下に埋まっている遺構を中心に地上から僅か１ｍ前後の所までがかろうじて残り、当時、地上部分に露出していた遺構のほとんどは破壊されていることがわかった。例えば、郭内を仕切る石垣や土留め石垣などは根石の部分しか残ってなく、石畳道でも比較的レベルの低い部分は破壊を免れているものの高い所は削平されその位置すら特定することができないほどになっていた。

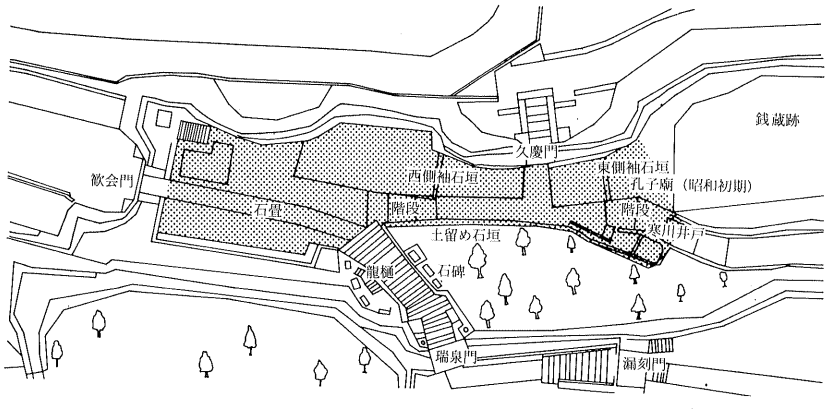
検出した遺構は、井戸及び井戸に伴う水利施設、石畳道、新・旧の石垣、石階段、暗渠形排水溝、上水道石管、方形石組、水槽等である。

これらの遺構のうち、比較的保存良好なものは寒水川井戸と呼ばれている井戸である。この井戸は方形を呈し、四面が琉球石灰岩の切石による整層積みされた立派なもので、現在でも豊かな湧水と樋から流れ出る水によって常に満水状態である。井戸の直上には琉球大学の校舎が建っていたが、幸いなことに、琉球大学造成時にコンクリートによって保護されていたために破壊を免れた。

本調査地は、すでに述べたように傾斜地を埋め立てて造成されたところで、地下の深いところから琉球石灰岩の岩塊等を積み上げ水が下に抜けるように工夫されていることも随所で観察することができた。

なお現在、昭和初期に作成された600分の１首里城平面図(県立図書館所蔵)(第６図)及び、明治、大正、昭和に撮影された写真類が若干現存しているので、これらの資料によって戦災前の遺構の状態を復元することができる。

以下、検出された遺構について説明する。



第11図　歓会門・久慶門内側の平面図

第2節　井　戸

井戸は一ヵ所検出された。この井戸は昭和初期に作成された首里城の実測図及び、首里城古図類にもきちんと描かれている。名称について記載された文献はないが、古老の間では寒水川井戸（スンガーガー）と呼ばれている。

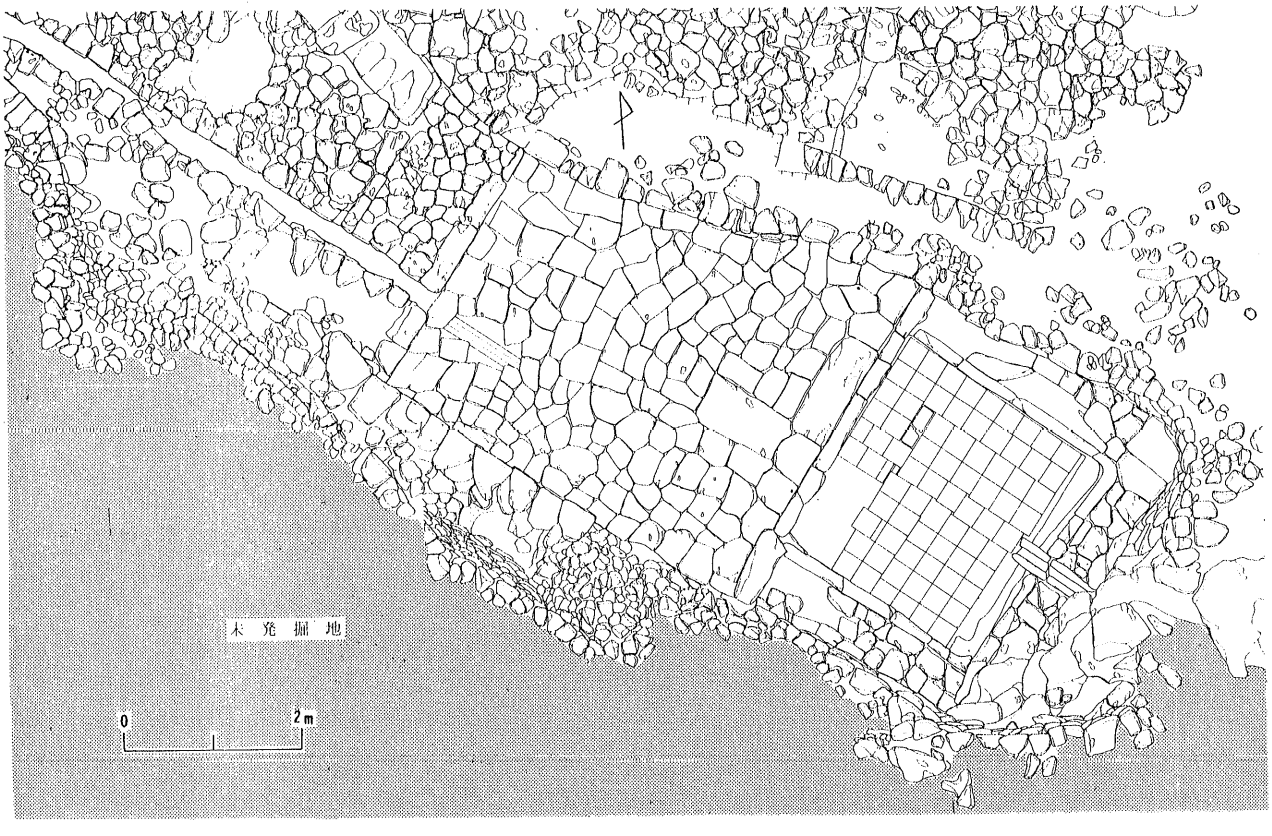
歓会門を直進して右脇門に延びていく石段の右下で検出された。埋め土の際に井戸全体がコンクリートの枠で覆われていたため保存状況は比較的良好で、発掘された時から井戸枠の中に水を満々と湛えていた。

平面形241×257cmの正方形を呈し、正面中央には琉球石灰岩の石樋が取りついている。この石樋は25×27×175cmの琉球石灰岩切石の角柱に幅９cmのＵ字溝を穿って作られたものである。検出されたときには約３分の１のところからひびが入り二つに割れていた。

井戸枠は55×32cm、厚さ13cm大の琉球石灰岩切石を使用し、順次床面より積み上げたもので掘り抜きである。井戸枠の石と石との隙間には漆喰やセメントで目づめを行っているが、この目づめは恐らく後世になって塗り込められたものであろう。井戸枠周辺は保存が良く、復元のための保存区域であることから断面観察は行わなかったが、井戸口前方の小範囲の掘り方で観察した結果では井戸枠石の背後に赤い粘土層が詰められており漏水の工夫が施されていた。

井筒の高さは35cmである。井戸枠のまわりは高さ2.5m程の相方積みの石垣に囲われ、井戸口の前方に石畳の広場を有している。現在の湧水面は標高110mである。

井戸の深さは212cm、井戸底の床面は平坦で井戸口右隅に100×60cmの余白を残しその周辺には塼が敷き詰められている。塼は布敷きになっている。



第12図　井戸地区平面図（井戸、石畳、石垣）

第3節　石　畳

石畳は3面検出された、井戸口前方の広場に敷設された石畳(第12図)、久慶門の前を横切って右脇門に向かう石畳、後世の孔子廟に伴う石畳（第14図）の3面である。いずれも琉球石灰岩切石を使用し、切面を会わせ亀甲形に敷設する。

第12図は、寒水川井戸の広場に伴う石畳で保存状況が極めて良好である。30～40cm大の琉球石灰岩を多角形に加工して亀甲形に敷設されており、面が丁寧に仕上げられ隙間には漆喰で目づめをする。井戸枠に接する石は比較的大きめのものが使用されている。石畳中央線から右（西）よりの石畳下で石管の埋設が確認されたが、保存区域のため発掘不可能となり観察は行わなかった。井戸に伴う水利施設と見なされるがその機能については判然としない。

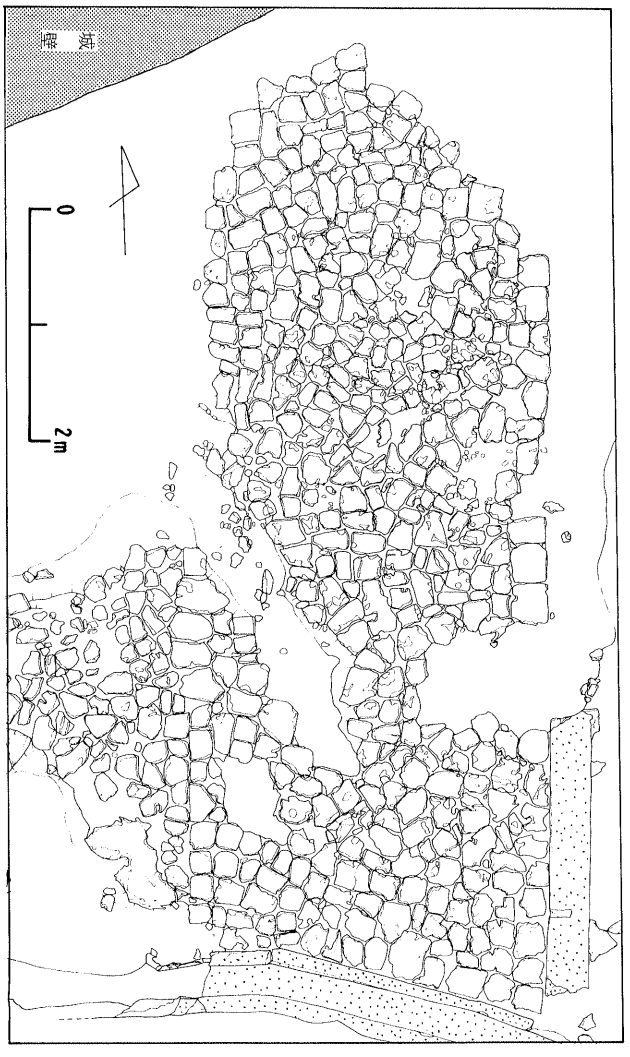
第13図は､石畳道として捉えられるものである。首里城図に描かれている本地区での石畳道は歓会門から瑞泉門に向かう石畳道及び、久慶門の前を横切って寒水川井戸、さらに奥にすすんで右脇門に至る石畳道の両者がある。前者の歓会門から瑞泉門に向かう石畳道については、完全に破壊され今回の調査では全く確認できなかった。今回の調査で検出された石畳道は、瑞泉門の階段下側から約1m東に寄ったところから久慶門を横切って寒水川井戸の左脇近くまで、長さにして約25mの距離である。石畳道が残っている箇所は、本地域でも比較的低くなった部分で標高111.50m以下のところである。

石畳道の幅は広い所で355cm、狭い所で280cmを測る、保存状況は比較的悪く、大部分が破壊、損傷をうけていた。残存している部分の石畳の表面は、つるつるに摩り減り長い歴史を感じさせる。

第13図
久慶門の前を横切って右脇門に向かう石畳平面図

石畳下については特に仕事の跡は確認されなかった。おそらく石畳敷設にあたって下部構造のことがそう問題にされなかったからであろう。

第14図は、久慶門の内側左手の方で検出された石畳で、南側にコンクリート製の側溝、また、石畳の前面側溝に接してコンクリート製の階段が取り付いており、比較的新しい時期に敷設されたものであることがわかる。戦前の首里城について記憶している数人からの聞き取り調査の結果、大正の初期ごろ孔子廟が建てられた際、孔子廟への参道としてつくられた石畳道の一部であることがわかった。琉球石灰岩切石を使用して、切口をあわせて敷設されているが、部分的に破壊され石の緩みや損耗がはげしかった。新しい石畳であることがはっきりしたので、復元整備にあたっては埋め殺しを行ってから上部の整備を行った。



第14図　孔子廟に伴なう石畳平面図

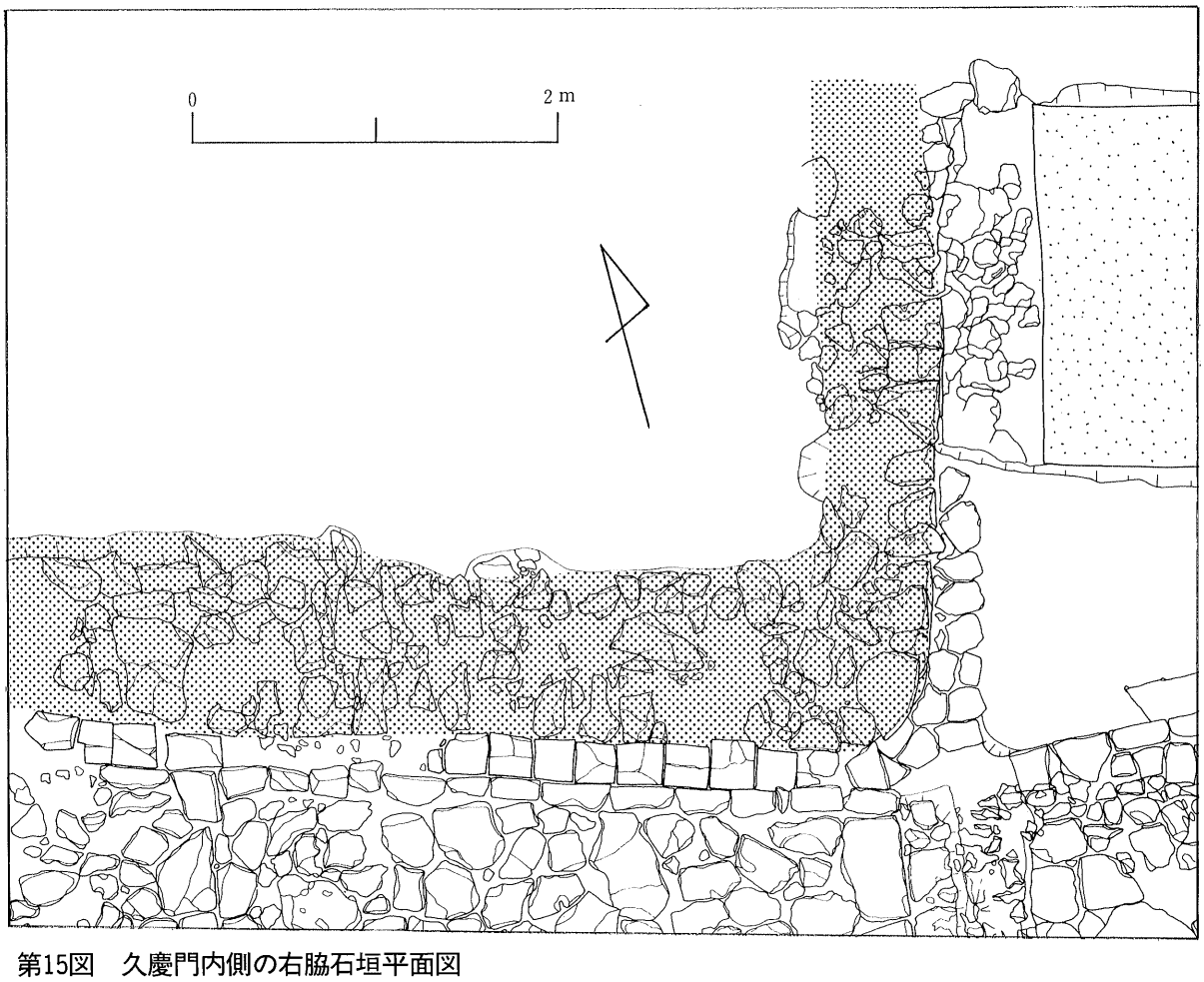
図版８　孔子廟前の石畳出土状況

第4節　石　垣

石垣は、瑞泉門にのぼる階段の下側から寒水川井戸に向かって延びる土留め石垣とそこから寒水川井戸の周囲を取り巻くように延びる石垣及び、久慶門内側の左右両脇に見られる土留め石垣、歓会門内側右脇の土留め石垣等である。寒水川井戸の周囲を取り巻く石垣は良く残っているが、それ以外の石垣については保存状況が極めて悪く根石の部分だけ僅かに残っているだけであった。

第22図（図版９図）は、瑞泉門に上る階段の下から寒水川井戸に延びていく土留め石垣で、寒水川井戸の広場石畳までの長さ約30m、幅は最も広いところで1.8m、狭いところで0.8mを測る。使用されている石は琉球石灰岩で、30～40cm角、控え35～45cmを測る。根石下は５cm前後の厚さでコーラルを敷いただけの簡単なものである。石垣はもともと２～３m程の高さだったといわれているが、現存する石垣は根石部分の一個だけである。石が多角形に加工されていること、古老の話などからすると相方積みであったようである。

第12図（図版７の下）は、寒水川井戸の回りを囲む石垣で平面形U字状を呈している。現存する石垣の高さは、比較的残りが良い井戸奥側（図版28の上）で、井戸枠天端から約３mを測り、保存状況が悪い井戸口石畳広場の南脇（図版28の下）と北脇で僅か数十cmを測るのみであった。なお、石畳広場両脇の石積みについては両者間に若干の違いがみられた。すなわち南脇（右側面）の石垣は二重になっているが北側ではそうなってないのである。



第15図　久慶門内側の右脇石垣平面図
（西側袖石垣）

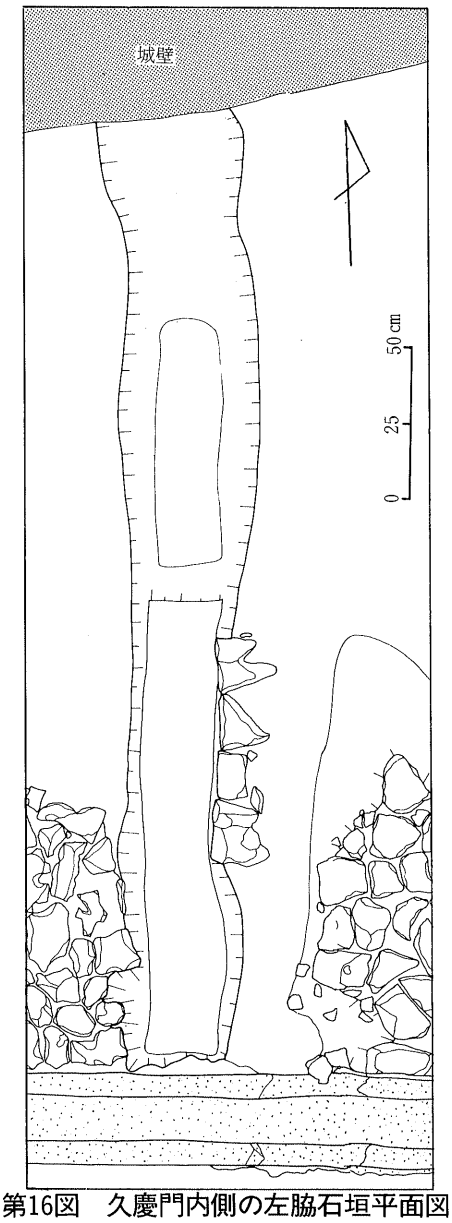
井戸の石垣正面には琉球石灰岩が露頭しておりその下をくりぬいて石樋が取りつけられている。石垣はこの露頭岩の周囲を巻くように巧みに積みあげられている。石垣の厚みは約1.8～２ｍを測る。使用されている石は琉球石灰岩で25～35cm角、控え35cm前後のもので、井戸両脇で使用されている石垣の石より僅かに小さい。根石下については保存区域のため断面観察は行えなかった。

井戸の右側面の石垣については、前述したように二重積みになっている（図版28の下）。内側の石垣は人頭大の石を乱積みとし、写真でもわかるように石灰岩を小さく多角形に割り、技巧的に積み上げられている。この乱石積みの前方に0.5～0.7mの厚さで石灰岩塊を詰めて裏込め石となし、30～40cm角、控え35cm前後の石灰岩切石をもって相方積みにされている。この二重石積み部分の石垣の厚さは約1.5mを測る。

この部分の石垣だけが二重になっている理由は、上部の方に漏刻門とその接続石垣が築かれていることからその過重によって下の石垣が崩壊する危険性を防ぐ工夫からであろう。このような工法は首里城正殿の基壇石積みでも確認された。

井戸の左側面石垣は保存状況が非常に悪く石垣下部を僅かに残すのみである。石垣の厚さは約１ｍを測る。琉球石灰岩の切石を使用し、石の仕様は右側面の外面石垣に使われた石と同様である。

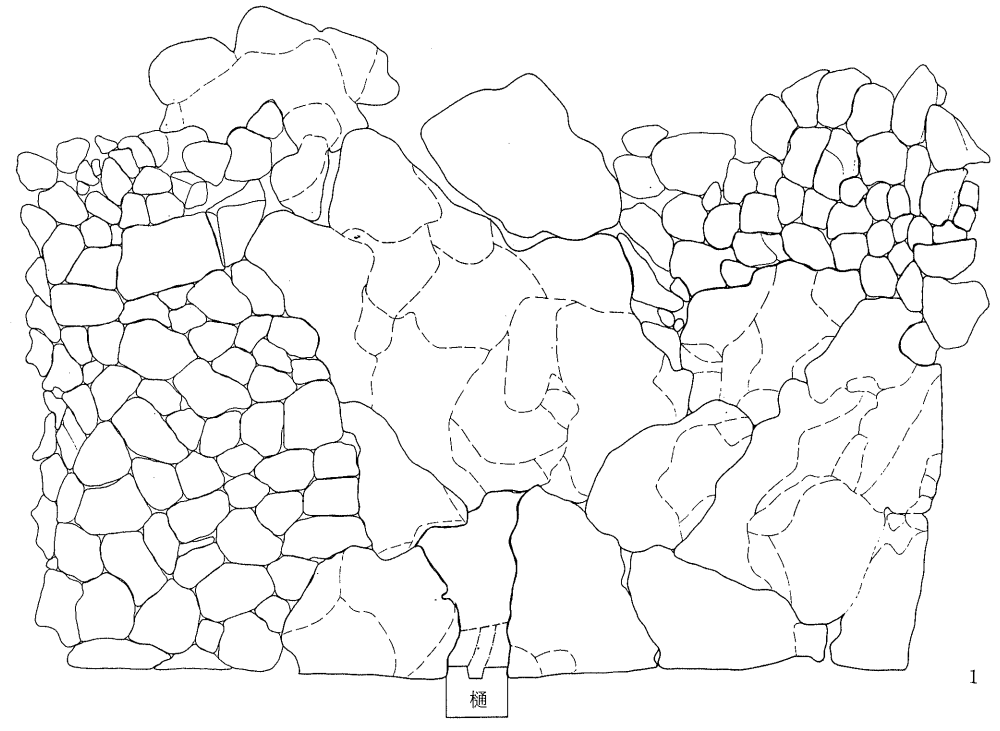
第15図（図版29の下）は、久慶門内側の右脇（西側袖石垣）にＬ字状に展開する石垣である。破壊がひどく根石が僅かに残っているだけであった。残った根石から使用された石の大きさを推定すると20～25cm角、控え30cm前後である。石垣の厚みは裏込め石の状況等から凡そ100cm前後が考えられる。石垣の高さは全く分からないが、古老の話では約150cm前後の土留め石垣だったようである。隅石は丸角に割りつけ加工されている。

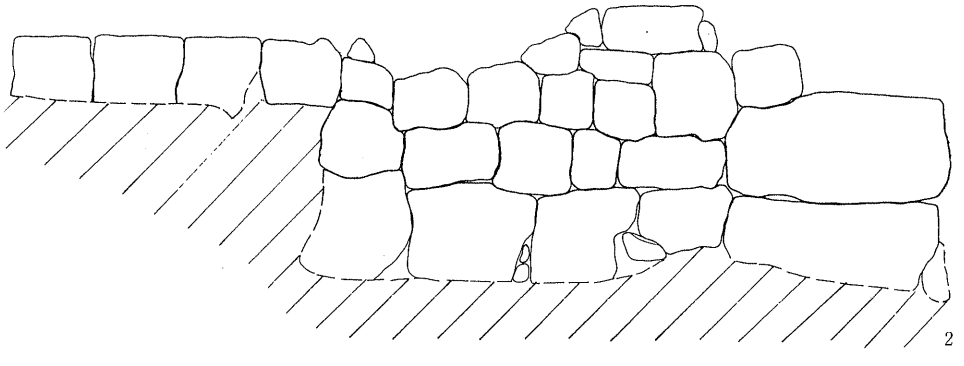


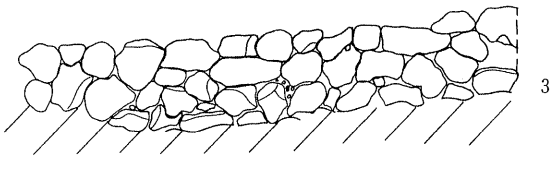
第16図　久慶門内側の左脇石垣平面図（東側袖石垣）

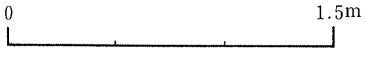
第16図（図版29の上）は、第15図の石垣に相対する東側袖石垣であるが、根石が僅かに数個残っているだけであった。近くに孔子廟の石畳が延びていることからこの石畳敷設の際に破壊されたものと思われる。石は25～30cm角、控え30cm前後の琉球石灰岩切石が使用されている。この石垣は絵図及び首里城実測図等でみると、東の方に直角に折れ右掖門の方へ向かって延びているようである。今回の調査では長さ６ｍ程のトレンチを設定して発掘を実施したが根石部分に至るまでかなりの破壊を受け数個の石垣ラインを追うのがやっとのことであった。

第17図の２は、歓会門内側右脇の土留め石垣である。琉球石灰岩を矩形に切り、整層布積みの石垣である。縦・斜め目地が稲妻形となりいわゆる稲妻目地となっており、今回発掘した石垣の中では最も古い形の石積みである。使用されている石は25×40cm角、控え35cm前後の琉球石灰岩切石である（図版30の下）。







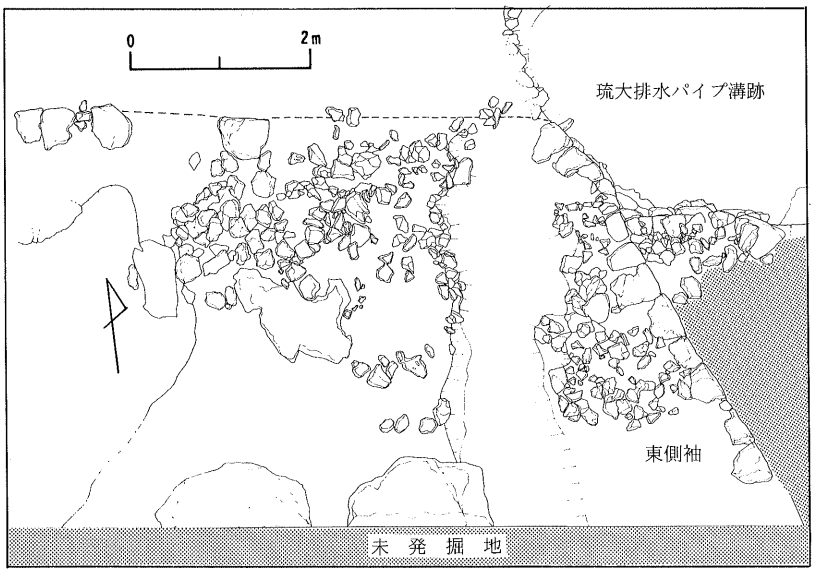


第17図　1．寒水川井戸東壁面　2．歓会門内側右脇土留め石垣　3．上水管南側土留め石垣

第5節　石階段

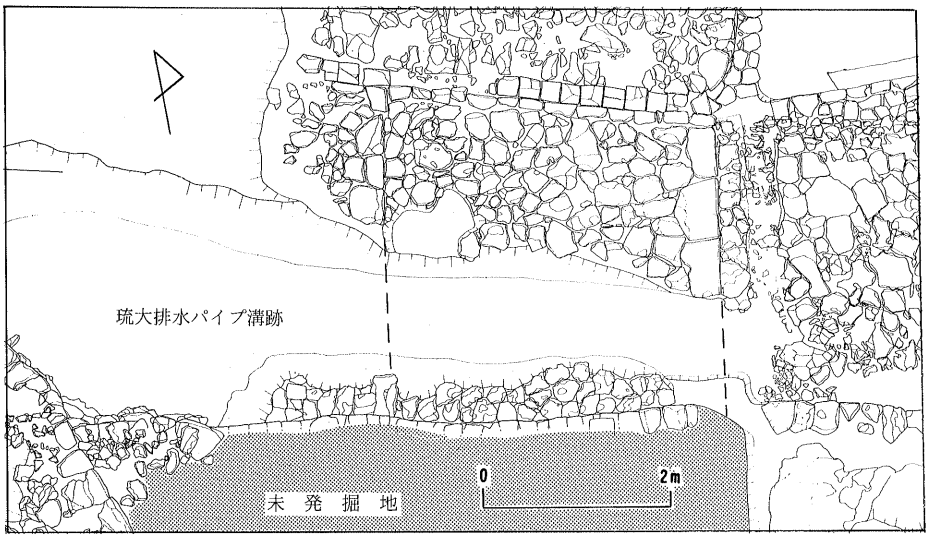
階段が四箇所確認された。いずれも石積階段である。その内三つの階段は首里城実測図に描かれているが、他一つについては描かれていない。

第18図は、瑞泉門に上がる石積階段であるが階段部が破壊され土台石を残すのみである。この土台石も東側袖の部分だけ残り、西側袖部は琉球大学造成時に破壊を受けている。そのため石垣土台部の幅については知ることができない。階段最下部土台石が石畳の下層に潜り込んでいることから、この階段の土台石は石畳敷設以前即ち外郭拡張以前の階段土台石の可能性が強い（図版31の上）。



第18図
瑞泉門に上がる石階段平面図

第19図は歓会門前から久慶門の前の石畳に通ずる石積階段である。現存総長５ｍ、階段総体の傾斜は約11～12度前後におさまる。幅は下方すなわち久慶門側で3.2m、上の方で3.8mを測り、階段を下りるにつれやや幅が狭くなる。踏石は二段現存し、首里城実測図で復元すると３段、長さ11mである。北側の片裾部には幅20cmの溝が西側袖石垣の壁面と平行に敷設されている。溝の底には赤色の塼が敷かれている。この溝は首里城実測図には描かれていないので後世に敷設された可能性が強い（図版31の下）。



第19図
歓会門前から久慶門の前の石畳に通ずる石階段平面図

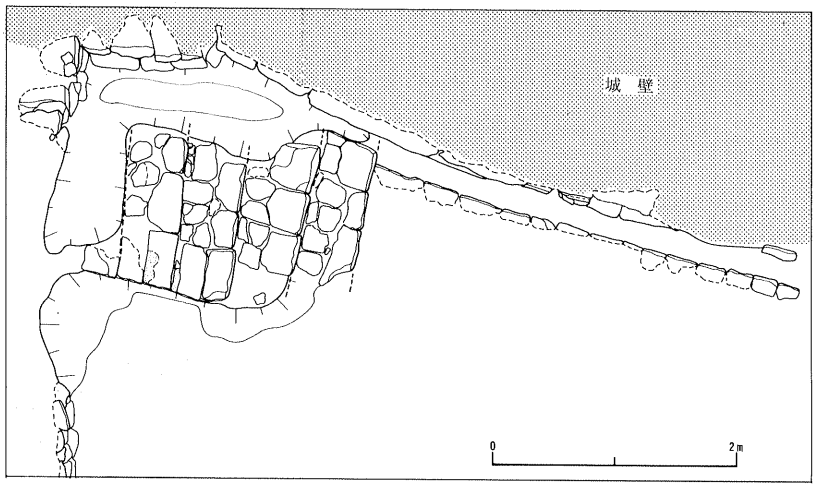
第20図は久慶門の前から寒水川井戸の北脇を通る石積階段である。階段の南側は寒水川井戸を囲繞する石垣に接し、北側袖は幅25cmのコンクリート製の溝に接している。この溝は後世孔子廟を作る際に敷設されたものである。現存長17.5mを測る。踏石は二段現存するが首里城実測図で復元すると4段、長さ20mである。蹴放し石の高さ15cm、床面は20～30cm角の琉球石灰岩切石を使用して相方風に敷設されている。階段の傾斜は約11度である。床石の表面は両階段ともつるつるに摩り減り長い歴史を感じさせる(図版32)。

第20図　久慶門前から寒水川井戸の左脇を通る石階段平面図

第21図は、昭和51年度に実施された久慶門発掘調査の際発見された石積階段と排水遺構である。すでに久慶門の復元の時に取り壊されたため今回の調査の時には存在しなかったが、実測図面が残っているので本報告書に掲載することにした。なお、当時の報告書には、「また西内側には、大正か昭和初期頃作られたと思われる石段と排水溝が出た。」と記されているだけである。

久慶門内側の西側袖石垣が城壁に接する角に取りつけられている。比較的残りが良く、幅2mで踏み石が5段現存し、復元すると6段、階段の出は2.3m、高さは不明である。階段口から久慶門の方へ向かって幅18mの溝が城壁に平行して敷設されている。

坂谷良之進原図の首里城平面図には描かれていない。



第21図
久慶門内側の右脇石垣の
石積階段と排水遺構平面図

第6節　排水溝

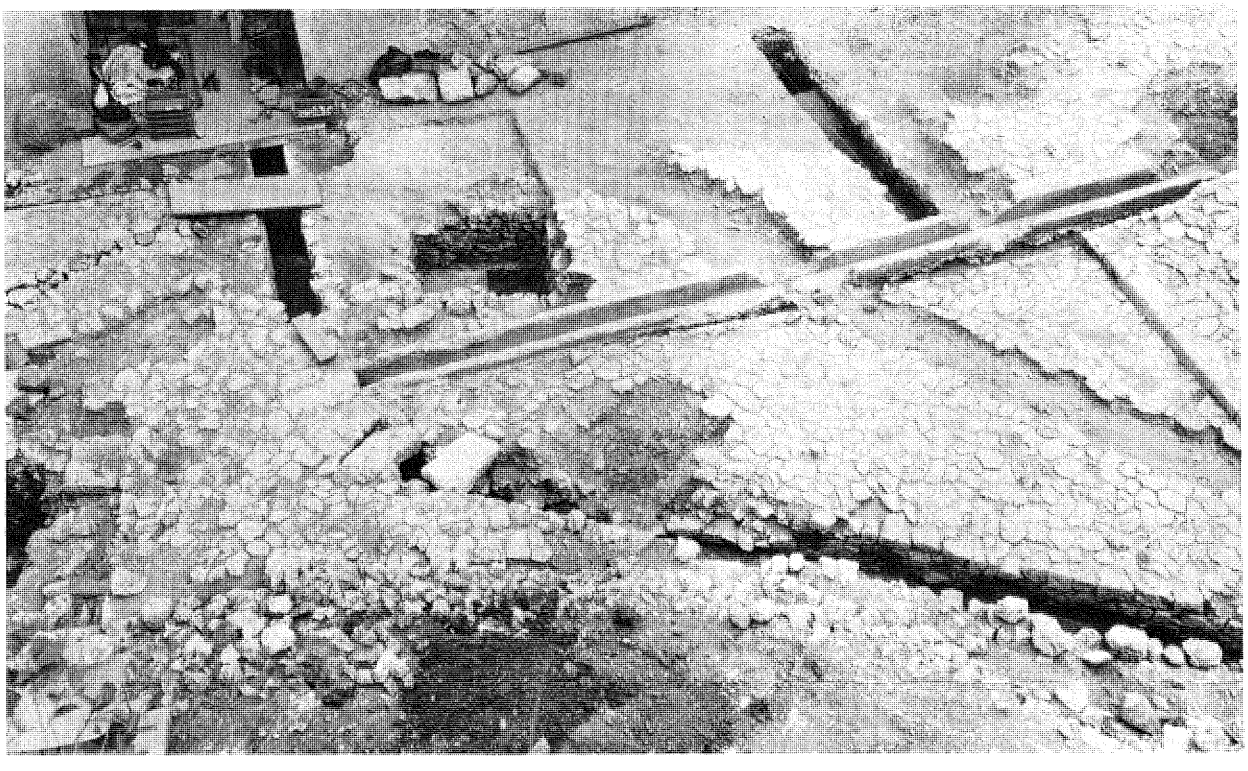
寒水川井戸の井戸尻から久慶門及び城壁の下を通って城外へ抜ける排水溝が三本検出された。そのうち一本だけが機能しており、他二本は石畳の下で埋め殺されていた。三本とも寒水川井戸に伴う排水施設である。

排水溝1（第22図）は、三本の排水溝のうち最も新しい時期に属する排水溝で、首里城実測図にも描かれている。寒水川井戸の井戸尻から石畳道の下を潜り抜け久慶門の下を通って城外に出、さらに首里城外の円鑑池へと落ちていく。久慶門までの長さは16mを測る。構造をみると、側石には20～30cm角の琉球石灰岩切石を3段ないし4段に積みあげ、床石は側石と同様の琉球石灰岩を加工した石敷とする。現状では排水溝に架された蓋石は僅かに8枚しか残ってなかった。蓋石の大きさは80×40×20cm前後の板状石である。溝幅30～40cm、深さ80～95cmを測る。

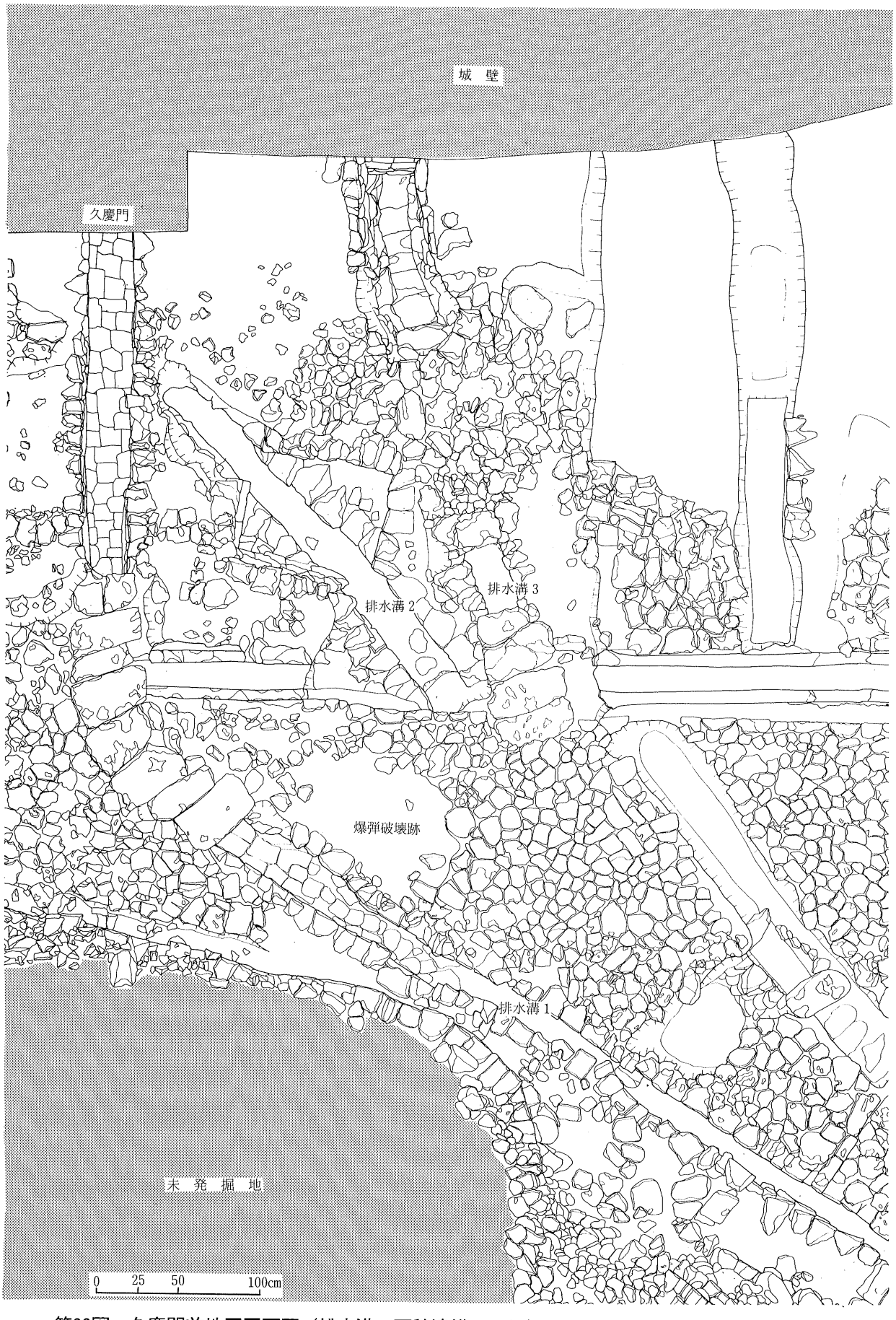
排水溝2と3は、古い排水溝で石畳道の下に埋め殺され早い時期に機能しなくなったものである。2の排水溝は1と3の排水溝敷設の際破壊されているので三本の排水溝では最も古い時期に属するものである。さらに第9節で述べる石組遺構によっても一部破壊されていることからこの付近で検出された遺構の中では一番古い遺構であることがわかる。構造は1と同様であるが床石は無く、蓋石は全く確認されなかった。溝幅30～40cm、深さ約70cmを測る。

3は側石には20～30cm角の石を用い、蓋石には80×40cm前後の板状の石を架けている。床石は板状石を布敷とする。溝の幅30cm、深さ60cm前後である。この排水溝は久慶門の東に接続する城壁の下に抜けているが、保存区域のため追跡することができなかった。1より古く2より新しい時期の溝である。

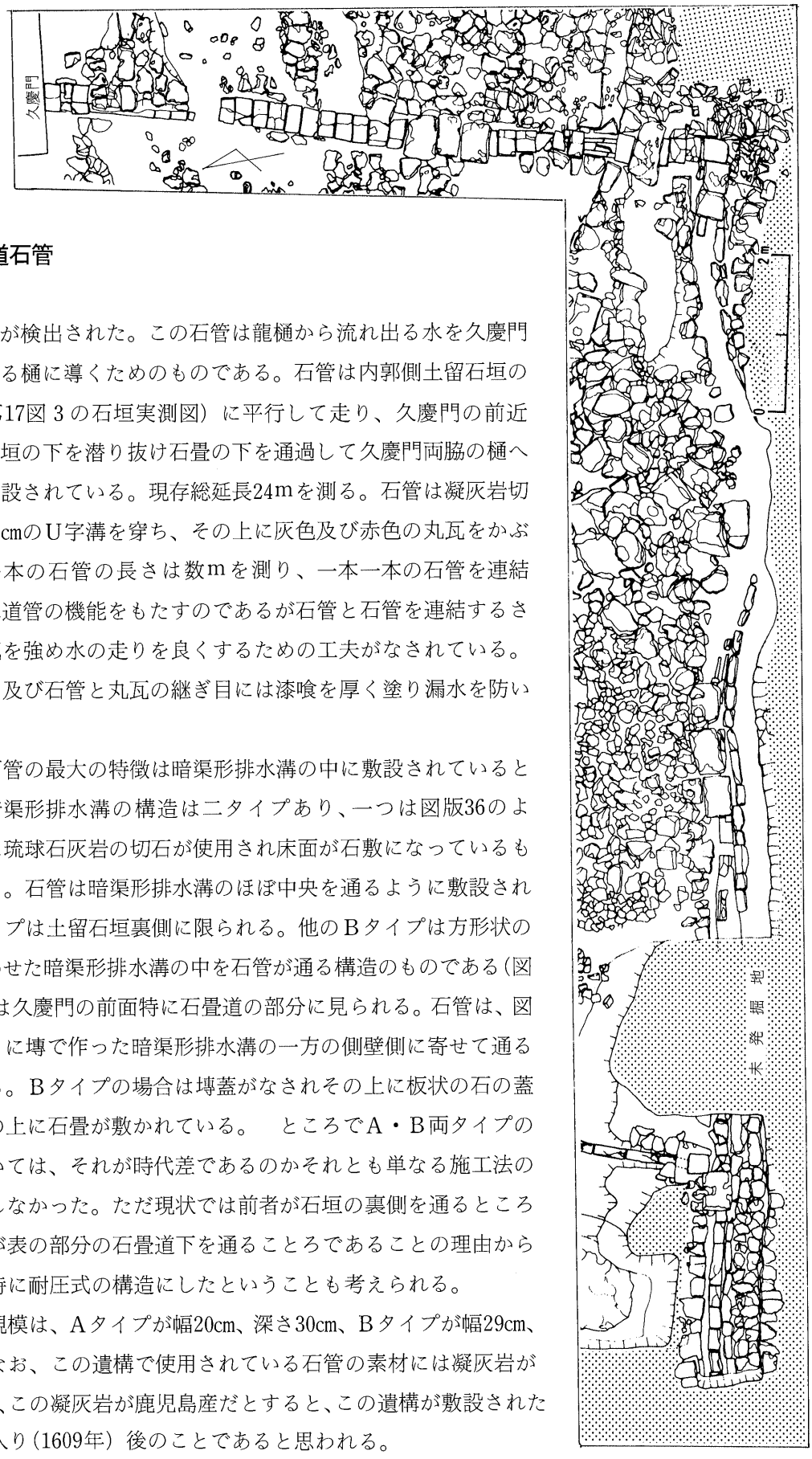
なお、この三本の排水溝の他に石畳道の縁にも深さの浅い排水溝が取りついているが、いずれもコンクリート製であり、大正か昭和初期に敷設されたものである。



図版9　久慶門前から東側地域の排水溝



第22図　久慶門前地区平面図（排水溝、石積遺構、石垣）



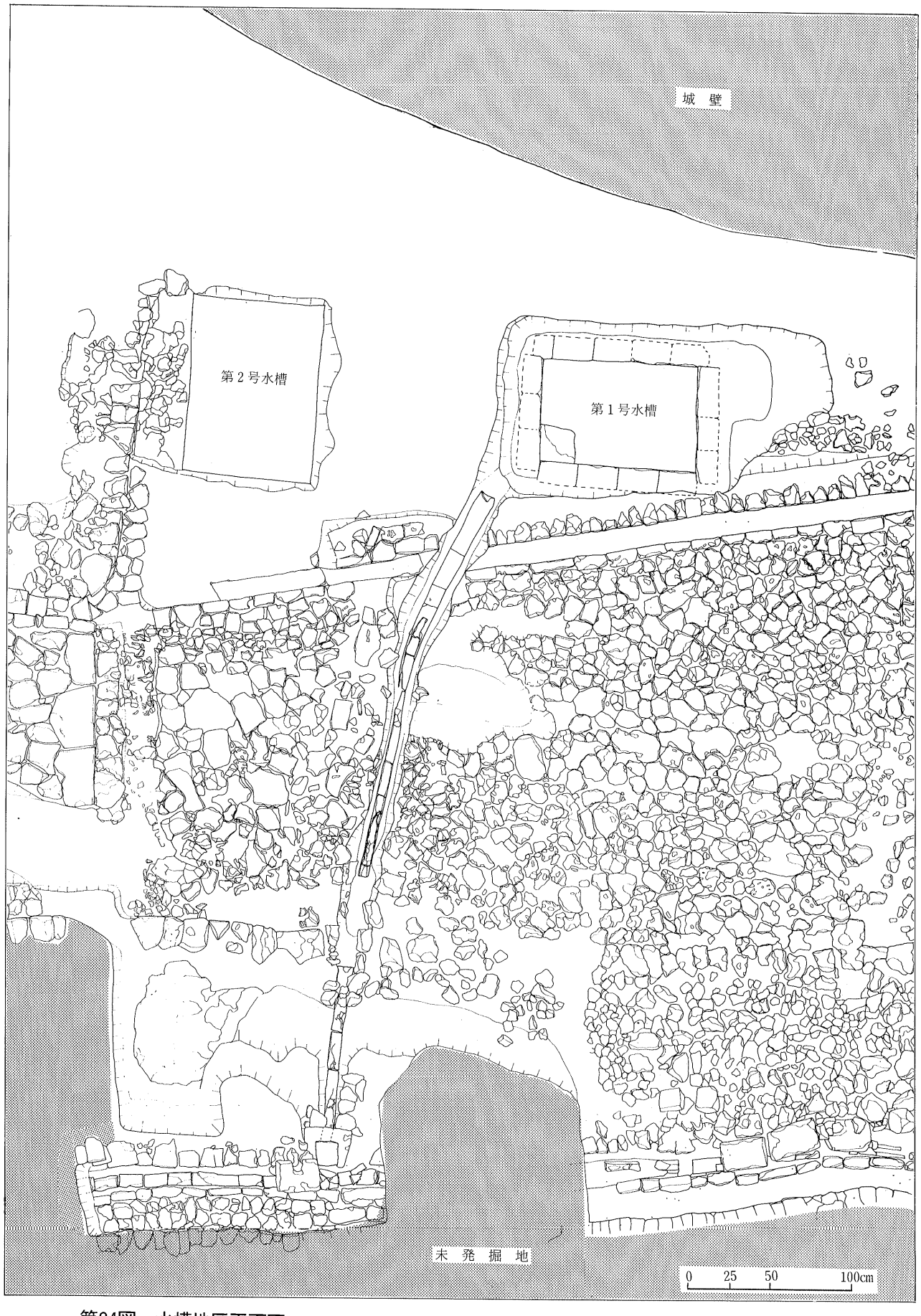
第23図
上水道石管平面図

第７節　上水道石管

一本の上水道石管が検出された。この石管は龍樋から流れ出る水を久慶門両脇に取りついている樋に導くためのものである。石管は内郭側土留石垣の裏側を土留石垣（第17図３の石垣実測図）に平行して走り、久慶門の前近くで直角に曲がり石垣の下を潜り抜け石畳の下を通過して久慶門両脇の樋へと流れ出るように敷設されている。現存総延長24ｍを測る。石管は凝灰岩切石の角柱に幅５～７㎝のＵ字溝を穿ち、その上に灰色及び赤色の丸瓦をかぶせたものである。一本の石管の長さは数ｍを測り、一本一本の石管を連結することによって水道管の機能をもたすのであるが石管と石管を連結するさい上下に重ねて勾配を強め水の走りを良くするための工夫がなされている。石管と石管の継ぎ目及び石管と丸瓦の継ぎ目には漆喰を厚く塗り漏水を防いでいる。

なお、これらの石管の最大の特徴は暗渠形排水溝の中に敷設されているということである。暗渠形排水溝の構造は二タイプあり、一つは図版36のように両側面と蓋石に琉球石灰岩の切石が使用され床面が石敷になっているものである（Ａタイプ）。石管は暗渠形排水溝のほぼ中央を通るように敷設されている。このＡタイプは土留石垣裏側に限られる。他のＢタイプは方形状の灰色の塼を組み合わせた暗渠形排水溝の中を石管が通る構造のものである（図版37）。このタイプは久慶門の前面特に石畳道の部分に見られる。石管は、図版37でもわかるように塼で作った暗渠形排水溝の一方の側壁側に寄せて通るよう敷設されている。Ｂタイプの場合は塼蓋がなされその上に板状の石の蓋を架け、さらにその上に石畳が敷かれている。　ところでＡ・Ｂ両タイプの構造上の差異については、それが時代差であるのかそれとも単なる施工法の違いなのか判然としなかった。ただ現状では前者が石垣の裏側を通るところであること、後者が表の部分の石畳道下を通ることろであることの理由から後者の表部分だけ特に耐圧式の構造にしたということも考えられる。

暗渠形排水溝の規模は、Ａタイプが幅20cm、深さ30cm、Ｂタイプが幅29cm、深さ20cmを測る。なお、この遺構で使用されている石管の素材には凝灰岩が使われている。もし、この凝灰岩が鹿児島産だとすると、この遺構が敷設された時代は島津の琉球入り（1609年）後のことであると思われる。



第24図　水槽地区平面図

第8節　水　　槽（第24図・図版38）

発掘調査で二基の水槽が検出された。二基とも久慶門内側の右脇に設けたE・F地区で検出されたもので、2m隣接した位置にある。この水槽の西側斜め上約20mの所には龍樋が存在する。

第1号水槽は、200×170cmの矩形を呈し、現状では枠石の深さ約30cm、地表面までの深さ約130cmを測る。水槽の枠石には25×45×30cmの琉球石灰岩の切石が使用されており、また床石にも42×30×15cmの琉球石灰岩切石が使われている。枠石、床石ともに入念に組まれているが、その上には漆喰が厚く塗り込められていて漏水を防ぐ工夫がなされている。南西角には、40cm四方の踏石が設けられ、さらにその上にはこの水槽に水を導くための陶管が取りついていた。陶管の方向が龍樋を向いていることからすると龍樋の水を引いてきて水槽に注いだものとおもわれる。なお、陶管は長さ48cm、径9cmの円筒状の焼き物で赤褐色を呈している。陶管と陶管の継ぎ目には漆喰を塗り込み、漏水を防いでいる。

水槽の埋土は、上・下二層からなる。上層は赤瓦、塼瓦、ガラス、ガラス瓶、鉄製品など明治以降の遺物を含む角礫集積層である。下層は、礫の少ない層となる。

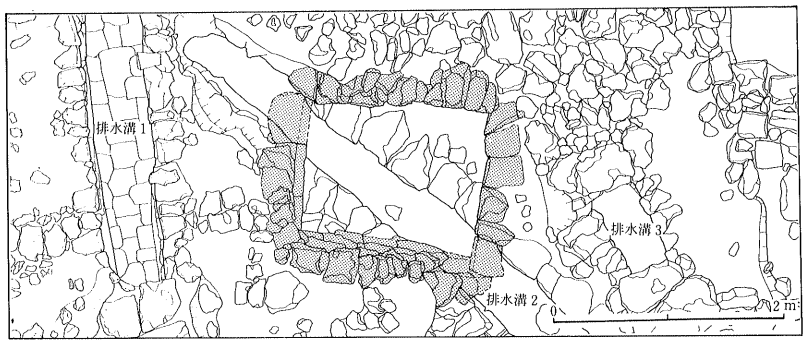
第2号水槽は、西側袖石垣に接して検出された水槽である。水槽の床面は良く残っているものの側面はほとんど欠損し僅かに立ち上がり部分だけを残すのみであった。床面は2×5mを測り、矩形を呈している。床面、側面ともコンクリート製である。この水槽は、師範学校によって大正の頃作られたものであることが聞き取り調査によってわかった。

第9節　石組遺構（第25図・図版35下）

石組遺構が石畳の下層で一基検出された。検出された場所はB地区で久慶門の内側東脇である。この石組は2の排水溝の上にそれを破壊して作られたものである。形態は1.5×1.3mの矩形平面を示し、琉球石灰岩の荒加工された石を6～7段程積み、深さは1.3mを測る、床面は粘土張りであるが、表面を白いヘドロ状の物質が薄く覆っている。石組の埋土は礫混じりの粘土層でその中には多量の炭や魚骨の細片が含まれていた。

この施設が何のための施設であったか、にわかに決しがたいが、寒水川井戸の井戸尻に近いこと、排水溝が近くを通っていることから、排水溝の溜めますではなかったろうかとも考えられる。

ところで首里城正殿跡の発掘調査ではこの種の石組遺構が数十基も検出されている。しかし、これらの石組遺構がみな同じ機能を有していたとは考えられず、遺跡の内容によって種々の機能を考えるべきであろう。



第25図　石組遺構平面図

第10節　造成地業（第26図・図版39）

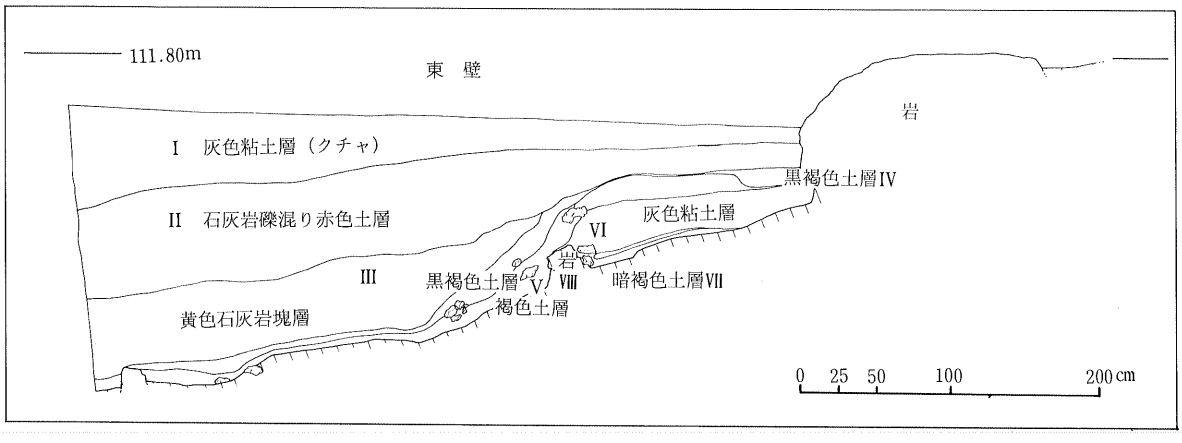
H地区の一部断面観察調査によって整地造成地業の様子がわかったのでここに記述しておくことにする。

本地域については尚真から尚清代にかけて拡張されたということについてはすでに述べた通りであるが、そのことについては詳細に記述された文献はない。断面観察の成果を基に造成地業の様子を復元すると次のとおりとなる。

本地区は整地造成される前はもともと125mを最高点として北面する傾斜部であったようである。傾斜度は約17度程であった。この傾斜面のほぼ裾部に相当するところの比較的安定したところを選び、そこに琉球石灰岩の大きな岩塊を高く積み上げ土留擁壁を築くのが最初の作業工程である。次に城壁の外側の石垣はこの擁壁の外側（城外側）に琉球石灰岩切石を整層積みにして約12m程高く積み上げ、内側の石垣はある程度造成した後にその造成層の上から琉球石灰岩切石をもって整層積みとするのである。

内側の造成層は現地表面まで8枚の層にわかれる。Ⅷ層は基盤の琉球石灰岩である。Ⅶ層は暗褐色土層で琉球石灰岩の風化土である。Ⅶ・Ⅷ層ともに基盤層ということになる。Ⅳ層は黒褐色土層で遺物包含層であるが、それはプライマリーな層ではなく、上の内郭側から流れてきた10～20cmの薄い層であり、外郭拡張前の地表面にあたる層である。Ⅲ層は造成地業の最初の盛土部分で25～30cm大の石灰岩塊をもって整地されている。岩塊と岩塊の間は土が充填されてないので隙間だらけになっているが、固く締まっていて強固な地盤を形成している。層の厚さは城壁側で約1mと厚く、内側にいくに連れ次第に薄くなり緩い傾斜堆積を示している。Ⅱ層は粘り気のある赤土に1～2cm大の石灰岩角礫が混入した層で、締まりの悪い赤土粘土層である。層厚は城壁側で約125cm、内側で35cmを測る。Ⅰ層は灰色の粘土層で石灰岩角礫を含まない層である。現地表面までの厚さは厚いところで135cm、薄いところで20cmを測る。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層とも外郭拡張時の造成層ということになる。

ところで造成地業を行った時代は何時であろうか。これらの造成がある時期に一気になされたことは層の堆積状況から首肯でき、とすれば造成直前の第Ⅳ層の黒褐色土層から出土する遺物がその鍵を握っているということになる。第Ⅳ層から出土した遺物は主として中国産輸入陶磁器が占めた（第Ⅵ章第Ⅰ節参照）。これらの陶磁器は全て14世紀代に属するものとなっている。



第26図　Hトレンチ壁面図

第Ⅵ章　遺　　物

本遺跡から出土した遺物は、戦前まで存在していた城内建造物に使用された屋根瓦や塼瓦等を中心に沖縄産陶器、輸入陶磁器、古銭、ガラス瓶など、時代的には中世、近世、現代に至るまでの遺物が多量に出土した。その多くは戦災による破壊後の盛土整地層からの出土であり、遺構に関連して出土したものはごく少量であった。

以下出土遺物について述べる。

第１節　輸入陶磁器

輸入陶磁器の中で圧倒的に優位を占めるのが中国陶磁器である。碗が最も多く、皿、盤がこれに次ぎ、酒会壺や香炉も少量含まれている。出土したこれらの青磁は、量的にはそう多くないが、質的に見ると優品が揃っており、王城としての首里城の性格を遺物の上からも窺えるものである。

(1)　青磁碗

輸入陶磁器の中で最も多く出土したのは青磁碗である。全標品とも破片で出土し、口縁部から底部に至るまで復元可能なものはなかった。文様や器形によって蓮弁文碗、雷文帯碗、外反口縁碗、玉縁口縁碗、直口口縁碗に分類できる。

①　蓮弁文碗（第27図１・２・３・４・５・13）

鎬蓮弁文碗と無鎬蓮弁文碗に分類できる。

鎬蓮弁文碗は６片出土したが、うち３片だけ図示し（１・３・５）、残り３片は小破片のため省略した。

１は鎬蓮弁文を箆彫りによって浮き彫りしたもので、蓮弁の弁先は尖っている。釉色は青緑色で明るい。推定口径17.2cmを測る。鎬蓮弁文碗最大の破片である。Ｄトレンチ㈢層からの出土である。３は１と同様鎬蓮弁が精巧に箆描きされ、弁先が尖る。釉色はオリーブグリーン。寒水川井戸南側石垣の下層から出土した。５は鎬蓮弁文の描き方が粗雑で、弁先がやや丸みを帯びている。釉色は淡緑色、貫入が多い。盛土整地層からの出土である。

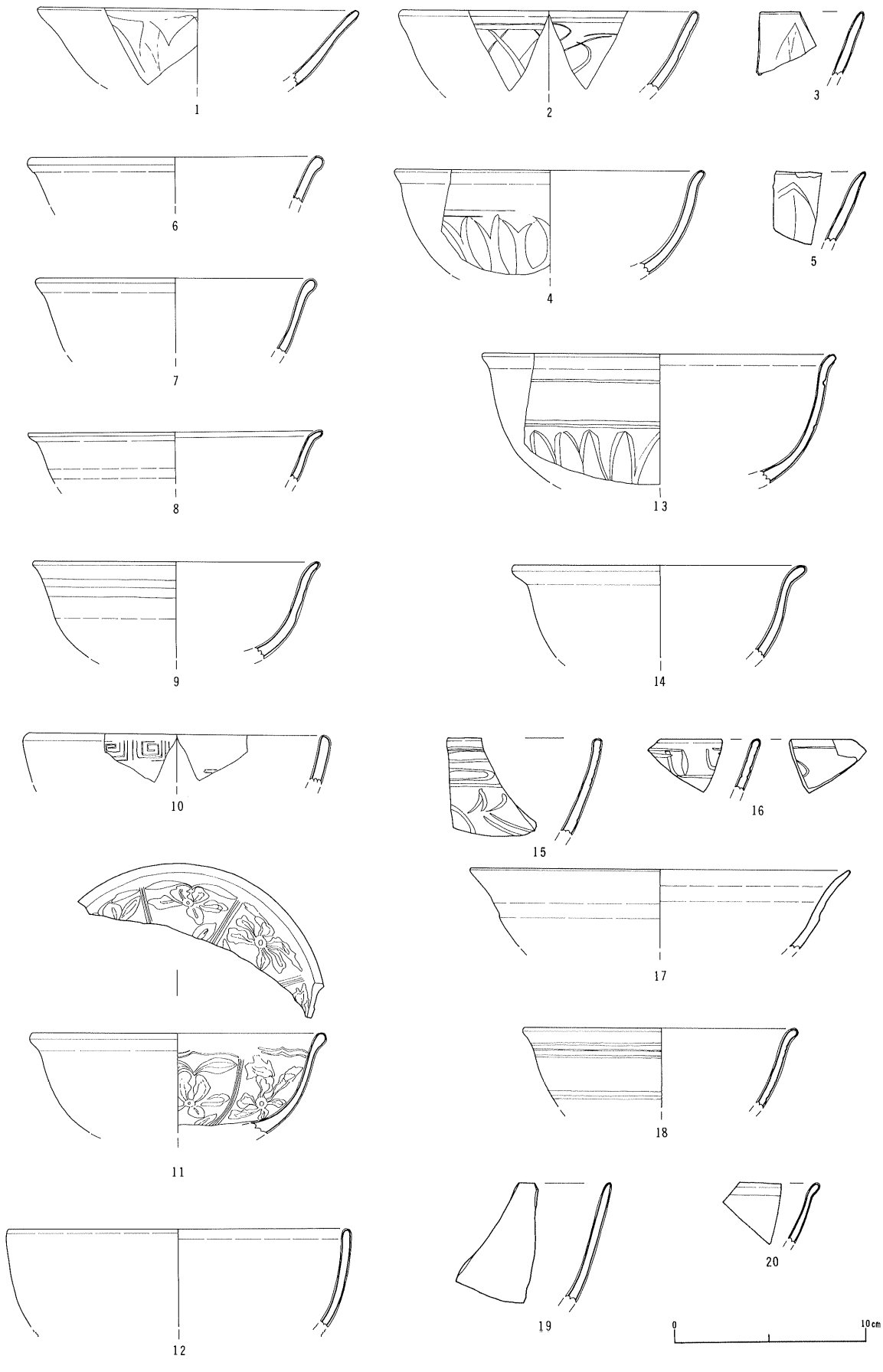
②　無鎬蓮弁文碗（第27図13・４・２）

９片の標品が得られたが、いずれも小破片で復元して器形を窺えるものはなかった。２は深い片切り彫りによって粗雑な蓮弁が描かれており、器内面に刻花文を有す。釉色は濃い緑色を呈し、素地は灰白色である。口唇は丸くつくり直口口縁、肉厚の碗である。推定口径12.8cm、盛土整地層からの出土。４は箆削りの粗雑な幅広蓮弁で、蓮弁の弁先は開き不明である。釉色は濃い緑色で厚くかけられている。口縁部は外反して肉厚の碗、推定口径16.5cm、盛土整地層からの出土。13は比較的大ぶりの碗である。丸彫りの弁先の尖った蓮弁を有し、弁間はあき、蓮弁の上に二本の圏線をめぐらす。素地は白色、釉色は淡緑色、口縁部が外反する。推定口径18.8cmの大振りの碗である。Ｂトレンチからの出土。

③　雷文帯碗（第27図10・15・16）

雷文帯碗

口唇直下に簡略化された雷文を描出するもので、箆彫りしたものとスタンプの両者がある。10はスタン



第27図　青磁器

プの雷文帯を器外面にめぐらす。直口口縁、器肉の厚い碗である。15と16は篦描きによる雷文帯を器外面にめぐらす。両者とも厚い釉がかかり直口口縁。器体部はやや厚手仕上げである。刻花文が16は内体面に、15は外体面に見られる。素地は両者とも灰白色、釉色は16が濃緑色、15が淡緑色を呈している。両者とも表採品である。

④　外反口縁碗

総数47片出土し青磁碗の中では最も多かった。いずれも小破片で復元して器形を窺えるものはなかった。18は全体的に薄手に仕上げられた碗で、器体部に数条の圏線がめぐっている。素地は灰白色、釉色は濃緑色を呈している。寒水川井戸南側石垣の下層からの出土。8は口唇部の釉色が僅かに禿落ちている。素地は灰色で素粒子、釉色はオリーブグリーン。推定口径15.6cmを測る。表採品である。9はやや厚手の碗で、胴部が膨らむ。器内外面に貫入が見られる。素地は灰白色、釉色は淡緑色。推定口径15.3cmLトレンチII層からの出土。14は口唇部が丸くつくられ、胴部はやや膨らむ。素地は灰白色で粒子がやや荒い。釉色は灰緑色。推定口径15.7cm、表採品である。17は口唇部が尖り全体的薄手に仕上げられている。素地は灰色。釉色は黄緑色。推定口径20cmでやや大振りの碗である。Dトレンチ III層からの出土。20は薄手に仕上げられている。素地は灰色、釉色濃緑色。表採品である。

⑤　玉縁口縁碗

口縁部を僅かに外反させ、短部を丸く肥厚させ小さく玉縁状につくるものである。復元して器形の窺える標品はないが、いわゆる佐敷クイプに近い青磁碗である。6は小破片のため全体形は窺えないが推定口径16cmの口縁破片である。釉が薄くかかり失透釉、素地は灰色で釉色が青緑色。7は素地が灰白色でやや粗粒子、釉色は淡緑色、推定口径15cm。6と7ともにLトレンチII層からの出土。11は内体器面一杯に陽印花を描き、釉が厚くかけられている。素地は灰色、釉色は濃緑色を呈している。推定口径15.7cm、表採品である。

⑥　直口口縁碗

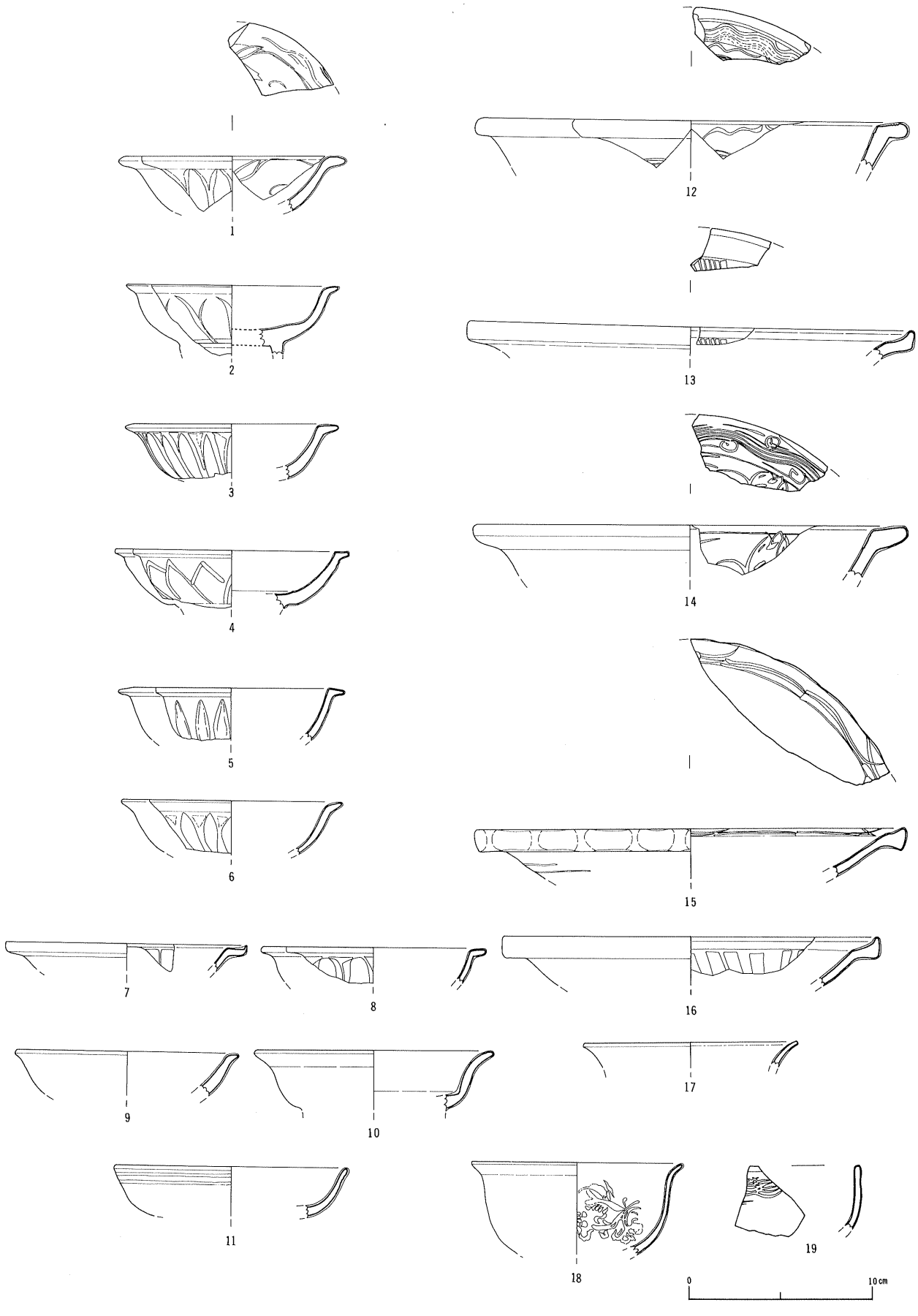
口縁部は直進し、無文の碗である。13点の出土。小破片が多く復元して器形を窺えるのがない。12は推定口径18.2cmを測り、大振りの碗である。口唇部を丸くつくり素地は灰色、釉色は失透釉の淡緑色。表採品。19は口唇部が尖り釉は厚くかかる。素地は灰白色で、釉色は明るい緑色。器外面に貫入が見られる。Lトレンチ II層からの出土。

(2)青磁皿（第28図－1～11）

青磁皿は11点の出土をみた。器形によって、口縁部が水平に折り曲げられるいわゆる口折皿、外反口縁皿、直口口縁皿の3つに分けられる。

①　口折皿（第28図－1～7）

この種の標品は比較的多く出土した。その内、器形が窺えるもの8点を図示してある。1は器外体面に膨らみをもつ蓮弁文が篦彫りされ、器内体面には劃花文がみられる。素地は灰白色、釉色は淡緑色。口径12.6cm、Lトレンチ III層出土。2は若干腰折状になった皿で、器外体面に弁先の不明な蓮弁文が彫られている。素地は灰色、釉色はオリーブグリーンで発色がいい。口径11.8cm、器高4cmを測る。表採品。3は器外体面に幅の狭い蓮弁文が篦で彫られている。弁先は尖っている。素地は灰白色、釉色は濃緑色。口径11.8cm。Hトレンチ III層からの出土。4は折り曲げられた口縁部が角張っている。器外面に蓮弁文を描き内底に圏線が巡っている。釉は薄くかけられ素地の気泡が目立つ。素地は灰色、釉色は褐色がかった緑色



第28図　青磁器

で発色が鈍い。口径13cm。表採品。5は器外面に膨らみのある蓮弁が描かれている。弁先が尖り幅の狭い蓮弁文である。弁間は開いている。器体部は薄手。素地は灰色、釉色は淡緑色。口径12.6cm。寒水川井戸南側石垣の下層からの出土。6は器外面に幅の狭い蓮弁文が描かれている。薄手仕上げである。素地は灰色、釉色は草緑色。口径12.5cm。表採品。7は器外面に蓮弁文が描かれているが釉が厚くかかっているため不明瞭。薄手で折り曲げられた口縁端を僅かにつまみ上げる。素地は灰白色。釉色は濃緑色。口径13.5cm。Lトレンチ II 層からの出土。

② 外反口縁皿（第28図－9・10）

口縁部が外反する皿である。10は口縁部が大きく外反して、口唇端を丸くつくる標品である。器内外面ともに無文、細かい貫入が多く見られる。素地は灰色、釉色濃緑色。口径13.3cm。Lトレンチ I 層からの出土。9は口縁部が僅かに外反する厚手の皿である。器内外面無文、釉は薄くかかっている。素地は灰色、釉色淡緑色。口径12.4cm。Lトレンチ II 層出土。

③ 直口口縁皿（第28図－11）

11は口縁部が直口するものである。口唇部は丸くおさめ釉は厚くかかり発色も良い。素地は灰白色、釉は草緑色を呈している。口径13cm。Lトレンチ II 層からの出土。

(3) 青磁盤（第28図－12～16）

青磁盤は口縁部の変化によって2類に分けられる。1つは口縁部を水平方向に折り曲げさらにその先端を僅かにつまみ上げる標品（1類）。他は口縁部を水平方向に折り曲げるだけで直口状の標品である（2類）。

i 類は、15・16・13の標品である。13は器内面部に櫛状の線を密に施したものである。小破片のため器形全体は窺えない。素地は灰色、釉色は淡緑色。推定口径24.4cm。Lトレンチ II 層からの出土。16は器内面部に幅約5～7㎜の蓮弁文が箆彫りされている。内外面ともに細かい貫入が見られる。素地は灰色、釉色は淡緑色。口径21cm。Cトレンチ I 層からの出土。15は口縁部の周縁を稜花につくる稜花盤である。口縁内にラマ式蓮弁弁先に合わせた二本の櫛目文を稜花に沿って描いている。内外面に細かい貫入が見られる。素地は灰白色、釉色は淡緑色。口径24cm、Lトレンチ II 層出土。

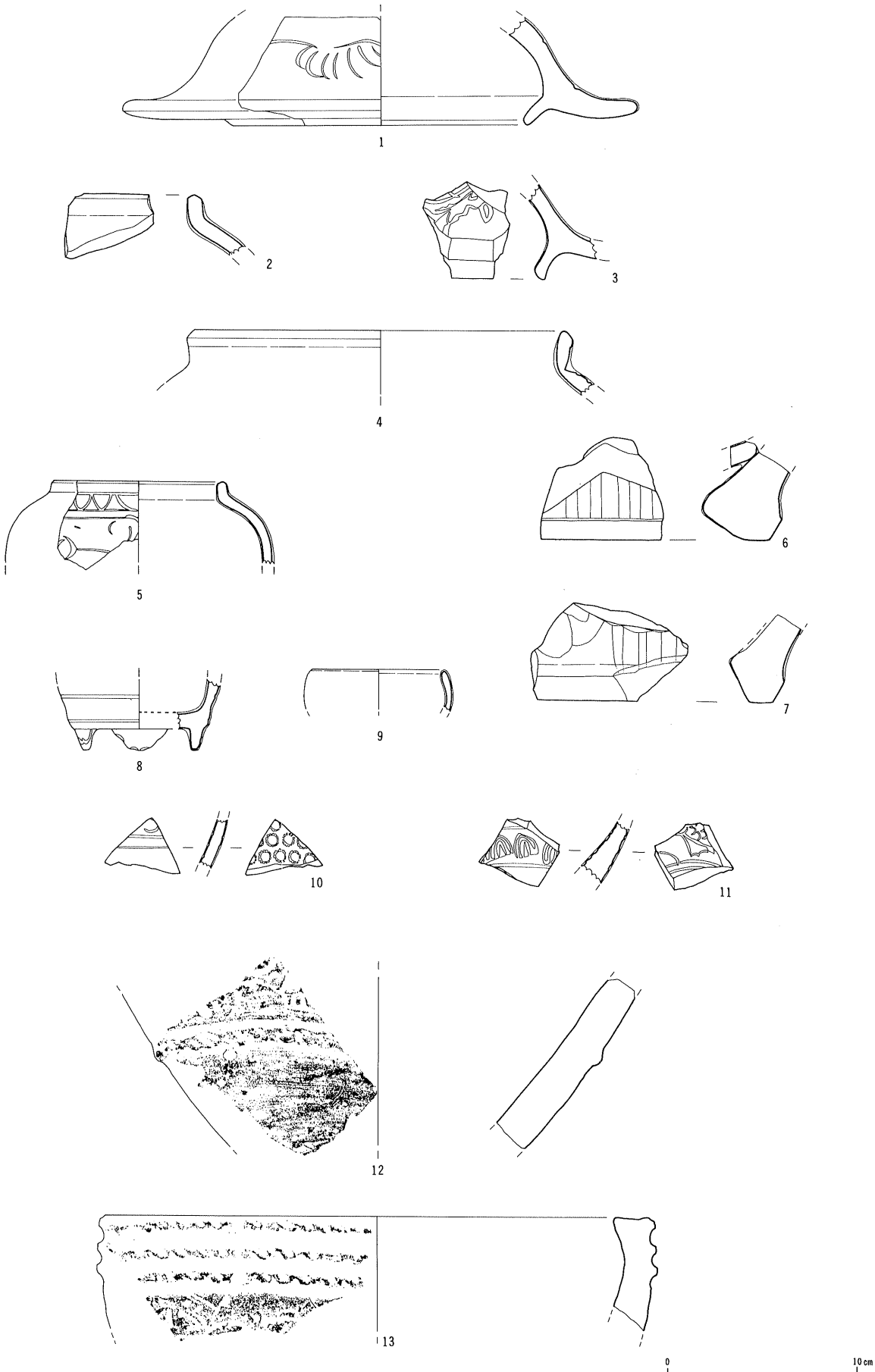
2類は、12と14の標品である。12は器内面と口縁部に波状文を描く厚手の盤である。素地は灰白色、釉色は淡緑色。Hトレンチ I 層からの出土。14は口縁部に六本の櫛目文を描き、その中に牡丹の蕾を配する。器内面には牡丹唐草文が箆彫りされている。素地は灰白色、釉色は濃緑色。表採品。12・14とも口唇部を丸くつくっている。

(4) 青磁壺（第29図－1～7）

いわゆる酒会壺と呼ばれている青磁の大壺とその蓋をここにまとめた。

1と3は蓋の破片である。1は径27.5cmを測り、外面の甲部に唐草文様を描いているが釉が厚くかかっているため明瞭でない。釉は鍔端から外面甲全体にかかり、鍔の下面から裏全面にかけては露胎である。釉色は灰緑色で細かい貫入が多く見られ素地は褐色を呈している。表採品。3と鍔や甲頂部を欠失する小破片である。外面甲部に箆描きの刻花文が描かれている。素地は白色、釉色は甲部が濃緑色、裏面が青緑色、鍔の下面は露胎になっている。Lトレンチ II 層からの出土。

4は口径20.5cmの無文青磁壺である。口縁部が低く垂直に立ち上がり、口唇端が尖る。素地は灰白色、釉色は濃緑色。器内外面ともに施釉の後口唇部の釉を掻き取って露胎にしている。表採品。2は口縁部の



第29図　青磁器（1～9）　高麗青磁器（10、11）　瓦器（12、13）

立ち上がりが低く厚手の作りである。釉色は灰緑色。4同様口唇部のみ露胎。表採品。5は口径5cmの小壺である。口縁部直下に印花、その下に二条の圏線を挟んで蔓唐草文が描かれている。素地は灰白色、釉色は濃緑色で器内外面に荒い貫入が目立つ。口唇部のみ露胎でそこに重ね焼きのための目跡が付着している。表採品。

6と7は青磁大壺の底部である。両標品ともいわゆる鉄足で底は落し底、胴部には鎬蓮弁文が描かれている。素地は6が灰白色で粗粒子、7は灰色で粘質の微粒子。釉色は6が淡緑色、7は濃緑色。両者ともに表採品。

(5) 青磁香炉（第29図－8）

青磁香炉が1点出土した。底部の一角に脚を取りつけた香炉で、三脚のうちの一脚のみの小破片である。脚は三角形を呈し、高さ1cmを測る。器内外面ともに施釉されている。素地は灰色、釉色は濃緑色。表採品。

(6) 青磁杯（第29図－9）

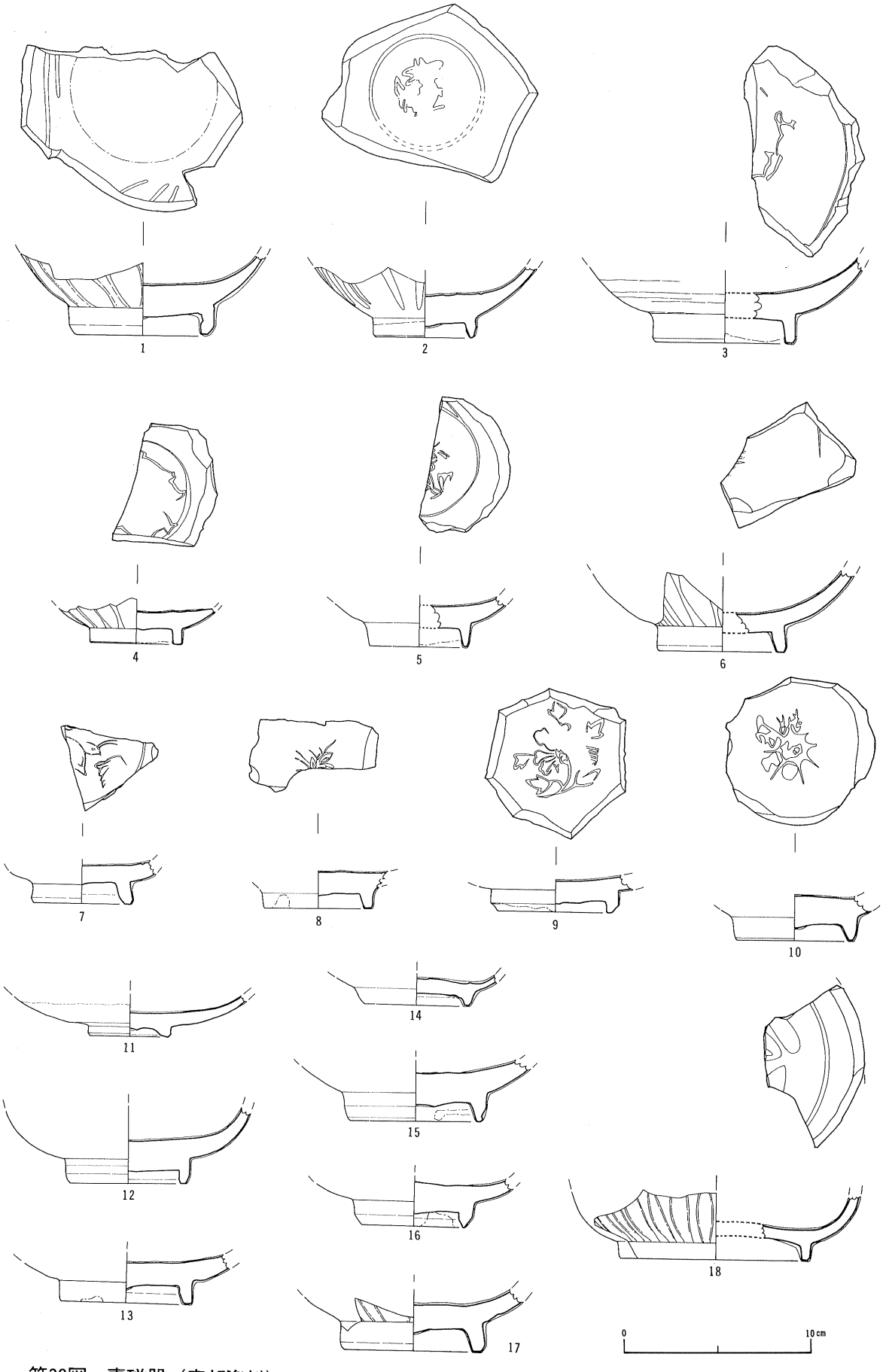
青磁杯が一点出土した。9は口径2cmの青磁杯である。直口口縁を呈し口唇部は丸くおさめている。胴部から底部にかけて欠失しているため高さは不明。釉が器内外全面にかかっている。素地は灰白色で粗粒子、釉色は淡緑色を呈している。表採品。

(7) 青磁底部資料（第30図－1～18）

青磁高台部の破片が25点出土した。そのうち比較的大きな破片18点を選んで実測図に掲げた。

1は底径9cmの比較的大振りの蓮弁文底部破片である。高台の先端部が丸みをもつ蛇の目高台の標品である。素地は灰色、釉色は濃緑色。2は蓮弁文碗で、内底面（見込み）を円形の線彫りで囲み、その中に草花のスタンプ文を施す。高台の先端部が尖りその部分だけ僅かに釉を拭き取ってある。素地は灰白色、釉は草緑色。3は大振りの碗である。高台は断面四角形に近いが、角が僅かに削られているために、高台先端が丸みをもっているように見える。釉は高台内面中心部付近を残して全面に施釉される。素地は灰白色で粘質微粒子、釉色は灰緑色。1・2・3いずれも表採品。

4は底径5cmの鎬蓮弁文碗、高台は断面四角形を呈しているが畳付の幅が狭い。内底底部に印花文が彫られている。釉は畳付から高台内部にかけて施釉されてない。素地は灰色に草花のスタンプ文を施す。高台の成形はシャープで高台内面だけ無釉である。釉色は青緑色で貫入が多い。表採品。6は底径1cmの鎬蓮弁文碗である。高台は断面四角形に近い。釉色はオリーブグリーン、高台畳付の釉を拭き取っている。素地は灰白色。表採品。7・8・9・10は内底面にスタンプ文を有する碗である。そのうち8だけは内底面のコーナーを円形の線彫りで囲む。素地はいずれも灰色を呈し、釉色は淡緑色。7・8・9は高台畳付けから内面にかけて無釉。表採品。10は蛇の目高台となっている。表採品。15と16は大振りの碗の底部である。内底面の釉を環状に掻き取り焼台受け部分を露体にしてある。高台畳付部は尖っている。釉は失透釉、素地は灰色で粗粒子。高台内面は無釉。いずれも表採品。11は薄手の碗底部。高台断面が四角形を呈し、畳付の幅が広い。高台の内部を浅く削るため高台が低い。釉は胴部下半から高台にかけて無釉。表採品。14は高台の内部を浅く削り高台が低い。高台内面は無釉。素地は灰白色で釉色は濃緑色。Hトレンチ III層からの出土。12は底径7cmの無文碗。釉は高台内面中心部付近を残して全面に施釉される。Cトレン



第30図　青磁器（底部資料）

チⅠ層の出土。13は高台の断面が四角形を呈し、畳付の幅が狭い標品である。素地は鉄分を多く含み赤茶色を呈している。釉は高台内面を残して全面に施釉される。寒水川井戸南側石垣の下層からの出土。18は器外面に膨らみをもつ蓮弁がみられる。素地は灰白色で微粒子、釉色は濃緑色。釉は高台内面のみ残して全面施釉されている。Lトレンチ I 層出土。17は底径8cmの厚手の碗底部である。素地は鉄分が多く赤茶色に発色している。高台は厚く粗野。高台内に蛇の目状に釉をかけている以外総釉の標品である。釉色は失透釉の濃緑色。表採品。

(8) 白　磁（第28図－17・18・19）

白磁は僅か数点の出土であった。

17は口縁端部を露胎にするいわゆる口禿皿である。胴部から底部にかけて欠失する資料である。口縁部は外反して口縁端はやや尖る。素地は淡灰色で釉色は淡青白色を呈している。表採品。19は直口口縁の皿である。器外面の口縁部直下に数条の線彫りが認められる。素地は灰白色、釉色は淡緑白色。寒水川井戸南側石垣の下層からの出土。

18は口縁はゆるやかに外反して体部下位が膨らみをもつ標品。いわゆる枢府タイプに属する碗である。器内面に陽印花文が見られる。素地は灰白色で釉色は淡緑白色。Lトレンチ II 層から出土した。

(9) 高麗青磁（第29図－10・11）

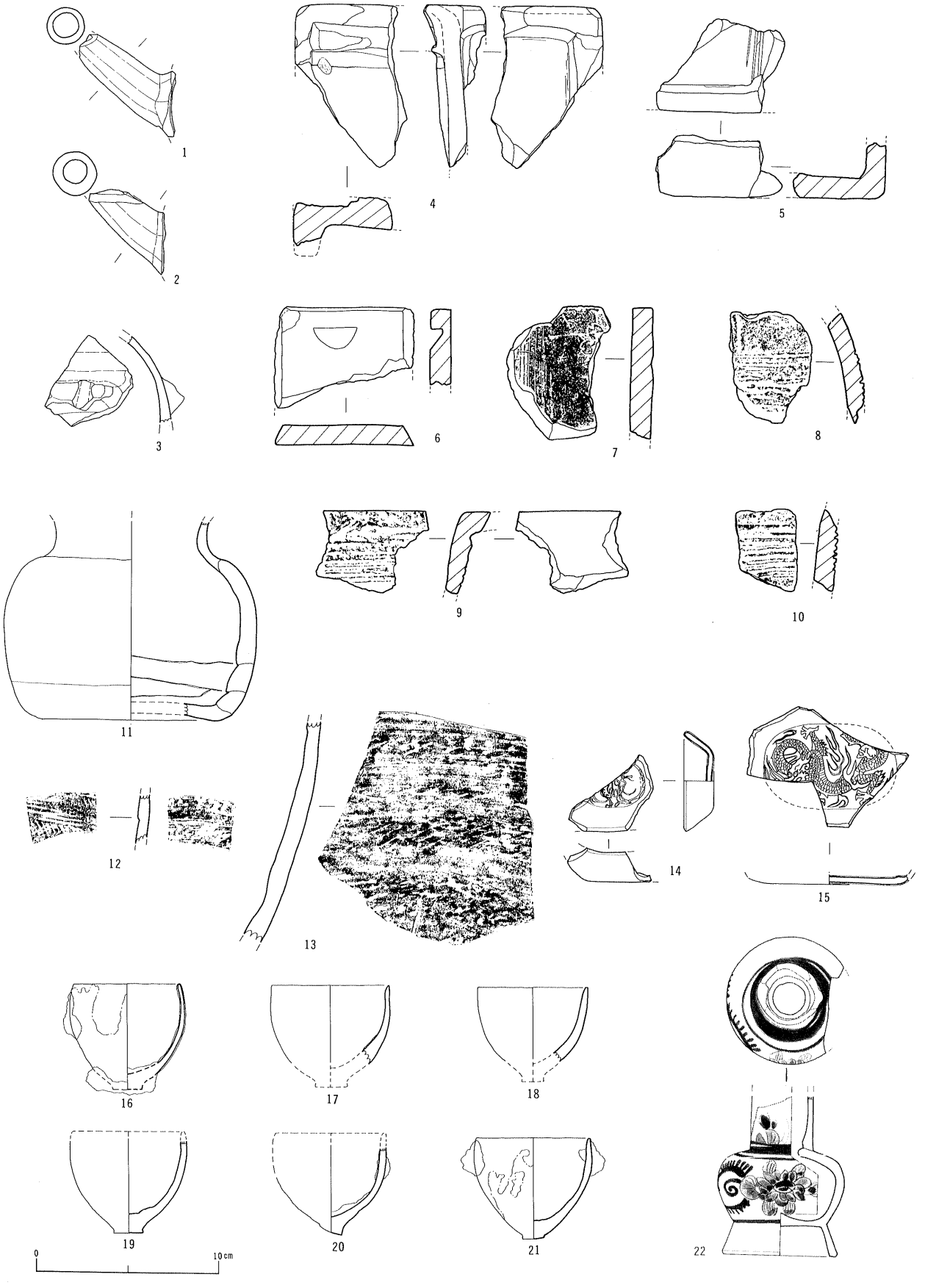
高麗青磁が2点出土した。いずれも3cm四方の小破片である。

第29図－11は底部に近い碗の破片であろうか。外側は上下二つの圏線の中に蓮弁が描かれている。内側は竹管文を繋いだ雲鶴文の一部が僅かに残存し、その下に線彫りの模様が描かれている。素地は灰色で緻密、内部にはサンドイッチ状に赤味が挟まれている。Hトレンチ IV 層から出土。10は碗の胴部破片であろう。器外面は二つの圏線の上に竹管文の一部が残っている。内面には竹管文が全面に押されている。素地は灰黒色。表採品である。

第2節　須　恵　器（第31図－11～13）

須恵器とは、これまで「類須恵器」、「陶質土器」、「中世須恵器」等と呼称されてきた還元焔でものされる灰黒色の焼物のことである。今回の調査では復元して器形を窺えるのが一点と胴部の破片二点の合計三点の出土をみた。

第31図－11は小形の壺である。推定口径9cm、高さ12cm、底部径9cmの復元可能な標品である。肩部から胴部にかけてゆるやかに膨らみ頸部は短い。口唇端が欠失しているため口唇部の形状は窺えない。器壁は全体的に厚く、短い口縁部は比較的薄く仕上げてある。器外面はナデ調整が施されているが内面は粘土の継ぎ目痕をのこしている。器内外面ともタタキ痕が認められない。胎土は粗粒子で小礫を含み、焼成はやや軟質で、色調は灰黒色を呈している。底部は薄く、円盤貼り付けになっている。13は大型甕の胴部破片である。器壁の厚さは7～9㎜を測る。器外面はナデ調整が施されているが、内面は斜行のタタキ目が良く残っている。胎土は粗粒子で小礫を多く含み、焼成は硬質。器肉の内面は茶褐色を呈し、外面は灰色である。12は胴部の小破片で器内外面にタタキ目を明瞭に残している。胎土は小礫を多く含み焼成は硬質。三点ともLトレンチ第II層からの出土である。



第31図　陶質土器１～10　須恵器11～13　陶器14、15、22　特殊陶器16～21

第3節　瓦質土器（第29図－12・13）

瓦質土器が数点得られた。第29図－13は推計口径28.5cmを測り、口縁が若干内弯気味に開き、口縁端は広い。口唇部下に三条の絡縄突帯を巡らし、体部には唐草文を描く大鉢である。胎土は瓦質。器の芯部は灰黒色を帯び器内外面は赤褐色でサンドイッチ状を呈している。Cトレンチ第Ⅰ層出土。12は胴部に絡縄突帯を巡らす標品である。13と同様大鉢であろう。

第4節　特殊陶器（第31図－16～21）

第31図－16～21はレモンを半分に切ったような形をした陶製の器である。器の内外全面には溶融物質が付着している。口径は6～6.5cm、高さ5～6cmを測り定形の器である。器壁の厚さは体部下位が5～7mm、口縁部2～3mmと比較的薄手である。素地は粗粒子で灰白色、耐火粘土の感じがする胎土である。器内外面ともに無釉、どのような機能をもった器であったか判然としないが、器全面に溶融物質が付着していることからすると特殊な器であることには間違いないと思われる。溶融物質の中に青色をした青銅の屑片が含まれていることからすると青銅製品鋳造の際の坩堝の可能性もある。全標品とも盛土整地層からの出土である。

第5節　黒釉陶器（第34図－18・19）

いわゆる天目茶碗を黒釉陶器としてまとめた。第34図の18は復元口径12.1cmを測る。素地は淡黄白色、口縁から胴部にかけての破片で器高については窺えない。口はべっ甲口を示す。体部から下位は露体である。同図19は高台部を中心とした標品である。高台は低く、内刳りが非常に浅い。高台の脇には明瞭な鎬が認められる。高台径4.3cm。両標品とも盛土整地層からの出土である。

第6節　沖縄産陶器（第32～40図）

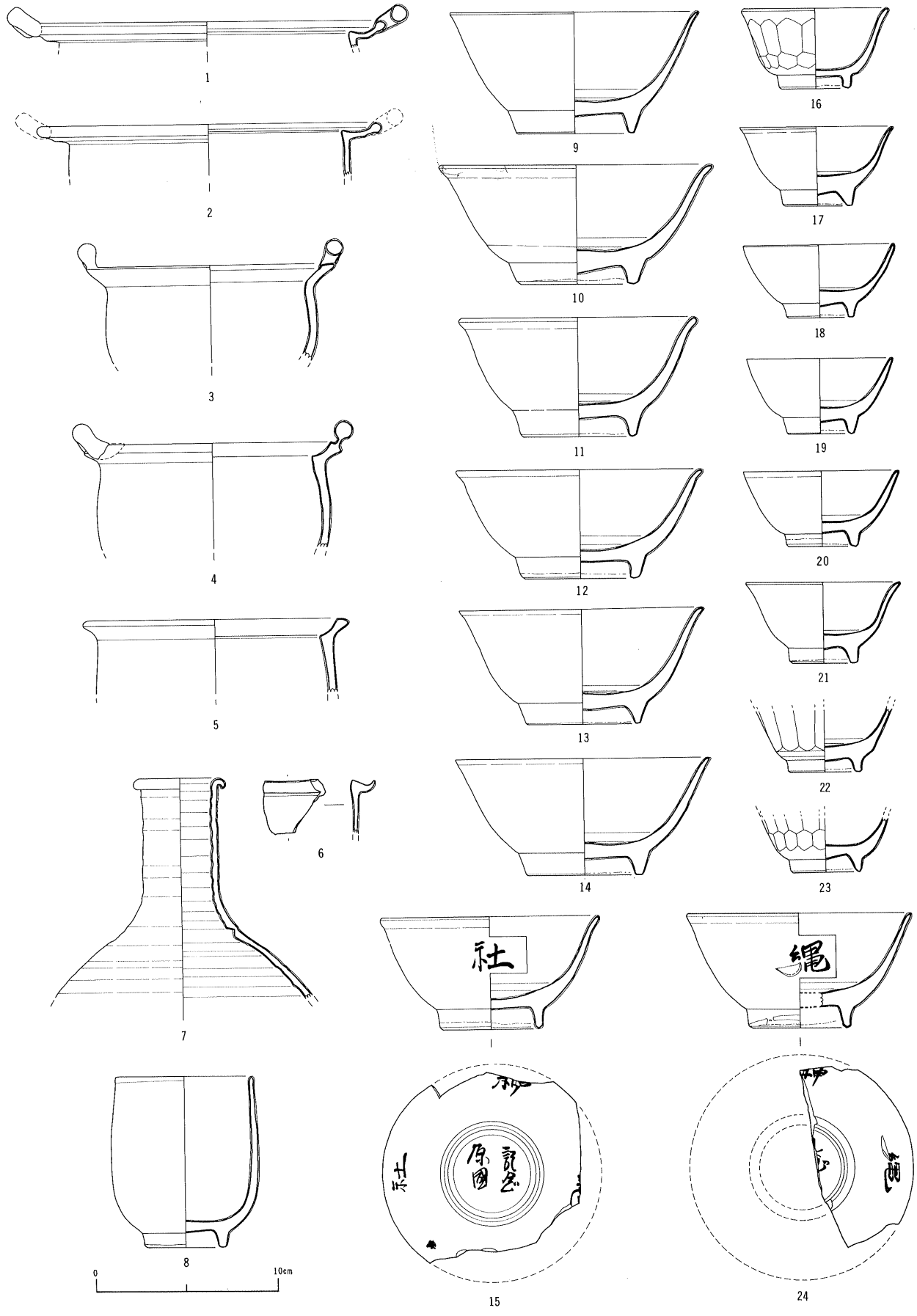
沖縄で焼かれた陶器も多量に出土した。壺屋焼で占められる。施釉陶器と無釉焼き締めの陶器に大別される。

(1)　施釉陶器

施釉陶器は主として白釉陶器と鉄釉陶器によって占められる。器種は甘酒注、碗、杯、皿、鉢、壺、瓶、水注などがある。以下各遺物の詳細については遺物観察表を参照。

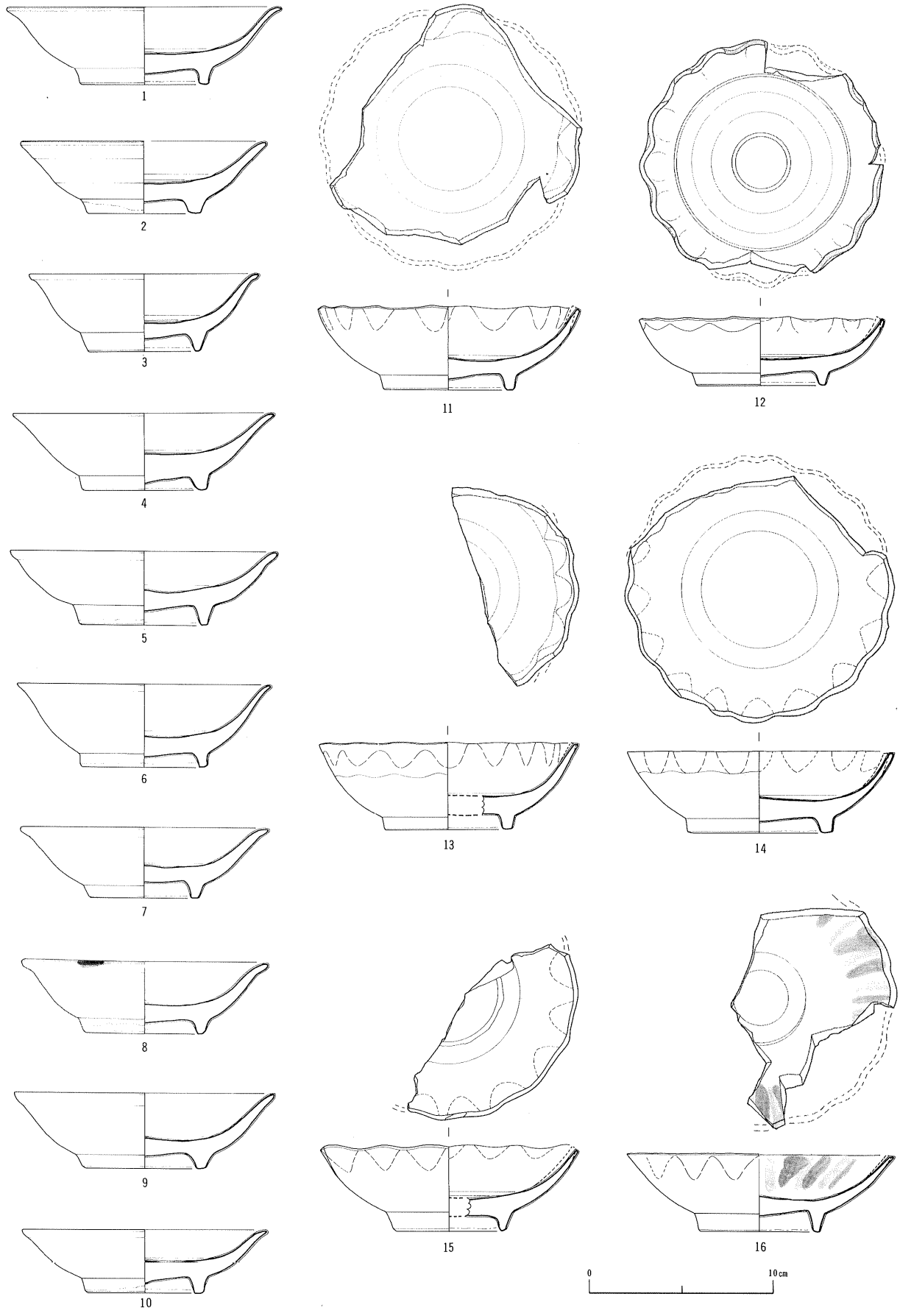
施釉陶器（白釉）

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
第32図－1	甘酒注？	盛土整地層	19.5	－	－	軟質で黄白色	濁った白色	器内は露胎	口縁部は「く」字状に外反 口縁部上端に蔓取付部を付す 口縁部のみの小破片
〃 －2	〃	〃	18.9	－	－	〃	〃	〃	口縁部は「く」字状に外反 口縁部のみの小破片
〃 －3	〃	〃	13.8	－	－	茶褐色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は白釉	口縁の蓋受部は露胎	円筒状の器形 口縁部は「く」字状に外反 蔓取付部を口縁に付す
〃 －4	〃	〃	14.2	－	－	〃	〃	体部下位は露胎	口縁部は「く」字状に外反 口縁部上端に三角形状の蔓取付部を付すが小穴はない。
〃 －5	〃	〃	14.6	－	－	〃	〃	口縁の蓋受部は釉をふき取っている。	円筒状の器 口縁部は「く」字状に外反 蔓取付部は無い。
〃 －6	〃	〃	－	－	－	黄白色で粗粒子	器内外ともオリーブグリーン	蓋受部は露胎	口縁部は「く」字状に外反 口縁のみの小破片
〃 －7	瓶	〃	－	－	－	チョコレート色で粗粒子	黒褐色	器外は厚く施釉し、器内は薄い	口縁部は小さな玉縁状をなす 頸部内面にロクロ面を残す
〃 －8	茶碗	〃	7.8	9.2	4.7	茶褐色で粗粒子	黒褐色	畳付を除く総釉	円筒形の湯呑み茶碗 口縁部が僅かにすぼむ
〃 －9	碗	〃	13.5	6.6	6.4	黄白色で粗粒子	灰白色	畳付を除く総釉	腰部より斜めに立ち上り、僅かに外反する 釉着を防ぐために内底見込み部を輪状に削る
〃 －10	〃	〃	15.0	6.5	7.6	灰白色で粗粒子	乳白色	〃	僅かに丸味を帯びた腰部より斜めに立ち上り、口縁部が緩い外反を示す 見込み部輪状に削る。
〃 －11	〃	〃	13.0	6.5	6.4	黄白色で粗粒子	〃	〃	腰部より斜めに立上り、僅かに外反する 見込み部輪状に削る
〃 －12	〃	〃	13.5	5.9	6.4	灰白色で粗粒子	〃	〃	〃 器外面に削り痕が残る
〃 －13	〃	〃	13.4	6.3	6.3	淡黄色で粗粒子	灰白色	〃	僅かに丸味をおびた腰部より斜めに立ち上がり、口縁部が緩い外反を示す。 器外面に削りの痕跡を残す 見込み部輪状に削る
〃 －14	碗	〃	14.0	6.3	6.4	淡黄色で粗粒子	淡黄白色	畳付を除く総釉	腰部より斜めに立上る。 見込み部輪状に削る
〃 －15	〃	〃	12.0	6.1	5.6	レンガ色で粗粒子	淡黄白色	畳付を除く総釉	腰部より斜めに立上る 体部に「沖縄神社」、高台内底に「原國記念」の呉須による記銘あり。 見込み部輪状に削る。
〃 －24	〃	〃	12.3	6.2	5.6	〃	〃	〃	〃
〃 －16	猪口(盃)	〃	8.0	4.3	3.9	灰白色で粗粒子	淡灰白色	畳付と高台内底を除く総釉	胴部と腰部に1cm前後の幅で面取りを施している。 腰部よりストレートに立ち上がり、口縁が僅かに外反。
〃 －17	〃	〃	8.6	4.3	3.9	淡黄色で粗粒子	乳白色	畳付を除く総釉	僅かに丸味を帯びた腰部より斜めに立上り、口縁が僅かに外反する。 見込み部輪状に削る



第32図　沖縄産陶器

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
第32図－18	〃	〃	8.2	3.9	3.7	灰白色で粗粒子	淡灰白色	畳付を除く総釉。釉ぬむらがある。	胴部よりストレートに立ち上がり直口タイプ 見込み部輪状に削る
〃 －19	〃	〃	7.9	4.1	3.7	淡黄色で粗粒子	淡黄白色	〃	〃 〃 気泡が多い。
〃 －20	〃	〃	8.5	4.1	3.9	淡黄色で粗粒子	乳白色	〃	胴部のリストレートに立ち上がり直口タイプ 見込み部輪状に削る
〃 －21	〃	〃	8.6	4.3	8.3	〃	〃	〃	胴部より斜めに立ち上がり、口縁は僅かに外反する 見込み部輪状に削る
〃 －22	〃	〃	－	－	3.9	淡黄白色で粗粒子	〃	畳付を除く総釉	胴部に0.8～1.8cm前後の面取りを施している 見込み部輪状に削る 口縁部欠失。
〃 －23	〃	〃	推定7.9	4.3	3.9	淡黄白色で粗粒子	淡黄白色	〃	胴部と腰部に１cm前後の幅で面取りを実施。 見込み部も総釉 口縁部欠失
第33図－１	皿	盛土整地層	15.0	4.2	7.1	淡黄白色で粗粒子	乳白色	〃	腰部から斜めに開く。 口縁部は僅かに外反。白釉の皿。 見込み部輪状に削る。
〃 －２	〃	〃	13.5	3.9	6.3	淡茶褐色で粗粒子	淡黄白色	〃	〃　〃 見込み部輪状に削る 高台が厚く、全体としてやや重い。 体部にヘラ削り調整痕残す
〃 －３	〃	〃	12.7	4.2	6.2	淡黄白色で粗粒子	淡灰白色	〃	〃 口縁部は僅かに外反 見込み部輪状に削る
〃 －４	〃	〃	14.3	4.2	6.9	〃	〃	〃	腰部から斜めに開く 底部は厚い（２cm） 見込み部輪状に削る
〃 －５	〃	〃	14.6	4.0	7.1	淡黄白色で粗粒子	乳白色	〃	腰部から斜めに開く 口縁部は僅かに外反 見込み部輪状に削る
〃 －６	〃	〃	13.9	4.5	6.9	淡黄白色で粗粒子	淡灰白色	〃	〃　〃
〃 －７	〃	〃	13.6	3.8	6.0	淡茶色で粗粒子	乳白色	〃	腰部から斜めに開く 口縁部は僅かに外反 見込み部輪状に削る 器内外面に細い貫入がみられる
〃 －８	〃	〃	13.6	3.9	6.7	淡黄白色で粗粒子	淡灰白色	〃	〃　〃
〃 －９	〃	〃	14.2	4.1	6.8	淡茶色で粗粒子	乳白色	〃	〃　〃 腰部にヘラ削り調整痕を残す。
〃 －10	〃	〃	13.4	3.4	6.5	〃	淡灰白色	〃	〃　〃 釉にムラがある。
〃 －11	〃	〃	14.2	4.5	7.3	〃	乳白色	〃	口縁を弁花状につつくる 胴部が丸く立ち上がる 見込み部輪状に削る 口唇部に茶褐色の鏑を施す
〃 －12	〃	〃	14.1	4.7	7.0	〃	〃	〃	〃　〃
〃 －13	〃	〃	13.8	4.6	6.3	〃	〃	〃	〃　〃

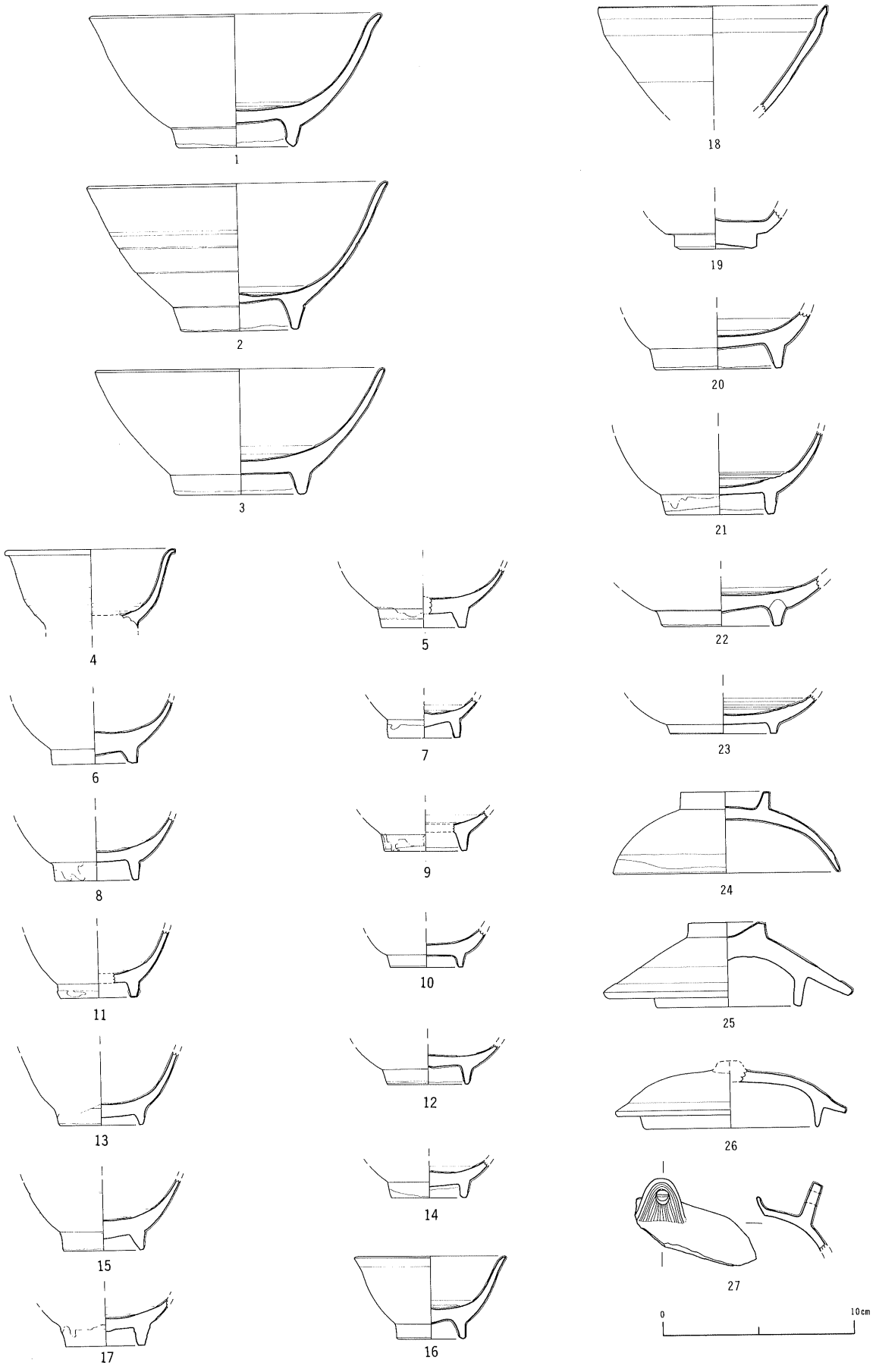


第33図　沖縄産陶器

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
〃 −14	〃	〃	13.5	4.1	6.7	茶褐色で粗粒子	淡灰白色	畳付は無釉	口縁を花弁につくる 胴部が丸く立ち上がる 器内面に二条、見込みに一条の圏線。 口唇部と圏線は茶褐色の釉を施す 見込み部輪状に削る
〃 −15	〃	〃	14.6	4.4	8.0	〃	灰白色	〃	〃
〃 −16	〃	〃							口縁を花弁状につくる 器外は白釉のみ、器内は青と茶褐色のシマ文様有り。 見込み部輪状に削る　白釉の皿

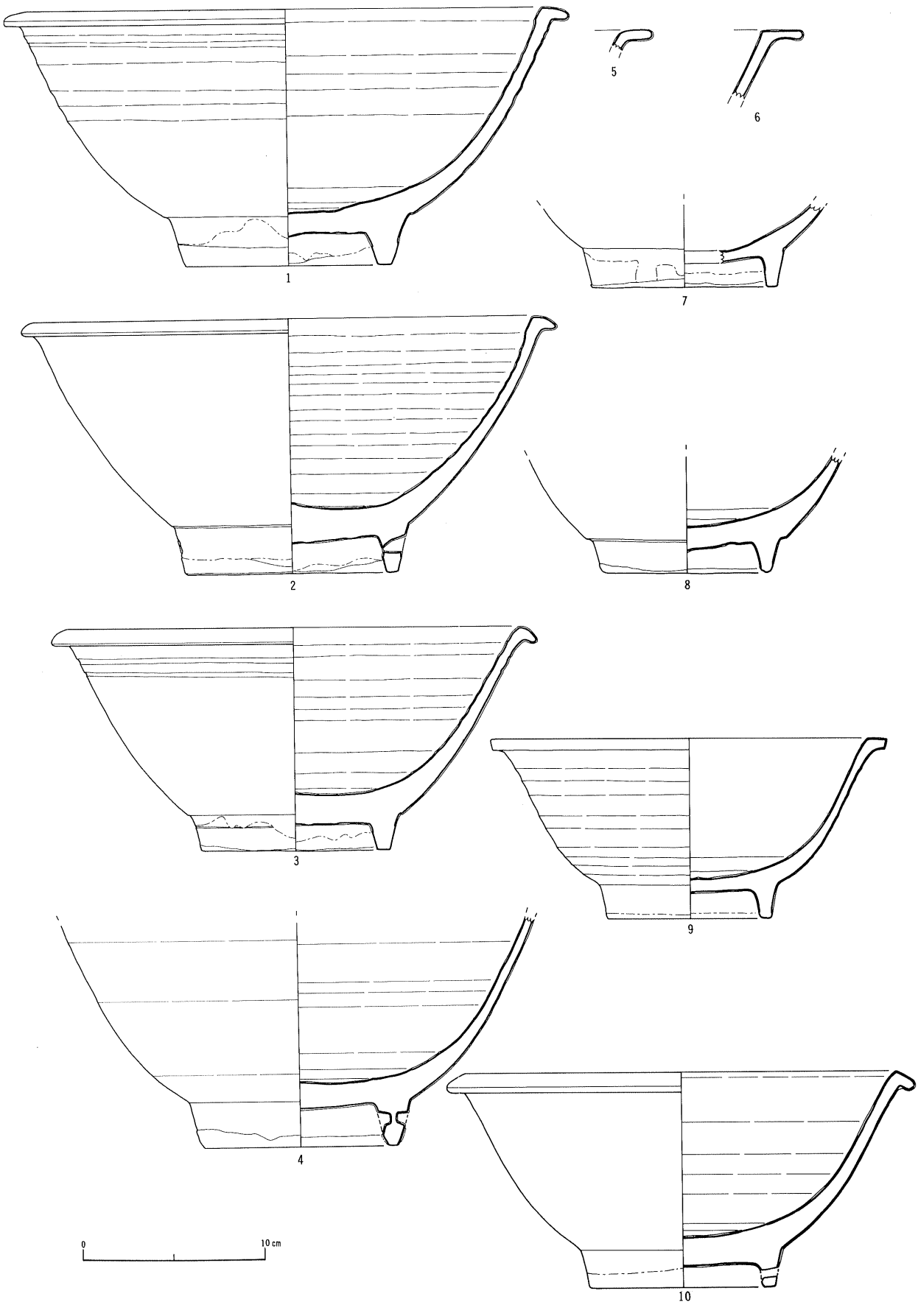
施釉陶器（鉄釉及びその他）

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
第34図−1	碗	盛土整地層	15.6	7.0	6.5	黒褐色で粗粒子	茶褐色	畳付を除く総釉	丸みをもった腰部からそのまま立ち上がり口縁が直口する。 胴部にヘラ削りに調整痕を有す。 見込み部輪状に削る
〃 −2	〃	〃	16.0	7.6	6.4	レンガ色で粗粒子	〃	〃	〃
〃 −3	〃	〃	15.4	6.6	7.2	黒褐色で粗粒子	〃	〃	〃
〃 −4	猪口(盃)	〃	6.1	−	−	淡黄色で微粒子	器外は黒褐色 器内は白釉	見込み部輪状に露胎	口縁部僅かに折り返し玉縁状となる。 高台部欠失。
〃 −5	〃	〃	−	−	4.5	淡灰色で微粒子	外は黒色 内は白色	高台部は露胎	高台部は入念な成形 見込み部輪状に削る。 底部資料
〃 −6	小碗	〃	−	−	3.0	灰白色で粗粒子	外は茶褐色 内は灰色	高台部は露胎	見込み部輪状に削る 底部資料
〃 −7	猪口(盃)	〃	−	−	3.9	淡黄色で粗粒子	外は黒色 内は灰黄色	高台部は露胎	見込み部輪状に削る 底部資料
〃 −8	小碗	〃	−	−	4.1	レンガ色で微粒子	外は黒褐色 内は灰白色	畳付から内底部は露胎	見込み部輪状に削る 高台部は入念な成形 底部資料
〃 −9	〃	〃	−	−	4.5	淡黄白色で粗粒子	〃	〃	〃
〃 −10	猪口(盃)	〃	−	−	3.9	〃	外はブルー 内は白色	畳付を除く総釉	底部の破片資料
〃 −11	〃	〃	−	−	4.4	灰白色で微粒子	外は黒色 内は灰白色	畳付から内底部は露胎	見込み部輪状に削る 畳付に白色物質が付着 底部資料
〃 −12	〃	〃	−	−	4.5	〃	〃	畳付を除く総釉	見込み部輪状に削る 畳付は尖る 底部資料
〃 −13	〃	〃	−	−	4.1	灰色で粗粒子	器内外青白色	高台部は全て露胎	釉に特徴がある。 高台の断面は三角形を呈する。



第34図　沖縄産陶器１～17、20～27　黒釉陶器18、19

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
第34図—14	—	盛土整地層	—	—	4.3	黒灰色で微粒子	外は茶色 内は灰色	畳付から内底部は露胎	見込み部輪状に削る 高台部のみの資料
〃 —15	小碗	〃	—	—	4.4	淡黄白色で微粒子	外は黒褐色 内は灰白色	畳付及び内底部は露胎	見込み部輪状に削る 高台の成形は入念。
〃 —16	猪口(盃)	〃	8.0	4.4	3.7	黒灰色で粗粒子	器内外褐色	畳付を除く総釉	見込み部輪状に削る 高台の高さが高い。 口縁部僅かに外反。
〃 —17	小碗	〃	—	—	4.3	灰白色で粗粒子	外は黒褐色 内は灰緑色	高台部は全て露胎	見込み部大きく輪状に削る 高台の断面は台形状を呈している。
〃 —20	碗	〃	—	—	6.8	灰黄色で微粒子	外は黒色 内は白色	畳付を除く総釉	見込み部輪状に削る 高台の断面は三角形状を呈す。
〃 —21	〃	〃	—	—	6.0	〃	外は黒色 内は灰褐色	高台部全て露胎	見込み部輪状に削る 高台は薄く入念に成形
〃 —22	〃	〃	—	—	6.4	〃	外は黒色 内は白色	畳付を除く総釉	見込み部輪状に削る 高台の断面は三角形状を呈す。
〃 —23	〃	〃	—	—	5.7	灰白色で微粒子	器内外ともに黒褐色	畳付から内底部にかけて露胎	高台は低い。 高台の断面は四角
〃 —24	蓋	〃	11.9	4.3	高台状のつまみの径 4.7	灰黄色で微粒子	外は黒色 内は白化粧がけ	端部は露胎	高台状のつまみを有す。 逆八字形に開く。
〃 —25	〃	〃	—	4.5	—	〃	外は黒色 内は露胎	内面は露胎 蓋上面の中央が輪状に削られている。	上面が斜めで傘状に開く。 沖縄製耳壺（ミンガーミー）の蓋である。
〃 —26	〃	〃	—	—	—	灰白色で粗粒子	外は黒色 上面は総釉	上面は緩やかな丸みを帯びる かぶせ蓋である。	
〃 —27	鉄釉水注	〃	—	—	—	淡黄白色微粒子	外は茶褐色 内は無釉	外部のみ無釉	肩部に耳が付く
第35図— 1	大鉢	盛土整地層	30.8	13.8	11.2	淡灰色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は白色	畳付を除く総釉 畳付は白化粧がけのまま	見込み部輪状に釉を拭きとる 口縁を水平に折り曲げる 器内外にヘラの調整痕を残す
〃 — 2	〃	〃	29.2	13.7	11.7	〃	〃	〃	見込み部輪状に釉を拭き取る 口縁を水平よりやゝ下向きに折り曲げる 器内外にヘラの調整痕を残す 高台部に対に二個の穴を穿つ
〃 — 3	〃	〃	26.5	12.0	10.3	淡灰色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は乳白色	畳付を除く総釉	見込み部輪状に釉を拭き取る 口縁を折り曲げ鈎状とする。 器内外にヘラの調整痕を残す。
〃 — 4	〃	〃	—	—	11.0	〃	〃	〃	見込み部輪状に釉を拭き取る 器内外にヘラの調整痕を残す。 高台部に対に二個の穴を穿つが1個の穴は貫通せず
〃 — 5	〃	〃	—	—	—	灰褐色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は白色	口縁部の上面は釉薬をふき取る。	口縁部の上面の釉薬が拭き取られているこのが特徴。 口縁部小破片



第35図　沖縄産陶器（大鉢）

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	素地	釉色	施釉	特徴
〃 －6	大鉢	盛土整地	－	－	－	淡灰色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は白色	口縁部の上面は釉薬をふき取る。	口縁を水平に折り曲げる 折り曲げ部明瞭な陵をつくる。 口縁部小破片
〃 －7	〃	〃	－	－	10.1	〃	〃	畳付部は露胎	見込み部輪状に釉を拭き取る 高台部小破片
〃 －8	〃	〃	－	－	9.4	淡灰色で粗粒子	器外は黒色 器内は乳白色	〃	見込み部輪状に釉を拭き取る 器内に貫入多し
〃 －9	〃	〃	21.4	9.7	8.8	〃	器外は黒褐色 器内は乳白色	畳付部を除く総釉	見込み部輪状に釉を拭き取る 口縁を水平に折り曲げる 折り曲げ部は明瞭な稜をつくる
〃 －10	〃	〃	25.4	11.6	10.0	淡灰色で粗粒子	器外は黒褐色 器内は乳白色	〃	見込み部輪状に釉を拭き取る 口縁を水平よりやや下向きに折り曲げる 高台部に対に二個の穴を穿つ

① 水　　注（第36図、図版－49）

第36図にまとめた標品は水注とその蓋及び水注の取手部分である。

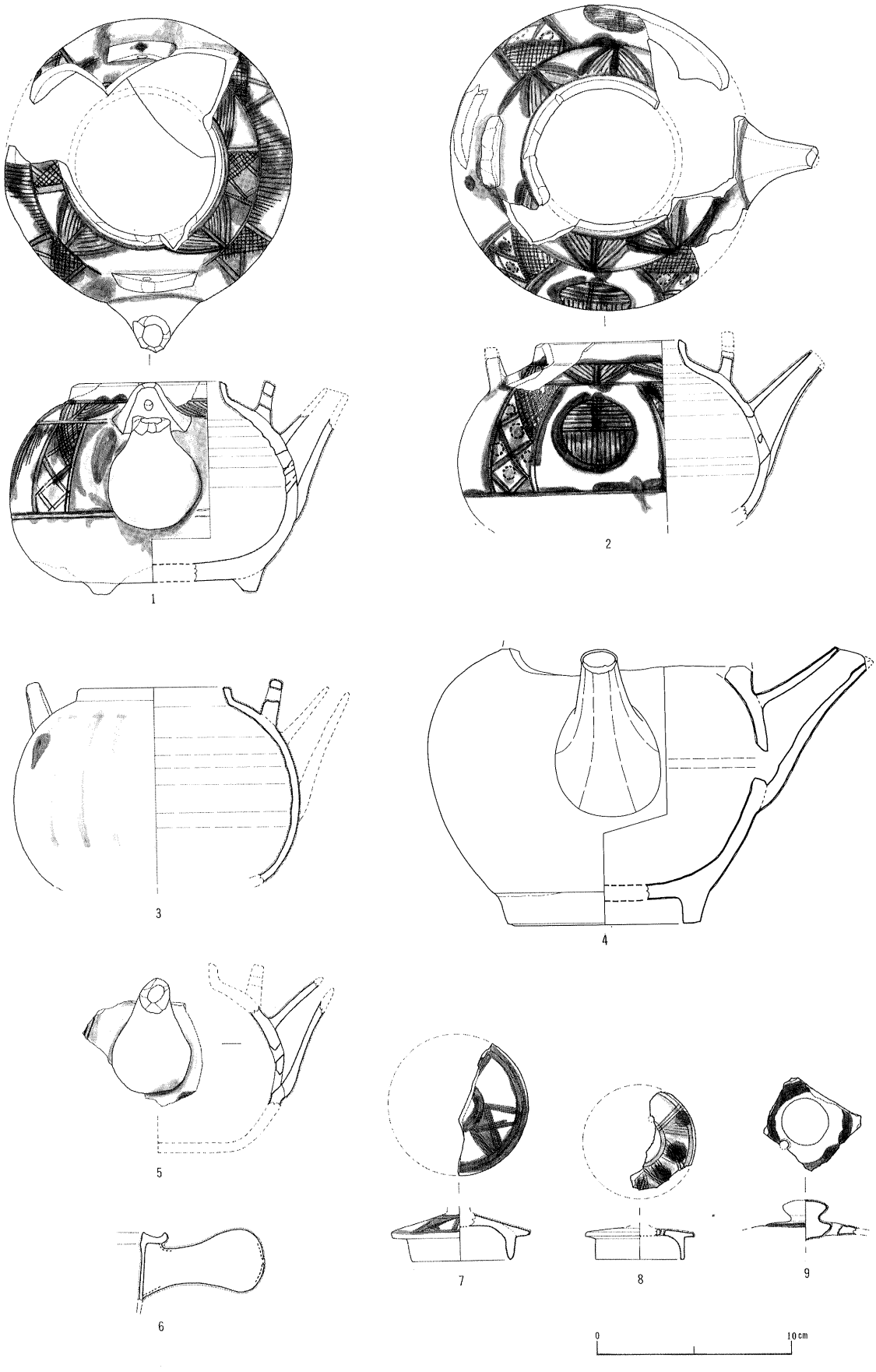
1・2・3はベタ底に足を付け、肩部に双耳のつく白釉水注である。1と2は線彫りした後に呉須による絵付けがおこなわれている。3は白化粧を行った後に呉須による絵付けが行われているが、絵の部分が剝げ落ちている。1が口径8.0、胴部の最大径14.7をそれぞれ測る。

第36図－4は鉄釉水注である。器外面は黒褐色、内部は乳白色を呈している。底部は輪高台である。口縁部を欠失する標品である。胴部の最大径17.4、高台径径9.8を測る。

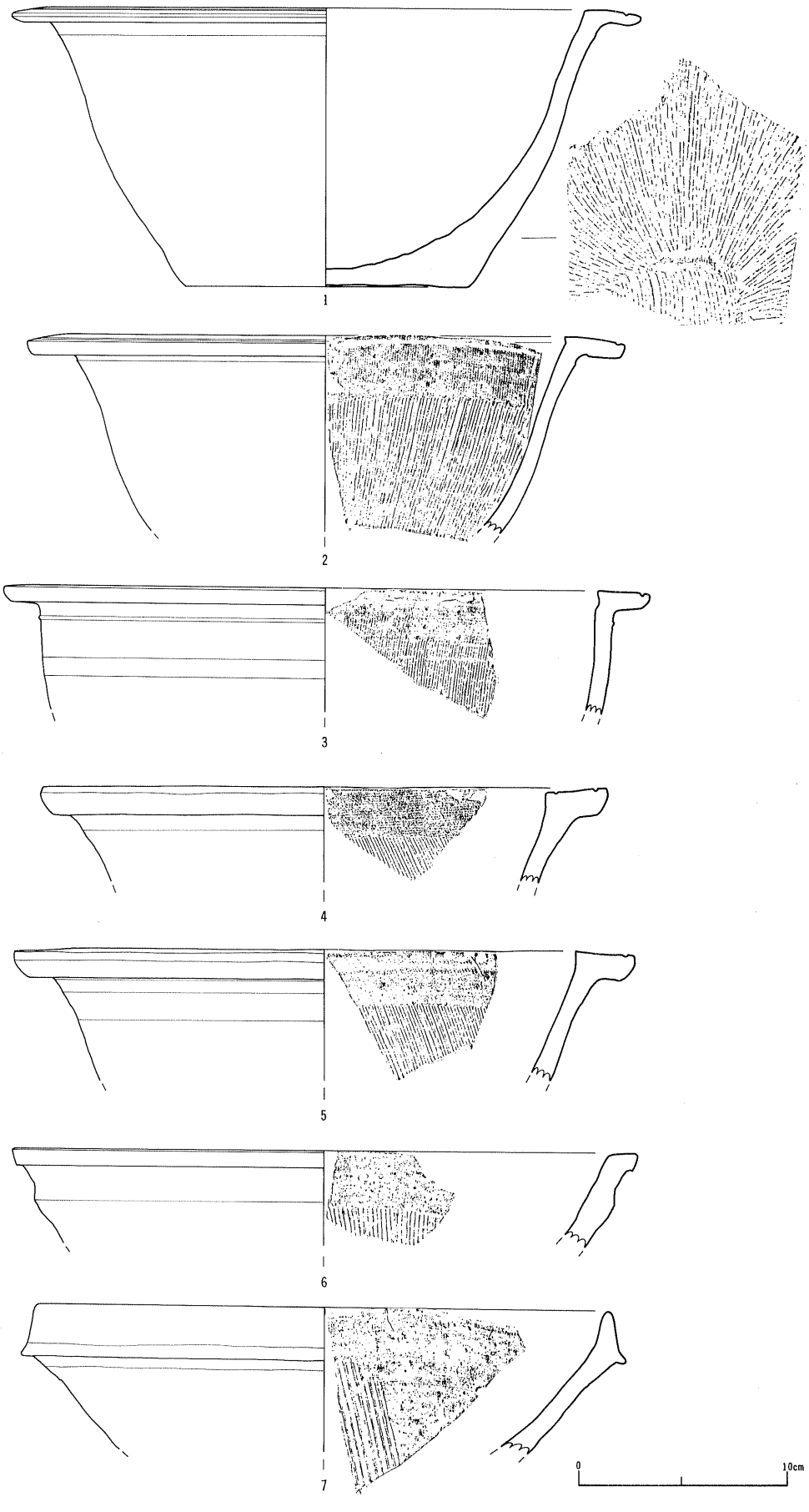
5の標品は注ぎ口の部分である。7・8・9は水注の蓋である。線彫りの後に呉須を施してある。7は上面が斜めの傘状、8は上面がほぼ水平になっている。9は宝珠のつまみのみの標品である。6は水注の把手の部分で、蓋受けの溝が僅かに残存している。5～9の標品は何れも白釉陶器である。

(2) 無釉焼き締め陶器（第37～40図、図版－50～52）

無釉焼き締め陶器は荒焼と称して施釉陶器の上焼と区別している。器種には擂鉢、壺、甕、鉢、瓶などの雑器類がある。



第36図　沖縄産陶器



第37図　沖縄産陶器（1～6）・備前焼（7）

① 擂　鉢

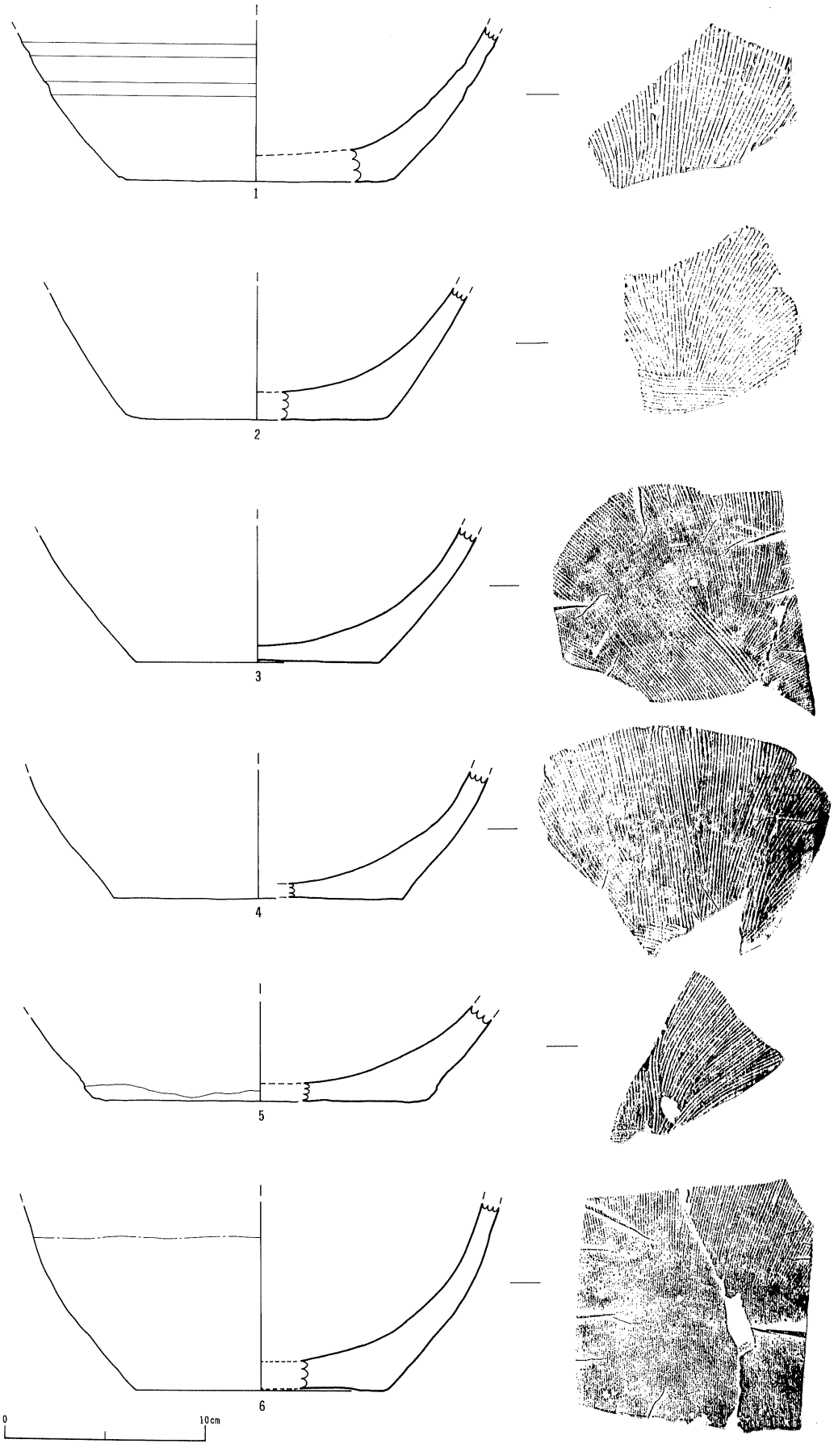
沖縄製の無釉焼き締めの擂鉢と備前焼の擂鉢である。後者は僅か1点の出土である。第37図は沖縄製の無釉焼き締め擂鉢の口縁部資料であり、第38図がその底部資料である。沖縄製の擂鉢は煉瓦色を呈して、器外面には水挽きロクロ目を残し器面調整に入念さが欠ける。全ての標品が口縁部を水平に外反させるもので、いわゆる折縁口縁を呈している。擂目は、器面全面に密に施されている。長期に使用されたとみえて、第38図の6の標品のように底面が完全にすりへっているのがみられた。

第37図の7は備前焼の擂鉢で1点のみの出土であった。

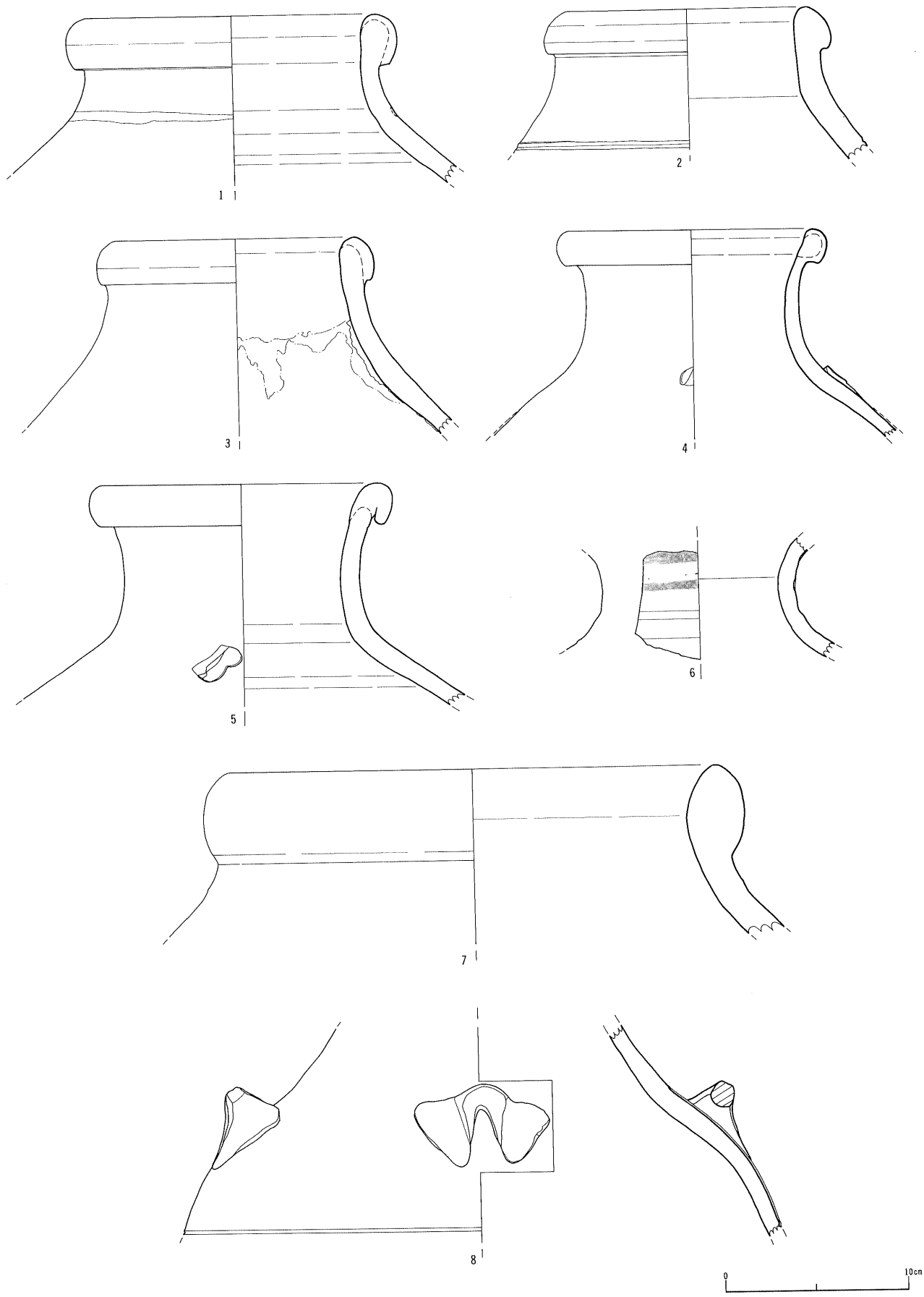
全標品盛土整地層からの出土である。各遺物の詳細については遺物観察一覧表にまとめてある。

無釉焼き締め陶器（擂　鉢）

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	底径	擂目の櫛幅	成形	色調	特徴
第37図－1	擂鉢	盛土整地層	30.3	13.6	13.3	2 mm	水挽きロクロ目を残す	煉瓦色	胴部から丸みをもって立ち上がる。 口縁を水平に折り曲げる 口縁直下3.6mmのところから内底にむかって水平方向にほぼ全面に擂目を施す。口縁上面に一条の凹線が巡る。
〃　－2	〃	〃	27.4	－	－	1 mm	〃	〃	口縁を水平に折り曲げる 口縁直下2.2cmのところから内底部に向かって斜め方向に擂目を施す。 口縁上面に二条の凹線が巡る。
〃　－3	〃	〃	30.0	－	－	1.5 mm	〃	〃	口縁を水平に折り曲げる 口縁直下2.4cmのところから内底部にむかって斜め方向に擂目を施す。 口縁上面に一条の凹線が巡る。
〃　－4	〃	〃	31.2	－	－	1.5 mm	〃	〃	口縁を水平に折り曲げる 口縁直下3.0cmのところから内底部に向かってやや垂直方向に擂目を施す 口縁上面に一条の凹線が巡る 胴部から直線上に立ち上がる
〃　－5	〃	〃	28.9	－	－	1 mm	〃	〃	口縁を水平に折り曲げる 腰部から緩い膨みをもって立ち上がる 口縁上面に一条の凹線が巡る 薄手の擂鉢である。
〃　－6	〃	〃	－	－	－	1.5 mm	〃	〃	口縁上面の幅は1.3cmと狭い 口縁直下で内傾ぎみに立ち上がり、断面では凹状を呈す。 口縁部の小破片
〃　－7	〃	〃	27.7	－	－	2.5 mm	〃	〃	体部が斜め方向に開き、口縁部は上下に拡張する。擂目の櫛方向が下から上で、他の標品と違う。胎土はチョコレート色で褐色に発色。 備前焼（14～15世紀）
第38図－1	〃	〃	－	－	13.7	2 mm	－	〃	底部資料 底部から斜め方向に立ち上がる 器外面に指ナデの調整痕を残す。 擂目は全面に施されている。
〃　－2	〃	〃	－	－	13.0	2 mm	－	〃	〃
〃　－3	〃	〃	－	－	12.1	1 mm	水挽きロクロ目を残す	〃	〃 擂目が磨りへっている。
〃　－4	〃	〃	－	－	14.4	1 mm	〃	〃	底部資料 胴部がやや膨みをもって立ち上がる 擂目がかなりすりへっている。
〃　－5	〃	〃	－	－	16.8	1.5 mm	〃	〃	底部資料 底部から斜め方向に立ち上がる 擂目がかなりすりへっている。
〃　－6	〃	〃	－	－	12.4	1 mm	〃	〃	底部資料 胴部がやや膨みをもって立ち上がる 底部の擂目は完全にすりへりつるつるになっている。



第38図　沖縄産陶器



第39図　沖縄産陶器

② 壺 類（第39図、図版52）

第39図に沖縄製の無釉焼き締めの壺をまとめた（6の標品は除く）。口縁端部を折り曲げて玉縁状に作る標品である。概して頸部から緩やかに移行しナデ肩となる。第39図の1・2・5の標品は頸部と肩部に二条から数条の沈線が巡っている。なお、肩部の方には第39図の8の形をした耳を貼付するのが多い。この種の壺類は戦前まで、味噌を入れたり、種物を入れたりするのに使用されていた。全標品とも壺屋焼である。

第39図の6は、舶載された褐釉陶器である。口縁部を欠失する。

第39図の4は、口縁部が大きく外反して逆八の字状に開き、頸部から緩やかに膨らみをもちながら胴部へ下りていく壺である。

③ 甕 類（第40図、図版－50）

第40図に沖縄製の無釉焼き締めの甕類と鉢類をまとめた。何れも壺屋焼である。
口縁部の形態により三種に分けられる。

Ⅰ類

折縁口縁を呈し、口縁上面が幅広の標品である。口縁端部と肩部に凹線文が一条から数条巡る。1は42.1cmを測り、何れも器肉の厚い大型の水甕である。標品5と6は胎土に白色物質を多量に混入している。

II類

口縁部を方形状に肥厚させるタイプの標品である。第40図の3と8がそれである。3は口縁部直下に二条の凹線文が巡り、肩部がなくそのまま垂直に胴部へ下りていく標品である。口縁端には石灰分の付着が認められる。8は底が浅く甕というより鉢に近い標品である。

III類

口縁部が両側に拡張するタイプである。口縁直下に櫛描きの波状文と円形貼佐文を有する標品である。第11図の2と7がそれである。2は口径44.8cmをはかる大甕である。7は櫛描きの波状文が2に比べ直線的である。色調は2が茶褐色、7が煉瓦色を呈している。

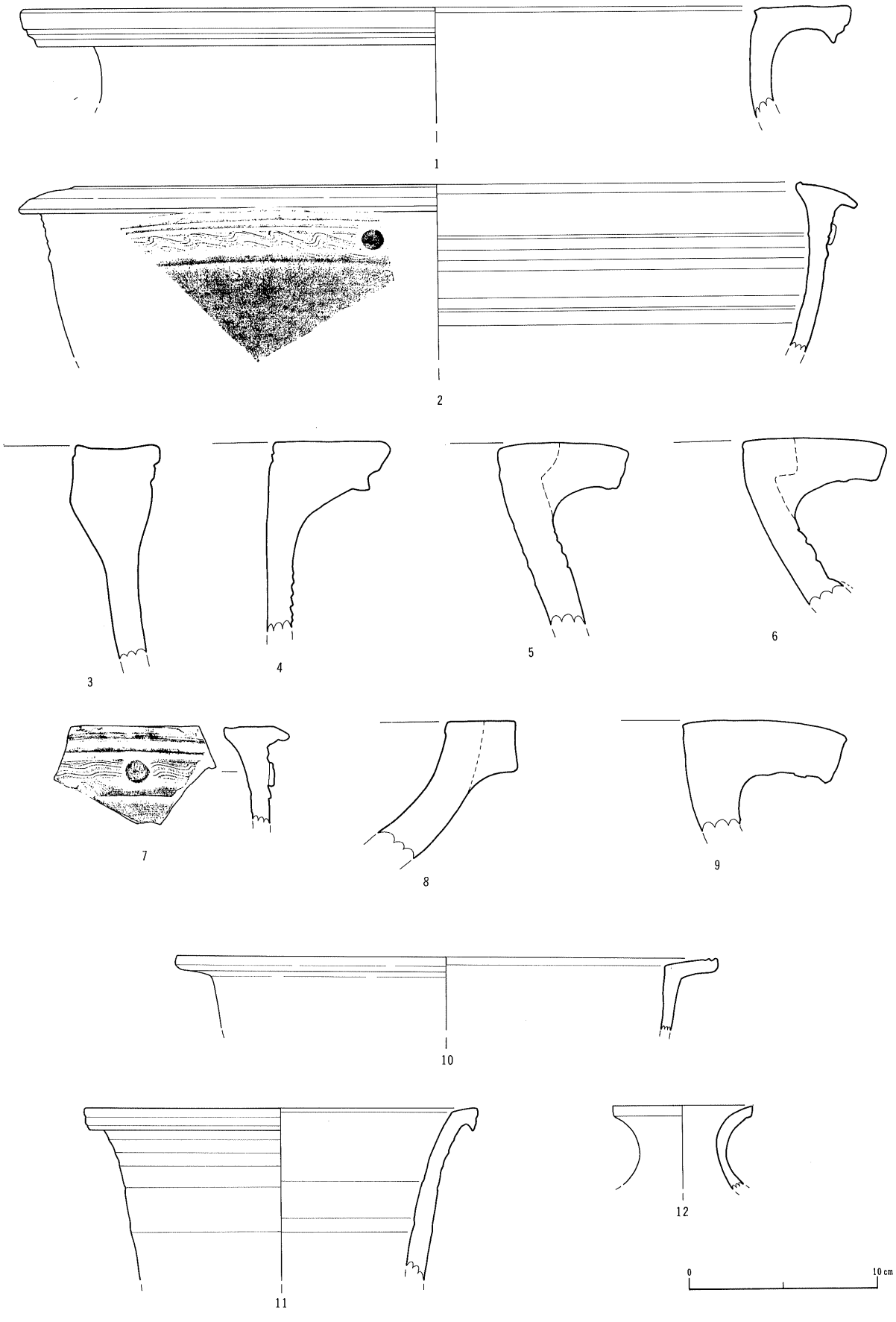
④ 鉢 類

第40図の10は口径29.1cmを測る水鉢である。折縁口縁を呈し、器肉が薄く口縁部上面に二条の沈線文が巡る標品である。

第40図の11は口径21.2cmを測る花鉢である。口縁部を方形状に肥厚させる標品である。器形は胴部から口縁部にかけて若干開きやや外反する。口縁端に二条の凹線文がめぐる。色調は両者とも煉瓦色を呈している。壺屋焼である。

⑤ 瓶

第40図の12は瓶の口縁部破片である。



第40図　沖縄産陶器

第７節　近代の磁器

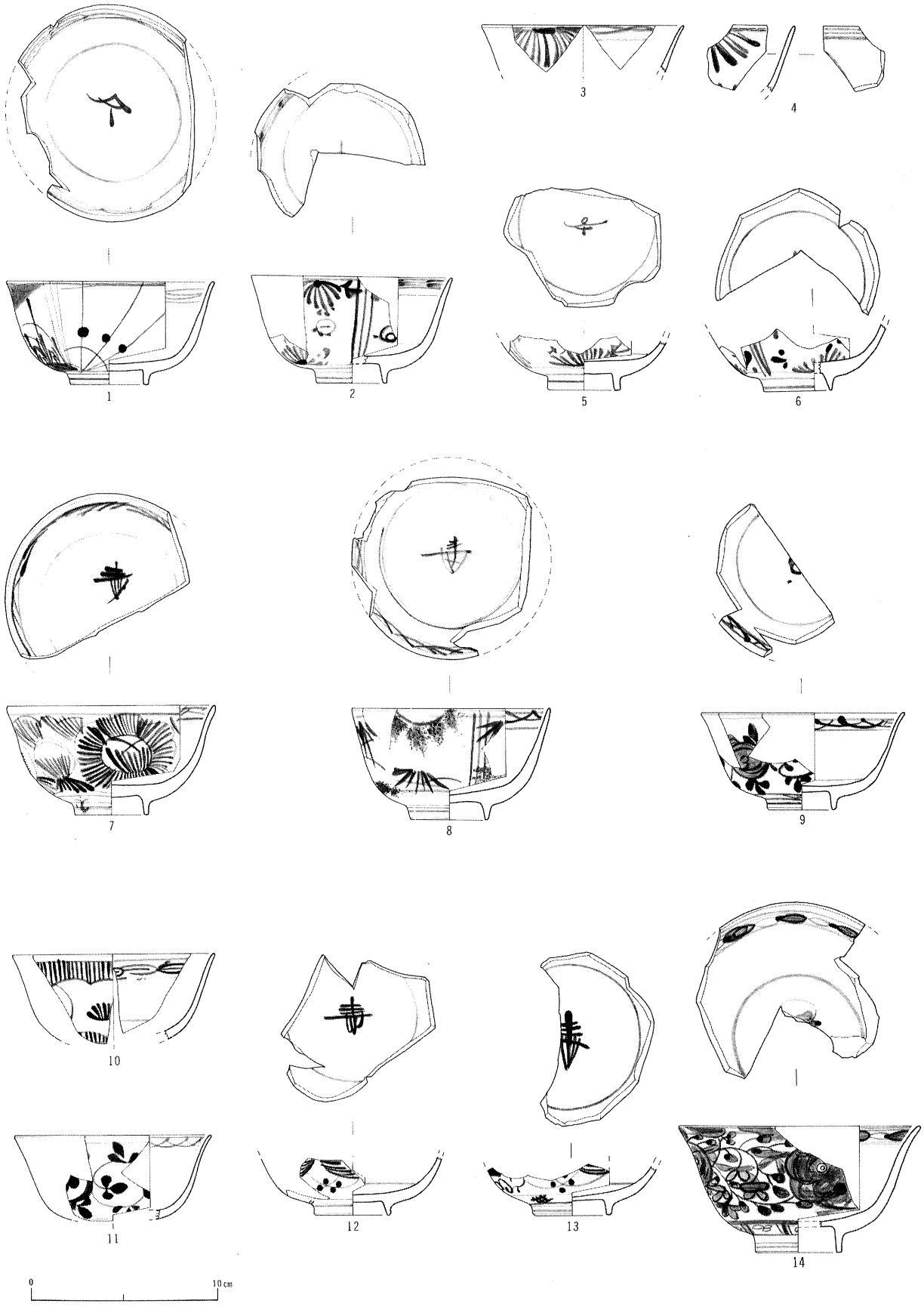
明治印判染付磁器の類で、首里城に熊本鎮台が置かれて以後首里城内で使用された汁器類であろう。

印　判　染　付　碗

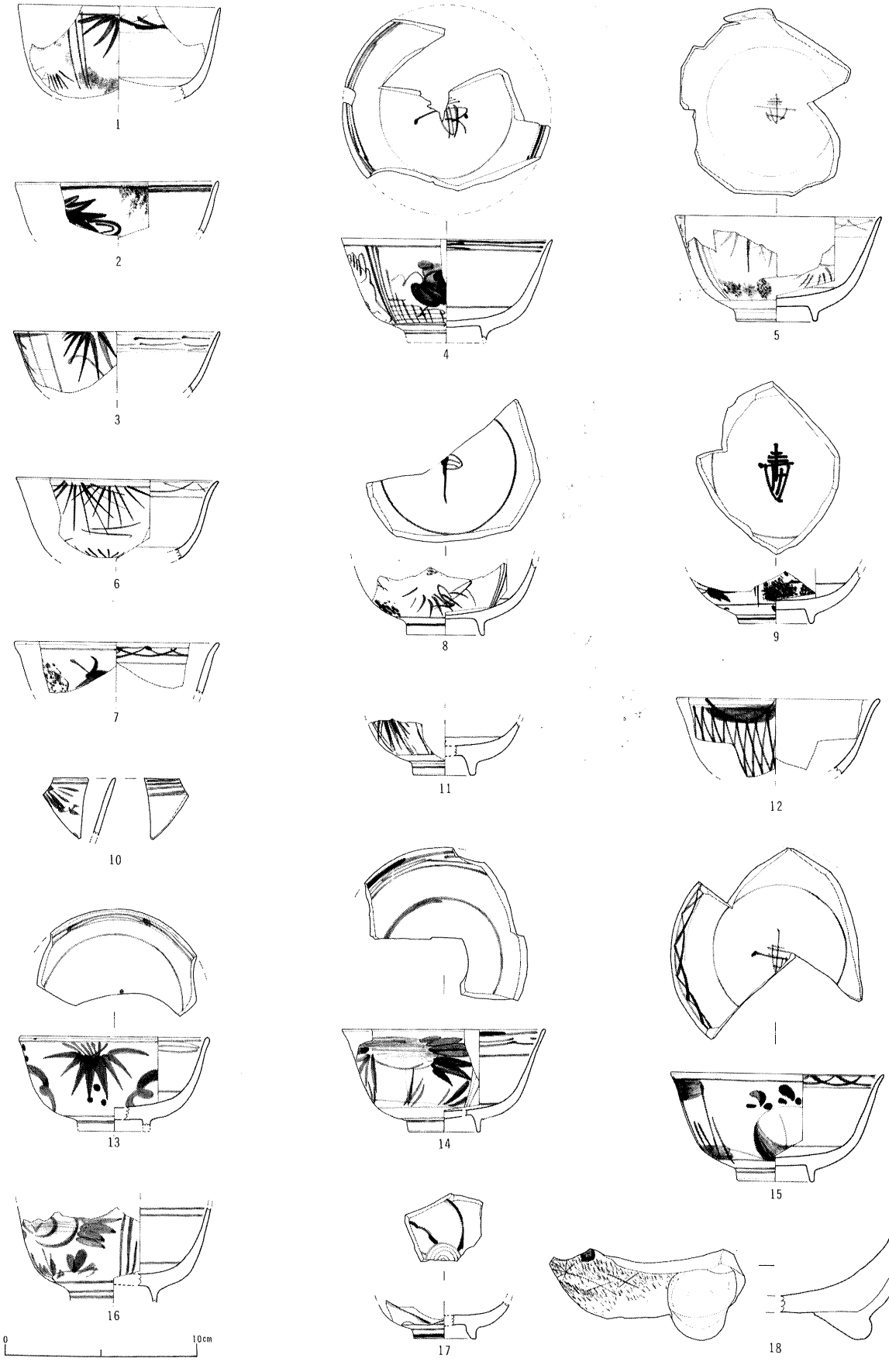
挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	呉須の発色	釉調	文様	特徴
第41図－１	碗	盛土整地層	11.2	5.5	4.2	鮮明	青白色	見込と口縁に圏文 外面に水草	畳付けを除く総釉
〃　－２	〃	〃	10.8	5.6	3.8	やや鈍い	〃	見込と口縁に圏文 外面松葉文	畳付けを除く総釉、畳付けは尖る
〃　－３	〃	〃	10.6	—	—	不鮮明	〃	見込と口縁に圏文 外面松葉文	
〃　－４	〃	〃	—	—	—	鮮明	淡青白色	同上	
〃　－５	〃	〃	—	—	3.9	やや鈍い	〃	見込みに圏線と抽象化した文字 外面松葉文	畳付けを除く総釉
〃　－６	〃	〃	—	—	3.6	鈍い	白色	見込みに圏線 外面松葉文	〃
〃　－７	〃	〃	11.2	5.8	4.0	〃	青白色	見込みに圏線と寿 外面松葉文	〃
〃　－８	〃	〃	10.5	5.9	4.2	〃	灰白色	見込みに圏線と寿 外面松葉文	〃
〃　－９	〃	〃	10.8	5.2	3.7	不鮮明	淡青白色	見込みに圏線と抽象化した文字 外面に三葉文	〃
〃　－10	〃	〃	10.6	—	—	やや鈍い		見込と口縁に圏文 外面に松葉文	体部から高台にかけては不明
〃　－11	〃	〃	10.6	—	—	鈍い	青白色	見込と口縁に圏文 外面に三葉文	〃
〃　－12	〃	〃	—	—	4.1	鮮明	淡青白色	見込みに圏線と寿 外面に松葉文	体部から口縁部にかけては不明
〃　－13	〃	〃	—	—	4.2	〃	灰青白色	見込みに圏線と寿 外面に唐草文と松葉文	〃
〃　－14	〃	〃	12.8	6.8	4.6	〃	白色	見込み口縁に圏文 外面に唐草文	畳付けを除く総釉、口縁部外反
第42図－１	〃	〃	10.6	—	—	鈍い	灰青白色	見込み口縁に圏文 外面に松葉文	体部から高台にかけては不明
〃　－２	碗	盛土整地層	10.6	—	—	黒色味を帯びる	青白色	口縁内外面に圏線 外面に竹葉文	体部から高台にかけては不明
〃　－３	〃	〃	10.8	—	—	鮮明	口縁内外面に圏文 外面竹葉文	〃	〃
〃　－４	〃	〃	11.0	5.4	4.2	黒色味を帯びる	淡青白色	見込みと口縁に圏文と寿 外面に抽象化した風景	体部から垂直に立ち上がる。 直口口縁
〃　－５	〃	〃	10.8	5.5	4.3	鈍い	〃	見込みに圏文と寿 外面に竹葉文	畳付けを除く総釉

挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	呉須の発色	釉調	文様	特徴
〃 －6	〃	〃	10.7	－	－	やや鈍い	灰青色	見込みと口縁に圏文 外面に松葉文	体部から口縁部にかけては不明
〃 －7	〃	〃	10.8	－	－	鮮明	淡青白色	口縁内面に圏文	〃
〃 －8	〃	〃	－	－	4.0	〃	〃	見込みに圏線と抽象化した文字 外面に竹葉文	〃
〃 －9	〃	〃	－	－	4.0	黒色味を帯びる	灰青白色	見込みに圏線と寿 外面に抽象化した植物	〃
〃 －10	〃	〃	－	－	－	不鮮明	〃	口縁内面に圏文 外面に松葉文口縁部の細片化したもの	
〃 －11	〃	〃	－	－	3.2	〃	〃	見込みに圏線 外面に竹葉文	底部の細片
〃 －12	〃	〃	10.6	－	－	〃	〃	見込みと口縁に圏文 外面に網目文	口縁部の細片化したもの
〃 －13	〃	〃	10.0	4.9	3.8	鈍い	〃	見込みに口縁と圏文 外面に竹葉文	口縁部若干外反、浅目の碗
〃 －14	〃	〃	10.6	5.3	3.8	不鮮明	淡灰青白色	見込みと口縁に圏文 外面に竹葉文	体部から口縁部にかけて若干開きぎみの碗
〃 －15	〃	〃	11.0	5.5	4.0	〃	灰青白色	見込みと口縁に圏文と寿 外面に抽象化した植物	畳付けを除く総釉、畳付けに砂が付着
〃 －16	〃	〃	－	－	4.4	不鮮明	灰青白色	見込みと体部に圏文 外面につる草文	口縁部及び高台部が不明
〃 －17	碗	〃	－	－	3.2	鈍い	灰青白色	見込みに渦巻文外面につる草文	高台が低く、畳付けは露胎
〃 －18	水盤	〃	－	－	－	〃	〃	外面に抽象化した絵。足がついている。内面は施釉されてない	高台内は露胎
第43図－1	皿	盛土整地層	4.2	3.2	7.2	鈍い	灰青白色	器内全面を印判で飾る 器外口縁部につる草の印判	高台内底輪状に露胎口縁を十二弁花状にする
〃 －2	〃	〃	12.4	3.3	7.0	やや鮮明	〃	器内全面を印判で飾る 器外口縁部に草花文体部下位と高台側面に圏線	〃
〃 －3	〃	〃	12.5	3.2	7.6	不鮮明	〃	〃	〃
〃 －4	〃	〃	12.9	3.5	8.2	鮮明	〃	〃	〃
〃 －5	〃	〃	13.9	3.5	7.6	鈍い	〃	〃	〃
〃 －6	〃	〃	12.8	3.1	7.8	鮮明	淡青白色	器内全面を印判で飾る 器外口縁につる草文の印判	〃
〃 －7	〃	〃	13.0	3.8	8.0	〃	灰青白色	器内全面を印判で飾る 器外口縁草花の印判 高台側面に圏線	〃
〃 －8	〃	〃	13.0	3.2	8.6	鈍い	淡青白色	器内全面菊花の印判で飾る 器外口縁に唐草文 高台側面に圏線	〃

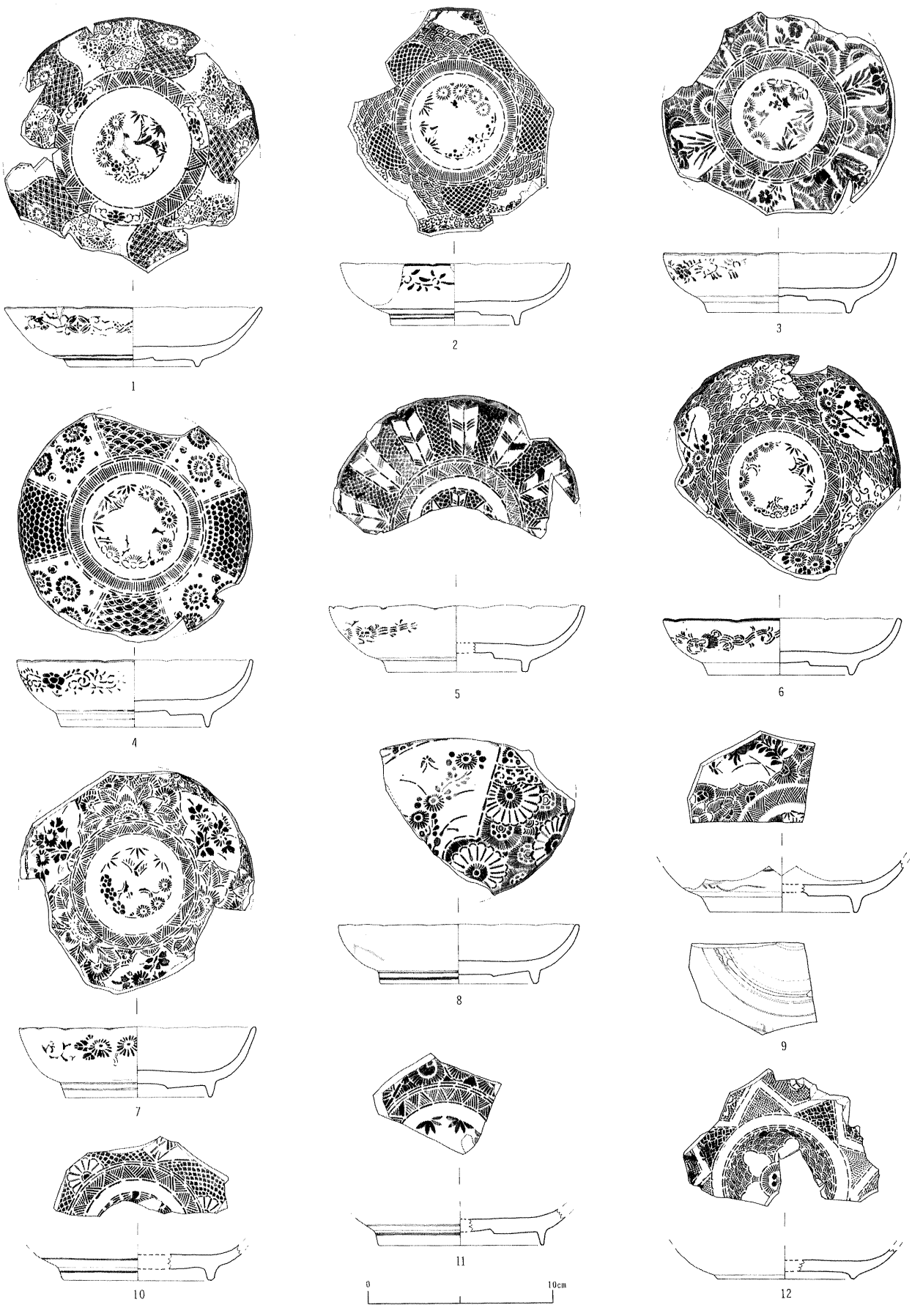
挿図番号	器形	出土地点と層位	口径	器高	高台径	呉須の発色	釉調	文様	特徴
〃 －9	〃	〃	－	－	7.9	鮮明	青白色	見込み全面印判で飾る 器外体部に唐草文 高台側面に二重圏線	底部の小破片
〃 －10	〃	〃	－	－	8.3	やや鮮明	灰青白色	見込み全面印判で飾る 器体部下位と高台側面に圏線	〃
〃 －11	〃	〃	－	－	9.0	鈍い	灰濁白色	〃	〃
〃 －12	〃	〃	－	－	7.7	やや鮮明	淡青白色	見込み全面を印判で飾る	畳付けを除く総釉。高台低い
第44図－1	皿	盛土整地層	11.9	2.0	7.2	やゝ不鮮明	灰白色	器内全面印判で飾る 器外は無文	畳付けを除く総釉 浅底の皿
〃 －2	皿	〃	10.6	1.8	6.2	〃	青白色	器内全面桜の印判で飾る 器外は無文	畳付けを除く総釉 浅底の皿
〃 －3	皿	〃	10.8	1.8	6.5	〃	灰青白色	器内全面菊花の印判で飾る 器外は無文	畳付けを除く総釉 浅底の皿 畳付けに砂粒が付着
〃 －4	皿	〃	－	－	7.6	不鮮明	灰青白色	器内全面松葉の印判で飾る 器外高台の周辺に２本の圏線が巡る	高台の断面は四角形を呈している 高台の内側は無釉 体部から口縁部にかけては不明
〃 －5	皿	〃	22.1	－	－	鈍い	灰褐色	器内全面青海波の印判で飾る 器外は唐草文と圏線	口縁部のみの破片
〃 －6	皿	〃	12.3	2.1	7.4	鮮明	灰白色	器内全面印判で飾る 器外口縁直下に抽象化した文字	畳付けを除く総釉 浅底の皿
〃 －7	皿	〃	26.3	2.4	16.7	やや不鮮明	白色	器内全面に風景を描く。 高台内側にWILLOWのスタンプ	器内外面とも総釉 素地軟質
〃 －8	不明	〃	－	－	4.4	鈍い	濁青白色	見込みに草花 器外体部に唐草 高台内側に抽象化した文様	中国清代の染付 高台のみ
〃 －9	〃	〃	－	－	8.3	〃	〃	見込みに螺旋状の文あり	中国清代の染付 高台のみ 畳付けに砂が付着
〃 －10	〃	〃	－	－	5.9	〃	〃	〃	中国清代の染付 高台のみ 畳付けは尖る
第31図－14	陶器楕円形皿	〃	－	1.7	－	－	全面に芥子色の釉がかかる	見込み全面に龍のスタンプ文	素地は軟質
第31図－15	〃	〃	－	－	－	－	〃	〃	〃
第31図－22	仏壇の花生	〃	－	－	－	－	－	体部全面に花文を描く	琉球赤絵



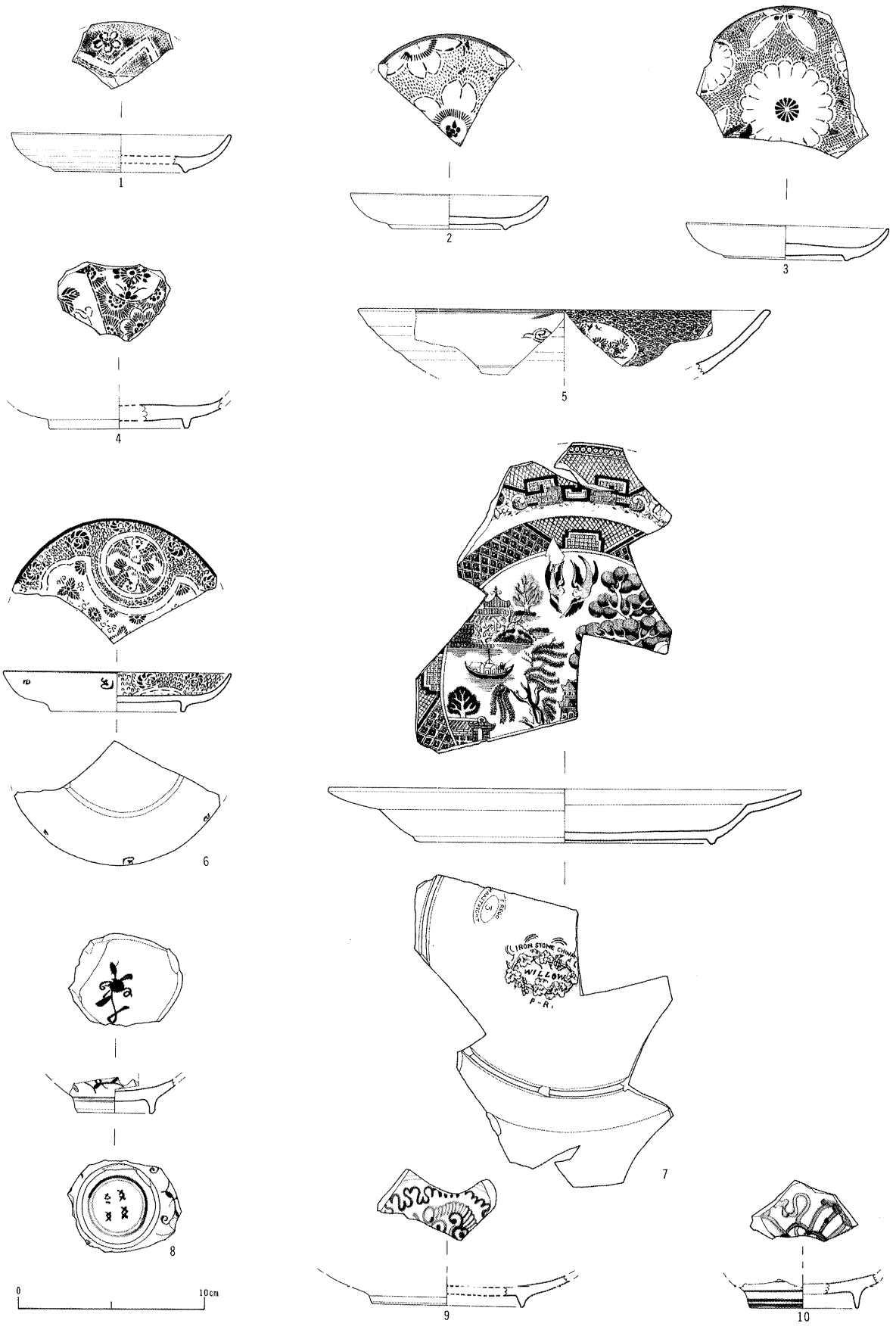
第41図　印判染付磁器



第42図　印判染付磁器



第43図　印判染付磁器



第44図　印判染付磁器

第8節　土　器

a　摘み付き凹形器

土器はLトレンチから集中して、総数1286点余の破片が検出されている。接合して復元できるものはないが、図上復元により壺と鉢の器種が判別できた。出土量では前者が多く得られている。

壺はその口径により第45図1、5の10～14.3㌢台のものと、同図2、3、4の16.7～18.6㌢台の二つのグループに分けられる。また口縁形は様々にあるが、大まかに下記の二種に分けられ、それぞれがさらに二タイプに細分される。

A類は口縁部が外反するグループである。

Aa‥口縁形の外反がC字状に大きく緩やかに曲線を描くものである。第45図1，6，7，8の資料で出土量が最も多くみとめられた。

Ba‥外反の形状がくの字に著しく曲がるもので、その出土は少ない。第45図2。

B類は口縁部が直口状ないし若干外折するグループである。

Bb‥口縁部の立ち上がりが垂直に1.5cm以上と長く、肩がはるように胴部に移行する形態のものである。第45図4、5、13。

Bb‥立ち上がりが極めて短く、口縁直下から直ぐ胴部に移行するようになっているものである。第45図3、12、14

鉢は口縁部が内湾するグループで、大形の破片はなく、口縁部にこぶ状の突起を有するものや、有文のものは得られていない。　第45図9、10、11、15、16。

胴部破片については鉢と壺の破片がすべて含まれていて現段階では判別できない。胎土及び、整形の違いからは二グループに大別できる。

Ⅰ類‥混入物に石灰岩粒子がみられるもので、器面上に多くそれを露出するものと、それが剝離し多孔面でおおうものがある。本グループの整形はナデ調整が主体で、概して調整時の指頭痕を残すものがあり、器面に凹凸がみられる。

Ⅱ類‥このグループは石灰岩粒子が含まれず、きわめて粒子の細かい黒色物質、ガラス質の鉱物が大量に混じるものである。器面の調整はⅠ類に比較すると、その調整は良好でスムーズな曲面を保持している。また特徴的な点は混入物が器面上に露出するものが多く、手触りはザラザラ感じるものがある。

出土量ではⅠ類とⅡ類の比率は1：2の割合で後者が多く検出されている。さらに前述の口縁形態との関連でみると、Ⅰ類はAa類の鉢に存在し、Ⅱ類はB類に傾向として多く認められる。

底部は41例の破片資料があるが、くびれ平底をなすものが一例のみで、他は底径の大きい平底からなる。第45図17は唯一のくびれを有する平底で、胎土はⅠ類に該当する。同図18、19は底部裏に葉痕を残すも

ので、胎土はくびれ平底同様の泥質になる。

底径の大きいその他の資料で、II類に含まれる底部はその立ち上がり部に角を有するものが多く、その面の整形痕ではヘラ削りを残すものがあり、約4cm幅の範囲で整形痕を残すものが多い。

土器集計表

	口縁部片		胴部片		底部片	
	I	II	I	II	I	II
表土層	0	0	10	5	0	0
第II層						
0－10	6	19	177	518	4	27
10－20	1	2	98	109	0	2
20－30	8	3	79	76	2	7
30－50	3	1	75	55	3	3

b　蓋形状土器

器形が凹面し、内面中央に摘みが施され、口縁部が折り曲げられて肥厚し、落とし蓋ないしは皿形をした製品である。底部は丸底をなすが中心部付近にやや平面を有するものもある。器高は第45図28～31のように高いものと、同図32、33のように扁平状のものがある。径の大きさは図上復元からすると12.5～14.8cmとなり定形化している。

口縁部は内側に返るように折り曲げられ、その上面は凹線上に口縁を囲しゅうしている。また折り曲げにより内面側との境には稜をつくっている。この形態的特徴は口縁の補強のためのものか、内側に入れる物質のこぼれを防ぐためのものか、その意見が分かれるところである。

内部中央の摘みは明らかに実用的なつくりをなし、外面からみると、その頂部が覗く程度の位置にある。摘みの形態は現在のところ宝珠形の第45図35～37と鏡餅形の同図29の二種が認められる。

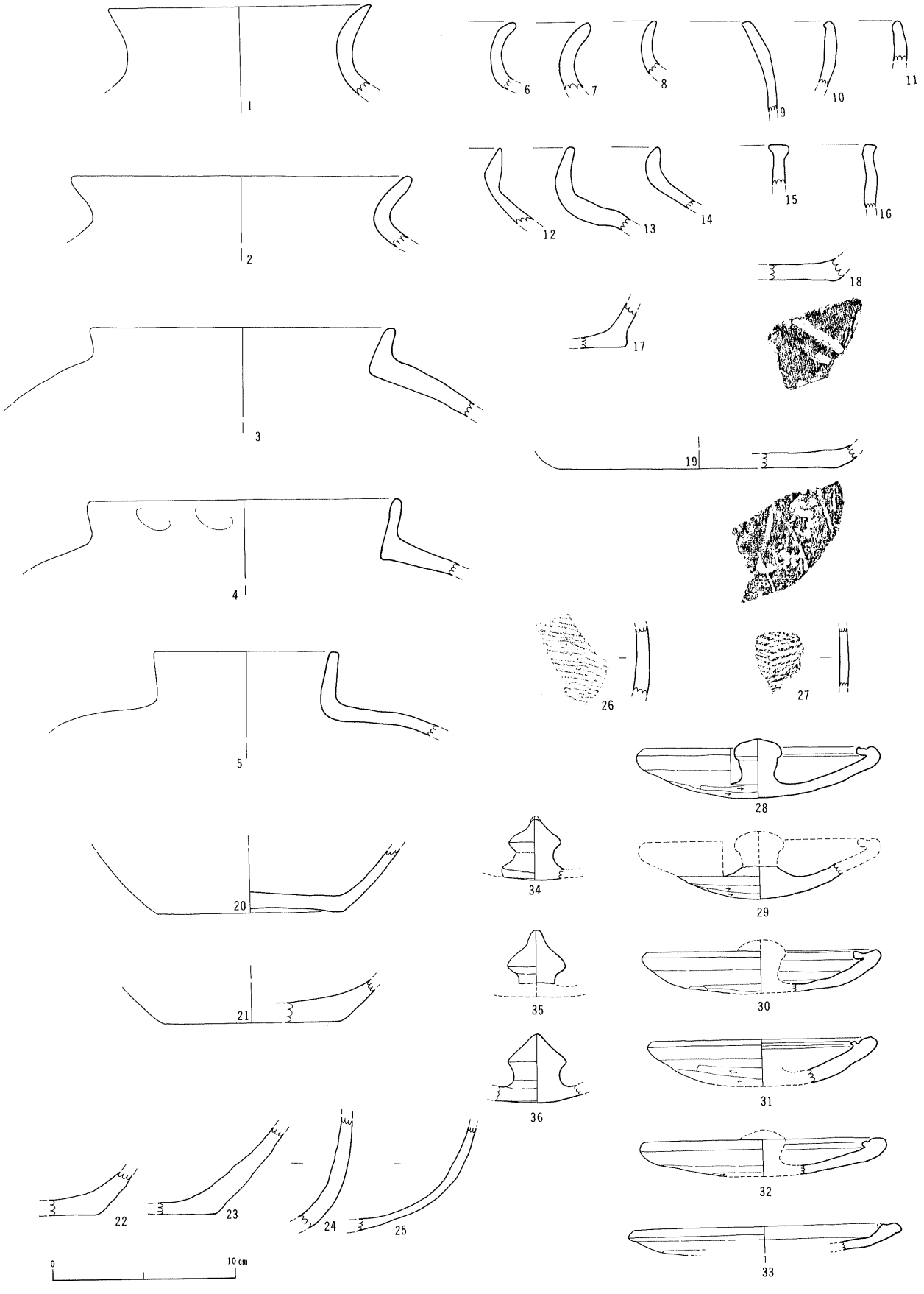
器面の仕上げはナデ整形がなされるが、丸底の裏面のみに篦削り痕が明瞭の残すものが多い。胎土は泥質である。混入物に粒子のそろった石英、赤色物質が大量に入り、器面上にも露出している。焼成は良好で、色調は肌色、橙色を呈する。ただ胎土中央は灰色をおびる。

当該製品は資料の増加もあるが、現在の資料からは14世紀頃からみられ、土器の消滅と同時にその量も減りやがてなくなっていく。他のグスクから検出される資料と比較しても規格性が顕著であり、それのみ単独に製作され商品として流通していたことも考えられる。その用途について言えば、もし土器の蓋と考えれば、外反の強いA類の壺に使用されるものと推測され、その場合当形態の土器の共伴関係の有無を調べる必要がある。また凹面を有するという形態的特徴から蓋ではなく単独に機能する橙明皿ではないかと推定する意見もある。この実証は脂肪酸分析で解決され、今後の資料の取り扱いに注意される。

c　叩きのある土器片

第45図26・27の二例出土している。表面のみに叩き目を残し、裏面は粗面になっている。胎土は泥質で赤色物質がみられ、色調は明褐色をおび、胎土中央のみ黒褐色を呈する。

焼成は良好。器厚は前者が5㎜、後者が3㎜を測る。いずれも壺の破片と思われるものである。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10 cm

第45図　土器

1　陶質土器

本類の器種は鍋、鍋の蓋、鉢、壺、水注、土箱などからなる。とくに鍋、蓋、壺、水注までの資料はいわゆる通称サークーと称される素焼きの土製品である。特徴として胎土は精練され、その成形がろくろびきで、薄手に仕上げられている。器色は橙褐色ないし黄褐色をおびる。

鍋　第46図１～16

鍋は口縁部破片487点、胴部および底部破片3156点の総数3653点検出されている。接合して全体を復元できるものはないが、図上復元でみると口縁部は水平に近いくの字状に外湾し、胴部の膨みが下半部にある丸底の器形になる。最小口径14.4cmものから、最大口径24.6cmのものまで、間隔なく存在し明確に大小の大きさに分けるのが難しいほどにある。口縁形は詳細にみると、くの字状にストレートに曲がるものと（Ⅰ類）、くの字状にストレートに曲がり、その口唇部先端が内傾するもの（Ⅱ類）、くの字状に曲がるが、全体に受け口状に内湾するもの（Ⅲ類）がある。

本鍋には２か所に対応する取手が付されている。取手は土紐を外反する口縁に沿って撫で付けたもので、そのためやや水平よりは下向きの位置にある。取手の数は完全形が20点、破片数は右耳58点、左耳77点、位置不明の耳50点を数える。単純に取手の数から鍋の量を算出すると少なくとも74個体の鍋が推定される。

鍋の蓋　第47図１～10

上記の鍋には皿形をした蓋が伴う。これらの鍋は使用時に図の様に逆さにかぶせて使用する。図面復元をすると最小径14.8cm、最大径20.8cmをはかり、鍋の口径と対応する。高台状のつまみの成形は削り出しによるもので、高台脇にあたる部分の約２cmまでおよんでいる。ろくろからの切離しは糸切りでなされていることが第47図10で知られるが、多くがつまみ部の成形時に削られ、残るのは少ない。またそのつまみに相当する畳付け部の幅は同図１、２、８、９の細いものと同図３、10の厚いものがある。さらに同一個体でその畳付き部の幅が一定しないのもみられた。これらは概して、その成形は悪いものである。つまみの完全形のものが38点、破片数が60点を数える。つまみの破片は完全形に近い組合わせにより個数を復元すると17点になり、完全保存形を加えると49点の蓋が推定される。

B鉢

第47図11は推算口径が16cmの鉢である。器厚が0.5cmで水注の口縁部にも類似しているが資料が微細で、類例も少ないため、その関係は現在不明である。

C壺

第47図12、13の資料で、口縁は短く直口し、その直下に胴部が丸く張出している。底部の存在する13は、ややごけ状に削り出した底を呈する。器高は5.7cm、推算口径4.8cmを計る。同図14は口縁部の破片で、推算口径7.5cmとなる。

D水注

全体の形状は破片が細かく不明であるが、第47図14～18と第31図１～３が同製品の部分片と考えられる資料である。いずれも破片ながら同図14、15は算盤の珠状の小さい蓋のつまみである。器厚は0.3cm。同図17、18は取手の吊下げ部分であるが形態は異なり、大小器形の違いと推測される。同18は底部付近の破片で、外器面にだるまにけばを付けたような細かい模様が連続してある。器厚0.3cm。第31図１、２は水注部分で、胴体部に張付けたところから剝離している。成形時の胴体部との接合は体部の孔が穿たれた後になされ、陶器のそれと異なっている。器厚0.3～0.4cm。

F土箱、第31図４～７、９

破片のため全体の形状は不明であるが、図化したように箱形の隅部分が存在する。同図6は欠損しているが、表面は研磨がなされ光沢があり、その一部に掛かりの細工が認められる。残存する側面は方形に成形されていて、蓋様の部分片かと思われる。7は光沢のある平面に植物のさくらの花模様のスタンプが認められる。胎土は先述のサークーの同じ精練された泥質であるが、大量の石英粒子、金雲母の混入物が存在する。器色は橙褐色をおびる。器厚1.0～1.2cm。

不明資料　第31図8、9、10

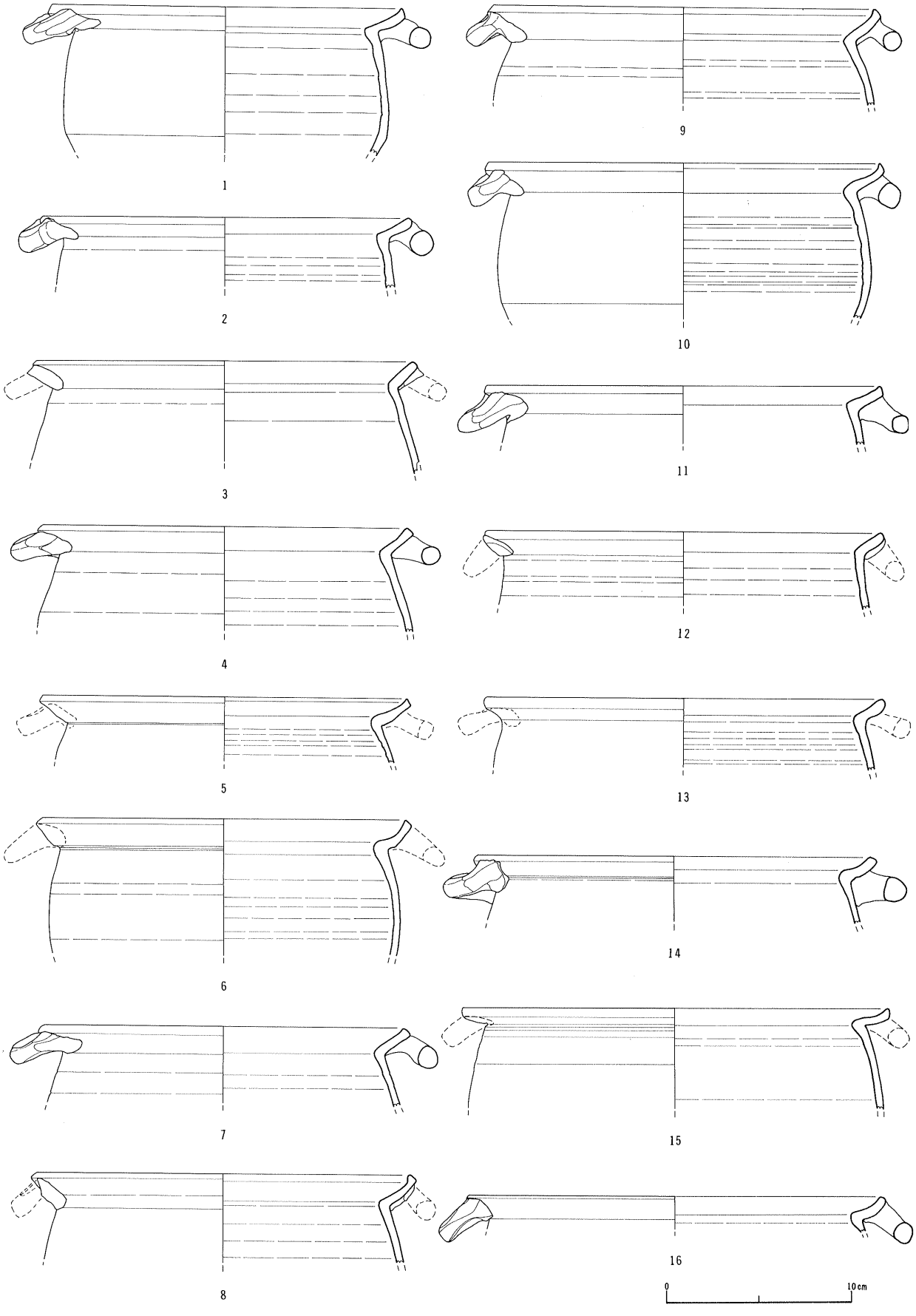
器表面には横位の沈線を深く多数施文した、壺ないし甕の一部と考えられるものであるが、きわめて小破片のため形状は不明である。胎土は上記の土箱と同様の混入物を大量に混じっている。器表面には横位の沈線を深く多数施文している。器厚1.0～1.1cm。

鍋の集計一覧

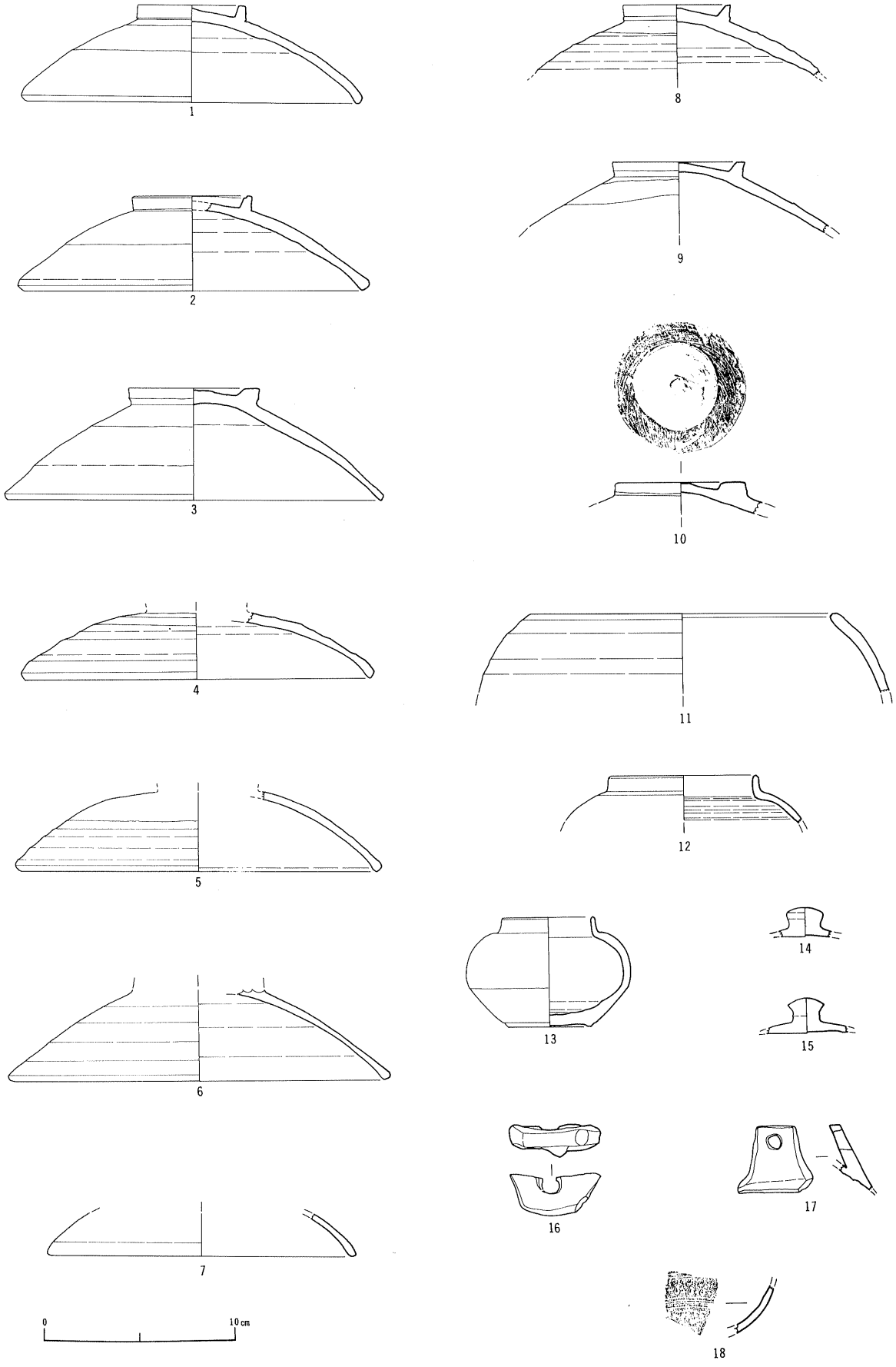
図	口径cm	口縁形態
第46図1	19.1	II類
〃 2	19.9	I
〃 3	20.5	I
〃 4	19.8	II
〃 5	19.8	III
〃 6	19.8	III
〃 7	19.6	I
〃 8	20.4	II
〃 9	20.7	II
〃 10	21.3	II
〃 11	21.4	I
〃 12	21.5	I
〃 13	21.5	III
〃 14	21.3	III
〃 15	23.1	III
〃 16	22.4	III

鍋の蓋集計一覧

図	口径cm	つまみの径
第47図1	17.2	5.4
〃 2	17.7	6.3
〃 3	19.5	6.8
〃 4	18.0	-
〃 5	18.6	-
〃 6	19.2	-
〃 8	15.8	-
〃 9	-	5.5
〃 11	-	6.9



第46図　陶質土器



第47図　陶質土器

第９節　瓦　類

第48図～53図に瓦の実測図をまとめた。これらの瓦は盛土整地層からの出土が圧倒的であるが、一般に高麗瓦と称される中世期の瓦の中には試掘トレンチの中のきちんとした層序から出土したものもある。

時期的には中世に属する瓦と近世に属する瓦の二種が含まれている。前者をⅠ群、後者をⅡ群としてまとめることにした。

Ⅰ　群

軒丸瓦（第48図－３・４・５、図版－61）

３点の出土である。内区に連珠文と巴文、周縁は全て素文である。第48図－３は径8.4cm、厚さ1.2cmの小型の軒丸瓦である。幅0.4cmを測る周縁の内側に２条の凸帯文を巡らしその中に連珠文を貼り付けるが、小破片のため内区については不明である。同図４は内区と連珠と三つ巴文を配している。周縁については欠落しているため不明。同図５は径13.8cm、周縁幅1.8cmを測り、内区は12個の連珠と三つ巴文である。３と４は共に灰色。５は黒色を呈している。３点とも盛土整地層からの出土である。

軒平瓦（第48図－１・２、図版－61）

２点出土した。第48図－１は直角四辺形の瓦当であるが周辺部を欠落するため文様の構成等については不明である。現存する部分で言えば、大川清氏の分類中宇瓦浦添城第３類Ｃに分類されるものである。色調は灰褐色である。同図２は長方形の瓦当部分の小破片である。文様面の横長は不明、縦幅は約4.2cmである。現存部分では十弁の花文と唐草文の一部が認められる。周縁は素文である。色調は灰黒色、１、２とも盛土整地層からの出土である。

平瓦（第49・50図、図版－62、63）

全標品とも小破片のため長さ、尻幅、頭幅、谷の深さ等については知り得ない。第49図にまとめた標品は、瓦の凸面に銘が押されたものである。同図１から９については「癸酉年高麗瓦匠造」の銘文のある瓦であるが、現標品では羽状押型の中に僅かの銘文しか確認出来ない。銘文は押型になっており、瓦面には銘文が反対にあらわれている。瓦の厚さは1.5～2.2cmを測る。瓦側面が観察できる標品を見るといずれも割り痕がある。また、凹面には布目が明瞭に認められる。色調は1・5が茶褐色、６・７・９が淡灰色、２・３・４・８が灰黒色をそれぞれ呈している。同図４・５・６・10は盛土整地、他は古い石垣の隔間や古い整地層の中から出土している。

同図10は凸面に「天」銘文のある瓦である。現状では上部欠落の破片のため「天」の銘しか確認できないが、もともと「大天」の銘である可能性が強い。厚さは2.2cm、灰黒色を呈している。凹部には布目が認められる。

第50図の標品は銘文の無い破片である。同図１・２・３は羽状押型の中に格子状の枠があり、４は羽状押型の中に空白の枠がある。また、５～10は羽状押型だけの破片である。色調は２・９・10が茶褐色、４・６・７が淡灰色、１・３・５・８が灰黒色を呈している。２・３・４・９は古い整地層の中から出土し、他は盛土整地層の中から採集されたものである。

丸瓦（第48図－9、10、図版－61）

第48図－9は凸面に縄目をかすかに残す標品である。凹面には布目の上に刺子状の網目が見られる。また、同じ凹面に砂粒の付着も認められる。瓦側面は生乾きのときに刃物によって切られており、整形の痕跡を残す。色調はネズミ色を呈している。古い整地層から出土した。この種の標品は首里城の南に隣接する崎山御嶽や勝連城跡からも出土する。また近年では首里城正殿跡の第Ⅰ期基壇からも大量に出土した。

10は小破片のため不明、灰色を呈している。盛土整地片から出土した。

II　群

軒丸瓦（第48・51図、図版－61、64）

内区には花文と連珠、周縁は全て素文である。内区花文の意匠により5類に分けられる。1類は第48図6・8・7、2類は第51図－1～6、3類は第23図7・8、4類は同図9、5類は同図10・11である。1類と5類は色調が灰色、軟質で吸水性があり、2類・3類・4類は煉瓦色で焼き締められ固い。瓦当の径は全標品とも15cm前後を測る。標品全てが盛土整地層から出土した。

軒平瓦（第52図、図版－65）

『瓦奉行例帳』（首里王府の近世文書）で「髭瓦」と記されている垂尖形の軒平瓦である。垂れ長さは第52図－6の標品以外は全て9～10cmを測り、垂れには葉をつけた牡丹がつく。垂れ部分の接合角度は流水効果をはかって斜めについている（約100～110度）。同図3・6・7・8は灰色、他は煉瓦色を呈している。灰色の標品は、煉瓦色の標品に比べ概して厚手である。灰色瓦の中でも同図6は最も大型で垂れ長さ14cm、垂れ先端部の厚さで1.7cmを測る。全標品とも盛土整地層からの出土。

平瓦（第53図－1・2、図版－66）

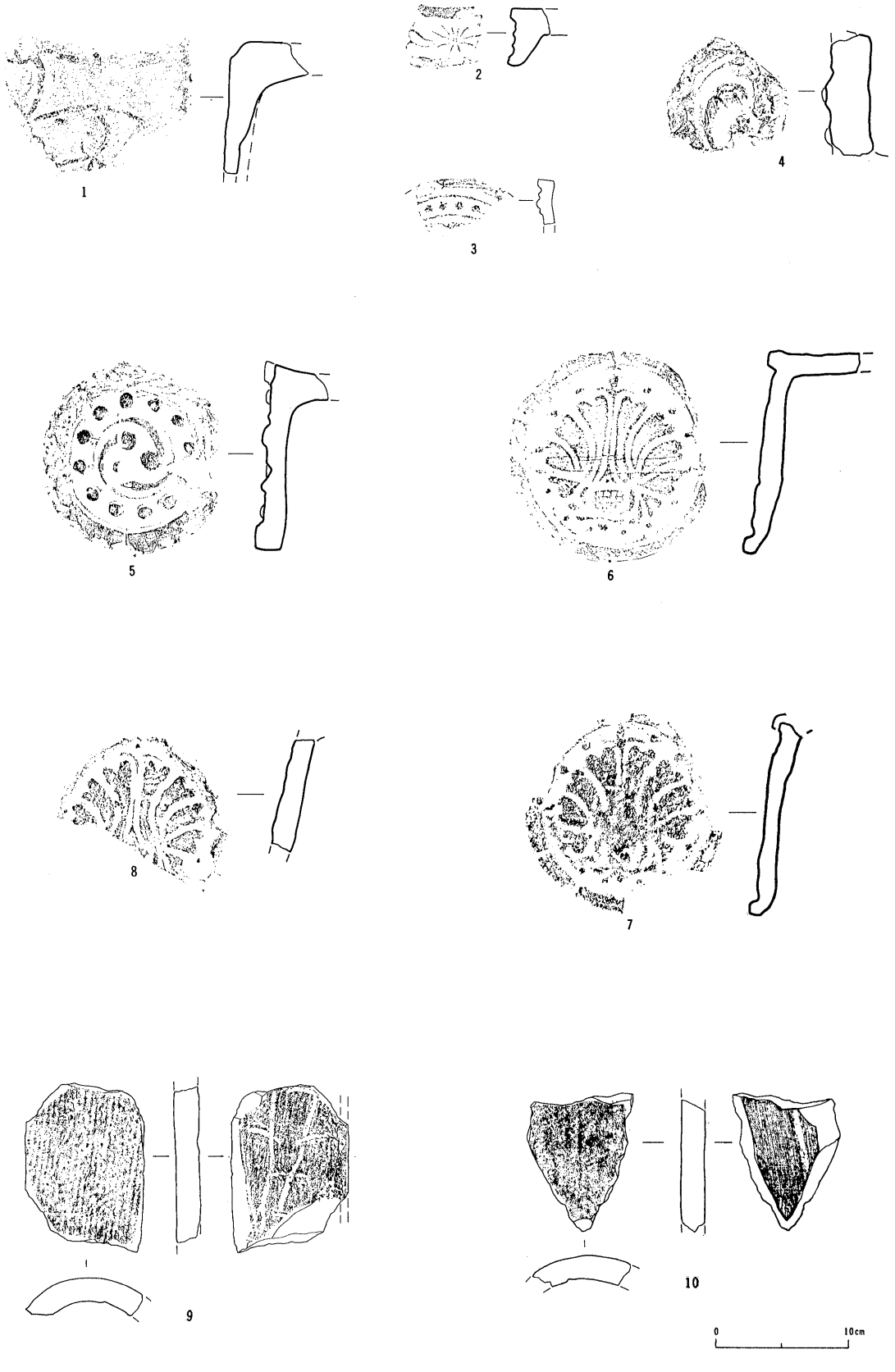
第53図－1は長さ22cm、尻幅18.2cm、頭幅23cm、谷の深さ3.5cm、厚み1.5cmを測り、側面には割り痕がある。1は灰黒色、2は灰色を呈している。両者ともに凸面には叩き痕が無く、凹面に布目痕と桶を連綴した紐痕を残す。盛土整地層からの出土。

丸瓦（第53図－3・4・5、図版－66）

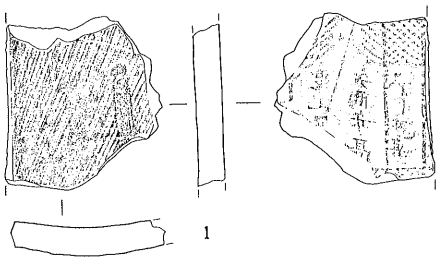
第53図－3は胴の長さ26.5cm、玉縁の長さ4cm、尻幅・頭幅ともに15.2cmを測る。同図4と5については欠失部分があるため法量については不明であるがほぼ3と同じような法量だと思われる。3は煉瓦色、4と5は灰色を呈している。3の場合は凸面に「ナディ」による整形痕を明瞭に止めている。3と4は両側面に割り痕をそのまま残しているが、5はきれいに整形されている。3標品とも凹面に布目がある。盛土整地層からの出土。

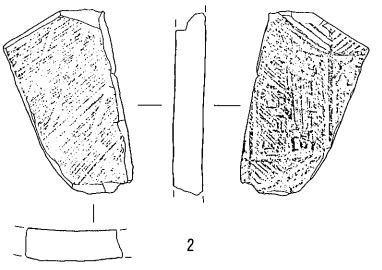
線画を描いた瓦（第53図－6、図版－66）

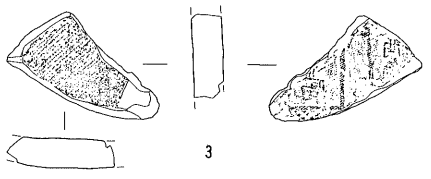
第53図－6は平瓦の凸面に線画を描いた標品である。描かれたものが鳥のようにもみえるが小破片のためはっきりしない。瓦の色調は煉瓦色、サンドイッチ状に中の方は灰色を呈している。凹面は布目を残し、

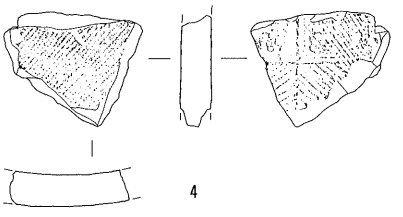


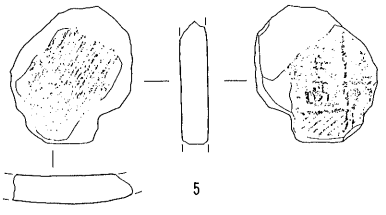
第48図　瓦

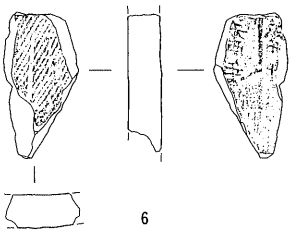


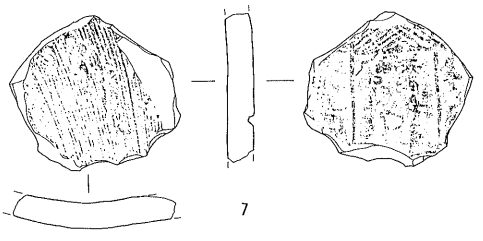


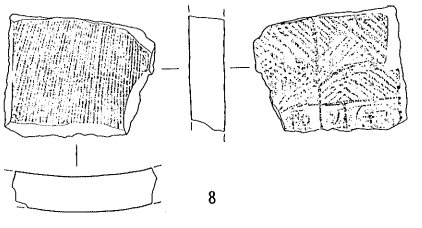


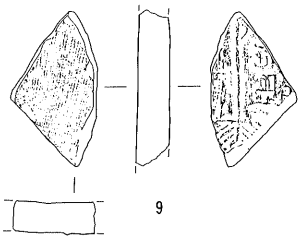


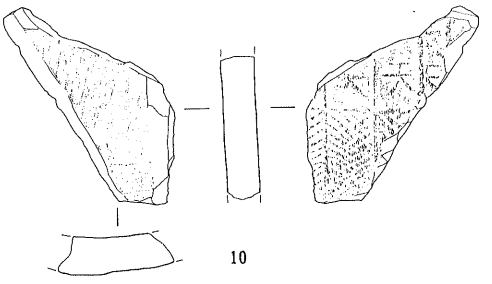




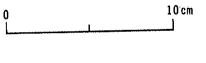


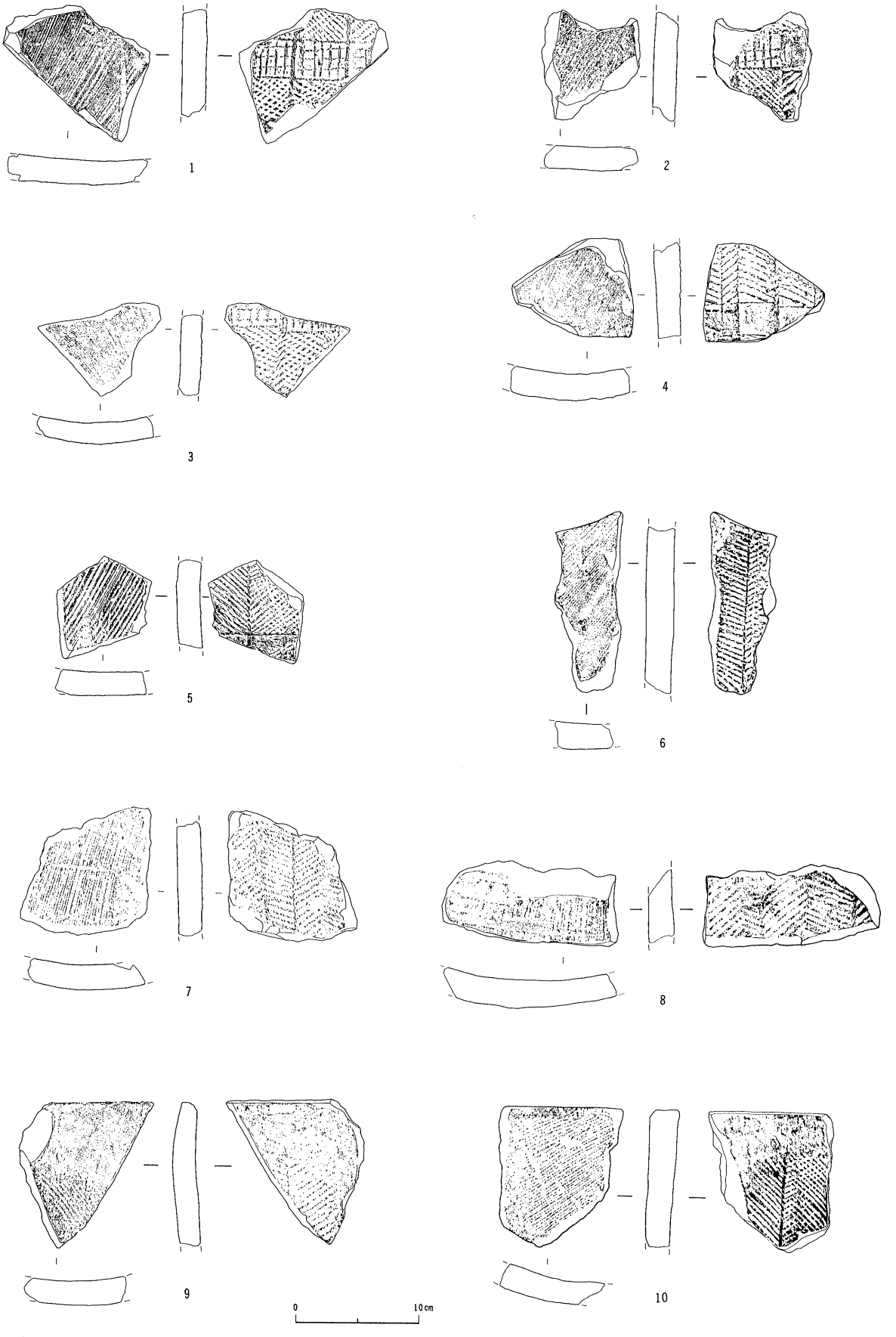






第49図　瓦





第50図　瓦

漆喰が付着している。盛土整地層から出土した。

主 要 参 考 文 献

大川　清　「琉球古瓦調査抄報」沖縄文化財調査報告1962年度版　1962年度版　琉球政府文化財保護委員会

当真嗣一・上原静　「首里城正殿跡の調査」文化課紀要第４号　沖縄県教育庁文化課　1987年３月

『沖縄県宜野座村松田遺跡――般国道329号改良工事に伴う緊急調査―』沖縄県文化財調査報告第76集　沖縄県教育委員会　1986年３月

『浦添城跡第二次発掘調査概報』浦添市教育委員会　1984年３月

『沖縄出土の中国陶磁器（下）―ジョージ・H・ケア氏調査収集資料―沖縄本島編―』沖縄県立博物館　1983年３月

亀井明徳「グスク採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁器（下）』沖縄県立博物館　1983年３月

宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図（考古編）』柏書房　1983年３月

『今帰仁城跡発掘調査報告書－Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年３月

『勝連城跡―昭和56年度本丸南側城壁に伴う遺構発掘調査報告書』勝連町教育委員会　1983年３月

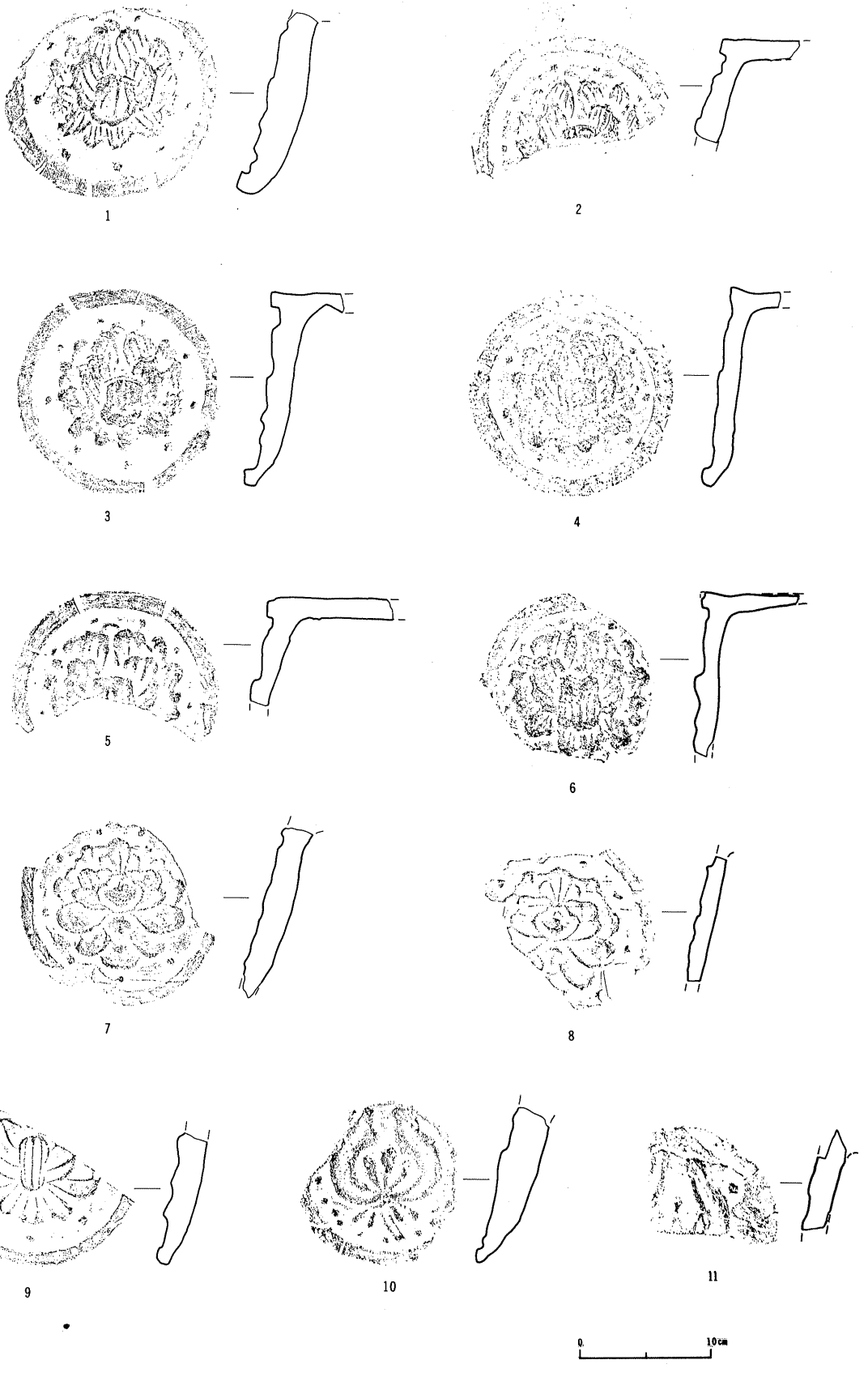
『今姿を見せる古琉球の浦添城跡』浦添市教育委員会　1983年１月

鈴木重治「沖縄出土の中国輸入陶磁器―勝連城を中心とするグスク出土の資料」『貿易陶磁研究』No.１　日本貿易陶磁研究会　1981年８月

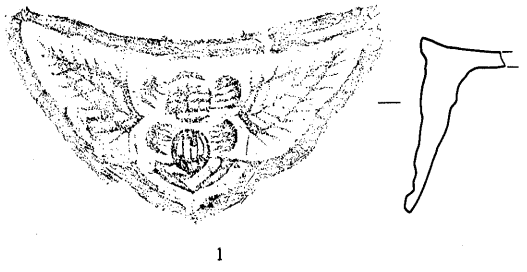
当真嗣一「西原町内間散布地No.１出土の須恵器について」南島考古だより第24号　1981年11月

三島　格「琉球の高麗瓦など」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会　1980年

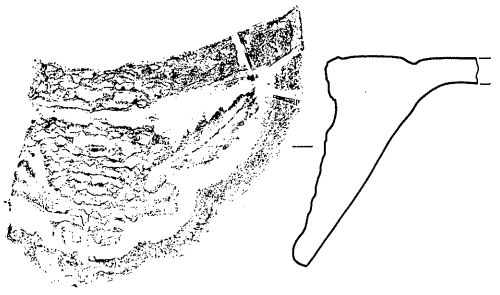
多和田真淳『古稀記念多和田真淳選集』古稀記念多和田真淳選集刊行会　1980年１月



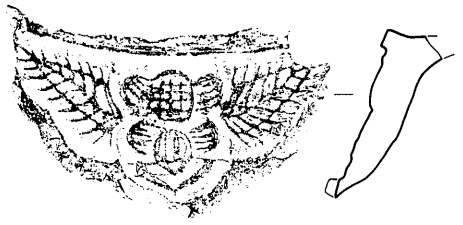
第51図　瓦



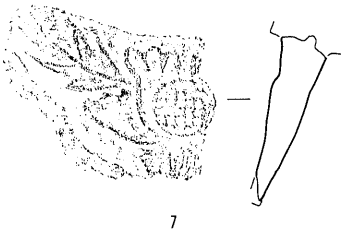
1



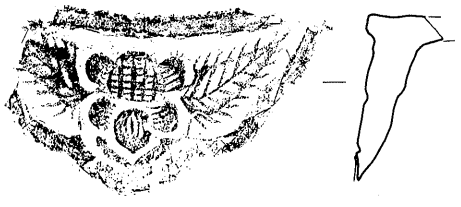
6



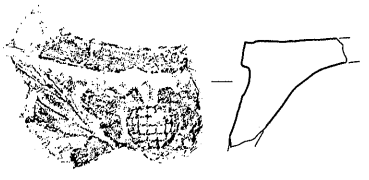
2



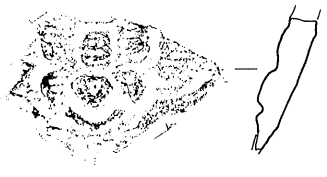
7



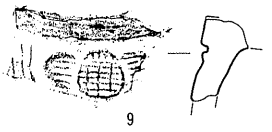
3



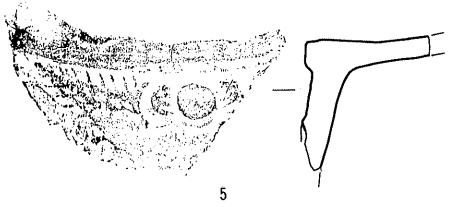
8



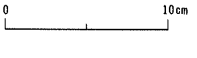
4



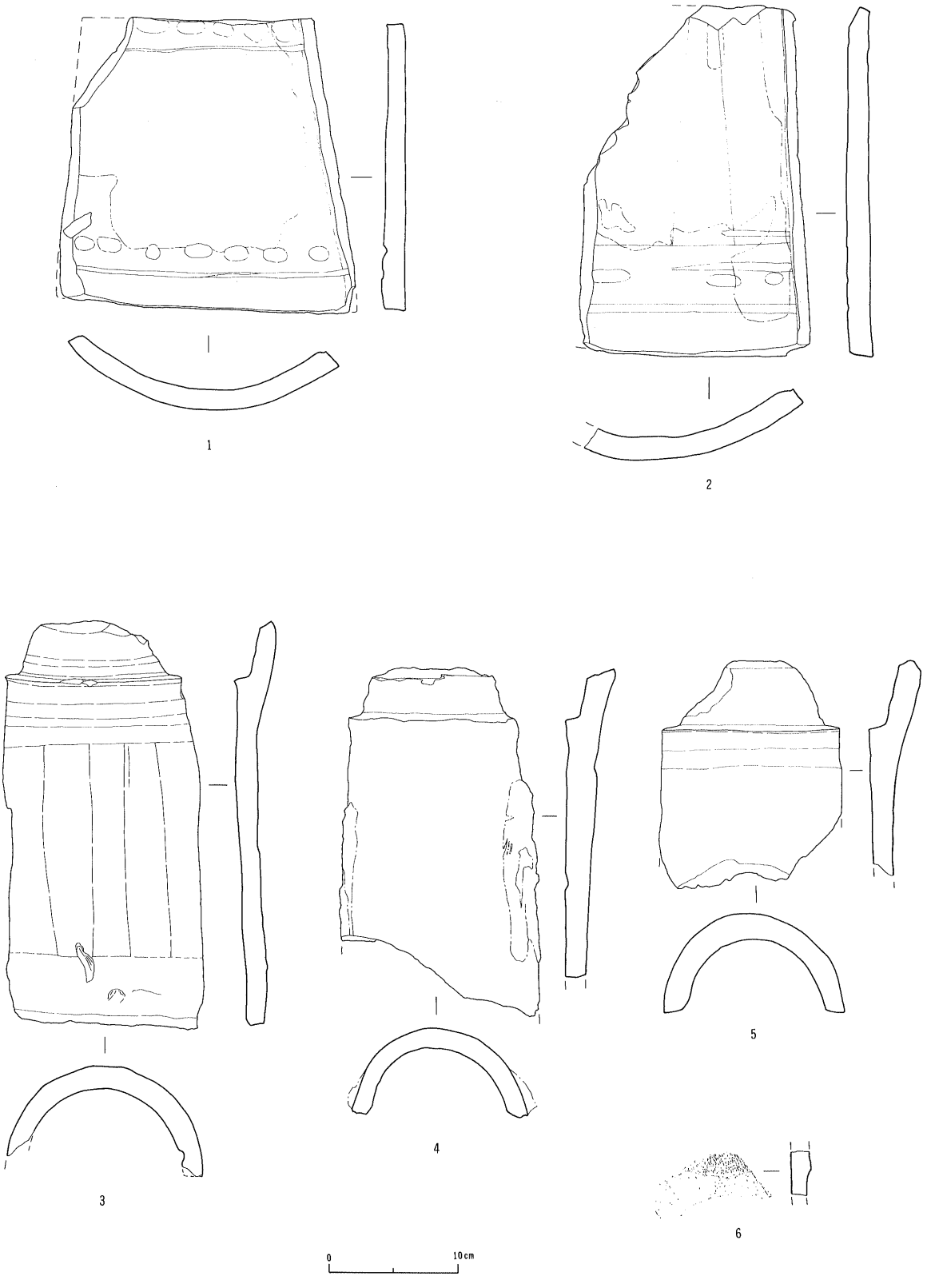
9



5



第52図　瓦



第53図　瓦、１・２平瓦、３～５丸瓦、６線画を描いた瓦

第10節　塼

塼はその形態、大きさから５種のタイプに分類できる。

A類　溝の蓋になる製品で総数46点の破片が得られている。第54図１、３の２例示した。得られた製品では最も大きく、重量がある。縦が35cm、横が22cm、厚さ10cmで長方形をしている。重量が12.5kgある。当資料は単に長方体でなく、表面は平面になるが、裏面の長軸と短軸の両側にはえぐりが造られ、使用の際に互いに嚙合う造作になっている。灰色を呈するものが45点あり、１点だけは褐色をおびる。

B類　A類と組み合わせて溝の蓋に使用されたもので、その厚さや大きさは共通するが、その造り方については若干ことなる。第54図２の表面は短軸の両側にえぐりが造られ、裏面の長軸の両側はA類と同じになっている。試みにA類に接合すると合致した。蓋として使用する場合はそれぞれが交互に敷設されていたとみられる。

※ａ・ｂは破片からすると、その形状が類似しているため判別がつきにくく、ａ、ｂのいずれかの破片46点が出土した。

C類　下駄の様に二本の歯を一面につけたもので、表面にも側面側にえぐりがつくられている。５点検出されて、きわめて少ない量である。第54図４がそれである。

D類　完全形はないが、四方形をなすものとみられるもので表面と裏面が互い違いの関係でえぐりをつくっている。64点出土し、赤色が26点、灰色38点となる。

E類　方形をなす群で、その厚さで大まかに三種に細分される。総数(片)341点。

E_a　一辺が25～26cmのもので、その厚さが４～５cmの当群では最も厚いものである。E_b　一辺が24～25cmのもので、その厚さが４～８cmにあり、中程度の大きさをなすものである。

E_c　破片で検出されているため、その大きさは現在呈示できないが、その厚さが５～９cmの極めて薄いものである。

※その厚さで、大まかな出土量をみると、E_a133点、E_b1185点、E_c23点となっている。むろん、部分的に厚い場合も考慮されるので傾向としておさえておく。

F類　平面形が三角形をした資料である。第55図10、11当資料も前記のE類と同じく、その厚さと大きさと関係してその大小があるものと思われるが完全形にめぐまれず、今後の資料の追加で再検討したい。

不明破損品として 104点の破片がある、量的には赤色59点、灰色62点となる。

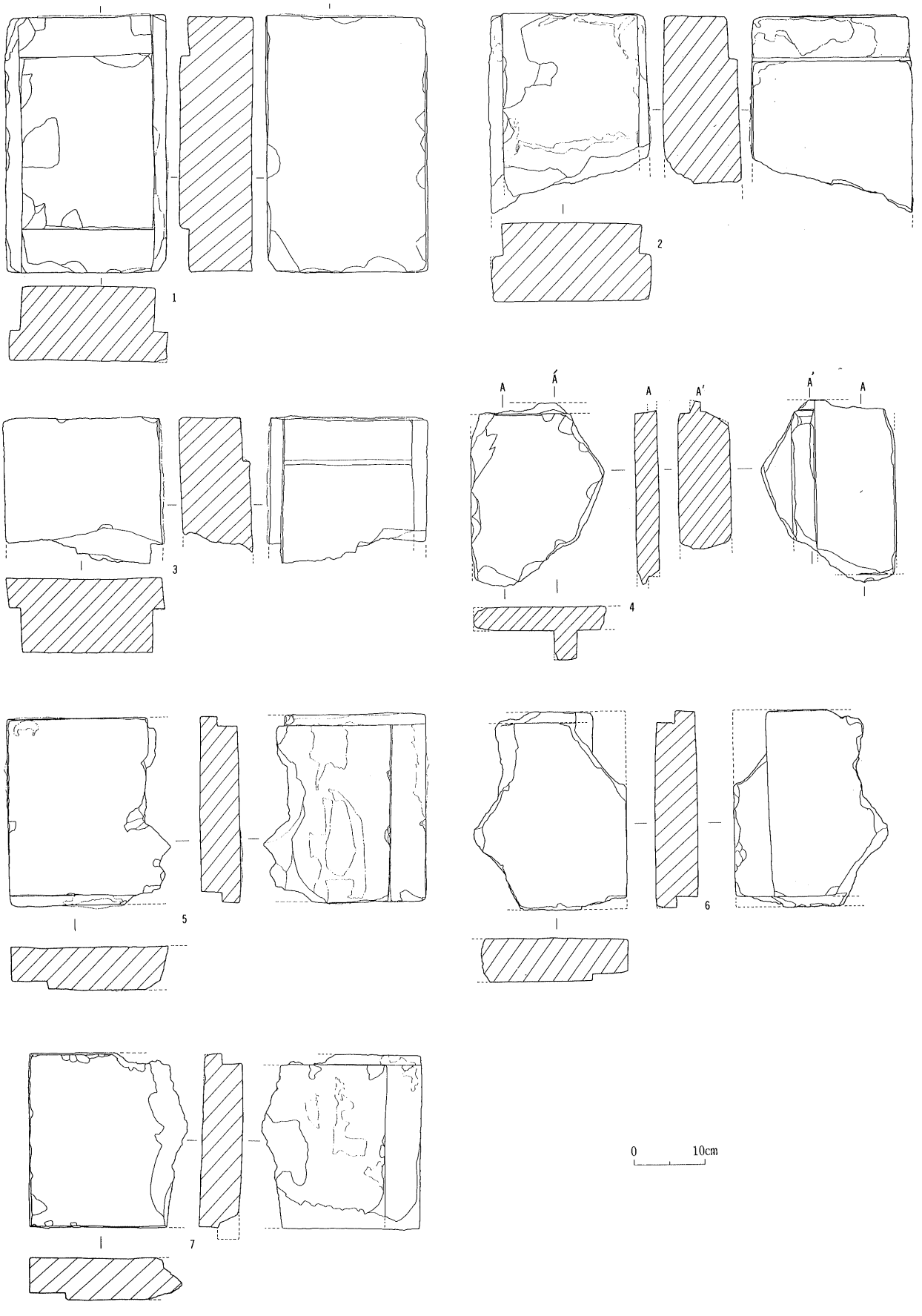
レンガ

62点検出された。本類は大まかに二種に分けられる。第55図８は薄手のもので厚さ3.6cmを測る。大きさは完形品がなく、不明ではあるが、幅10cm、残存長22.3cmを呈する。第55図９、12は厚手とするもので厚さ5.9cm、幅10cm、長さ21cmをなす。

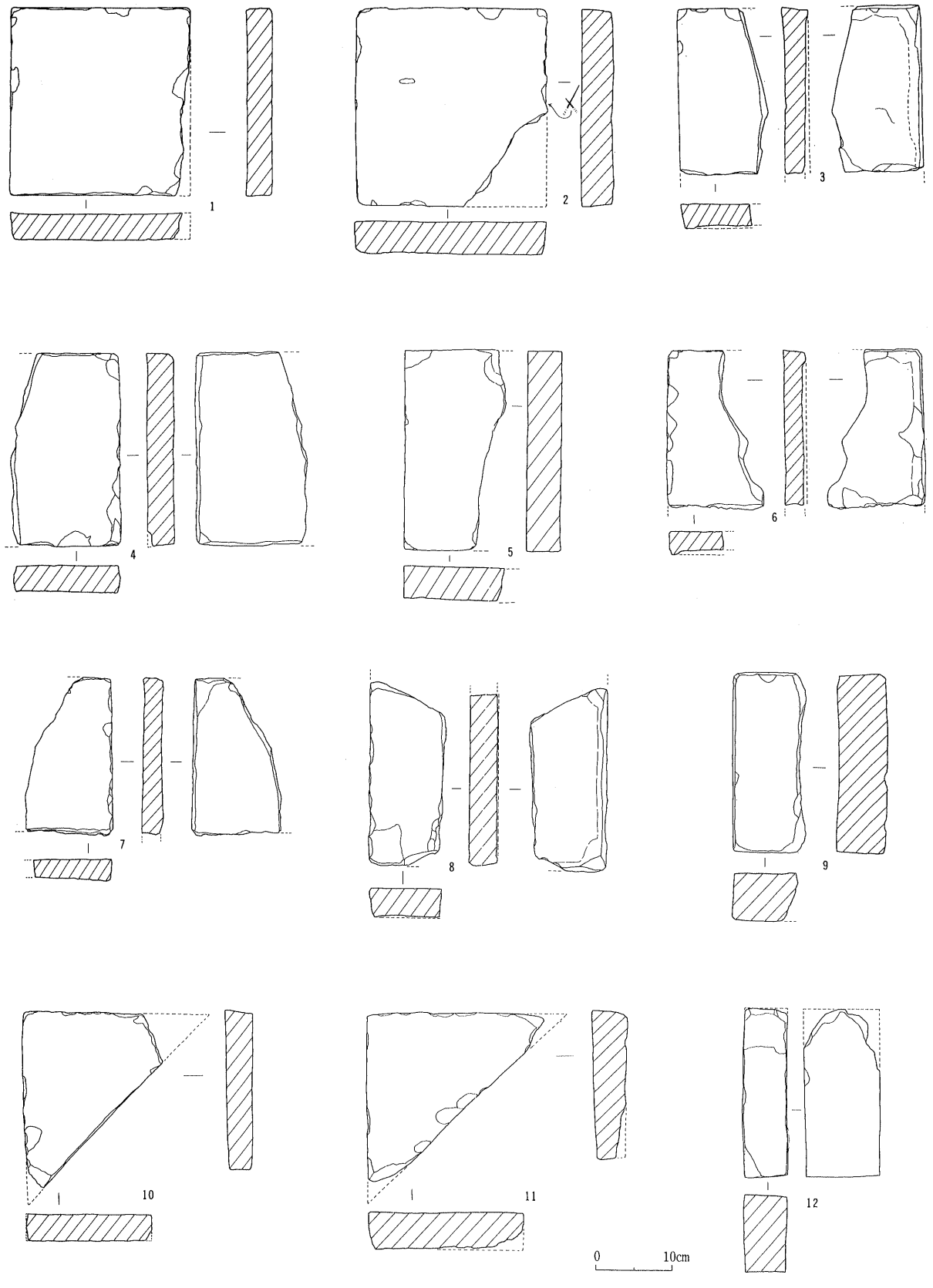
塼観察一覧表

（法量cm）

挿図	残存長軸	残存幅	残存厚	出土地点	色調、その他の特徴
第54図－1	34.95	22.45	10.35	表土層	灰褐色
2	27.0	21.0	10.5	〃	灰色シックイ付着
3	19.95	22.4	9.9	〃	灰褐色
4	23.9	18.4	7.2	〃	灰色
5	25.6	22.8	5.6	〃	赤褐色
6	27.1	21.2	5.9	〃	内部暗褐色　外表黒色～暗灰色
7	23.9	22.2	5.65	〃	赤褐色
第55図－1	24.2	23.8	3.4	表土層	赤赤色
2	25.55	25.5	4.2	〃	灰色
3	21.5	11.8	2.95	Dトレンチ	赤色
4	24.9	14.45	3.6	表土層	灰色
5	26.15	13.3	4.45	〃	灰色
6	20.25	12.7	2.55	Dトレンチ	赤色
7	20.4	11.65	2.9	〃	赤色
8	24.0	10.1	3.65	表土層	全体にシックイが付着する。
9	23.35	9.6	6.3	Eトレンチ	赤色　〃
10	22.85	18.7	3.5	表土層	赤色
11	21.65	23.5	4.65	Cトレンチ	灰色
12	21.75	9.95	5.85	Dトレンチ	赤色



第54図　塼



第55図　塼

第11節　金属製品

製品の用途からみると、家屋、家具など木造部に使われたもの、武器、武具に関係するもの、趣好品、調度品、台所の調理具などの家具などがある。個別にみるとその種は豊富で、角釘、鉄鏃、煙管、鎧の金具類、その他の小金具、下ろし金具、なべ等の取手金具、取手付きひしゃく製品などとなっている。以下略記する。

a　角釘（第56図１—11）

その多くが腐食が著しく図にたえうるものがないが、僅かに保存のよいものを10例図化した。ただしそれでも完全形をなすものは１例のみである。素材は図11は真鍮で他は鉄である。形態は名の示すとおりその断面が四角形をなし、頭部で折れるもので、その身や頭部の大きさから大まかに４群にグループ分けしてみた。ａグループは３・11のもっとも細身のもの、ｂは次のクラスで４・６・８である。ｃはさらに次のもので２・５・７がある。最後に大形のもので１・９・10がある。

角　釘　計　測　表

（法量　cm）

第56図	全長（残存長）	幅　（残存幅）	完　欠	出　土　地　点
1	5.4	1.4	欠	盛土整地
2	5.35	1.3	〃	Ｂトレンチ
3	4.5	1.3	〃	盛土整地
4	4.8	1.3	〃	Ｈトレンチ第Ⅳ層　0～10cm
5	4.7	1.1	〃	Ｂトレンチ
6	5.5	1.1	〃	Ｌトレンチ第Ⅱ層　10～20cm
7	4.0	0.9	〃	Ｈトレンチ第Ⅳ層　10～20cm
8	3.9	1.1	〃	Ｈトレンチ第Ⅳ層　0～10cm
9	2.8	1.1	〃	Ｌトレンチ第Ⅱ層　10～20cm
10	3.0	0.7	〃	Ｂトレンチ
11	4.7	0.5	完	Ｄトレンチ

b　鉄鏃（第56図15）

一例出土している。腐食が進行しているが、ほぼ完形品である。刃は平刃形式をなした有軸製品である。身長さ全長８cm、茎の長さ3.4cm、刃縁幅1.4cmを測る。現重量20ｇ。

c　煙管

三例得られた。第56図12は破損しているが接合可能な資料で、全長14.7cmを測る。吸い口とたばこ受け部分以外は一応に偏平になっている。管の欠損部断面が観察され、内部に木製の管が施され貫通していたものである。外器には錆が付着しているが、わずかに残るメッキから金の塗料が付いていたものとみられる。保存状況はたばこ受け部分側の背面上は叩きによりいびつな凹がつくられている。これは長い使用によってできたものである。同図13、14は吸い口部分のみを残すものである。前者は吸い口は丸いが導管部

側はその断面が六角形になる細工がなされている。残存長7.1cm後者は破損が著しいが、前者とまた異なり管が残されている範囲で丸く造られている。残存長6.8cm、この二つの資料は青錆が付着している以外、その他の塗料は見られない。

d　鎧の金具類（第56図16～21）

鎧の部材と考えられるものである。16は鞢である。平面形が舟形をしたもので中央に二孔つくられている。青錆がみられるが金のメッキが一部に残されている。断面でみると中央でやや折れ曲がりがある。最大長36㎜、最大幅10㎜、最大厚3.5㎜、重量0.5ｇ、孔径5.5㎜。　17、18は飾りものにあたるもので、17は透かし彫りがみられ、表面には細かい叩きによるものとみられる模様がある。金メッキがされている。20も同様のもので、飾り部分の末端部にはめられるものとみられる。V字の切込み様の加工がなされている。18は止め具とみられるもので、芯は二つに割れる。円頭部の径1.5㎜、芯長19㎜。19は菊の花状にあしらった金具で、中央に一孔穿たれている。21は両端を対称的に四角錘に加工した断面が四角の釘状製品である。素材が真鍮とみられる。全体に青錆が認められる。なおこの細かい棒状製品は一応に垂直にならず中央部で若干ずれる様に加工されている。

e　その他の小金具

22は針金状の製品で断面が丸く。その先端が丸く整形されている。保存が悪く折れ曲がり、他方の一端は破損のため不明であるが、簪状の製品と思われる。23はU字状に加工されたもので、その間には止め具の施しがあるところから、何らかの皮ないし布状の製品を止める金具である。アルミ製品である。全体に青錆が付着している。

f　下ろし金具（第68図１）

外観状がはご板の様な形状をしている。下ろし上面にはたがねにより、細かいサメ肌状のトゲが全面に施されている。そのトゲは横位に24条確認できる。下ろし部の両側の縁は若干垂直に折り曲げがつくられ、ものがこぼれないようにできている。取手部分の先端部に一方向から穿った孔がある。下ろし部と取手部の境にたがねにより商品銘とみられる辰の字が彫られ、またその側に毛筆により「オム」の字が入っている。

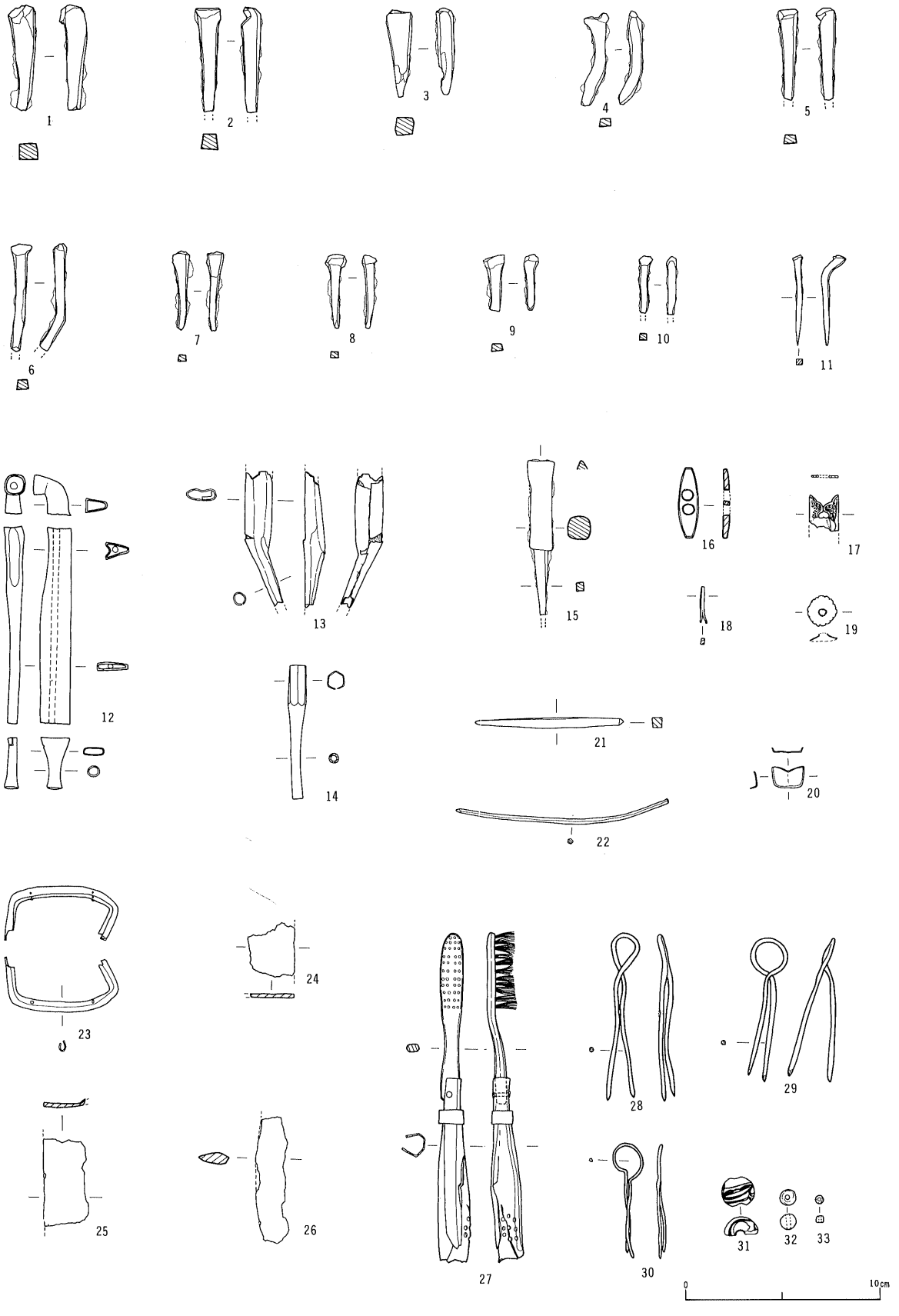
g　取手金具（第68図２、４）

前者は断面がU字状の金属を用いたもので、元の形状を残し弓状になっている。両端はかぎになるように細く丸く折り曲げられている。鍋の取手であろうか。

後者の資料は取手部分を残し受ける部分が大きく破損している。受けの底部から推定すると図の様になる。かなりの重量とその作りから調理用具ではなさそうである。

第12節　骨製品

素材が骨からなる製品を総称するもので用途の明確なものが歯刷子、かぎ編針、裁縫用ヘラの三種類があり、その他に器種不明のものからなる。



第56図　角釘１～11、煙管12～14、鉄族15、鎧の金具類16～21、棒状製品22、金具類23～26、プラスチック製品27～30、玉31～33

a　歯刷子

形状、大きさに若干の変化があるものの、第57図１の資料の存在から、これら製品は歯刷子であることが明らかになった。10点得られている。その内全体の形状を残すのは４点、ブラシ側や柄側が大きく欠損しているのもが６点になる。これらは各部位により数種のタイプに分類されるが、ここではブラシ部や柄部を含めて全体が扁平でその断面形が扁平楕円形をなすAタイプと、ブラシ側から柄部にとくに厚みがみられるもので、その断面形も半円形ないし台形、略三角形状をなすBタイプの二つのグループに分けてみた。後者のBタイプはさらにブラシ部の平面形が略長方形、略楕円形、なすび形に分けられる。また柄部の末端をみると剣先状、半円状をなすものに区分できる。身全体観ではブラシ部から柄部にいたるまでほぼ直線状のものと、そりを入れたものがある。ブラシの植え込み部の孔にも幾種かみられるが、まずは、長軸に沿ってみて三条あるものと、四条施すものがある。素材は金子浩昌氏の同定により牛骨と判定された。

その登場について第57図１の銘のあるライオン株式会社に問い合わせた結果、その骨製の歯刷子については昭和２年から24年まで製作し、その後は石油科学製品の開発でプラスチック製品が生産されているとされる。骨を素材としたその背景については、消毒時の耐熱性から選択されたという。またその生産地は大阪とされる。それは原料が近くで入手が容易であったからだとのことである。その素材は牛骨であるとの教示をえた。以上の認識にたつと、会社銘のない製品もその素材の耐用年数を考慮すると、また共伴関係をみると、その製作年代も前記資料の時期と大体差がないものと考えられる。

骨製歯刷子の計測表

方量（cm）

第57図	全長（残存長）	ブラシ全長（残存長）	残存幅 ブラシ部	残存幅 頸部	残存幅 柄部	残存厚 ブラシ部	残存厚 柄部	出土地点	その他
1	15.7	3.85	0.95	0.65	1.2	0.55	0.6	Cトレンチ	柄の部分にライオン歯刷子、二號形と文字がある。
2	13.3	3.85	1.1	0.45	1.0	0.5	0.75	Eトレンチ	
3	5.59	3.9	1.15	0.55	——	0.5	——	表土層	★同一個体と思われる。
〃	8.65	——	——	0.55	1.25	——	0.75	Dトレンチ	青銅製、骨の表面がわずか青味を帯びる。柄部一部破損
4	14.3	3.25	1.15	0.5	1.1	0.6	0.75	Eトレンチ	ブラシ部一部破損
5	12.7	3.7	1.0	0.5	0.9	0.5	0.65	Eトレンチ I層	青銅製、骨の表面が青味を帯びる
6	4.8	3.1	0.89	——	——	0.4	——	Bトレンチ	柄部より頸部まで破損、ブラシ部一部破損
7	2.45	1.5	1.1	——	——	凹 0.1 / 凸 0.25	——	表土層	ブラシ部一部だけ残っている。
8	9.1	——	——	0.65	1.1	——	0.55	Bトレンチ	ブラシ部破損
9	10.5	——	——	0.6	1.25	——	0.8	Bトレンチ	〃
10	8.55	——	——	0.6	0.9	——	0.55	Eトレンチ	〃

b　かぎ編針

第57図11の一例がある。細い棒状に加工した骨に研磨を加え、その一方の端を棒状にし、さらにその先端部に切込みを入れ、鉤状の返りを細工したものである。他方の先端は欠損している。製品は全体に手ずれが観察され、また光沢を有する。

c　裁縫用ヘラ

第57図14、15、16の三例がある。一部欠損しているものもあるが、全体観が青龍刀形をしたものである。刃部と柄の部分からなるもので、これらは身の大きさが大小二種類ある。いずれも刃部の作りは、両面の内一方の面を扁平に仕上げ、片刃状にしてある。この製品も極めて入念な研磨がなされ、また手ずれのためか光沢がある。その素材は牛骨である。

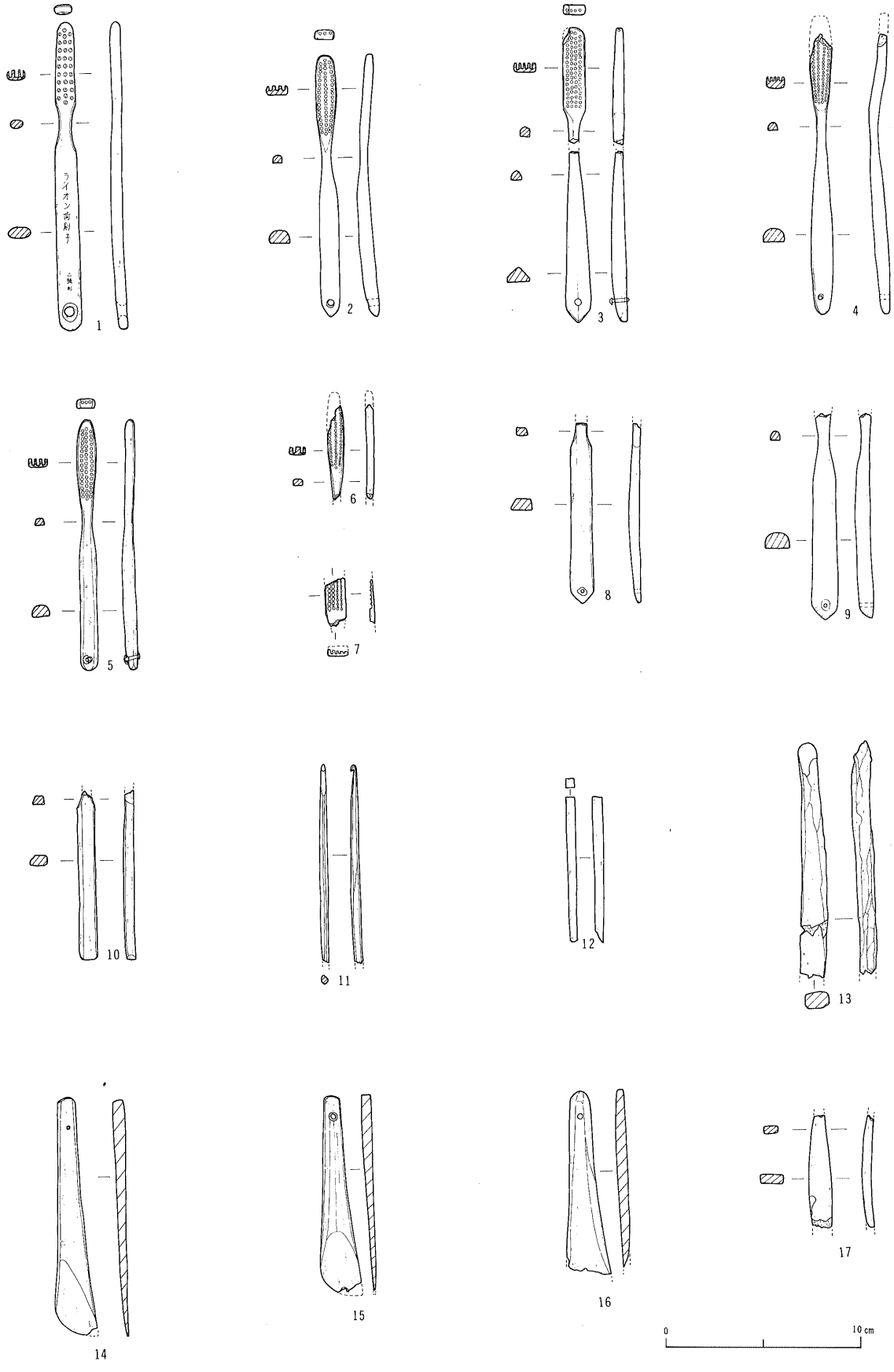
d　器種の不明製品

第57図12、13、17の三例である。どれも破損部が大きいため、その用途が不明のものである。同図12は簪状に徐々に一方側に太くなるもので、細くなる側で欠損している。その断面は四方形をし、器面は光沢がある。同図17はそりがみられる製品の一部である。全体に丁寧な研磨がなされ光沢を有する。同図13はこれまでのものとは異なり、半製品の状態をしている。しかし手ずれがあり長時間の使用が窺える。

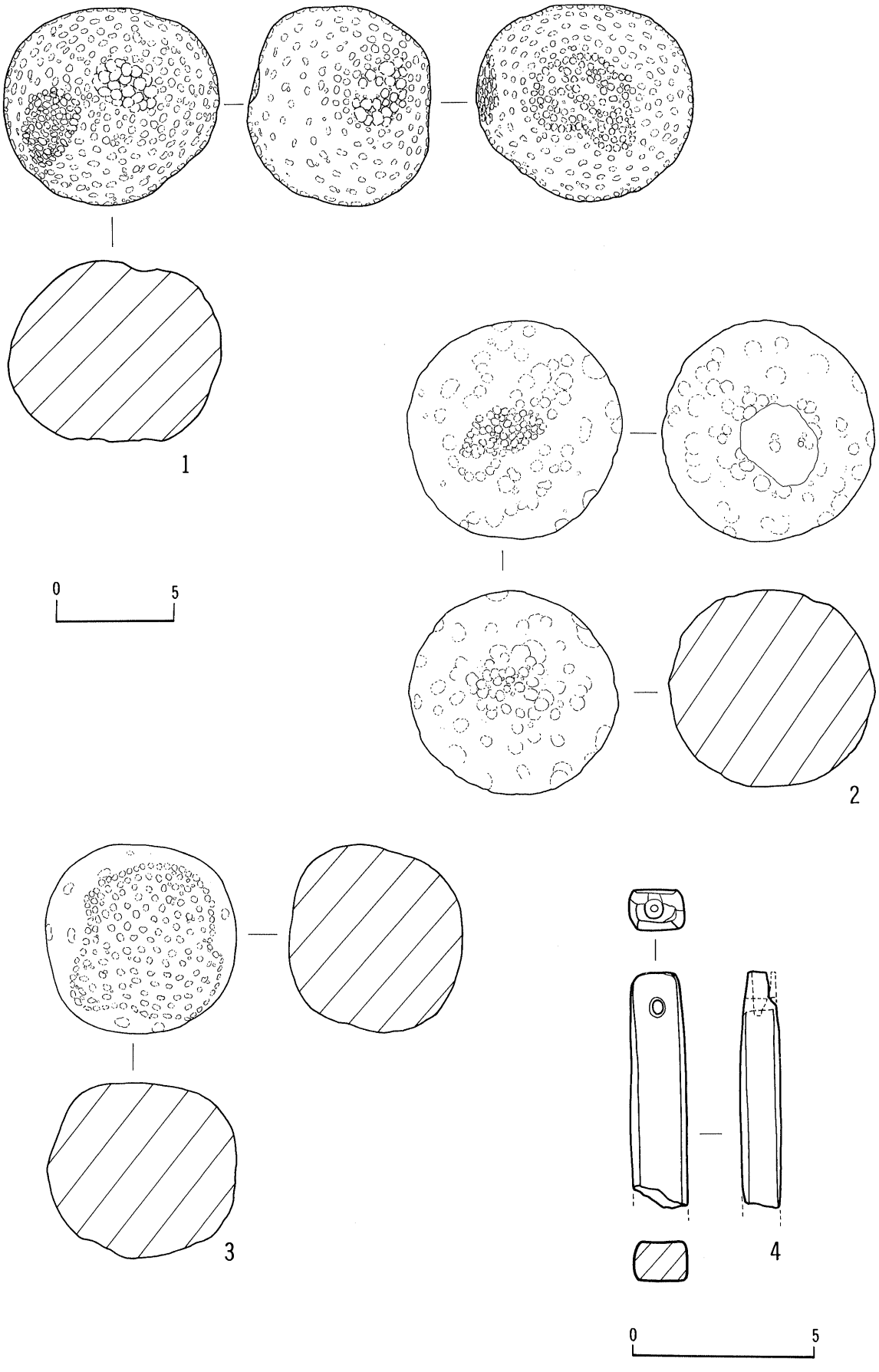
第13節　石製品

a　石球（第58図１～３）

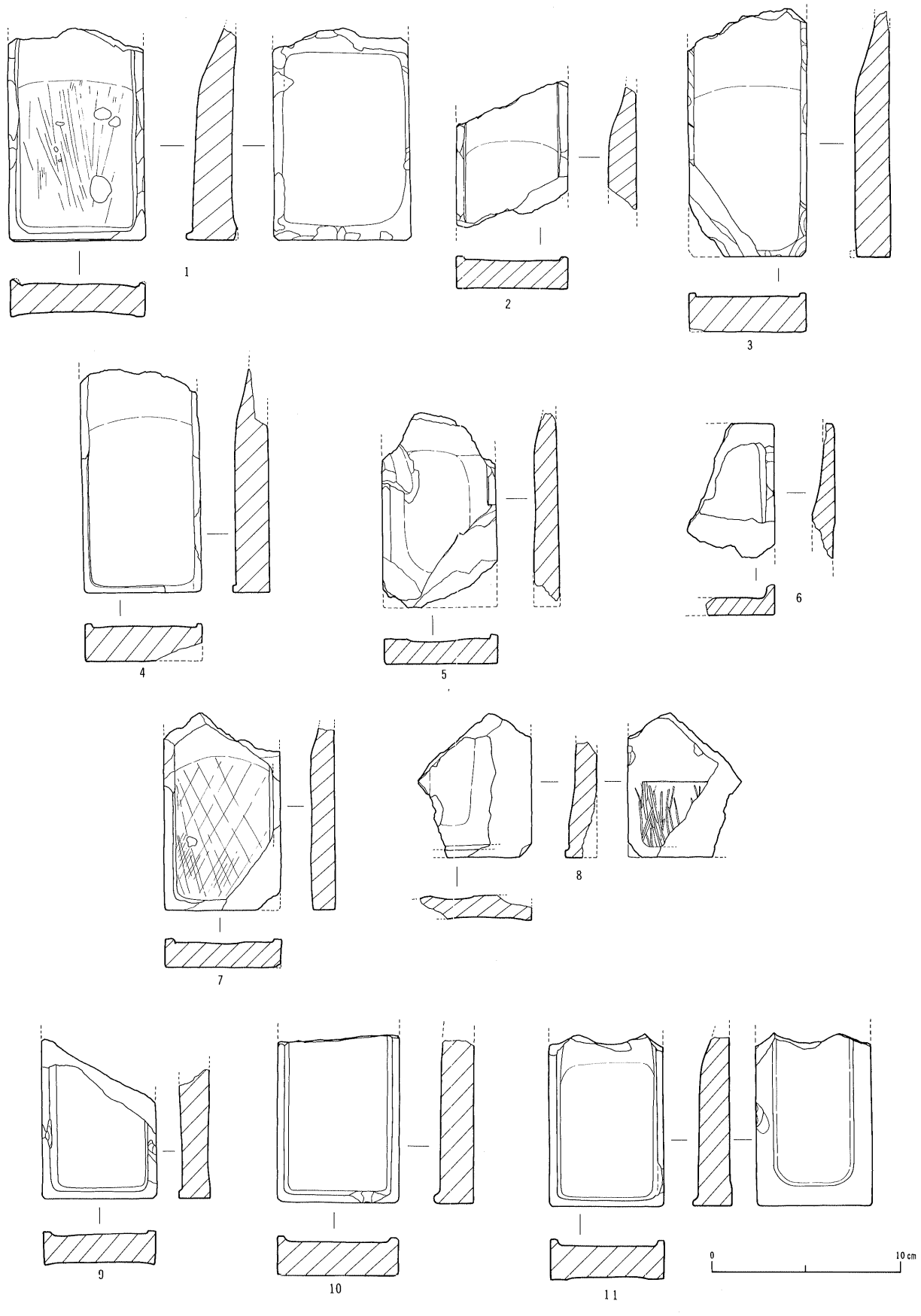
細粒砂岩を球状に加工したもので三例検出している。直径が最小7.4cm、最大9.15cm、重量最小712ｇ、最大820ｇとほぼ平均した大きさをしている。器面はところどころに整形時の敲打痕が覆い、その細かい整形がなされたことが知られる。その用途は球形を呈していること、またその大きさが一定していること、手のひら大という大きさなどの状況から、玉突状の遊具ないし石弾のごとくみられるが、今のところその決め手はない。今後の資料の蓄積をまって検討したい。



第57図　歯刷子１～10、かぎ編針11、棒状製品12、13　ヘラ14～16　　その他17



第58図　石球１～３、砥石４



第59図　硯

b．護符状石製品

断面が1.5cm×1.65cmの細い棒状製品で、半分から欠損している。残存部の端部には表裏面に貫通する孔と、頭頂から連結する孔がある。器面は砥磨がなされ手触がスムーズである。なお、表面は平面であるに対し裏面はやや湾曲を呈する。両側面も同様に曲面をおびる。石質は砂岩。残存重量20ｇ。

石　球　　法量（cm，ｇ）

第58図	最大直径	最小直径	重　量	石　質	備　考
1	9.15	7.75	810	細粒砂岩	
2	9.05	8.90	820	〃	
3	8.00	7.40	712	〃	

c　硯

完形品はなくすべて破損しているが12例得られている。破損箇所が共通して墨汁を受ける部分が大半占めている。これはもっともその部分が器厚が薄いために起因しているものと思われる。残存する部分からではあるが、その大きさに違いが認められ、大きくは３種類に分けられる。形態的特徴は裏面が単に平面をなすもの、大きな窪みをつくるもの、ゆるやかな窪み面をつくるものなどがある。使用された度合をみせる資料もあり、第59図８は台の中央部が長い研ぎによってできた窪みである。素材には粘板岩、グラニュール岩、黒色頁岩の３種ある。

硯　　法量（cm）

第59図	長さ(残存)	幅(残存)	厚み(残存最厚)	石　質	出土地点	色　調	備　考
74	8.4	6.1	1.6	粘板岩	Dトレンチ	灰紫色	裏面に文字のようなひっかききずが有る
〃	10.5	6.3	1.3	〃	盛土整地層	灰紫色	表面になめ方向にひっかききずのようなもの入る
75	9.2	6.1	1.9	グラニュール岩	盛土整地層	灰　色	ウンモ・長石・板岩片を含む（人工混合物）？
〃	8.9	6.5	1.8	〃	東側排水溝	灰　色	
76	7.8	6.0	1.5	粘板岩	盛土整地層	灰紫色	1/3ほど残る
〃	7.2	不　明	1.3	〃	歓会門表層	灰紫色	1/4ほどの遺物
77	11.2	7.2	2.4	〃	盛土整地層	灰紫色	
〃	13.0	6.3	1.8	黒色頁岩	Eトレンチ	灰黒色	裏面
78	11.0	6.3	1.8	〃	盛土整地層	灰黒色	
79	10．4	6.1	1.4	粘板岩	Bトレンチ	赤　色	縁部にわずかな赤色
80	7.6	6.1	1.5	〃	盛土整地層	灰紫色	裏面に削って段をつけている

d　石碑

石碑は破片ながら５例出土している。その内４例は文字がある板状碑で、残る一つは石碑の台石である。文字の残りがよい３例は判読可能であり、いずれも別個体で、龍樋の水を賞するために建立された石碑類の一部である。戦前まで在った７基の中の３基が確認されたわけである。

第60図１は縦位置にある石碑の破片である。頭頂部の形状は両脇の角を取り、丸く整形している。表面の中央には「源」とその右に「道光戊戌」がみられ、それから以下が次落している。しかし、これら状況から林鴻年書の「源遠流長・道光戊戌中秋」の碑であることは明らかである。石質は粗粒砂岩。大きさは幅45.4cm、厚さ10.4～11.0cm。

同図２は石碑の研磨された側面部破片で、縦位に五文字が確認される。文字が判読、戦前の拓影の比較した結果から「霊脈流芬・同治丙寅季秋、木容城趙㊞、滄江千㊞㊞㊞」の文の円印をした部分であることが確認できる。石質は粗粒砂岩。石の幅12.8cmを測る。

同図３は石碑の研磨された表側のみ残った小破片で、器面上の文字は判読できない。おそらく大形の文字の一部と考えられるが、破片が極めて小さいため、何れの碑の残欠か不明である。石質は粗粒砂岩である。

第61図１は横位置にある石碑である。石碑の頭縁と側面は平坦に整形され、下縁部は幾分円く加工されている。台石部に接合していた下縁部の深さは８cmを測る。検出されたものの中で、最も大きい破片で、文字自体も大きく、横位に「飛泉」、その右横上に縦位から「道光戊戌季秋」と判読される。これらのことから、「飛泉漱玉」碑文の右半分が検出されたことになる。石質は粗粒砂岩。石碑の大きさ、高さ66.4cm、厚さ12.4cm。

同図２は部分的欠損がみられるが、全体の形状をよく残した石碑の台石である。石碑の建つ上面とその縁部に研磨がなされ平面をなしている。その他の面は研磨はみられず粗面になっている。ただしその面も風化し粗い稜線はみられない。さらに、研磨された上面には石碑の差し込み穴が存し、それにそのまま石碑の根元が残存している。その根石の大きさ35.4×12.7cm、孔の大きさ、37.2×14.2cmを測り、縦位置にあった石碑であることが知られる。その石質は粗粒砂岩で、台石は縦103cm、横128cm、高さ65cm、石灰岩である。

e　礎石、その他

第61図３は四方形の礎石で、上面は丁寧に研磨され平坦面に整形してある。大きさは長軸最大45.7cm、短軸最大42.0cm、厚さ最大25cmをなす。石質は粗粒砂岩。

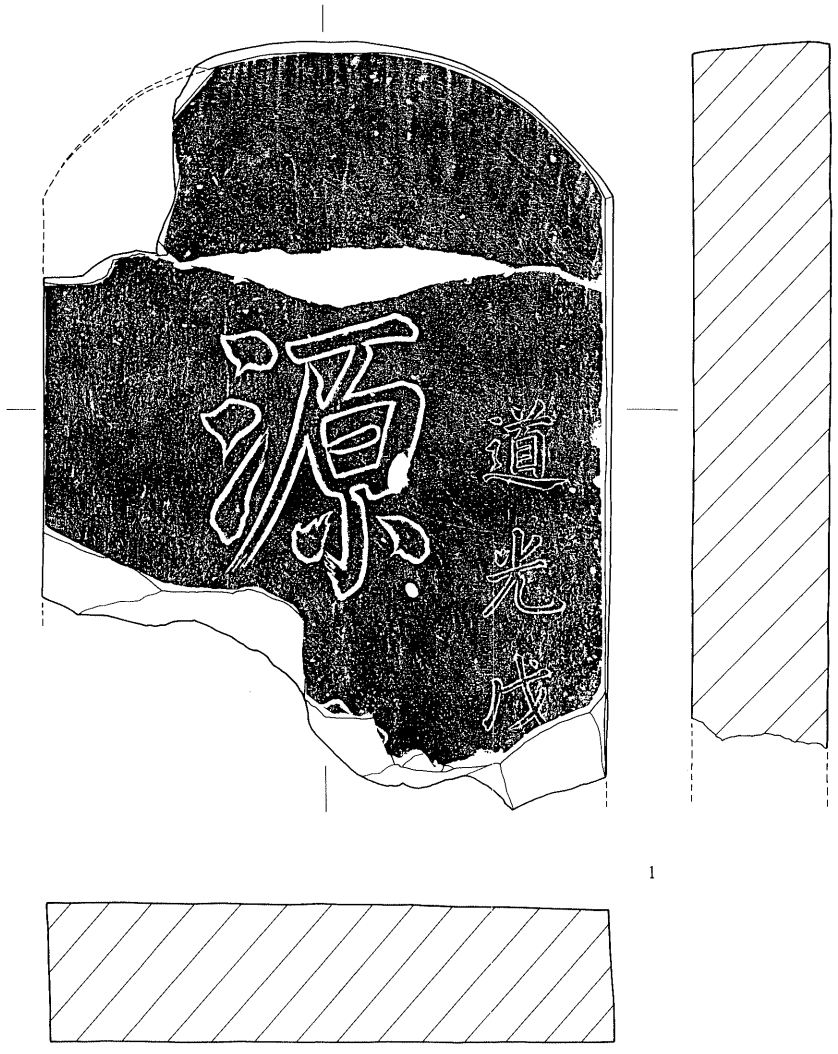
同図２は長方形をした石碑の台もしくを礎石と思われる板状の製品である。長軸の一辺が大きく欠損している他は、元の形状を残している。端軸の中央から側面よりに貫通する長方形の穴が穿たれている。大きさは92×70cm、厚さ21cm、孔の大きさ、18.3×11.0cm。また大きく欠落している側縁部に径12.2cm、深さ3.4cmの窪みがある。石質は粗粒砂岩。

f 樋

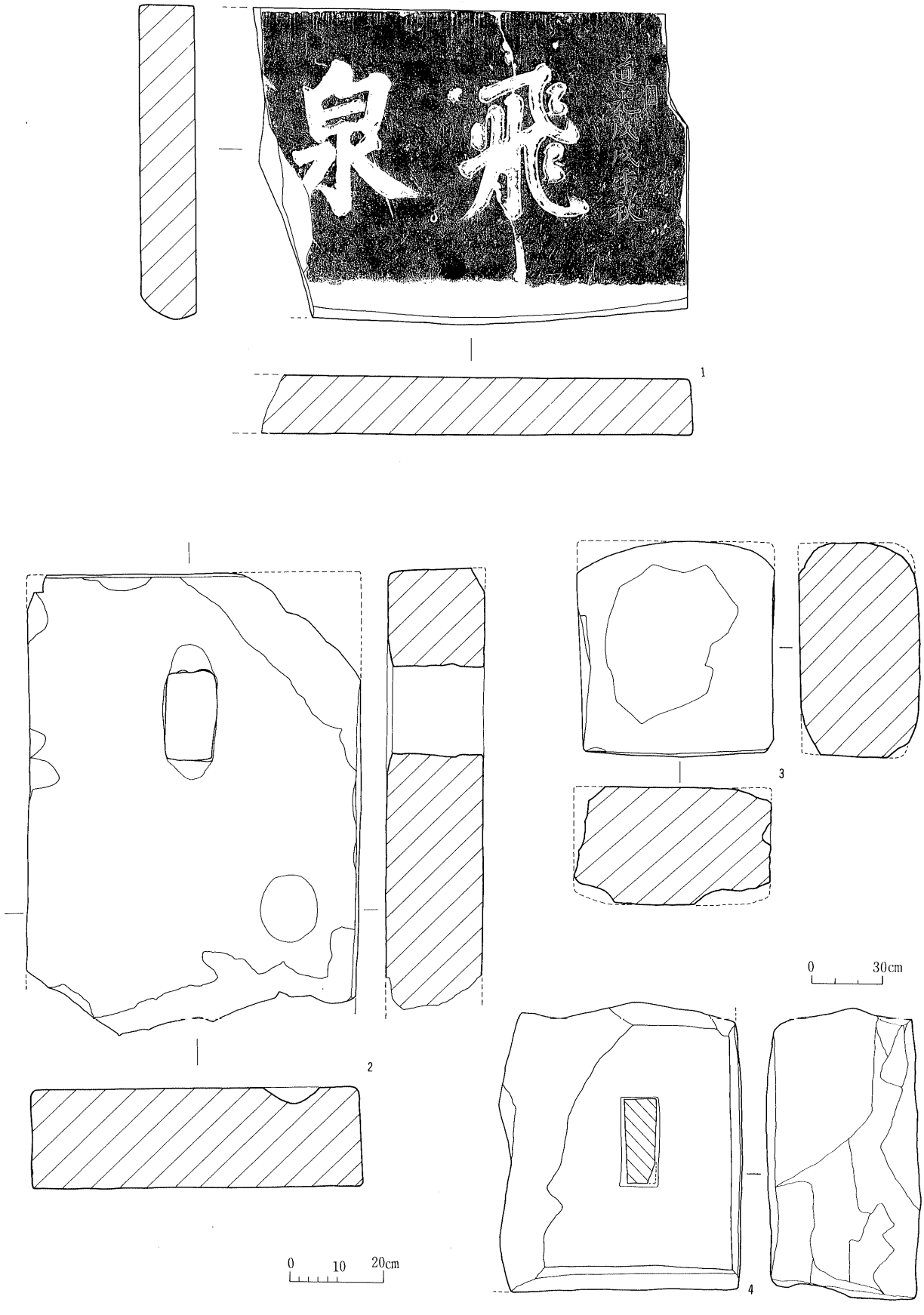
龍泉から当地区の南側にある土留石垣の裏を通り、久慶門下の石畳下まで敷設されている石製の樋である。形態上、溝部の違いは殆どないが、素材の幅に大小ある。材質は全て凝灰石で、整形のノミ痕が表面を覆っている。ノミ痕の幅を計測すると1.15cmあった。

第62図１、２は材の幅が細い類で、いずれも完形ではないが、端部が閉じられたものである。材の幅12.5cm、高さ15.0cmを測る。溝は長軸に沿って彫られ、U字状を呈している。溝幅21.5cm、深さ12.8cm。この類は補修のセメントが部分的に付着し、長年の使用が窺える。

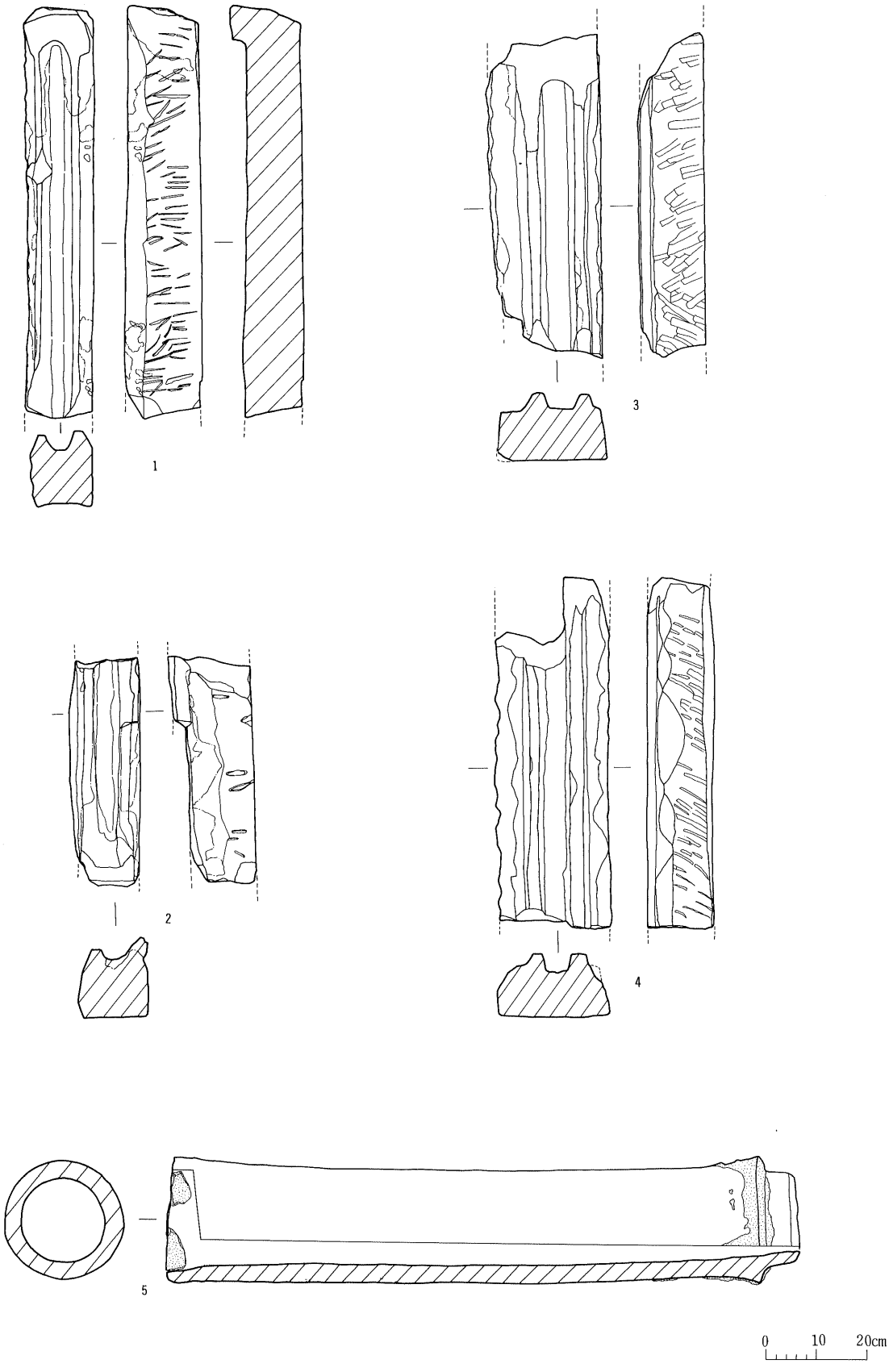
同図３、４は前記資料に比べ幅が厚いもので、幅21.5cm、高さ12.8cmをなす。溝は材の中央には彫られず、一方に偏ってなされている。また溝の幅は若干広くなり、幅6.6cm、深さ2.9cmを測る。溝の断面は方形に近い。



第60図　石碑



第61図　石碑１、礎石類２・３、石碑の台石４



第62図　石製樋１～４、土管５

第14節　動　物　遺　存　体

金　子　浩　昌

A．脊椎動物

本地域で出土した動物遺存体中特に脊椎動物については、魚類13種、爬虫類１種、鳥類２種、哺乳類10種が検出されている。これらは首里城域におけるものである。しかし、別項でも述べられているように、本地域が度重なる造成により、かなりの攪乱を受けており、動物骨もまたその時代性を確認し難いといわれている。従って、ここでは検出して動物骨についての詳述はさけ、その一覧表を提示するに止めたいと思う。ただ、確かにこうした後世の様々な攪乱があるとはいえ、これらの動物骨には筆者がこれまでみてきたグスク出土のものに共通した内容をみることができる。おそらく今後、ここに提示した資料の中に、グスク時代の食生活あるいは人と動物との関わりを知り得るものとして、再認識されていくものがあるのであろう。これからの比較検討を待ちたい。

資料整理に当たり、県教育委員会の上原静氏から種々の御教示を得た。

a．魚　類

サメ類以下10数種が検出されているが、グスク出土の資料としては数量的に少ない。おそらくこれは調査地域の特殊な位置によるのであろう。ベラ類、ブダイ類、ハマフエフキダイの多いのは他のグスク遺跡とも共通する。

b．爬虫類

ウミガメ類は目立った出土ではなかった。しかし、断片的ながら出土しているのは、当時の食糧残滓の一部であったと思われる。アオウミガメと同定される骨も含まれる。

c．鳥　類

ニワトリを主として出土している。各地のグスクからのニワトリの出土は多い。また大型の遺骸もこれまでに知られている。本遺跡出土のニワトリはそれらと一致する。

d．哺乳類

イルカ類の出土は一般に少ない。イヌは完存する骨はなかったが、下顎骨、四肢骨が出土している。グスクからの出土は一般に多く、石器時代犬よりもやや大きくなった体型の種類である。検出されたイヌも同様のものである。

ジュゴンは、石器時代遺跡及びグスクからは常に知られる獣類である。今回も少数であったが出土しており、頭蓋片もあった。おそらくグスク時代のものであろう。

イノシシの骨は多数検出されている。これもグスクにおいて一般的である。おそらく野性のものが捕獲されたのであろう。今回の調査ではブタと思われる四肢骨を検出している。イノシシと比べて、大きさ、形質が異なる。このような骨格の標本は、これまでのグスク調査では出土例がない。おそらく後世の混入であろう。

ウシは最も多くの骨を出土した。これもグスクにおける特徴である。多くの骨は打ち割られ、調理・食用に当てられたことを示している。出土した骨は大部分が成獣のものであるが、乳歯も僅かに含まれる。生後３才位までの個体であろう。中型のウシである。

ウマはウシに比べると少ない。これも食用に供された痕跡を示している。小型から中型のウマである。

以上の他にネコ、ヤギの骨も検出されている。ネコについては他のグスクでの出土例はあるものの、その量は多くない。今回の検出もやはり少ないが、グスク時代のものとする確証に乏しい。ヤギについても確証を得るに至っていない。

首里城歓会門・久慶門内側出土の脊椎動物遺存体出土量表

1　魚　　類

部位	ベラ		ベラ科Ⓐ		ベラ科Ⓑ		ブダイ		ナンヨウブダイ	ナガブダイ	クロダイ	ヨコシマクロダイ	ハマフエフキ	フエダイ	ハ　タ	アナゴ類	サメ類
	前上顎骨 L R	上咽頭骨 L R	前上顎骨 L R	上咽頭骨 L R	前上顎骨 L R	上咽頭骨 L R	前上顎骨 L R	上咽頭骨 L R	上咽頭骨 L R	上咽頭骨 L R	前上顎骨 L R	前上顎骨 L R	前上顎骨 L R	前上顎骨 L R	前上顎骨 L R	前上顎骨 L R	(メジロザメ科)
調査区（層序）	歯骨 L R	下咽頭骨	歯骨 L R	下咽頭骨	歯骨 L R	下咽頭骨	歯骨 L R	下咽頭骨	下咽頭骨	下咽頭骨	歯骨 L R	歯骨 L R	歯骨 L R	歯骨 L R	歯骨 L R	歯骨 L R	椎体
一括	3 / 1			1		1	1 / 2 1		1	2			2 / 1				
B．I層	1						2 2		1				1				
B 西側排水									1								
D．III									1								
H．I 層	1						1						1 / 1		1 1		
H．III 黒褐色層								1					1		1		
H．IV層	1 1												1 / 1				
L．II層	1 1 / 1 2	1					2 / 1 4	1	1	1		1	1 2 / 2	1 2	1 1		
L．III層								1									
M．I層 石畳下											1 / 1		1		1		
寒川南壁 内側トレンチ							1										
不明								1	1							1	1
小計	5 1 / 2 5	1		1		1	5 4 / 3 5	5	2 5 / 1	3	1 / 1	1	2 6 / 1 6	1 2	1 / 3 2	1	

2．爬 虫 類

ウ ミ ガ メ 類

部位 調査区 (層序)	R・L・不	縁骨板片	肋骨板片	肩甲骨	前烏口骨	尺骨	指骨	細片
一括	R L 不						1	
H. Ⅶ	R L 不						1	
L. Ⅱ	R L 不	1	1	0300	1	1000	2	1
合 計	R L 不	1	1	0300	1	1000	4	1

アオウミガメ

部位 調査区 (層序)	R L 不	肢骨 P完Sd
L. Ⅲ層	R L 不	0100

2） キ ジ バ ト

部位 調査区 (層序)	R L 不	上腕骨 P完Sd
一 括	R L 不	0100
合 計	R L 不	0100

3．哺乳類

1） ネ ズ ミ

部位 調査区 (層序)	R L 不	大腿骨 P完Sd
H. I層	R L 不	00①0
合 計	R L 不	00①0

3、 鳥 類

1） ニ ワ ト リ

部位 調査区 (層序)	R・L・不	肩甲骨 P完Sd	上腕骨 P完Sd	尺骨 P完Sd	中手骨 P完Sd	大腿骨 P完Sd	脛骨 P完Sd	中足骨 P完Sd	烏口骨 P完Sd
一 括	R L 不		0100 00①0			0001	0001 00①4	1000 1000	
A. Ⅲ層	R L 不	0100							
B. I層	R L 不		0100 0001	0100 0200	0100	1001	1002 11①0	0100	1000
B. 1号遺構中込の	R L 不							0100	
G	R L 不						1000		
H. I層	R L 不		0001 0001	0001		1000			
H. Ⅲ層	R L 不						0001		
H. Ⅳ層	R L 不						1001		
H. C. 黒褐色土 層	R L 不							0001	1101
L. Ⅱ層	R L 不	0100	0002	0001		00②0 01①0	1000	0100 0101	1000
L . 50 / 60	R L 不		1000			2000			
M. I. 石畳下	R L 不		1000				2000		
旧石畳 トレ井戸	R L 不					1000			1000
東排水溝	R L 不		1000						
合 計	R L 不	0200	0201 20①4	0100 1202	0100	20②1 31①1	1005 21②4	1200 1202	2000 2101

2） イ ル カ 類

部位 調査区 (層序)	腰椎 P完Sd
一 括	1
L. II層	5
合 計	6

3） イ ヌ

部位 調査区 (層序)	R・L・不	脊椎骨 頸椎	肩甲骨 P完Sd	尺骨 P完Sd	上腕骨 P完Sd	橈骨 P完Sd	脛骨 P完Sd	踵骨 P完Sd	中足骨 P完Sd	中手骨 P完Sd
一 括	R L 不		0100	0100	0010			0100		4
D. III層	R L 不						0100	0100		
H. I層	R L 不		0100							
L. II層	R L 不	2	0300 0300			0100	00①0		3	
合 計	R L 不	2	0400 0300			0100	01①0	0200	3	4

4） ネ コ

部位 調査区 (層序)	R L 不	上腕骨 P完Sd
H	R L 不	0001

イヌ の 歯 牙 類

一括　　RP^4 4個
Hトレンチ　一括　L$\underline{C}$1個
Hトレンチ　VII層　L$\underline{C}$1個
Lトレンチ　II　　R$\underline{C}$1個、L$\underline{C}$1個、R下顎骨

5） ジュゴン

部位 調査区 (層序)	R L 不	頭蓋片	椎体	椎体突起	肋骨	中手 中足骨 P完Sd	破片
一 括	R L 不	1	1				
H. IV層	R L 不				1		1
L. II層	R L 不			1	1	1	
合 計	R L 不	1	1	1	2	1	1

6） ウ マ

部位 調査区 (層序)	R・L・不	上腕骨 P完Ⓢd	橈骨 P完Ⓢd	中手骨 P完Ⓢd	踵骨 P完Ⓢd	距骨 P完Ⓢd	中足骨 P完Ⓢd	膝蓋骨	指骨 基節	指骨 中節
一 括	R L 不	0001	0001	1000 0001	0100	0200	00①0	1	1	1
B	R L 不								1	
D. Ⅲ層	R L 不			 0001						
L. Ⅱ層	R L 不	0001	00①1				0001		1	
L. Ⅲ層	R L 不						0100			
旧石垣 地 区	R L 不		0100	0100 0100 0001						
合 計	R L 不	0001 0001	00①2	1100 0100 0001	0100	0200	0100 01①1	1	3	1

ウ マ の 歯 牙 類
Cトレンチ 上顎歯１個
Hトレンチ Ⅳ層 下顎歯１個
一 括 下顎歯１個

7） イ ノ シ シ

部位 調査区 (層序)	R・L・不	脊椎骨 環椎	軸椎	頸椎	胸椎	腰椎	肩甲骨 P完Ⓢd	上腕骨 P完Ⓢd	橈骨 P完Ⓢd	尺骨 P完Ⓢd	寛骨	大腿骨 P完Ⓢd	脛骨 P完Ⓢd	踵骨 P完Ⓢd	中手骨	中足骨	基節	肋骨	仙骨
一 括	R L 不		1		3	1		0100 0100	0200 (１幼) 0200	1幼000	1		01①0				1		
B. Ⅰ層	R L 不	1		1				0001						0100					
B. 灰層下	R L 不					2												1	
B. 1号 遺構中 込め	R L 不												0100						
C	R L 不							0100	0200			0100							
H. Ⅰ層	R L 不	1		1					0100	0100		0100	0100	0100 0100			1		1
H. Ⅲ層 黒褐色	R L 不	1												0100		2			
H. Ⅳ層	R L 不									0100									

G	R L 不							00①0										
L. II層	R L 不					2		01①3 0201 00①0	02①0	0200	00②0	00①0	01②0 0100 00①0	0100	7	3		
L. II層 50/60	R L 不	1																
寒川南壁 門側トレ II層	R L 不												00①0					
合 計	R L 不	4	1	2	3	5		03①3 0302 2	0400 (1幼) 03①0 2	1000 (幼) 0600	0200	00①0 0100	03②0 02②0 1	0100 0400	9	5	1	1

イノシシ の歯牙類

一 括		上顎骨R１個、CL１個
Bトレンチ	西側排水溝	RC̄♂１個
Hトレンチ		
	IV層	LC̄♀１個
Lトレンチ	II層	LC̄♀１個、下顎骨L１個

8） ブ タ

部位 調査区 (層序)	R L 不	肩甲骨 P完Ⓢd	上腕骨 P完Ⓢd	橈骨 P完Ⓢd	尺骨 P完Ⓢd	脛骨 P完Ⓢd	距骨
一 括	R L 不	0100	0001	00①0	0100		1
C	R L 不			0100	(?)	0100	
H. I層	R L 不					0100	1
L. II層	R L 不		0001		0100	0100	
合 計	R L 不	0100	0001 0001	01①0	0200	0100 0200	2

ブタ の歯牙類

一 括		$RM_2$１個
Aトレンチ	一括	下顎骨R１個
Bトレンチ	一括	下顎骨R１個
	西側排水溝	$RM_3$１個
Hトレンチ	I層	下顎骨L１個
	IV層	$RM_3$１個

9） ヤ ギ

部位 調査区 (層序)	R L 不	橈骨 P完Ⓢd	脛骨 P完Ⓢd	後頭顆
一 括	R L 不		0100	
B. I層	R L 不			1
L. II層	R L 不	0001		
合 計	R L 不	0001	0100	1

10)　ウ　シ　－①

部位 調査区 (層序)	R・L・不	角	岩骨	下顎枝	脊椎骨					肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨
					軸椎	頸椎	胸椎	腰椎	椎体	P完Ⓢd	P完Ⓢd	P完Ⓢd	P完Ⓢd	P完Ⓢd
一　括	R L 不			1	1	3					0003 0010			0101
A	R L 不													0001
B	R L 不								1					
B. Ⅲ層	R L 不													
B. 灰下層	R L 不													
B 東側排水溝内	R L 不			1										
B 西側排水溝内	R L 不			1										
C	R L 不													
D. Ⅲ層	R L 不													
H. Ⅰ層	R L 不		1 1								0001			
H. Ⅱ層	R L 不													
H. Ⅲ層	R L 不		1											
H. Ⅳ層	R L 不			1							0002			
L. Ⅱ層	R L 不	1			1	5	6	3	5	0100	1000 0003 1	1001	0100 0400	0002 0003 1
L. Ⅲ層	R L 不										0001			
合　計	R L 不	1	1 1 1	4	2	8	6	3	6	0100	1000 0001 (1幼) 2	1001	0100 0400	0103 0004 1

ウ シ －②

部位 調査区 (層序)	R・L・不	寛骨	大腿骨 P完Ⓢd	脛骨 P完Ⓢd	距骨	中足骨 P完Ⓢd	中手、中足骨 P完Ⓢd	手根骨	仙骨	指骨 基節骨	指骨 中節骨	指骨 末節骨
一　括	R L 不	1000	10①0 (幼1)	00①0 00①1			1000 1				1	
A	R L 不											
B	R L 不											
B. Ⅲ層	R L 不				1							
B. 灰層下	R L 不		1000									
B 東側排水溝内	R L 不											
B 西側排水溝内	R L 不											
C	R L 不											
D. Ⅲ層	R L 不			00①0				1	1			1
H. Ⅰ層	R L 不		0001 (幼1)									
H. Ⅱ層	R L 不			0200 (幼2)								
H. Ⅲ層	R L 不											1
H. Ⅳ層	R L 不	1000						3				
L. Ⅱ層	R L 不		2000 0001 0100	0001 0001	1	1100 0002 1					4	3
L. Ⅲ層	R L 不											
E	R L 不				1							
合　計	R L 不	2000	3000 10①2 0100	00②1 02①2 (幼2)	1 1 1	1100 0002 1	1000 00①3	1	1		5	6

ウ シ の 歯 牙 類

一　括	RM^1 1個、RM^3 2個、LM^2 1個、LP_3 1個、切歯R 1個、切歯不明 3個
Aトレンチ　一括	RM^1 1個、RM^2 1個、RM^3 2個、LM^1 1個、切歯不明 3個
Bトレンチ　一括	RM^3 1個
Bトレ表土	LM^2 1個、切歯不明 1個
Bトレ灰層下	RP^4 1個
Bトレ東側排水溝	RM^2 1個、RM^3 1個、R下顎骨 1個
Bトレ西側排水溝	RM^3 2個、切歯不明 3個
Cトレンチ　一括	RM^2 1個、切歯不明 3個
Dトレンチ　一括	RP^3 1個、RM^3 1個
Dトレンチ　III層	Lm_4 1個
Hトレンチ　一括	Lm^3 1個
Hトレンチ　II層	切歯右左 1個
Hトレンチ　IV層	RM^3 1個
Hトレンチ　VI層	切歯右左 1個
Lトレンチ　一括	RM^1 1個
Lトレンチ　II層	RM^3 2個、LM^2 1個、切歯左右 3個
Mトレンチ石畳下	切歯右左 1個

11)　ヒ　ト

部位（層）	頭	脛骨片
表　土		1
L．III 層	1	
合　計	1	1

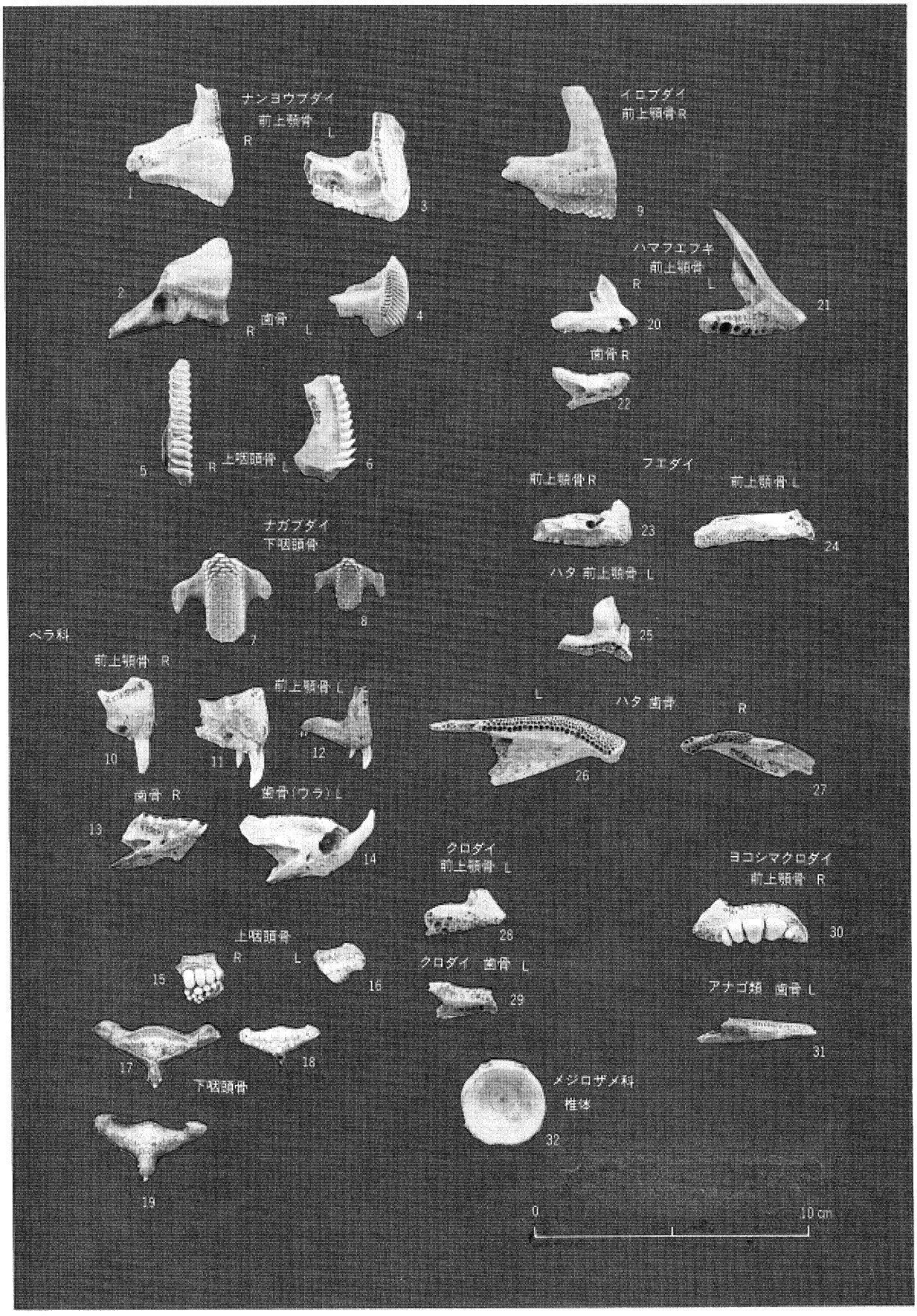
B．貝　殻

遺跡全体が、戦中・戦後の攪乱にあったためか、出土した貝類は、全体に保存状態が悪く量的にも少ない。

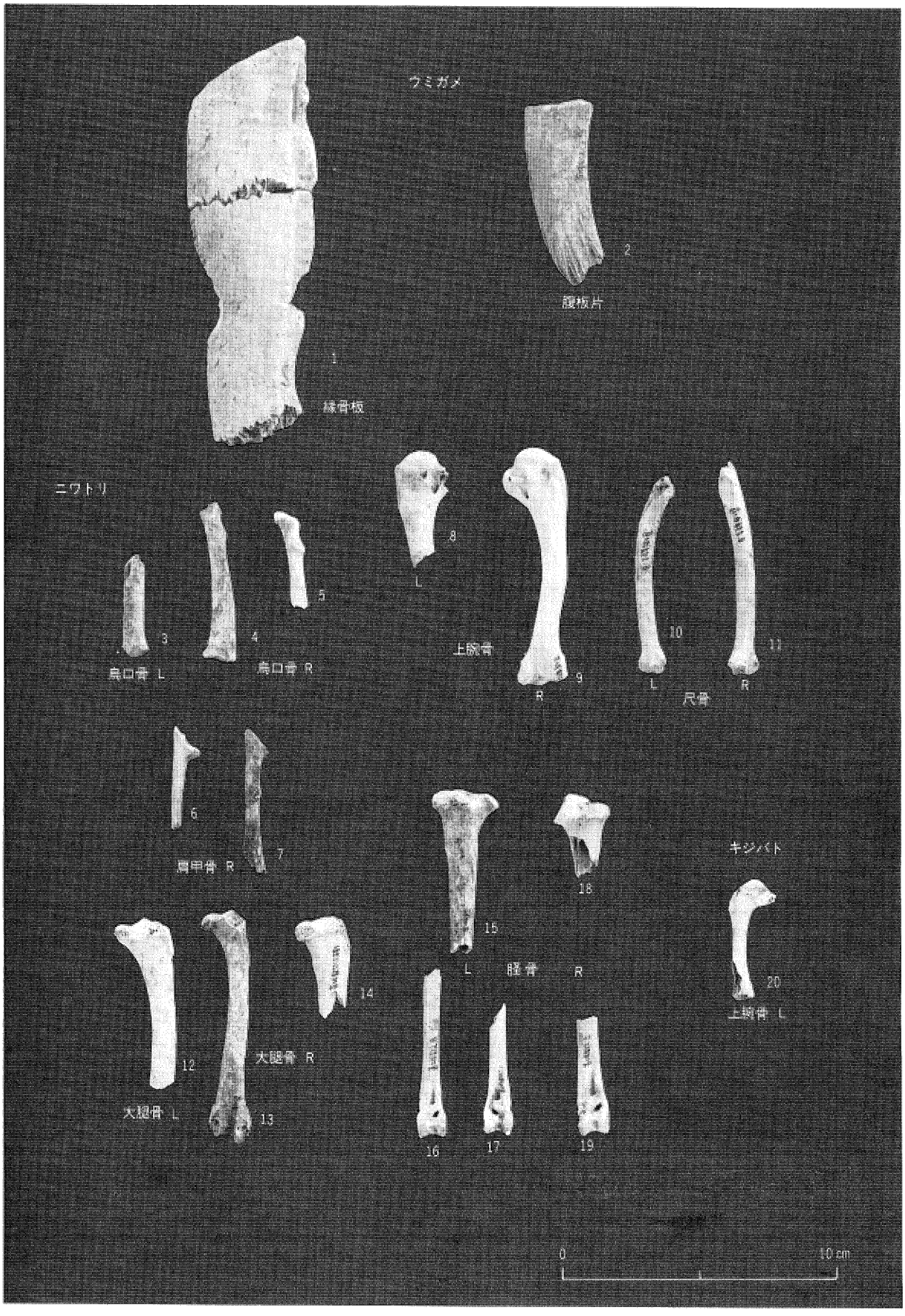
本遺跡出土の貝類遺存体の総個体数は、殻頂部残存のもので704個、総重量は81,223.5ｇで、うちわけは腹足網（巻貝）16科36種、斧足網（二枚貝類）７科17種であった。遺跡出土の貝類のうち主体となるものは夜光貝の殻およびフタで、各々の出土総数は、75個（完形品＋有頂破片）（10.6%）・99個（14%）、総重量は47,125ｇ（58.0%）・13,679ｇ（17.0%）で、双方を合わせた重量では、全体の75%にのぼり他を圧倒的に凌駕する。夜光貝の殻は、貝の性質状砕片となるものが多く、螺頭部で個体を集計するというよりも、その重量に注目したい。蓋については、一・二箇所に打撃を受けたものが多数出土しているが、人工的な加工痕はみられない。

夜光貝を出土地点別に見ると、Bトレンチで最も多く殻か64個・21,910ｇ出土し、それについでHトレンチの３個・1,628ｇであった。夜光貝の他の貝類遺存体のなかでは、アラスジケマンガイ・オキナワヤマタニシ・カンギク等が比較的多く出土している。

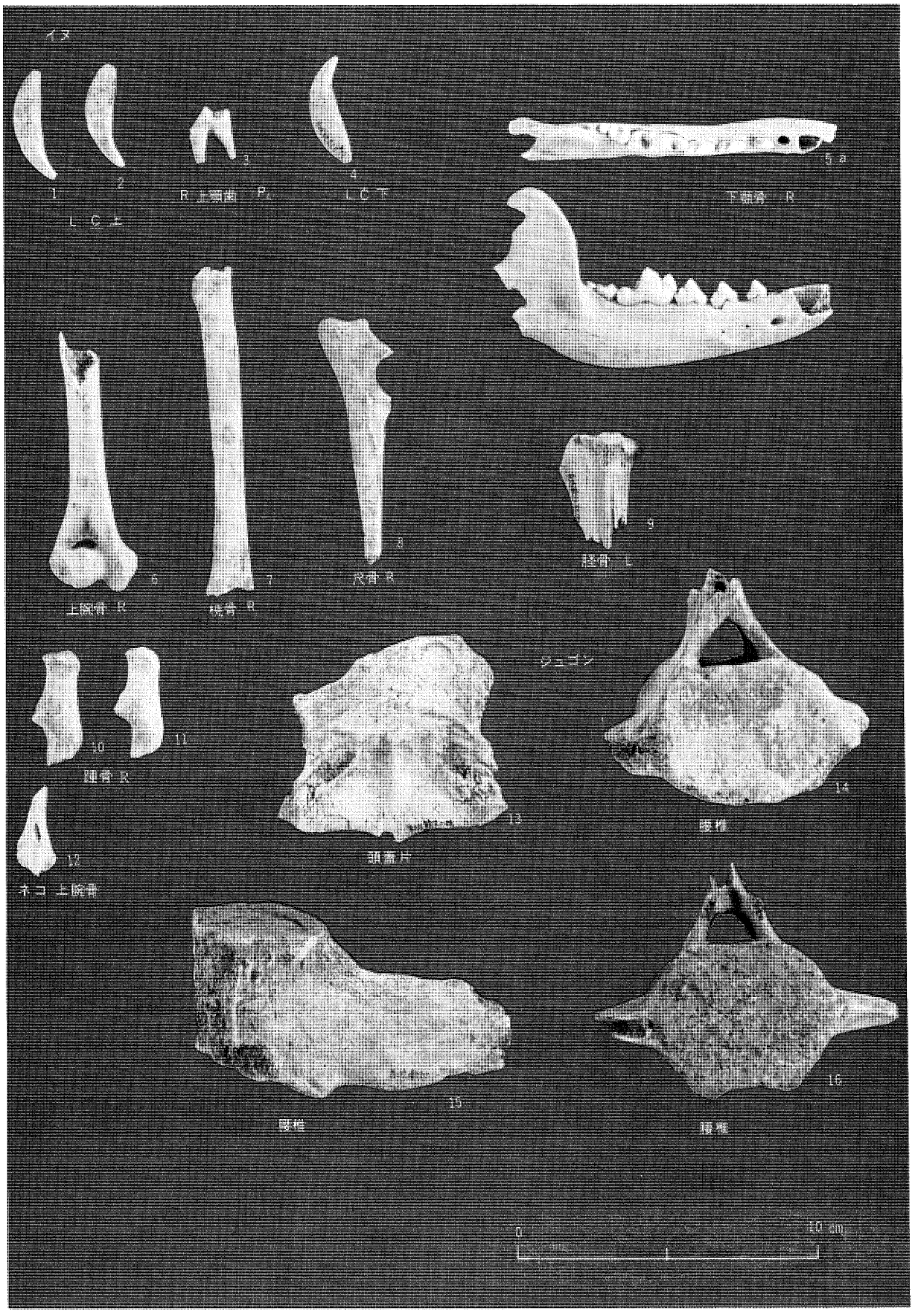
第１表は、本遺跡出土貝類遺存体種の総計を出したものである。また、第２表は、各トレンチ別に集計したものである。



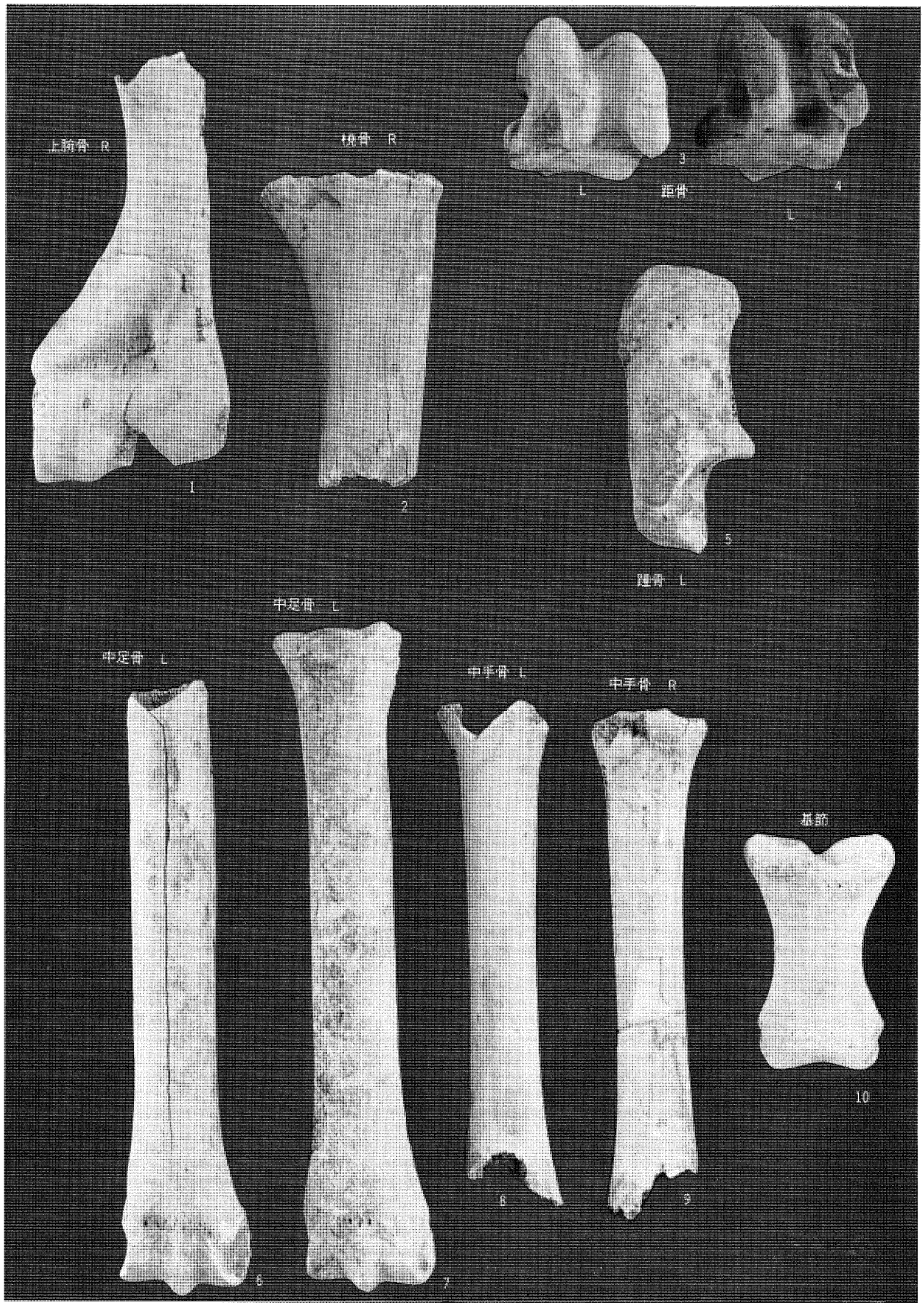
図版10　魚類　ナンヨウブダイ(1～6)、ナガブダイ(7、8)、イロブダイ(9)、ベラ科(10～19)、ハマフエフキ(20～22)、フエダイ(23、24)、ハタ(25～27)、クロダイ(28、29)、ヨコシマクロダイ(30)、アナゴ類(31)、メジロザメ科椎体(32)



図版11　ウミガメ類（1、2）、ニワトリ（3～19)、キジバト（20)

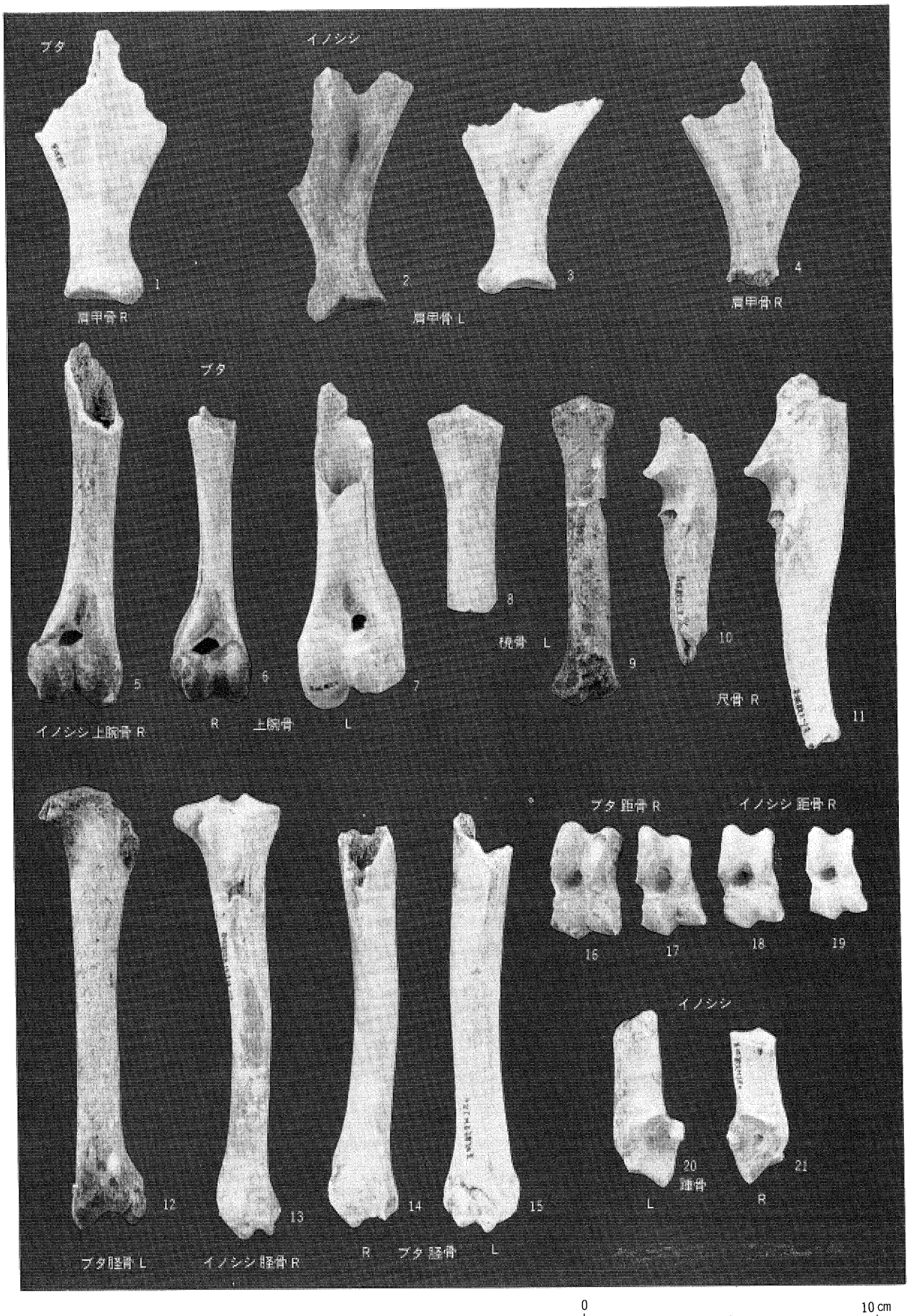


図版12　イヌ（1～11)、ネコ (12)、ジュゴン (13～16)

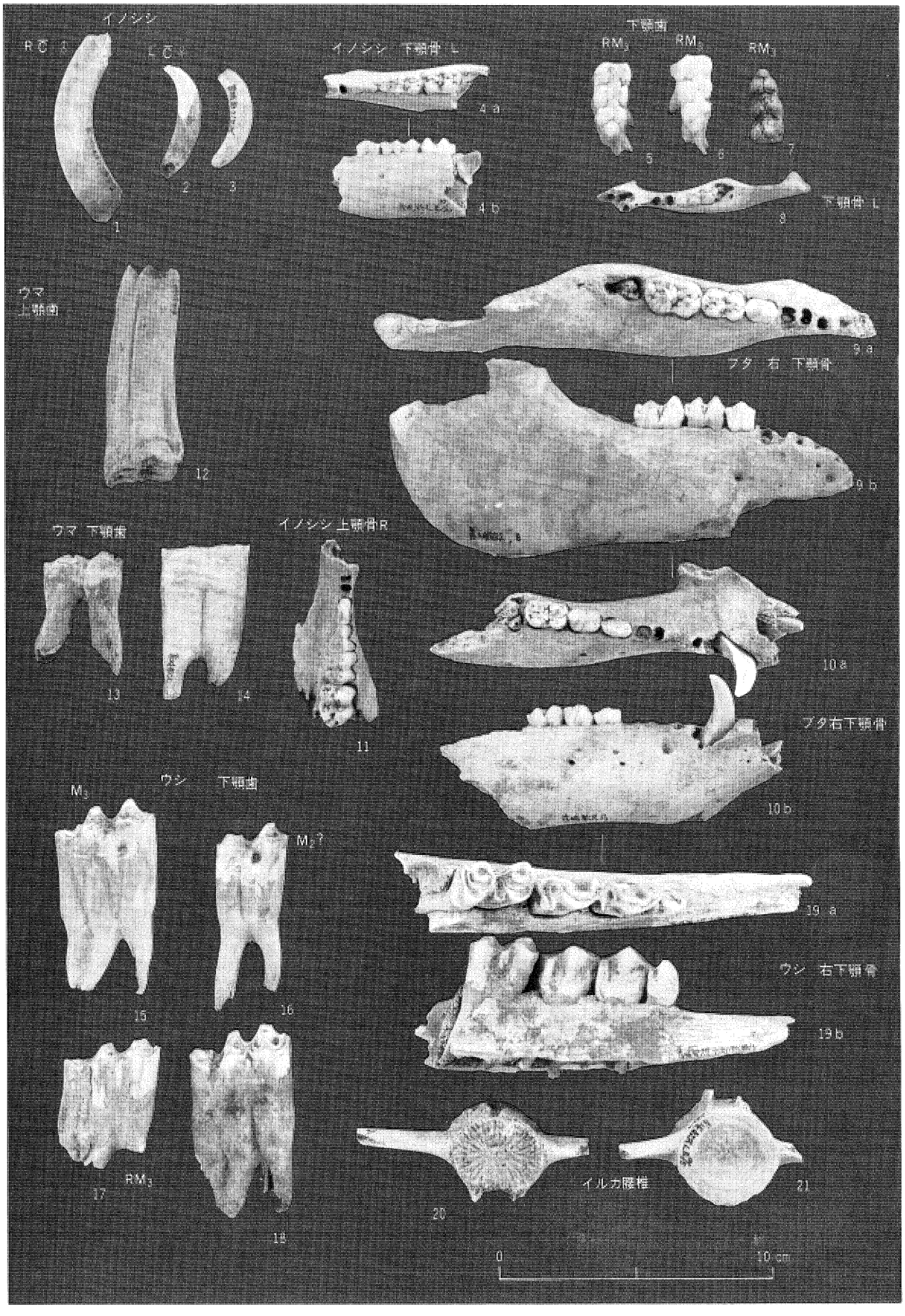


図版13　ウマ

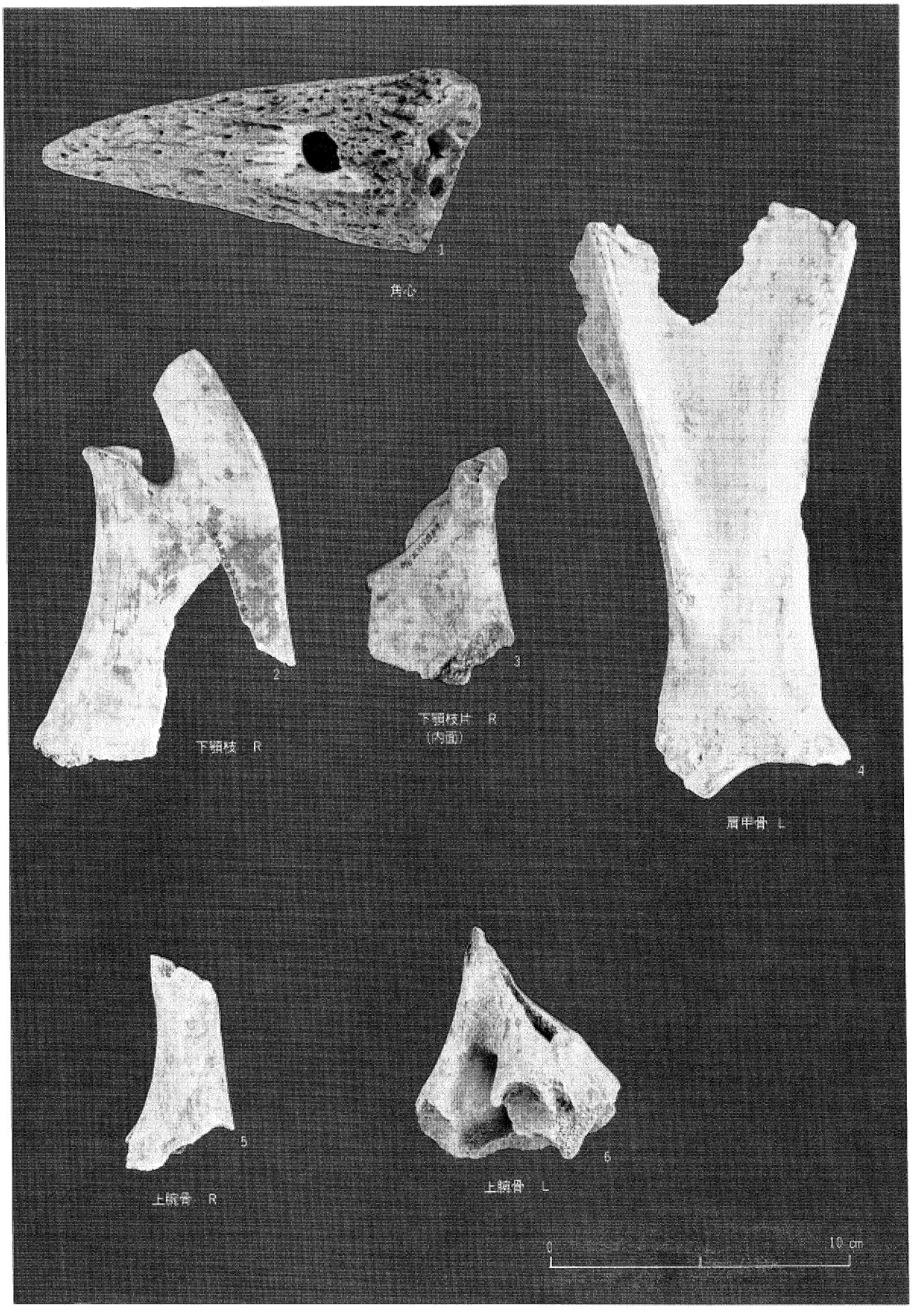
0　10 cm


ブタ
イノシシ
1
肩甲骨 R
2
3
肩甲骨 L
4
肩甲骨 R
ブタ
5
6
7
8
9
10
11
イノシシ 上腕骨 R
R
上腕骨
L
橈骨 L
尺骨 R
ブタ 脛骨 R
イノシシ 脛骨 R
16
17
18
19
イノシシ
20
21
踵骨
L
R
12
13
14
15
ブタ 脛骨 L
イノシシ 脛骨 R
R
ブタ 脛骨 L
0
10 cm

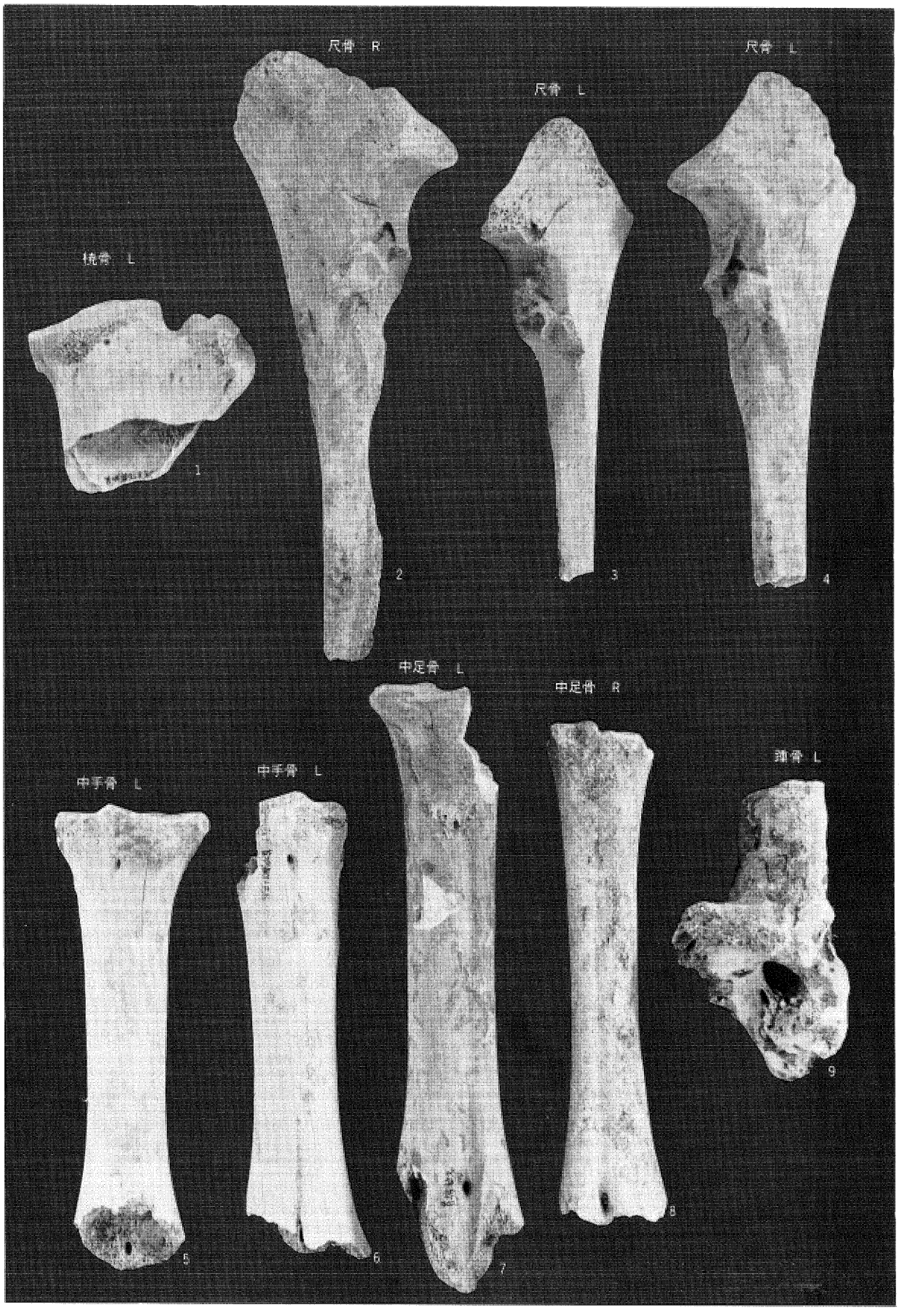
図版14　イノシシ、ブタ



図版15　イノシシ(1～7、11)、ブタ(8～10)、ウマ(12～14)、ウシ(15～19)、イルカ類(20、21)

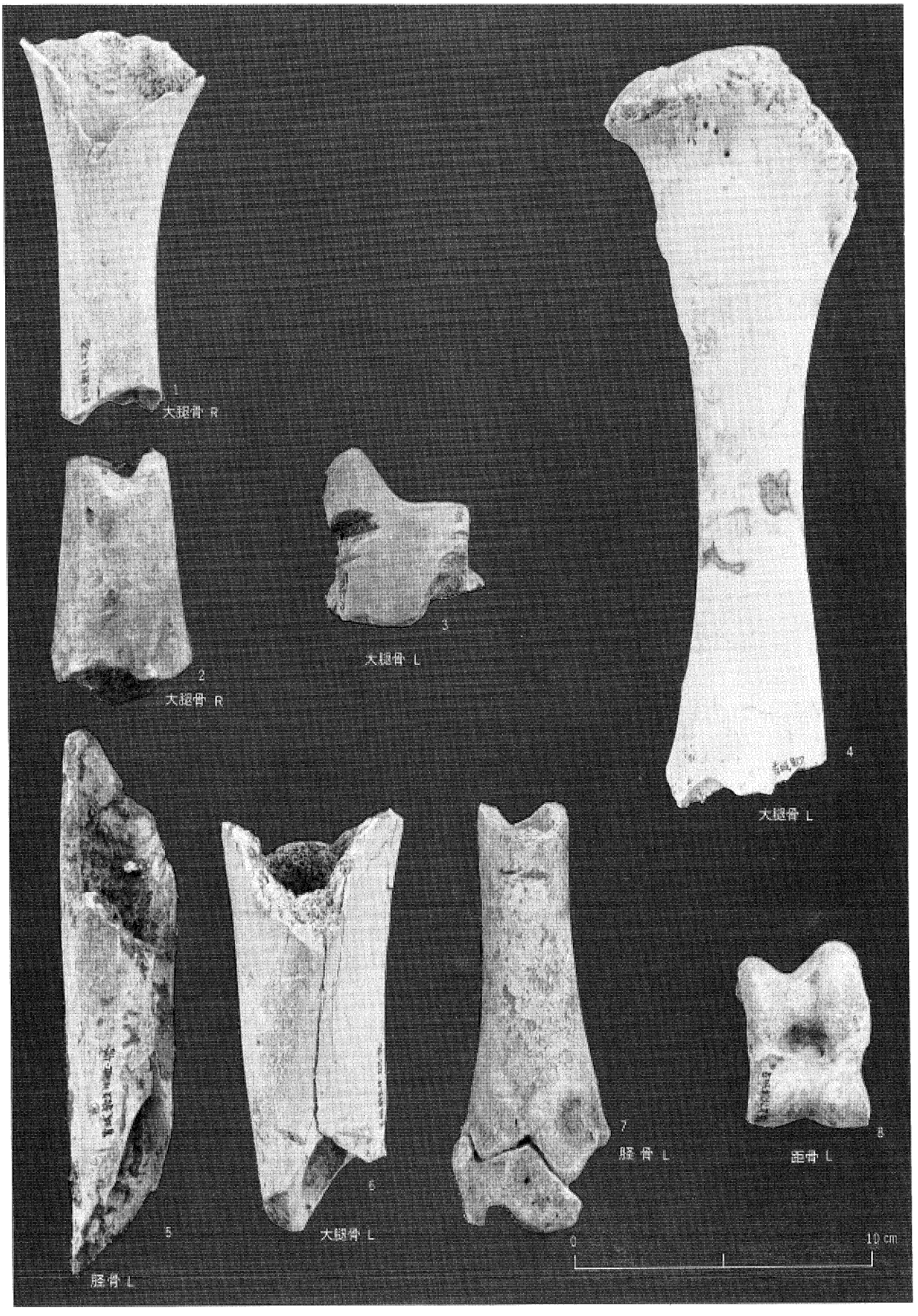


図版16　ウシ



図版17　ウシ

0　10 cm



図版18　ウシ

第1表　貝類遺存体出土表

番号	科名	和名	完形		有頂破片		細片	備考
			左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)	
1	ミミガイ科	不明	1	1				
2	ニシキウズ科	〃	1	4				
3	〃	ニシキウズ	1	10	1	12		
4	〃	サラサバティ	3	313	3	92	89	
5	〃	ギンタカハマ	2	44				
6	〃	カンギク	24	103	12	18	3	
7	〃	チョウセンサザエ	4	190	9	301	45	
7'	〃	チョウセンサザエのフタ	9	70	2	11	16	
8	〃	ヤコウガイ	12	2000	63	13465	31660	47,200 } 60,933=73%
8'	〃	ヤコウガイのフタ	54	7209	45	4731	1694	13,733 }
9	アマオブネ科	アマオブネ	1	5	7	10	0.5	
10	〃	マルアマオブネ	1	1				
11	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	42	605.5	6	8	93	
12	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	1	0.5	1	0.5		
13	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	3	100	12	192	16	
14	〃	カスリカニモリ	1	1	5	5.5	0.5	
15	〃	カヤノミカネモリ	1	1				
16		不明	1	3	4	5	1	
17	ソデガイ科	オハグロガイ	1	2				
18	〃	マガキガイ	13	203	22	235	4	
19	タカラガイ科	ハナマルユキ	1	7	3	11	2	
20	〃	ハナビラダカラ	2	5	1	2		
21	〃	ホソスジヤクシマダカラ	1	20				
22	フジツガイ科	ホラガイ			1	50	30	
23	アツキガイ科	不明			1	9		
24	〃	ツノレイシ	3	50	1	10		
25	エゾバイ科	イソニナ	4	5	1	1		
26	イトマキボラ科	イトマキボラ	3	400				
27	〃	ヒメイトマキボラ	1	73			28	
28	〃	ナガサキニシキニナ	2	2				
29	オニコブシ科	コオニコブシ	1	5				
30	フデガイ科	マルフデガイ	1	1				
31	イモガイ科	オトメイモ	1	33				
32	〃	不明	2	15	4	51		
33	キセルガイ科	ナミギセル	4	2				
34	オナジマイマイ科	オナジマイマイ	7	14			25	
35	フネガイ科	ベニエガイ	1／0	4／0				
36	〃	リュウキュウザルボウ	3／0	89／0	1／0	10／0	1	
37	イタヤガイ科	キンチャクガイ	1	10				
38	ウミギク科	不明	0／1	0／7			10	
39	シキガイ科	クチベニツキガイ	0／1	0／2	1／0	10／0		
40	〃	シキガイ	5／2	27／14	2／0	5／0		
41	シャコガイ科	ヒレジャコ	5／2	4720／2500	0／1	0／1940	750	
42	〃	ヒメジャコ	2／1	73／11	0／1	0／10	50	
43	ザルガイ科	カワラガイ	1／0	10／0		1／0	5	
44	〃	不明			1／0	15／0		
45	マルスダレガイ科	不明	4／1	28／6	13／5	11／32	19	
46	〃	ヌノメガイ	2／2	24／45	1／1	1／23	1	1
47	〃	ホソスジイナミガイ	1／2	6／7				
48	〃	スダレハマグリ	1／1	3／4			3	
49	〃	ハマグリ	3／4	50／50	2／0	16／0	12	
50	〃	イソハマグリ	3／0	26／0				
51	〃	アラスジケマンガイ	89／73	299／221	30／23	76／75	37	
52	不明	不明	1	1				
				25,184.5g		21,444g	34,595	全体重量81,233.5g

第2表　各トレンチ別集計表

A トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
4	サラサバテイ					38
8	ヤコウガイ			1	120	696
11	オキナワヤマタニシ	3	532			85
45	マルスダレガイ科					4
51	アラスジケマンガイ	1／1	2／2			

B トレンチ I 層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
6	カンギク	1	6			
7	チョウセンサザエ			1	30	
8	ヤコウガイ			13	3000	6000
8'	ヤコウガイのフタ	2	260	10	1140	215
25	イソニナ	2	2			
36	リュウキュウサルボウ	1／0	24／0			
40	ツキガイ	0／1	0／4			
45	マルスダレガイ科			1／2	2／15	15
46	ヌノメガイ			1／0	1／0	
49	ハマグリ			1／0	2／0	
51	アラスジケマンガイ	1／5	6／11	1／1	1／4	1
B トレンチ灰層より下						
8	ヤコウガイ			8	2500	4000
8'	ヤコウガイのフタ	1	110	1	175	
B トレンチ西側排水溝						
8	ヤコウガイ			21	3500	8500
8'	ヤコウガイのフタ	3	500			
11	オキナワヤマタニシ					1
35	ベニエガイ	1／0	4／0			
36	リュウキュウサルボウ	1／0	20／0			
39	クチベニツキガイ	0／1	0／2			
45	マルスダレガイ科	1／0	1／0			
B トレンチ東側排水溝						
5	ギンタカハマ	1	14			
7'	チョウセンサザエのフタ					16
8	ヤコウガイ					410
8'	ヤコウガイのフタ	1	120			115
11	オキナワヤマタニシ	5	10			
47	ホソスジイナミガイ	1／0	6／0			
B トレンチ1号遺構						
8	ヤコウガイ	12	2000			3000
8'	ヤコウガイのフタ	1	125	2	110	
18	マガキガイ			1	10	
34	オナジマイマイ	1	4			
46	ヌノメガイ	1／0	15／0			
51	アラスジケマンガイ	1／0	5／0			

C トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
7	チョウセンサザエ	1	30	1	70	
7'	チョウセンサザエのフタ	1	10	1	6	
8	ヤコウガイ			1	150	800
8'	ヤコウガイのフタ	5	640	5	430	40
41	ヒレジャコ			0 1	0 1940	
49	ハマグリ					10

D トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
7'	チョウセンサザエのフタ	1	12			
8	ヤコウガイ					40
8'	ヤコウガイのフタ			1	70	50
18	マガキガイ	1	20	1	15	3

Dトレンチ 北石畳下 I層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
8'	ヤコウガイのフタ			1	50	
40	ツキガイ	2／0	14／0			
45	マルスダレガイ科			1／10	5／0	
49	ハマグリ	1／0	9／0			

D トレンチ III層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
7'	チョウセンサザエのフタ	1	5			
8'	ヤコウガイのフタ			1	50	
32	イモガイ科	1	10			

E トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
7	チョウセンサザエ			1	45	20
8	ヤコウガイ					120
8'	ヤコウガイのフタ	1	200	1	100	60
18	マガキガイ	1	20	1	20	
41	ヒレジャコ	1／0	920／0			
43	カワラガイ	1／0	10／0			

G トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
8	ヤコウガイ			1	185	30
8'	ヤコウガイのフタ			1	80	

Hトレンチ I層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
4	サラサバティ			1	6	1
5	ギンタカハマ	1	30			
6	カンギク	3	8			
7'	チョウセンサザエのフタ	1	11	1	5	
8	ヤコウガイ			2	980	86
8'	ヤコウガイのフタ					84
9	アマオブネ	1	5	7	10	0.5
10	マルアマオブネ	1	1			
11	オキナワヤマタニシ	6	11	2	3	1
12	ゴマフニナ	1	0.5	1	0.5	
16	オニノツノガイ科	1	3	4	5	1
13	オニノツノガイ	2	71	4	82	
14	カスリカニモリ	1	1	3	4	0.5
18	マガキガイ	5	65	4	25	1
19	ハナマルユキ			1	5	
24	ツノレイシ	2	25	1	10	
28	ナガサキニシキニナ	1	1			
30	マルフデガイ	1				
32	イモガイ科			2	31	
34	オナジマイマイ	1	3			
38	ウミギク科					10
40	ツキガイ			1／0	3／0	
45	マルスダレガイ科	2／0	22／0			
46	ヌノメガイ	1／0	9／0			
47	ホソスジイナミガイ	0／2	0／7			
48	スダレハマグリ	1／1	3／4			
51	アラスジケマンガイ	59／54	170／160	20／17	50／44	25

Hトレンチ II層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
2	ニシキウズ科	1	4			
4	サラサバティ	1	43			
6	カンギク	5	26	1	1	
8	ヤコウガイ					362
8'	ヤコウガイのフタ					40
11	オキナワヤマタニシ	14	25	4	5	1
13	オニノツノガイ			2	63	
14	カスリカニモリ			1	1	
15	カヤノミカネモリ	1	1			
17	オハグロガイ	1	2			
18	マガキガイ	1	14	2	27	
25	イソニナ	1	1			
32	イモガイ科	1	7			
34	オナジマイマイ			1	2	
37	キンチャクガイ	1／0	5／0			2
45	マルスダレガイ科	0／1	0／23			
50	イソハマグリ	1／0	1／0			
51	アラスジケマンガイ	8／2	26／4			

H トレンチ Ⅶ層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
3	ニシキウズ	1	10	1	12	
4	サラサバテイ			1	31	
6	カンギク	12	44	10	16	
8	ヤコウガイ			1	73	127
8'	ヤコウガイのフタ	1	143	1	96	25
11	オキナワヤマタニシ	8	17			5
13	オニノツノガイ	1	29	2	39	16
14	カスリカニモリ	2	4	1	2	
18	マガキガイ			2	16	
19	ハナマルユキ			2	6	2
20	ハナビラダカラ			1	2	
23	アツキガイ科			1	9	
25	イソニナ			1	1	
28	ナガサキニシキニナ	1	1			
32	イモガイ科	1	5			
33	ナミギセル	4	2			
34	オナジマイマイ	6	10			
36	リュウキュウサルボウ			1／0	10／0	
40	ツキガイ	0／1	0／10			
47	ホソスジイナミガイ	0／1	0／2			
49	ハマグリ	2／4	41／50			
51	アラスジケマンガイ	6／2	36／4			

K トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
8	ヤコウガイ					290
8'	ヤコウガイのフタ					45
40	ツキガイ	1／0	8／0			

L トレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
4	サラサバテイ	1	40			
6	カンギク	2	9			
7	チョウセンサザエ			1	16	
7'	チョウセンサザエのフタ	1	5			
8	ヤコウガイ			1	10	10
8'	ヤコウガイのフタ		2	220	50	
11	オキナワヤマタニシ	3	45			
13	オニノツノガイ			1	20	
18	マガキガイ	4	50	2	12	
20	ハナビラダカラ	1	3			
42	ヒメジャコ	1／0	20／0	0／1	0／10	50
45	マルスダレガイ科			0／1	0／10	
46	ヌノメガイ	0／1	0／20			
51	アラスジケマンガイ	4／3	25／2			

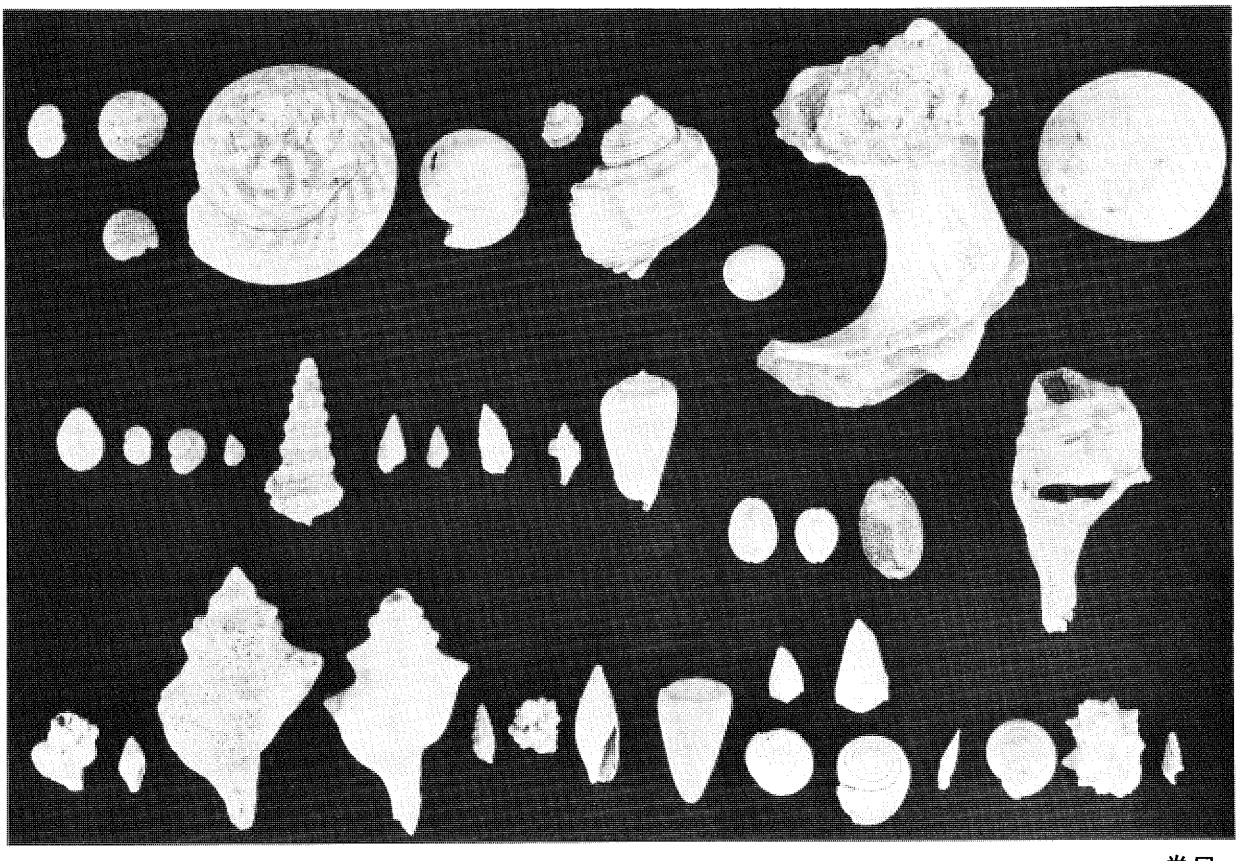
Mトレンチ						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
7	チョウセンサザエ	2	60	1	10	
8	ヤコウガイ					52

久慶門内側崩壊壁の埋土						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
8	ヤコウガイ			1	212	30
8'	ヤコウガイのフタ			1	130	
21	ホソスジヤクシマダカラ	1	20			
22	ホラガイ			1	50	30
26	イトマキボラ	1	130			

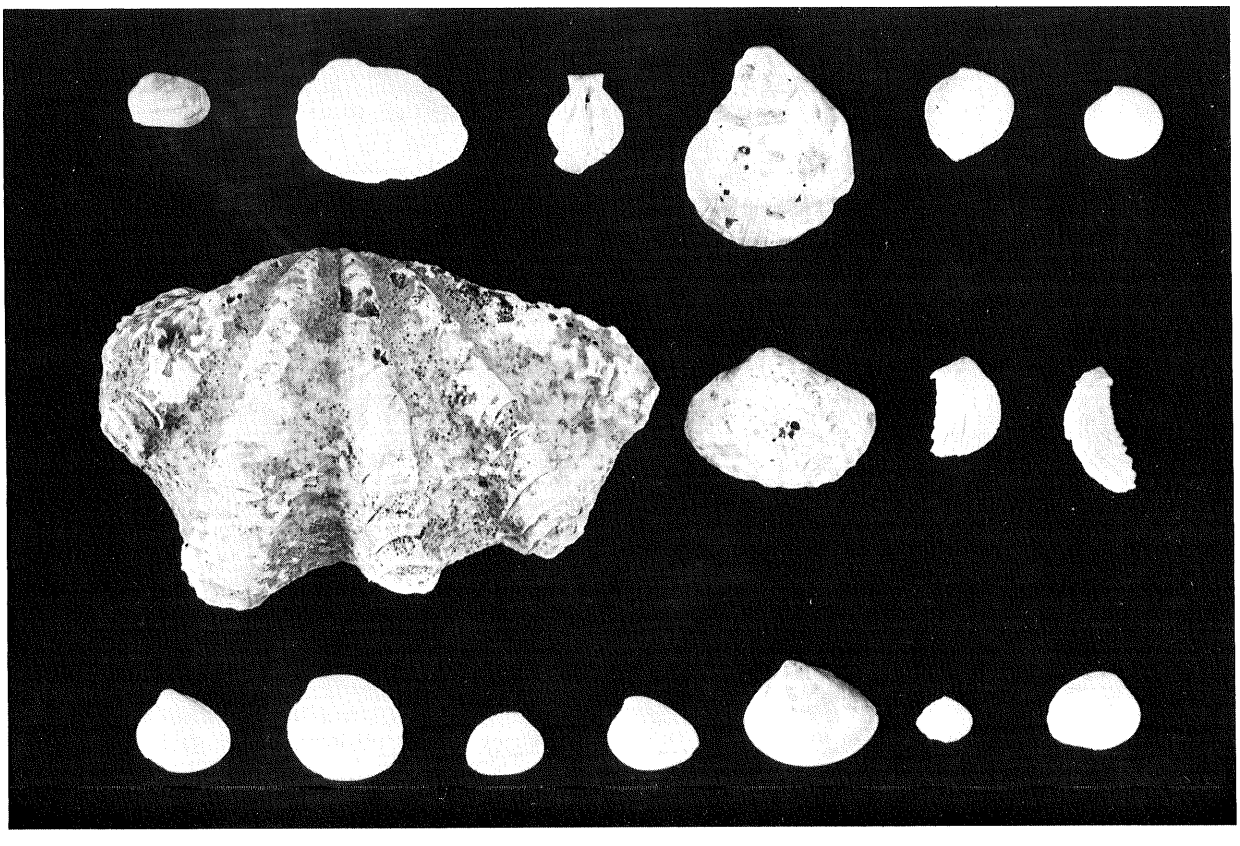
旧石畳トレンチ（井戸）						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
8'	ヤコウガイのフタ	1	1			
34	オナジマイマイ					25

寒川南壁の内側トレンチII層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
6	カンギク			1	1	
7'	チョウセンサザエのフタ	1	9			
8	ヤコウガイ					192
8'	ヤコウガイのフタ	1	110			
18	マガキガイ	1	20			
20	ハナビラダカラ	1	2			
29	コオニコブシ	1	5			
49	ハマグリ			1／0	14／0	
51	アラスジケマンガイ	3／1	9／4	1／0	2／0	4

盛土整地層						
番号	和名	完形		有頂破片		細片
		左／右	重量(g)	左／右	重量(g)	(g)
1	ミミガイ科	1	1			
4	サラサバティ	1	230	1	55	.50
6	カンギク	1	10			3
7	チョウセンサザエ	1	100	5	175	.45
7'	チョウセンサザエのフタ	3	25			
8	ヤコウガイ			13	2735	69.15
8'	ヤコウガイのフタ	37	5000	18	2080	970
11	オキナワヤマタニシ	3	6			
13	オニノツノガイ			4	8	
14	カスリカニモリ			1	0.5	
18	マガキガイ	1	34	10	130	
19	ハナマルユキ	1	7			
26	イトマキボラ	1	135			
27	ヒメイトマキボラ	1	73			28
31	オトメイモ	1	33			
32	イモガイ科			2	20	
36	リュウキュウサルボウ	1／0	45／0			1
38	ウミギク科	0／1	0／7			
39	クチベニツキガイ			1／0	10／0	
40	ツキガイ	1／0	5／0	1／0	2／0	
41	ヒレジャコ	4／2	3800/2500			750
42	ヒメジャコ	1／1	53／11			
43	カワラガイ			0／1	0／5	
44	ザルガイ科			1／0	15／0	
45	マルスダレガイ科	1／1	5／6	11／2	3／7	
46	ヌノメガイ	1／1	15／25			1
47	ホソスジイナミガイ	0／1	0／5			
50	イソハマグリ	2／0	25／0			
51	アラスジケマンガイ	6／5	20／34	9／4	23／7	5
52	ツノレイシ	1	25			



巻貝



二枚貝

図版19　貝殻

第10節　古　銭

本遺跡出土の古銭総数は、破損品を含めて1978点、その種類は単純に数えても30種類にのぼり最少の個体数は、無文銭を除いて356点であった。残念なことに遺跡は、ほぼ全体が攪乱層であり、古銭の出土状況も他の遺物同様、層位的なものはつかめ得ない。完形品は希少で細片が多く、火を受けたと思われるような重なりあった状態の個体が多数有り、これは、去る大戦によるものであろうかと思われる。

このような状況のため基本的には、首里城歓会門・久慶門内を一括して報告するが、Bトレンチ出土の古銭・Hトレンチ、寒水川井戸側南壁の内側トレンチは、これより除外し表を作成した。これはBトレンチに隣接する北東側に、旧王朝時代の銭倉があったと伝えられていること、本トレンチ出土の古銭の量が遺跡出土量の半数以上にあたること等を考え合わせ他資料と分けて作表を行った。Hトレンチは、古銭の出土数は僅少であるが、比較的層序の保存状態が良好であるため、又、寒水川井戸側南壁の内側トレンチは、石垣の前部の確認を行ったものでこれも前述の2トレンチ同様出土表を異にするものである。以上がそれぞれのトレンチを個々に報告する理由である。この他、Dトレンチ・Eトレンチも全体と別して表を作成した。

Bトレンチ出土の古銭は、本遺跡出土量全体の64.5%にのぼる。なかでも、これまで2～3点の報告例が上げられただけの五朱銭が1点本トレンチより採集されたことは特筆される。残念なことに半欠品ではあるが、これによりその時代幅は大きく広がった。Bトレンチ以外では、これまで発掘によって得られた資料で東風平町のカニマンウタキだけで知られる出土僅少の「世高通宝」も1点出土している。この外にも出土例としては珍しくないが、「寛永通宝」等の日本の古銭も採集された。このように出土資料は、中国・日本・琉球古銭と多種にわたった。

これらの出土資料の中より第63・64図と第3表には、完形品を中心に保存状態の良好な個体数の拓影と観察事項を第2～4表には判続可能な個体をすべて示し、字句の位置(天地左右)及び書体についても明記した。初鋳造年代については、1表・2表とも判別可能なものにかぎり剰記したものである。本遺跡では、明治から昭和初期の大日本鋳造の銭貨も出土している。これらの近代の銭貨についてもそれぞれ表の末尾に併記した。なお、出土資料の整理に際して興南中学校教頭嵩元政秀氏に御教示を仰いだ。

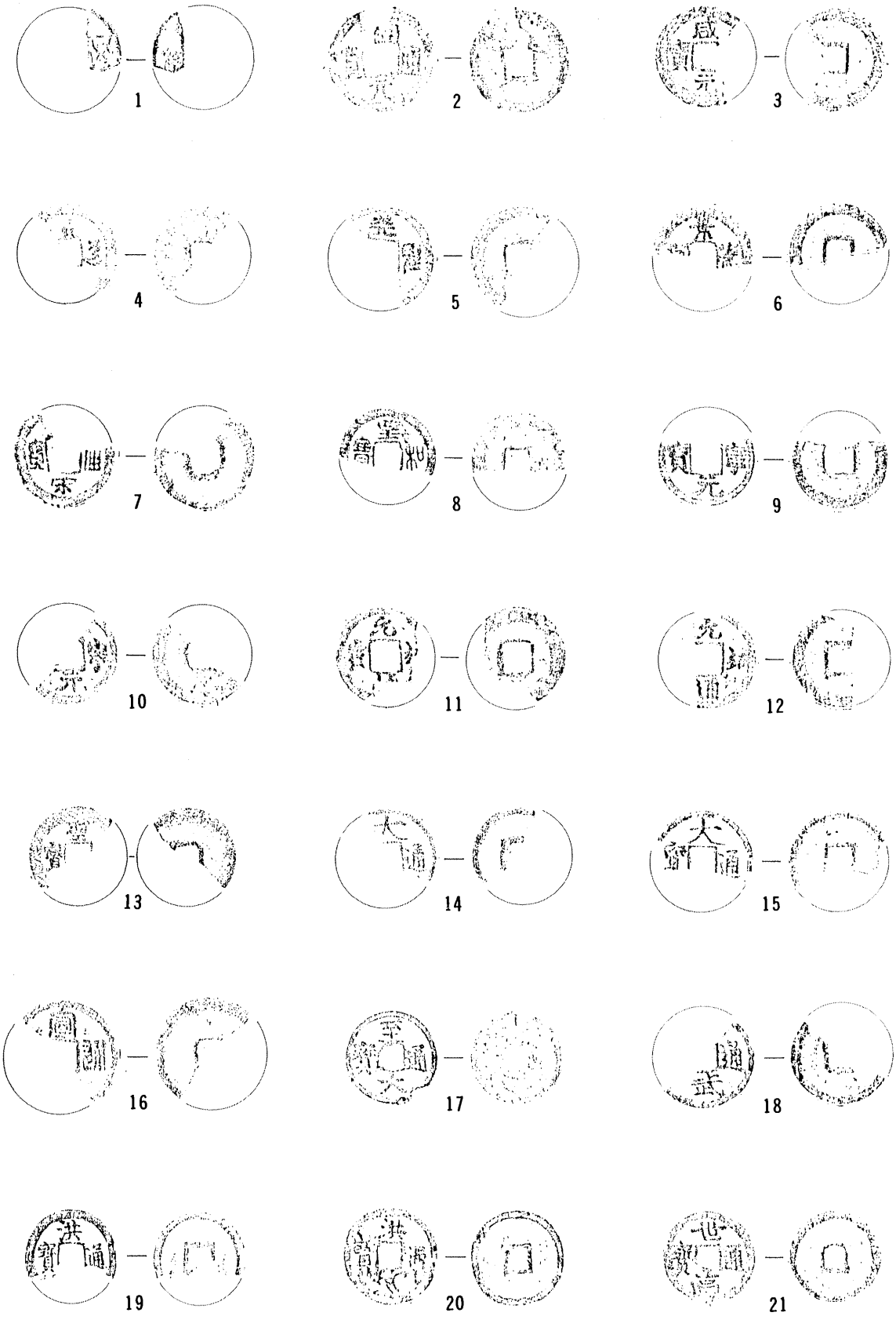
☆参考資料☆

嵩元政秀「沖縄県内出土の銭貨について」南島考古№1　沖縄考古学会

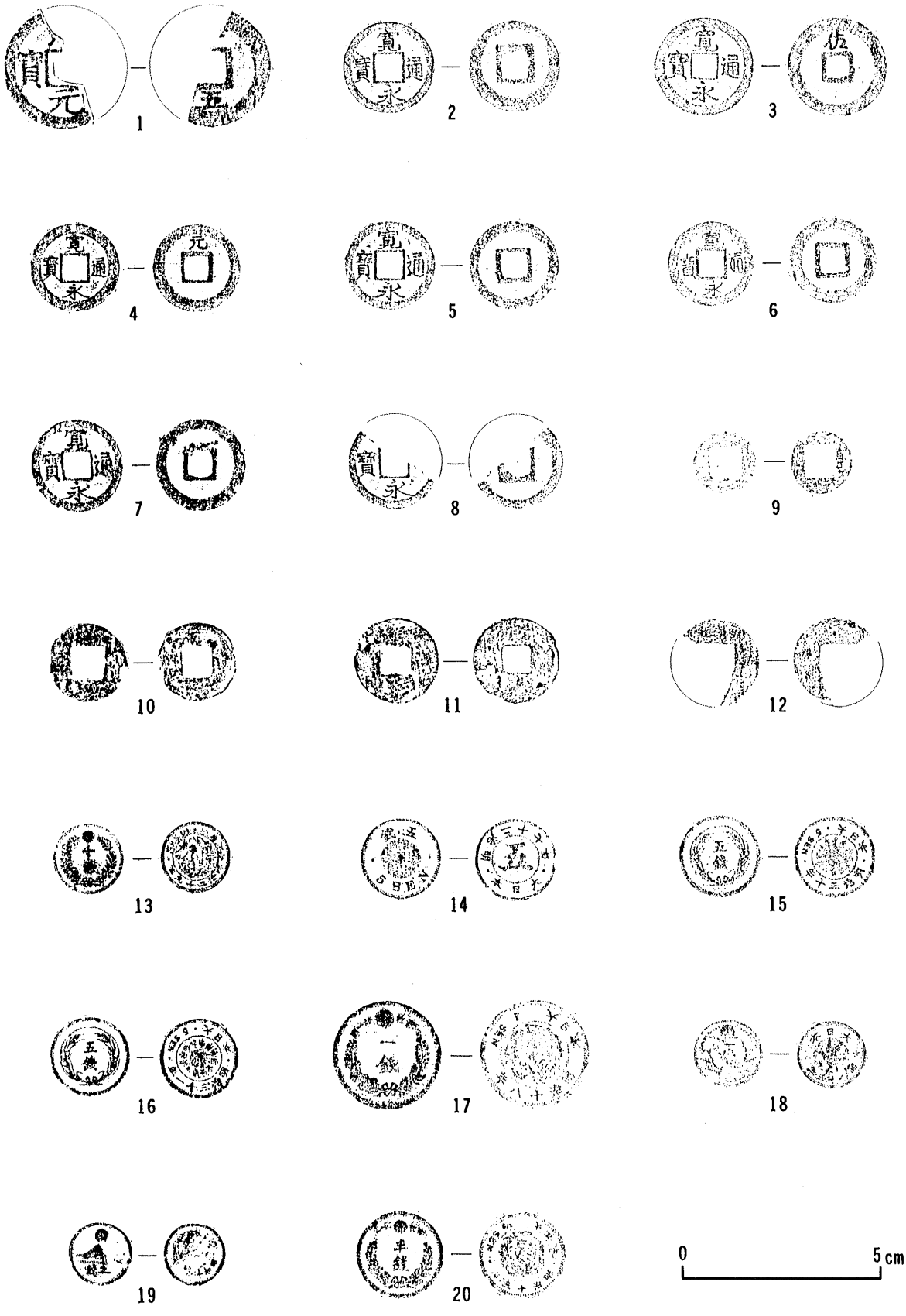
小川浩編「昭和古銭価格図譜」青宝棲蔵版

第1表　古銭出土表

挿図番号	古銭名	時　代	初　鋳　造	直径／㎜	文字の書体	出 土 地 点	観　察　事　項
第63図1	五銖銭	前漢～梁	BC122～AD502	——	篆　書	Bトレンチ I 層	「五」のみ残り他は欠損
〃　2	開元通宝	唐	621	25.0	楷　書	Bトレンチ I 層	「開」の文字の中心が一部破損
〃　3	咸〇元宝	北宋	995	25.0	楷　書	Hトレンチ IV 10/20	「平」の文字が欠損
〃　4	至道〇〇	北宋	999	25.2	草　書	盛土整地層	「元宝」の文字が欠損
〃　5	天聖〇〇	北宋	1023	26.3	隷　書	Bトレンチ I 層	「元宝」の文字が欠損
〃　6	景祐〇〇	北宋	1034	25.2	楷　書	Bトレンチ I 層	「元宝」の文字が欠損
〃　7	〇宋通宝	北宋	1039	25.7	隷　書	Bトレンチ I 層	「皇」の文字が欠損
〃　8	至和〇宝	北宋	1054	24.2	隷　書	Bトレンチ I 層	「元」の文字が欠損
〃　9	〇寧元宝	北宋	1068	24.3	楷　書	Hトレンチ IV 10/20	「熙」の文字が欠損
〃　10	〇寧元〇	北宋	1068	25.0	楷　書	Bトレンチ I 層	「熙」の文字が欠損
〃　11	元祐〇宝	北宋	1093	24.5	行　書	Bトレンチ I 層	「通」の文字が欠損
〃　12	元祐通宝	北宋	1093	不明	行　書	Bトレンチ I 層	完形品ではないが判読可能
〃　13	聖〇〇宝	北宋	1101	24.8	楷　書	盛土整地層	「聖宋元宝」の可能性がある。
〃　14	大〇通〇	北宋	1107	不明	楷　書	盛土整地層	「觀宝」の文字が欠損
〃　15	大〇通宝	北宋	1107	不明	楷　書	Bトレンチ I 層	「觀」の文字が欠損
〃　16	宣〇通〇	北宋	1118	27.9	隷　書	盛土整地層	「和・宝」の文字が欠損
〃　17	至大通宝	元	1310	23.1	楷　書	Hトレンチ IV 10/20	完形品
〃　18	〇武通〇	明	1368	24.5	楷　書	Bトレンチ I 層	「洪・宝」の文字が破損
〃　19	洪〇通宝	明	1368	23.4	楷　書	Bトレンチ I 層	「武」の文字が破損
〃　20	洪武通宝	明	1368	23.7	楷　書	Hトレンチ IV 0/20	完形品であるが「武」の文字が破損
〃　21	世高通宝	琉球	1446	22.8	楷　書	盛土整地層	完形品
第64図1	〇〇元宝	——	——	30.0	楷　書	Hトレンチ IV層 30	他固体より大きめであるが、「元・宝」の文字のみ残るもの
〃　2	寛永通宝	日本	1624	23.2	楷　書	Dトレンチ	完形品
〃　3	寛永通宝	日本	1624	25.0	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　4	寛永通宝	日本	1624	22.6	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　5	寛永通宝	日本	1624	22.7	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　6	寛永通宝	日本	1624	21.9	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　7	寛永通宝	日本	1624	23.4	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　8	寛永通宝	日本	1624	23.1	楷　書	盛土整地層	完形品
〃　9	鳩目銭	——	——	15.9	無　文	盛土整地層	
〃　10	鳩目銭	——	——	19.9	無　文	Bトレンチ I 層	
〃　11	鳩目銭	——	——	21.9	無　文	Bトレンチ I 層	
〃　12	鳩目銭	——	——	21.7	無　文	盛土整地層	
〃　13	十　銭	明治	29	18.1	——	Eトレンチ	近代の銭貨である
〃　14	五　銭	明治	27	20.7	——	Eトレンチ	〃
〃　15	五　銭	明治	30	20.7	——	盛土整地層	〃
〃　16	五　銭	明治	31	20.5	——	Eトレンチ	〃
〃　17	一　銭	明治	18	27.7	——	Bトレンチ I 層	〃
〃　18	一　銭	昭和	15	17.4	——	Hトレンチ IV層	〃
〃　19	一　銭	昭和	10年代	16.1	——	盛土整地層	裏面の年代の部分が摩耗している。
〃　20	半　銭	明治	13	22.1	——	Bトレンチ I 層	



第63図　古銭



第64図　古銭

第２表　Ｂトレンチ古銭出土表

古銭名	文字位置	年代	楷	行	草	隷	蒙	不明	個数	古銭名	文字位置	年代	楷	行	草	隷	蒙	不明	個数
五銖銭	右						1		1	政○○○	上		1			6			7
開元通宝	完形品	621	1						1	宣○○○	上						1		1
開○通宝	上右左		2						2	宣○通○	上右						1		1
開○○宝	上左		2						2	○和○○	下		2			3			5
開○△宝	上右		1						1	○和○宝	下左		2			1			3
開○○○	上		13						13	嘉○通○	上右		2						2
至○○○	上		1						1	嘉○○○	上		2						2
○道○○	右			1					1	嘉○○宝	上左					1			1
○○○○	上		1						1	皇□○宝	上下左						1		1
○徳○○	右		1						1	皇□通○	上右					4			4
太○通○	上右		2						2	皇○○宝	上左		1						1
太○○○	上		2						2	皇○○○	上					1			1
○平○○	下		2						2	○□○宝	下左		1				3		4
景徳○○	上右	1005	1						1	○□○○	下		7				3		10
景○○○	上		3						3	○□○○	右		4				1		5
○徳○○	右		4						4	○宋△○	下右					1			1
○化元○	上右		1						1	○□元○	右下					1			1
○化○○	上		2						2	○祐○○	右		2						2
或○○○	上		2						2	○定宝○			1						1
○平元○	右下		1						1	○定○○	右		3						3
○平○○	右		3						3	宋○通○	上通		1						1
天聖○○	上右	1023				1			1	洪○通宝	上右左	1368	1						1
天○○宝	上左		1						1	洪○○宝	上左		3						3
天○○○	上		3			1			4	洪○通○	上右		2						2
○聖元○	右下					1			1	洪○○○	上		12						12
○聖○○	右		3			3			6	○武通○	下右		4						4
祥○○○	上		4						4	○武○宝	下左		2						2
○符○○	右		4						4	○武○○	下		14						14
景祐○○	上右	1034	1						1	寛○通○	上右		1						1
治○○○	上		1						1	永○通○	上右		4						4
熙寧○○	上右	1068	1						1	永○○○	上		3						3
熙○○○	上		2			2			4	○楽通宝	下右左		1						1
熙○○宝	上左		1						1	○楽通○	下右		1						1
○寧元○	右下		1						1	○楽○○	下		5						5
○寧○○	右		2	3					5	○元○宝	下左		8	1		3			12
元豊○○	上右	1078		1					1	○元○○	下		28	10	1	7	2	3	51
○豊通宝	右下左			1					1	△元△△	下		1						1
○豊通○	右下			1		1			2	○元通○	下右		2					1	3
○豊○○	右			7		1	3		11	○元△○	下左		2						2
元祐通宝	完形			1					1	△○通○	上右							1	1
元祐通○	上右左			3					3	○○通○	右		44	6		12		3	65
○祐○○	右			5					5	○○通宝	下左		1	1		2			4
○符○○	右			1					1	○○通○	下		6	8		2		3	19
元○通宝	上下左					1			1	○○○宝	左		67	5		9	6	73	160
元○○宝	上左		1	4	1	2			8	△○○宝	上左							6	6
元△○○	上右			1					1	△○通宝	下左							1	1
元○○○	上		4	10		14		1	29	無文銭	——								12
紹○○宝	上左			2					2	不明破片	——								666
紹○○○	上			2					2	一銭	——	（近代の銭貨）							1
大○通宝	上右左		1						1	半銭	——								1
大○○○	上		5						5	計			324	74	2	80	22	92	1274
○觀○○	下		1						1										
政○○宝	上左		1						1										
政○通○	上右		1						1										

第3表　各トレンチ古銭出土表

古銭名	文字位置	年代	楷	行	草	隷	篆	不明	個数
Hトレンチ									
或〇元宝	上左	995	1						1
〇寧元宝	右下左	1068	1						1
至大通宝	完形品	1310	1						1
〇〇元宝	下左	?	1						1
一銭	——	S15	（近代の貨銭）						1
計			4	0	0	0	0	0	5
寒川側南壁の内側トレンチ									
開〇〇〇	上		2						2
治〇通〇	上右		1						1
治〇〇〇	上		1						1
祥〇〇宝	上		1					1	2
嘉〇〇宝	上左					1			1
元〇〇〇	上					1	1		2
大〇〇〇	上		1						1
〇武〇〇	下		1						1
〇□〇〇	右					1			1
永〇〇〇	上		1						1
〇楽〇〇	下		1						1
〇元〇〇	下		1	1		1		1	4
〇〇通〇	右		1	1				1	3
〇〇通〇	下			2					2
〇△〇宝	下左					1			1
〇〇〇宝	左		2			2		1	5
破片									25
計			13	4	0	7	1	4	54
Eトレンチ									
寛永通宝	完形		1						1
十銭		明治							1
五銭		明治							3
計			1	0	0	0	0	0	5
Dトレンチ									
寛永通宝	完形		1						1
宋〇〇〇	上		1						1
〇〇〇宝	左		1					1	2
破片									9
計			3	0	0	0	0	1	13

第4表　盛土整地古銭出土表

古銭名	文字位置	年代	楷	行	草	隷	蒙	不明	個数
開○通宝	上右左	621							1
開○○宝	上左		2						2
開○△宝	上右		1						1
開○○○	上		7						7
至道○○	上右	995	3		1				4
○道○○	右		1						1
至△△○	上	?	1						1
太○通○	上右	977	1						1
太○○宝	上左	977	1						1
太○○○	上	977	1						1
○平○○	下	977	1						1
淳○○○	上	990	2						2
○化○○	右		1						1
或平元○	上右下	995	1						1
或○○宝	上左		1						1
或○○○	上		2						2
○平元宝	右下左		1						1
○平元○	右下		2						2
○平○○	右		2						2
○平○○	右					1			1
祥○○宝	上左		2						2
祥○○○	上		1						1
天○○○	上		5						5
○聖○○	右		2			2	1	1	6
景○○宝	上左		1						1
景○○○	上		2						2
△祐○○	上右			1					1
△祐○○	上右			1					1
皇○通○	上右					1			1
皇○○宝	上左		1			2			3
皇○△○	上右		1			1			2
皇○○○	上					1	1		2
○宋通○	下右		1						1
○宋△○	下右		1						1
○宋○○	下		3				1		4
熙○○宝	上左		1						1
熙○○○	上		1						1
○寧元宝	右下左						1		1
○寧元○	右下		2						2
○寧○○	右		1			1			2
元豊○宝	上右左	1078				1			1
元豊○○	上右		1						1
○豊通宝	右下左		1						1
○豊○○	上		4		1				5
元符○○	上右	1098	1						1
○符○○	右		2						2
○祐通○	右下			3					3
○祐○○	右			2		1	1		4
紹聖○	上右	1094		1					1
紹○○宝	上左			1					1
紹○○○	上		2						2
聖○○宝	上左	1101	1						1

古銭名	文字位置	年代	楷	行	草	隷	蒙	不明	個数
○宋○○	右					1			1
大○通○	上右	1107		2					2
大○○○	上			1					1
○觀○宝	下左			1					1
政○通○	上右	1111				2			2
政○○○	上			1		3			4
宣○通○	上右	1119					1		1
嘉○○○	上			2					2
正隆○○	上右			1					1
元○通○	上右						1		1
元○○宝	上左			4					4
元○○○	上		1			6			7
△和通宝	上右左					1			1
○和通○	下右		1				1		2
○和○○	下左		1			1			2
○和○○	下							2	2
△祐○○	上右			1					1
○祐○○	下		1						1
洪武通宝	完形	1368	1						1
洪○通宝	上右左		1						1
洪○通○	上右		1						1
洪○○宝	上左		1						1
洪○○○	上		6						6
○武通○	下右		2						2
○武○宝	下左		1						1
○武○○	下		6						6
寛永通宝	完形		6						6
寛永通○	上下右		1						1
○永通宝	下右左		1						1
永○○宝	上左		1						1
永○○○	上		1						1
○楽○○	下		1						1
世高通宝	完形	1446	1						1
△△通○	上下右							1	1
△○○宝	上左							3	3
○△元○	右下							3	3
○元通○	下右		2			2			4
○元○宝	下		5	2		2			9
○元○○	下左		17	3		3			23
○○通○	右		18			3		5	26
○○通宝	下左			1	1			1	3
○○通○	下		3	1		1			5
○○△宝	下左		3	1		1			5
○○○宝	左								72
無文銭	——								4
不明破片	——								311
五銭	——	（近代の銭貨）							1
一銭	——								1
計			153	30	3	37	8	16	636

凡　例

○は欠損し判読できないもの。

△は文字は残存するが判読できないもの。

第11節　ガラス製品（第65図、図版76）

ガラスを素材とする製品で、その器種の判別できるものは、インク瓶、調味料の瓶、染料剤の瓶、清涼飲料水の瓶、薬品の瓶がある。これらは製品自体に文字が存在するものないし、現在かろうじて類似製品が存在することなどからその器種が判明したものである。しかし、その多くが器種不明なものからなっている。

a　インク瓶

第65図3・4は外観が靴形状をなしたものである。製品はタンク状の丸いインクを溜める部分と取り出し口にあたる柱状のペン立て部分からなる。大きさは二種類認められ、前者が後者に比べ大きくなっている。製品表面中央には制作時につけられた鋳型でついたとみられる隆起が残っている。1はやや緑がかった色を帯びている。2は無色で色調に違いがみられる。ガラス内を観察すると細かい気泡が多くみられる。

b　調味料の瓶

第65図1・2は器体が偏平柱状の角瓶である。ただし口縁は器体に比べ広いものである。底面裏に1は左方向から「味の素」、2は「素」と記された浮き文字が存在し、その用途が判明した。前者と後者の資料形状はほぼ相似形をなし、大瓶、小瓶の関係にあるものと思われる。

c　染料剤の瓶

第65図5の一例で小形の四方形の広口瓶である。本例は図に示したガラス製の蓋も付着した状態で検出されたため、容器内には今だ、赤い染料が残されている。側面にはアルス染料と浮き文字になっている。ガラスの色調は無色透明である。

d　清涼飲料水の瓶

第65図13は緑色をおびた口縁部がこれまでの資料と異なり、外器面が分厚く角がとられているものである。その縁の側面には対応する面の2箇所に整形時に付けられた細い窪みがみられる。この瓶は現在では少なくなりなかなか見ることがない、いわゆるラムネ瓶である。同図9は色調が濃いビー玉で、おそらく対応するものとみられる。

e　薬品の瓶

第65図8は出土中大きい部類の瓶である。口唇部を欠いているが、その周辺は厚くなりその内側のみ不透明になっている。手触りでその部分はザラザラに感ずる。その瓶の蓋とみられるものが同図10の筒状のものである。残念ながらこの資料も取手頂部が欠損している。とにかく広口で、口縁部内面がザラザラ仕上げの製品は同様のガラス蓋が対をなしていることが理解される。当製品のガラスの色は緑色を帯びている。

f　その他の瓶

第65図7、14、20の三例はやや大きい部類にはいる瓶とみられるものであるが、いずれも口部分を残す

ガラス製品

第65図	図版76	器種	縦（cm）	横（cm）	幅（cm）	出土地点	備考
1	1	ガラスビン	約15.60	口径3.0 6.3		Bトレンチ	「味の素」
2	2	〃	8.20	口〃1.70 3.35	1.90	表土層	「素」の文字が底部に入る
3	3	〃	4.30	5.0	6.3	Eトレンチ	
4	4	〃	3.90	4.5	5.5	Cトレンチ	
5	5	〃	5.80	2.70	2.20	不明	「アルス染料」の文字入り
6	6	〃	9.35	口〃2.20 4.00	4.00	Eトレンチ	「堀越」・「ホーカー液」・底面「t」
7	7	〃	不明	口〃2.40 5.80	3.75	東側排水構	「次」の文字入り・半欠品
8	8	〃	約17.00	口〃2.40 6.50		Bトレンチ	
9	9	?	不明	1.80	1.80	表土層	
10	10	ビンのフタ	〃	1.0		〃	
11	11	ガラスビン	7.70	口〃2.20 3.75	2.85	Bトレンチ	
12	12	〃	6.40	口〃1.50 1.50		Cトレンチ	「ヘルプ・定賃金弐拾銭」の文字入り
13	13	〃	不明	口〃2.50 不明	不明	東側排水構	
14	14	〃	〃	口〃3.90 不明	〃	〃	口縁部～胴上部
15	15	〃	5.30	口〃2.0 3.30		Cトレンチ	
16	16	〃	不明	口〃2.20 不明	不明	表土層	口縁部のみ
17	17	〃	3.30	口〃2.1 2.20		〃	
18	18	〃	5.50	口〃1.0 4.20	1.70	Lトレンチ土層	「KAOL」の文字が底部に入る
19	19	〃	不明	小 1.80 最大 2.50		表土層	
20	20	〃	〃	口〃2.30 不明	不明	Eトレンチ	口縁部～頸部のみ
21	21	〃	3.70	4.35	4.35	表土層	
22	22	〃	不明	2.50		東側排水構	半欠品
23	23	〃	3.80	2.40	0.70	Cトレンチ	

 もので、それ以下の部分が欠落している。同図7は濃い緑色を帯びたもので、体部がやや平たくなっている。側面に浮き文字の次の一字が残るがそれ以上は欠損のため不明である。同図14は残りの形状からその体部は筒状の丸いものと推定される瓶の口縁部である。口縁形が丸縁状を呈し、くびれを形成している。きわめて淡い緑色を帯びている。同図20は首の長いもので、口縁部は帯状に厚く肥厚させているが口唇部に向かい漸次細かくなされている。

第65図　ガラス製品

小形の瓶をなすもので、口縁の断面が四方形に肥厚した同形態のが四例ある。同図6は体部形が略四方体をなすもので、側面にホーカー液、底部裏面に七という浮き文字が造られている。同図11は体部形が略長方体をなす。文字の浮き文字はないが、肩部、側面、底部裏面に隆起をつけて装飾を施している。同図15は体部が安定観のある筒状をなしたまた一回り小形の瓶である。四例とも色調は無色透明になっているが、内面に虹色を帯びた薄い剝片のようなものが存在する。

さらに小形をなすもので、同図21は短い筒型の瓶で、口にねじ式の蓋の為の溝が有る。対面する側面に鋳型と考えられる隆起した線が有る。色調はやや深みのある緑色をしている。器内に大きい気泡が見られる。同図18は器体が偏平をなすもので、側面には線状の刻みのある装飾を施し、口は細く、ねじ式の蓋の存在をしめす溝がつくられている。同図12は巻たばこのように管状になったもので、口部分と首を区分できるようにくびれがある。側面にはカタカナでヘルプと浮き文字があり、対応する面には定価金二拾銭とある。ガラスの色は無色透明。文字から想像すると薬に関係するものであろうか。同図17はミニチュアの広口瓶と称してもよいと思われるくらいのもので、口は広く口唇部は水平に広げたものである。いずれも薄手である。首部、体部と明確に区分されている。色は無色透明。同図22は底が残るだけのものである。色調はやや青みがかっている。器内面に虹色を帯びていて、時に薄く剝離する。

同図23はこれまでの形態の瓶と異なり、かんちょう状を呈した、透明性のガラス製品である。器壁は薄く、内面に虹色を帯びている。口縁部は何かの例えばゴム等の製品と接合される様につくられたもので、蓋状の細工の痕跡はない。同図19は串だんご状にくびれを連続して製作した装飾性が強くみられる製品で、器壁は薄く精巧な感をみせる。破損のためのその全体の形状は不明、色調は無色透明である。

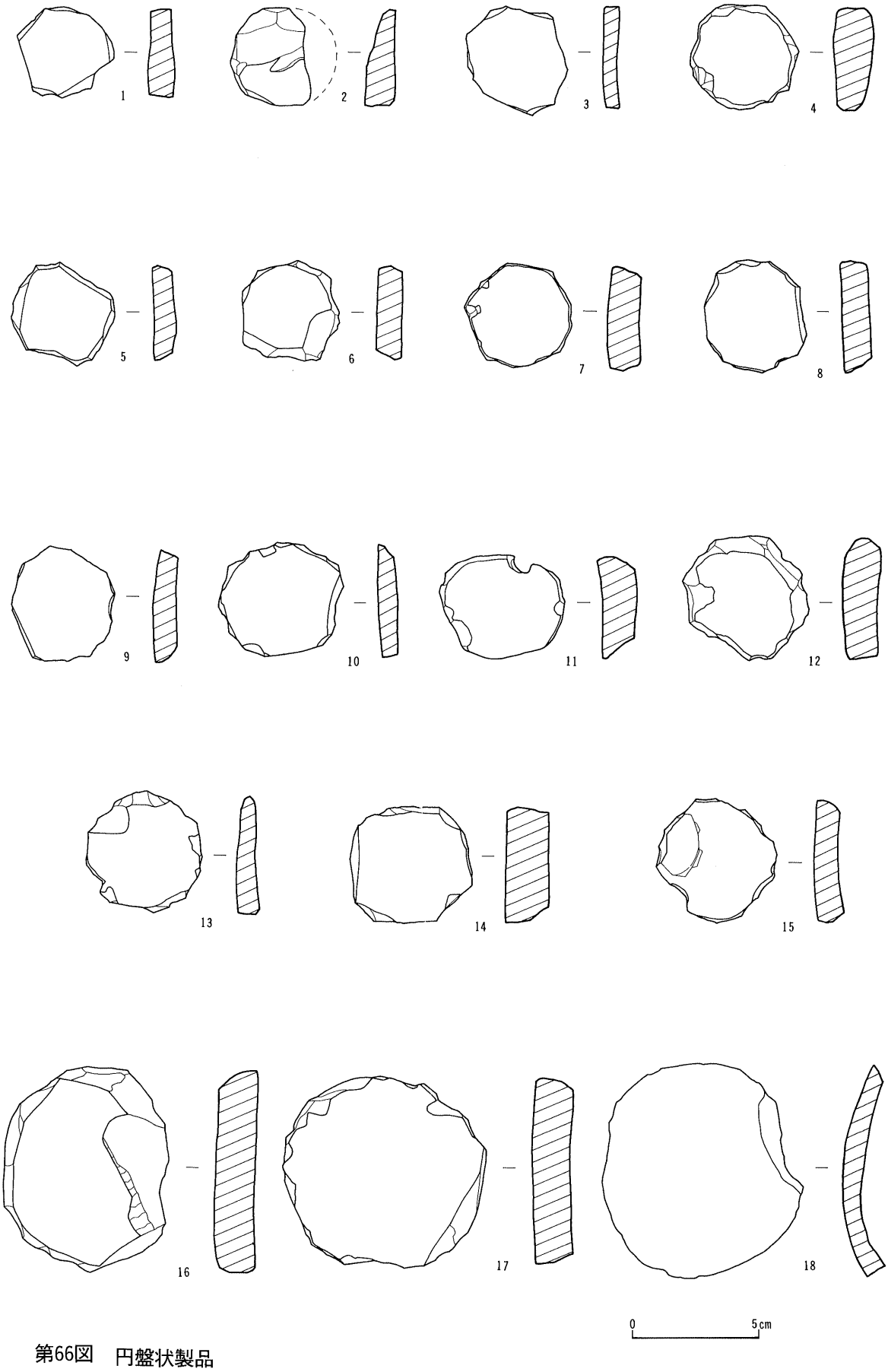
第12節　円盤状製品（第66・67図、図版77・78）

総数40点検出している。陶磁器や瓦などの破片を利用し、いずれも整形は叩きにより円形に仕上げたものである。その素材の内訳は黒褐釉陶器17、青磁器4、青花1、沖縄製陶器8、陶質土器1、赤色瓦3、灰色瓦6などからなっている。大きさは最小が3cmのものから最大3cmのものがある。詳細な観察は右表のとおりになる。近年、資料の増加している資料の一つである。現在のところ、そのものに字を記すものや、同様に大きさと種類を有する一次製品は未報告である。またその遺跡の性格を問わず、その材料になる器、瓦類の大量に得られる所での出土が目につき、特徴的な遺構に伴った例もまだ聞かない。

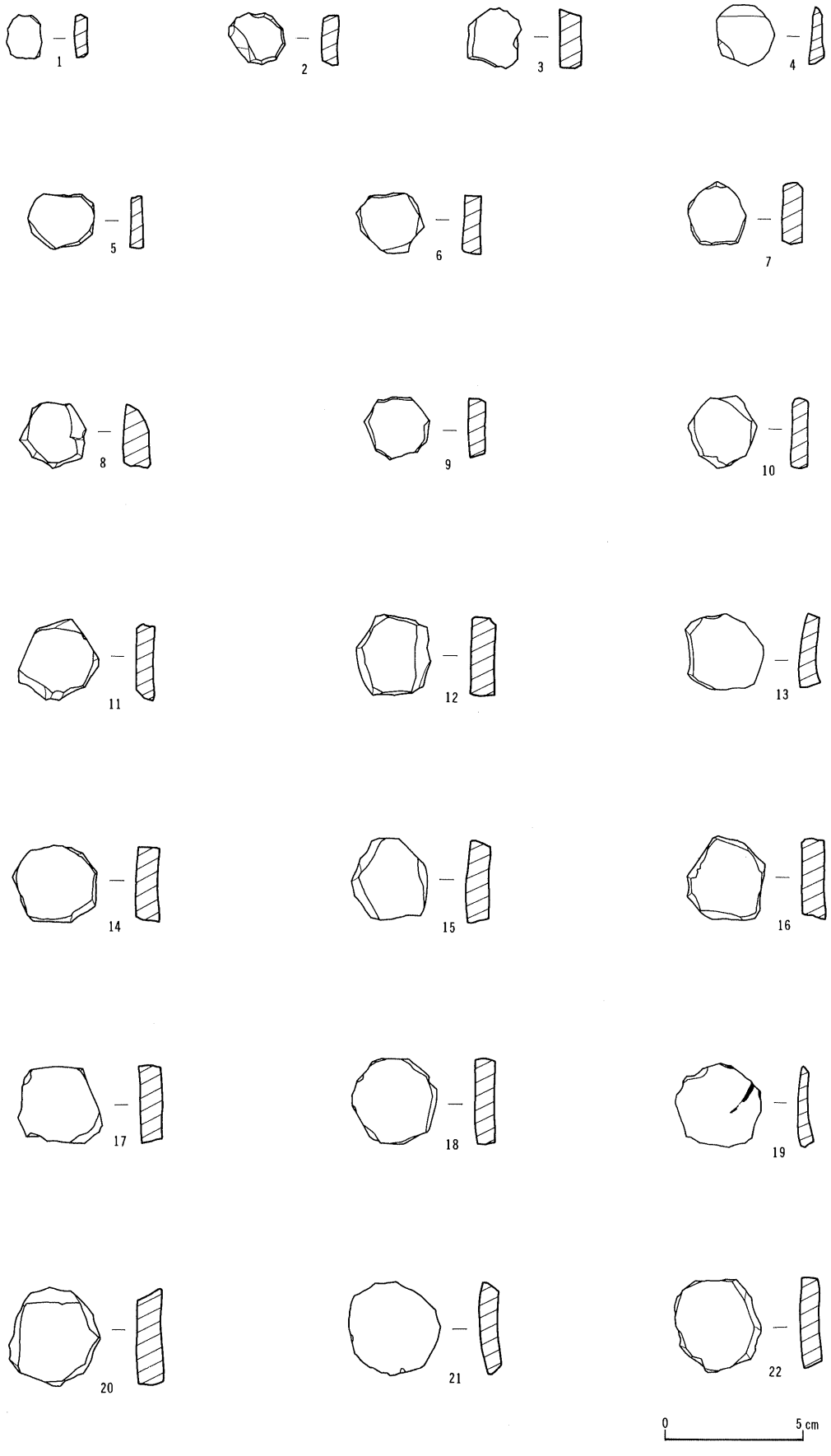
以前、拙文でこれを遊戯具とし、その製作、遊戯者は幼童、少年らを中心とするものとしたが、現在もその考えは基本的に変わっていないが、当製品の規格性も認められるようにもなり、新資料の追加もあることから、幾つか大きさや数を変えて一つの組合せをもち、将棋、囲碁のような遊戯具にもされないかという推測も可能性もなりたつようになってきたため、その製品の遊戯者を単に幼童、少年のみとせず、それら以外に大人も加わることもありうることも含めて若干その考えの枠を広げたい、ただし今の所、それを証明するような、盤や文字のある二次製品は発見されていない。

円盤状製品

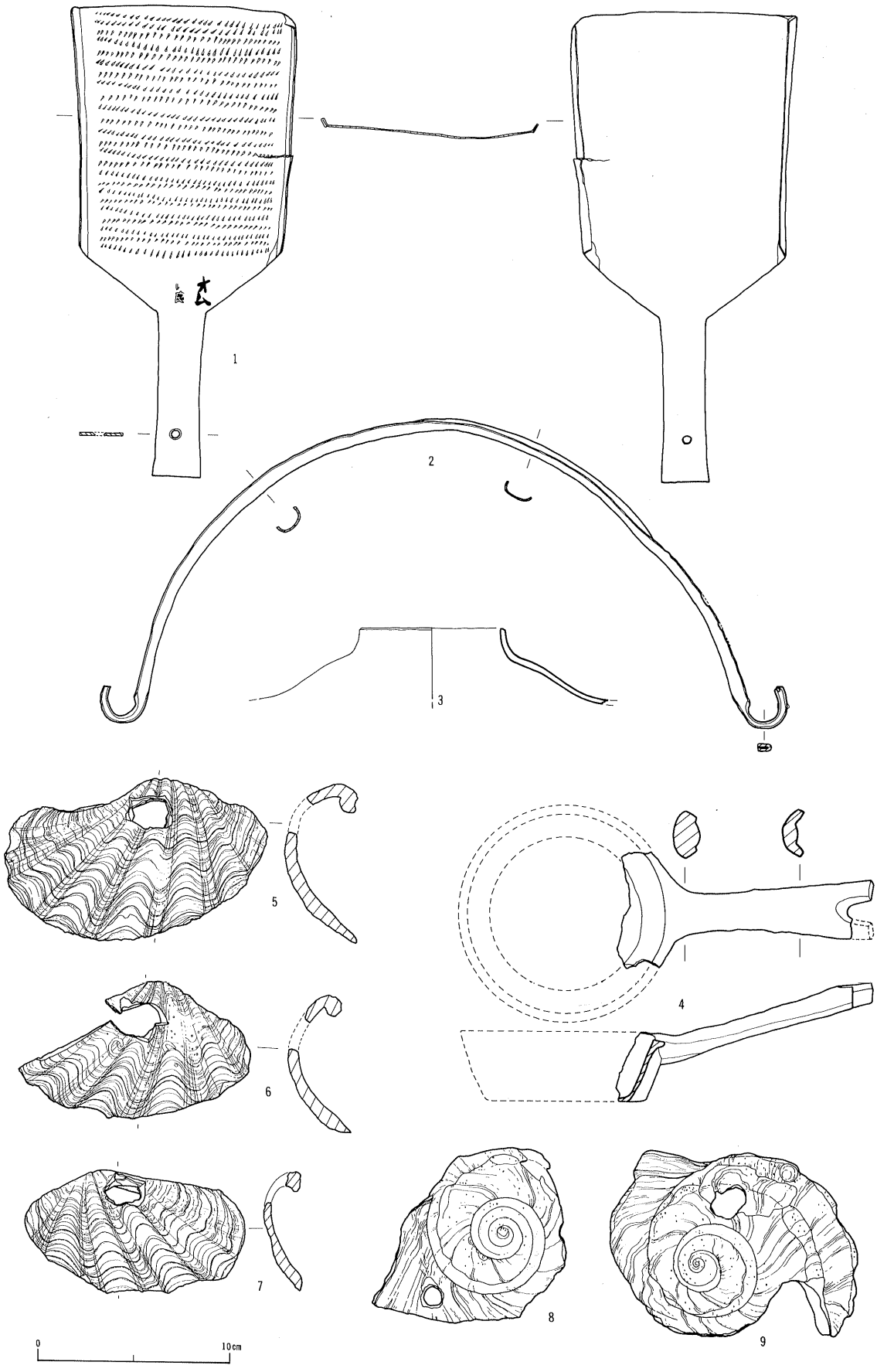
挿図	遺物No.	出土地点	利用製品	長(mm)	幅(mm)	釉色 表	釉色 裏	備考
第66図	1	旧石垣地区	陶器	35.0	38.5	黒色	黒色	裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	2	表土層	瓦片	38.0	31.5	灰褐色	灰褐色	裏に布目痕有り
〃	3	Cトレンチ	陶器	42.0	39.0	黒褐色	黒褐色	裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	4	表土層	瓦片	40.5	42.5	淡褐色	淡褐色	裏に布目痕有り
〃	5	Dトレンチ	陶器	40.0	41.0	黒褐色	黒褐色	裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	6	〃	〃	28.5	37.5	灰褐色	暗褐色	裏面より多く打ちかく
〃	7	表土層	瓦片	40.5	41.5	黒色	黒色	布目痕有り
〃	8	〃	〃	43.5	40.0	灰褐色	灰褐色	〃
〃	9	〃	陶器	45.0	40.5	黒色	黒色	裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	10	〃	〃	44.0	48.0	黒褐色	淡褐色	表面のみ施釉
〃	〃	〃	瓦片	41.0	49.0	燈褐色	橙燈色	裏に布目痕有り
〃	12	〃	〃	48.0	50.0	燈褐色	燈褐色	〃
〃	13	Cトレンチ	陶器	47.5	45.5	コゲ茶色	赤褐色	表面より打ちかく
〃	14	HトレンチIV層 10/20cm	瓦片	45.0	48.0	灰褐色	灰褐色	裏に布目痕有り
〃	15	Cトレンチ	陶器	48.0	48.0	黒色	暗褐色	表面に一部剝離の痕
〃	16	寒川右側トレンチII層	瓦片	79.0	65.0	灰褐色	灰褐色	裏に布目痕有り
〃	17	LトレンチIV層 0/10cm	瓦片	74.0	70.0	灰褐色	灰褐色	〃
〃	18	Cトレンチ	陶器	83.0	79.0	黒色	灰色	表面のみ釉を施す
第67図	1	HトレンチI層a	青磁	15.5	13.0	暗緑色	暗緑色	裏面より打ちかくもの
〃	2	〃 III層 0/10cm	〃	23.5	20.0	淡緑色	淡緑色	〃
〃	3	Bトレンチ	陶器	22.0	19.5	黒褐色	黒褐色	表面のみ釉を施す
〃	4	表土層	〃	21.0	21.0	燈褐色	燈褐色	土師質（素焼き）
〃	5	LトレンチIV層 0/10cm	〃	20.0	24.0	黒褐色	灰褐色	両面より打ちかく
〃	6	Hトレンチ	〃	21.5	25.0	緑黄褐色	燈褐色	表面なみ釉を施す
〃	7	LトレンチII層 0/5cm	〃	23.0	21.0	茶褐色	孔日色	裏面より打ちかく
〃	8	HトレンチIII層 0/10cm	青磁	23.5	25.0	淡緑色	淡緑色	両面より打ちかく
〃	9	表土層	〃	23.0	23.0	緑色	緑色	〃
〃	10	Dトレンチ	陶器	25.5	25.0	黄褐色	白・燈褐色	〃 表のみの陶器片
〃	11	HトレンチIV層 0/10cm	〃	29.0	29.5	灰褐色	暗褐色	
〃	12	表土層	〃	29.0	22.0	黒褐色	黒褐色	表面から打ちかき角を裏面より調整するもの
〃	13	〃	〃	22.5	22.5	白色	白色	両面施釉
〃	14	〃	〃	27.5	30.5	黒色	灰褐色	表面のみ釉を施す
〃	15	Bトレンチ	〃	29.5	28.0	黒褐色	黒褐色	裏面より打ちかかれたものである
〃	16	〃	〃	30.0	28.5	黒色	灰紫色	表面のみ釉を施す
〃	17	〃	〃	28.0	31.0	黒褐色	黒褐色	表面より打ちかかれたものと思われる
〃	18	表土層	〃	31.0	31.0	黒褐色	黒褐色	裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	19	CトレンチI層	染付(白磁)	30.0	30.1	白色	白色	表面に青色の染付
〃	20	表土層	陶器	36.0	34.0			裏面より打ちかくもの両面施釉
〃	21	CトレンチI層	〃	34.0	33.5	黒色	灰色	裏面より打ちかいて表のみ施釉
〃	22	表土層	〃	32.0	31.0	黒褐色	黒褐色	両面より打ちかくもの



第66図　円盤状製品



第67図　円盤状製品



第68図　1・2・4金属製品、3ランプのかさ、5～7貝錘、8・9夜光貝（有孔）

第13節　貝製品（第68図、図版79）

a　貝錘（第68図５、６、７）

僅かではあるが三例、完全形の貝錘が得られた。ほぼ同形、同大のシャコガイが利用され、殻頂部に裏面からの穿った粗孔が存在する。いずれも全体に著しく風化し白色になっている。

b　夜光貝の有孔品（第68図８、９）

厳密には製品とは呼びがたい、人為的痕跡が存在することから取り上げた。殻口側が破損した殻頂部側の貝殻で、その残された殻頂部に大きさが１～２cm大の小孔が一つ穿たれている。それら以外に図化しなかったものが数点ある。孔の部分は欠損しているが、貝そのものの個体数では75例検出されている。孔の部位は資料が少なくて規則的に同位置に穿つのかどうか、今のところ不明である。いずれにしても得られた貝は風化が厳しく器面の保持が悪い。

孔は緊縛用のものと考えられ、貢納品として当城に持ち込まれたものであろう。

第14節　プラスチック製品

a　留め針状製品（第56図28～30）

針金状の細いプラスチックを素材とし、女性の留め針状に、頭部を丸く枠をつくるように交差させ、その端部は針状に尖らせた製品である。素材は透明性が僅かに残り茶色を全体に帯びている。三例検出されている。大きさが二種認められる。

b　歯刷子（第56図27）

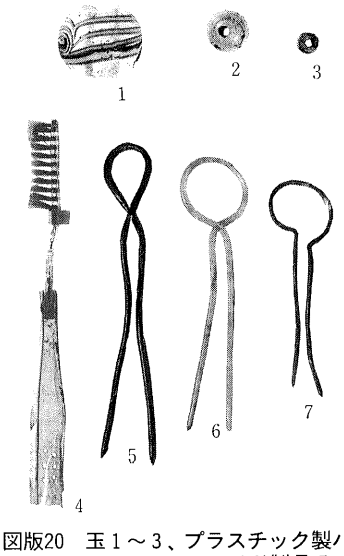
その素材がプラスチックからなるもので、図に示すようにブラシ側の柄が短く、その端部に折り込み式の柄とそのカバーにもなるようなケースを止め金で接続した製品である。大きさが全長約17.0cm。

留め針状製品　　プラスチック製品　　方量cm

第56図	全長(残存長)	厚(残存厚)	出土地点	
28	8.7	0.25	Eトレンチ I 層	
29	7.45	0.25	〃	枠の穴径1.4cm　ひずみがあり不明　全体にベッコウの茶色を施す
30	5.9	0.15	〃	ひずみがあり不明　〃

第15節　玉（第56図、図版20）

玉は３例得られている。第56図31は半分欠損した丸玉である。表面は風化し全体に白色を帯びるが、赤、青の曲線状の模様が認められる。大きさは径1.7ｾﾝﾁ、孔径0.4ｾﾝﾁ。表土層出土。　同図32も同様の丸玉で前者の資料より一回り小さい完形の資料である。色調は青色。径0.8cm、孔径0.2cm。Lトレンチ II 層10cm出土。同図33は形状が管をなした青色の小玉である。大きさは0.4×3.5cm、孔径0.15cmを測る。Lトレンチ II 層30cm出土。



図版20　玉１～３、プラスチック製ハブラシ４、セルロイド製品５～７

第Ⅶ章　結　語

この調査報告書は、首里城城郭等復元整備事業の一環として昭和59年度に実施した歓会門・久慶門内側地域の遺構調査の成果をまとめたものである。

発掘調査では、井戸及び井戸に伴う水利施設、石畳、石垣、石階段、暗渠形排水溝、石組遺構、水槽、上水道石管などの遺構と、土木普請の跡を止める造成地業などが検出された。また、遺物では輸入陶磁器、沖縄産陶器、土器、瓦類、塼、金属製品、骨製品、石製品、貝製品、円盤状製品、古銭、ガラス製品、プラスチック製品、自然遺物（脊椎動物・貝殻）等が出土した。これらの遺構・遺物についてはすでに述べた通りであるが、ここでは遺構・遺物とその時代について若干の所見を述べてまとめとしたい。

まず遺構については、ところどころ寸断されていたり部分的な破壊があったものの600分の１首里城平面図とほぼ同じような状況の遺構が検出された。前述したように首里城は、沖縄戦による戦禍を受けその後琉球大学による土地造成などもあって往時の遺構群がどの程度残っているのか、予想することさえ困難な状態であった(1)。発掘調査の結果は、石垣の根石の部分や石畳道、あるいは排水溝などが良く残り、遺構の空間的広がりや線形が前述の首里城平面図とほとんど合致していることが判明した。

首里城平面図は、昭和６年ごろ坂谷良之進氏によって作成されたものといわれ、その図面には昭和初期の首里城内における構築物の状況が詳細に描かれている(2)。図面上のスケールについても検出された遺構と細部にわたって比較検討したところ、実際の遺構との誤差が少なくかなり精密度の高い図面であるという確証が得られ、遺構を復元整備する場合にこの図面がかなり有効であることがわかった(3)。

検出された遺構でこの図面に描かれてない遺構といえば、①図面作成当時地下にあって地上では既に見ることができなかったものか、②後世に係る遺構で図面作成者が首里城に直接関わる遺構ではないと判断したものか、③図面作成後に造られたものかのいずれかである。①には石畳下に埋め殺されていた二つの排水溝や暗渠形排水溝、あるいは上水道石管及び石組遺構などの遺構があるし、②の遺構には水槽があり、③には第21図の石階段(4)や孔子廟(5)を建てた際に造られたコンクリート製の階段および排水溝などがある。

井戸は寒水川井戸と呼ばれる湧泉式の井戸が一基検出された。この井戸は首里城の地下から湧き出る水を石の樋をつたわって方形状の井戸に溜まるように工夫されたもので、瑞泉門の前にある龍樋と形式的に類似したものである。井戸枠に漏水防止等を施して城内の水を賄い、余水は排水溝を伝わって、城下の円鑑池や龍潭池に流れ出るように工夫されている。

寒水川井戸に伴う排水溝は、遺構の重複，遺構間の切り合いなどから第22・25図にみるように２→３→１の変遷を辿って最終的に今日のような排水溝になったことが明らかになった。ところで、これらの排水溝は寒水川井戸との関係でつくられたものであることから最初に造られた排水溝と寒水川井戸とは、当然同時代だということになるのである。ところがこれらのことについて調べる目的で設けられた発掘トレンチからは時代を特定できる遺物は出土しなかった。

つぎに上水道石管についてであるが、この遺構は龍樋の水を石垣や石畳道の下を潜って久慶門の両脇に取り付けられた石樋から流れだすように工夫された施設で、水に対する首里王府の考え方が如何に濃やかであったかと言うことを知ることのできる遺構の一つである。敷設の時期は、石管の素材に鹿児島産の凝灰岩が使用されていることから考えると島津の琉球侵入（1609年）以後に造られた可能性が強い。

石垣や石畳はところどころ寸断があるものの、その面的広がりや線形については首里城平面図と照合し

ながら復元が可能である。ただ石垣については根石を僅かに残すのみであり、往時の高さを復元するためには戦争前の状況を良く知っている人々から、聞き取り調査をしていく以外に方法がないであろう。

石組遺構はその用途が何であったか判然としなかったが、かなり古い時期に造られたものであることが分かった。このような石組遺構は、首里城正殿跡からも数多く検出されており(6)、現状ではいろいろな機能が考えられるが、今回の石組遺構については寒水川井戸に伴う排水溝と近接した位置にあることから貯め枡のような施設として考えることも可能であろう。

その他の遺構としては水槽や各種の石階段などが検出された。前述したように水槽と孔子廟に伴う石階段は後世に造られたものであり、首里城と直接関わらない遺構である。石階段の中でも特筆すべき遺構は、瑞泉門に至る石階段である。この石階段は、上部の方が破壊されていて上部構造の状況をつかむことはできないが、下部遺構が残っており石畳道や袖石垣との取りつけ部について知ることができる。残存する遺構で見ると、階段の最初の蹴上げ部分が歓会門から延びてくる石畳道の下層に潜り込んでいることがわかった。このような状況は、石階段と石畳道の新旧関係を表したものであり、石階段が出来た後に新しく石畳道が出来たことを物語るものである。この遺構の新旧関係は、よく言われているように外郭部分が新しく拡張される前まで瑞泉門が首里城第一の門であった可能性を示唆するものである。

以上検出された遺構について述べてきたが、これらの遺構は全て石造構造物である。我々は、琉球石灰岩を巧みに利用して造られた井戸、石垣、石畳道、溝、石組遺構、石段等々検出された遺構群を通じて、琉球における石工技術の粋を垣間見ることができる。

ところで、もともと城外であったこの地区に石垣を張り巡らし外郭として拡張された時期は何時であり、その意義は何であろうか。鎌倉芳太郎、伊東忠太の両氏は、この外郭の拡張について首里城の第二次拡張として捉え、その時期を第二尚氏の初め、尚真、尚清の時代だと考えた。さらに外郭拡張の意義をもっぱら第一次拡張の内郭部分の補強という土木技術的視点から説明し、両氏の共著『南海古陶瓷』（寶雲舎発行昭和12年）の中で次のように述べている。「正徳14年（西紀1519年）築造の園比屋武御嶽石門に比較して見ると、築造形式の上からも、歓会門より久慶門に連なる城壁は、その頃のものであろうと観察される。又重量的に地盤の安定ということを考えてみても、城内の埋立地を支える歓会門付近の城壁の重量に対して、園比屋武御嶽を中心とする前記安国山南面の石墻は、非常に重要な役割を持つことになる。恐らくは、第一次拡張城壁の補強の為に、歓会門付近の城壁を築造したものであろう（36頁）」。確かに歓会門や久慶門を伴う外郭の拡張は、その上に展開する内郭城壁の地盤を重量的に支えるという土木技術的意義があったことは否めないが、しかし、それよりまして重要なことは、城内に貴重な水場を取り込むことと、石造拱門を初めて首里城の城門に採用することによって城の防御を堅固にするという城郭建築上の意義があったことを見落としてはいけないと思う。

拡張の時期についてはどうであろうか。発掘調査の結果は、この外郭部分が拡張されたと言われる尚真王から尚清王代すなわち15世紀の後半から16世紀にかけての遺物は全く見出すことができず、逆に14世紀に属する輸入陶磁器（第27～29図、図版41～43）が圧倒的に出土した。このような事実は、これまでの尚真、尚清代外郭拡張説に再考を促すこととなり注目される。

遺物は輸入陶磁器や壷屋焼等の沖縄産陶器を主体に、首里城内の建造物に使用された瓦類や塼、龍樋の傍らに建てられていた各種の石碑の破片、古銭、後世のガラス製品やプラスチック製品など多種多様である。これらの遺物は戦後の盛土整地層からの出土が大多数であり、琉球大学キャンパス造成の際に城内各所からブルトーザーによって押し寄せられてきたものがほとんどであった。その点今回の発掘調査では、

検出された遺構と直接的な関わりを持つ遺物が非常に少なかった。とはいえ、出土遺物のほとんどが中世から近世にかけての首里城と関わる遺物群であり、今後の首里城解明に大きく寄与するものとなろう。中でも輸入陶磁器の場合に限って言えば、そのほとんどが外郭造成地業直前の遺物包含層から出土しており，遺物の時代幅が14世紀に限られるという事実から外郭拡張の時期を14世紀代としてある程度予想できたことは今回の調査の大きな収穫であった。

首里城内にある構築物とくに正殿を中心とした建造物は、今度の戦災を除けば過去三度にわたる火災に見舞われたことが文献記録に記されている(7)。最初の火災は1453年の志魯・布里の乱の時である。二度目の火災は、1660年尚質王の時で、そのときには王府財政が苦しかった事もあって、焼失後11年もたって再建されたといわれている。正殿の屋根が板葺きから瓦葺きに変わったのもこの時期であった。三度目は1709年尚貞王の頃で、三年後の1712年、尚益王の代になってから薩摩から贈られた木材などを使ってようやく再建されたといわれている。今回の発掘調査では、焼失時のものと見られるものは一点も発見されず、これらの焼失の記録を裏づけるような遺物、遺構については全く手掛かりが得られなかった。いずれにしても、今回は、歓会門と久慶門に挟まれた狭い範囲に限られた調査ではあったが、多数の遺構、遺物を検出することができ、首里城解明の第一歩が踏み出されたことは大きな成果であった。首里城はいうまでもなく、第一尚氏、第二尚氏の居館であったばかりでなく、およそ500有余年にわたって琉球王国の政治、経済、文化の中心的役割を果たしてきた城である。そういう意味で、沖縄史を解明していく上で首里城の調査は非常に重要であり、今後の調査が大きく期待されるところである。

最後に、今回の調査の成果を踏まえて実施された当該地域における遺構の復元整備が、四年の歳月を経て昭和63年３月に完成をみたことを報告しておく。

注

(1) 1951年（昭和26）２月12日琉球大学開学式が行われた。

(2) この図面は昭和６年ごろ、首里城正殿の解体修理のため来沖した文部省の文化財担当技官だった坂谷良之進氏が作成したものである。仕様は79×108cm、１枚、彩色、600分の１、沖縄県立図書館所蔵。

(3) 昭和59年度から昭和62年度にかけて行われた首里城城郭等復元整備は、実際にこの図面を参考に復元された。

(4) 史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査委員会『史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査報告書』沖縄県教育委員会、昭和51年11月。

(5) 1934年（昭和９）11月着工し、翌年の５月に竣工した。

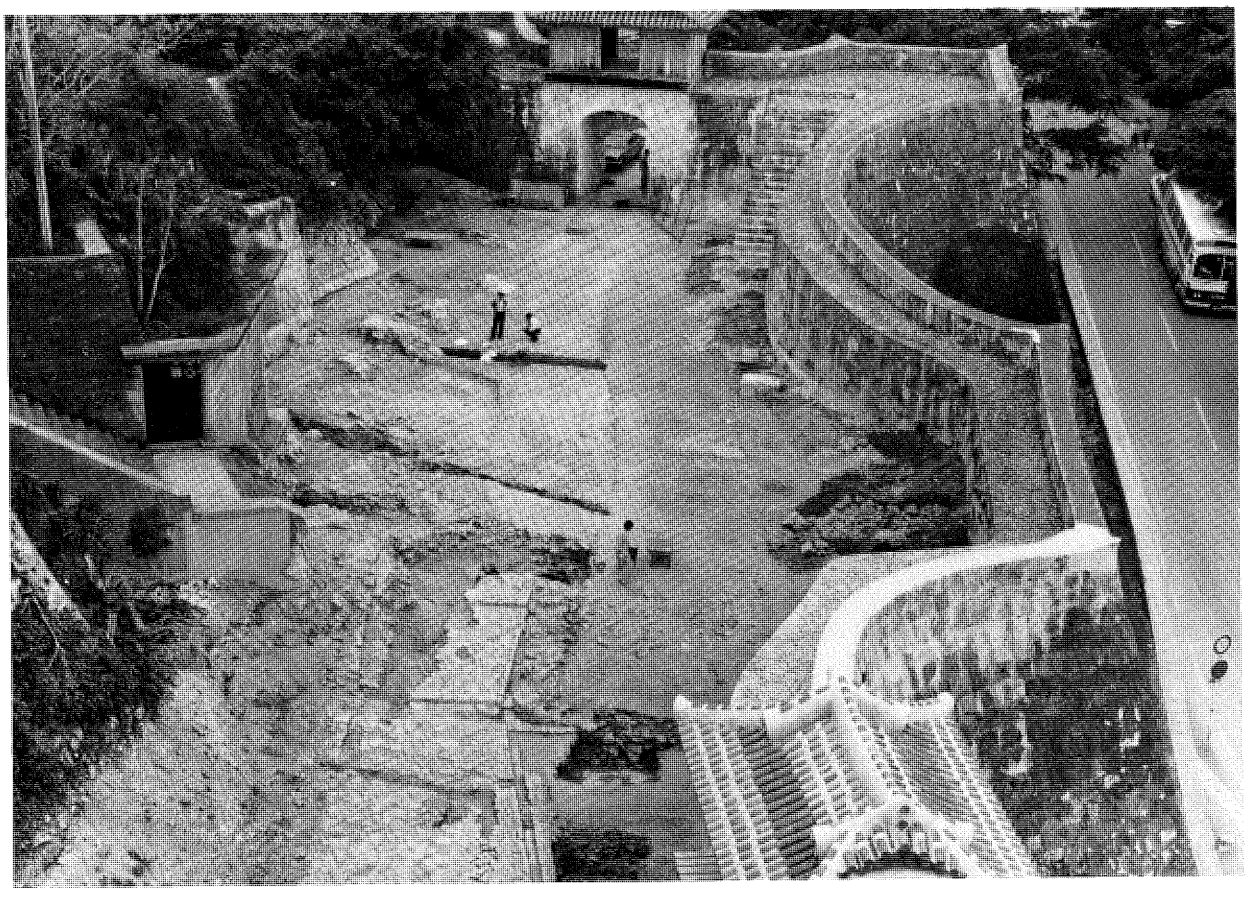
(6) 『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会、昭和61年３月。

(7) 球陽研究会『球陽』角川書店、昭和49年３月。

首里城関係年表

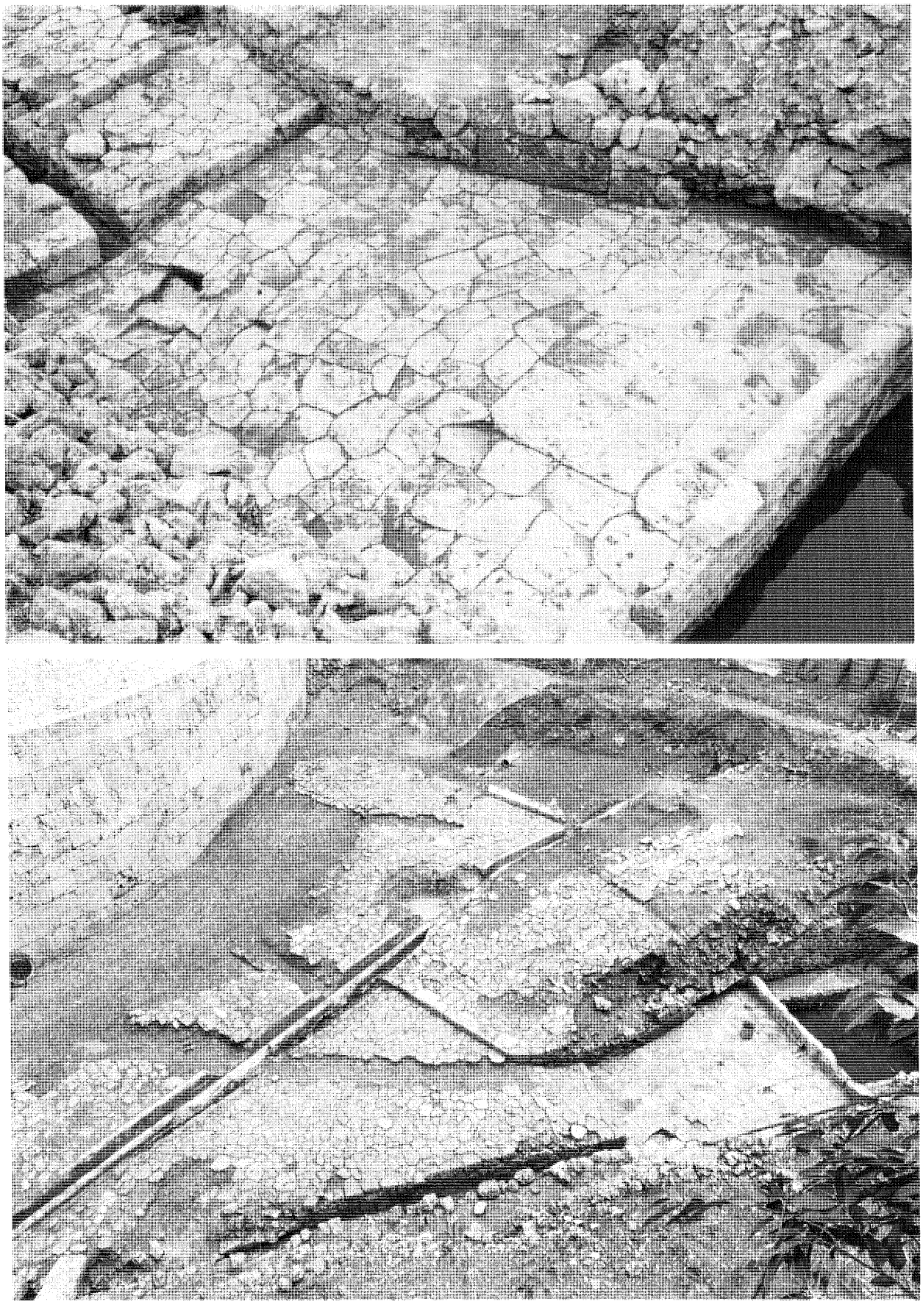
西暦	王　名	首里城関係事項
1406	尚思紹 1	尚巴志武寧王を討ち父思紹を王にたてる
1427	尚巴志 6	竜潭を掘り安国山を築く
1453	尚金福 4	志魯・布里の乱が起こり、首里城炎上
1470	尚円 1	第二尚氏王統が始まる
		首里城歓会門、久慶門創建（尚真王代）
1494	尚真 18	円覚寺の宗廟（御照堂）建立
1501	〃 25	玉陵を築く
		首里城北殿創建（正徳年間）
		首里城守礼門創建（嘉靖年間）
1546	尚清 20	首里城東南の城壁工事完成
1609	尚寧 21	慶長の役　薩摩軍侵攻
	尚豊	首里城南殿創建（天啓年間）
1660	尚質 13	首里城正殿焼失
1671	尚貞 3	首里城正殿の再建工事始まり、瓦葺に建て改められる（竣工72年）
1677	〃 9	東苑（御茶屋御殿）創建
1709	〃 41	首里城正殿、南殿、北殿焼失
1729	尚敬 17	首里城正殿重修される
1739	〃 27	漏刻門前に日時計を置き時刻を計る
1753	尚穆 2	首里城内に寝廟殿、世添御殿を創建
1768	〃 17	地震の被害にあった首里城正殿を重修
1846	尚育 12	首里城正殿重修
1853	尚泰 6	ペルリ提督来琉首里城訪問
1857	〃 10	中城御殿（世子殿）を当蔵へ移転する
1879	（明　治12）	首里城明渡し。熊本鎮台分遣隊駐留
1909	（　〃　42）	首里城跡、首里区に払い下げる。
1924	（大　正13）	沖縄神社創建し正殿を拝殿とする
1925	（　〃　14）	正殿国宝指定
1933	（昭　和8）	歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門等国宝指定
1945	（　〃　20）	首里城の建物・石垣等、沖縄戦で焼失

図版21　調査前と着手時　上：久慶門下から歓会門側を望む。　　下：歓会門側から久慶門側を望む。

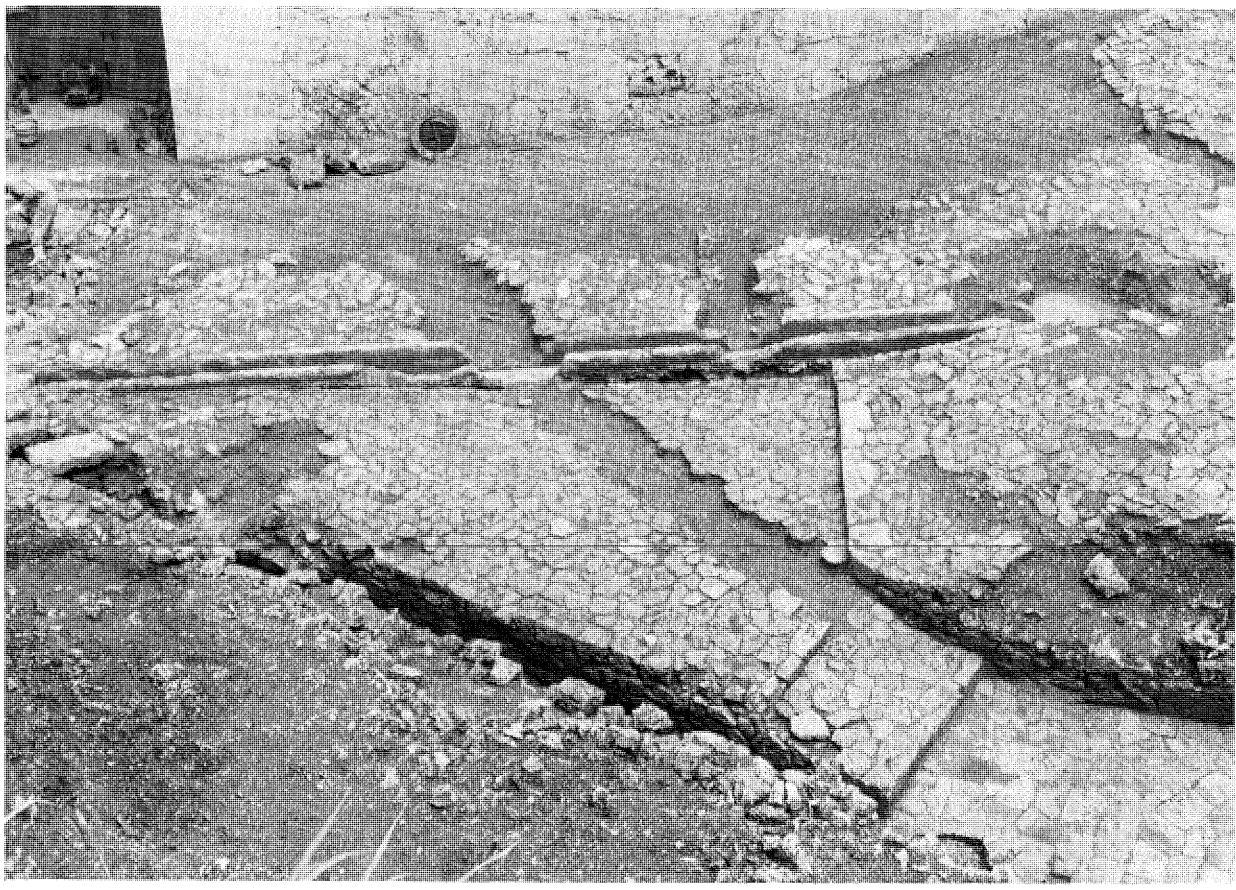


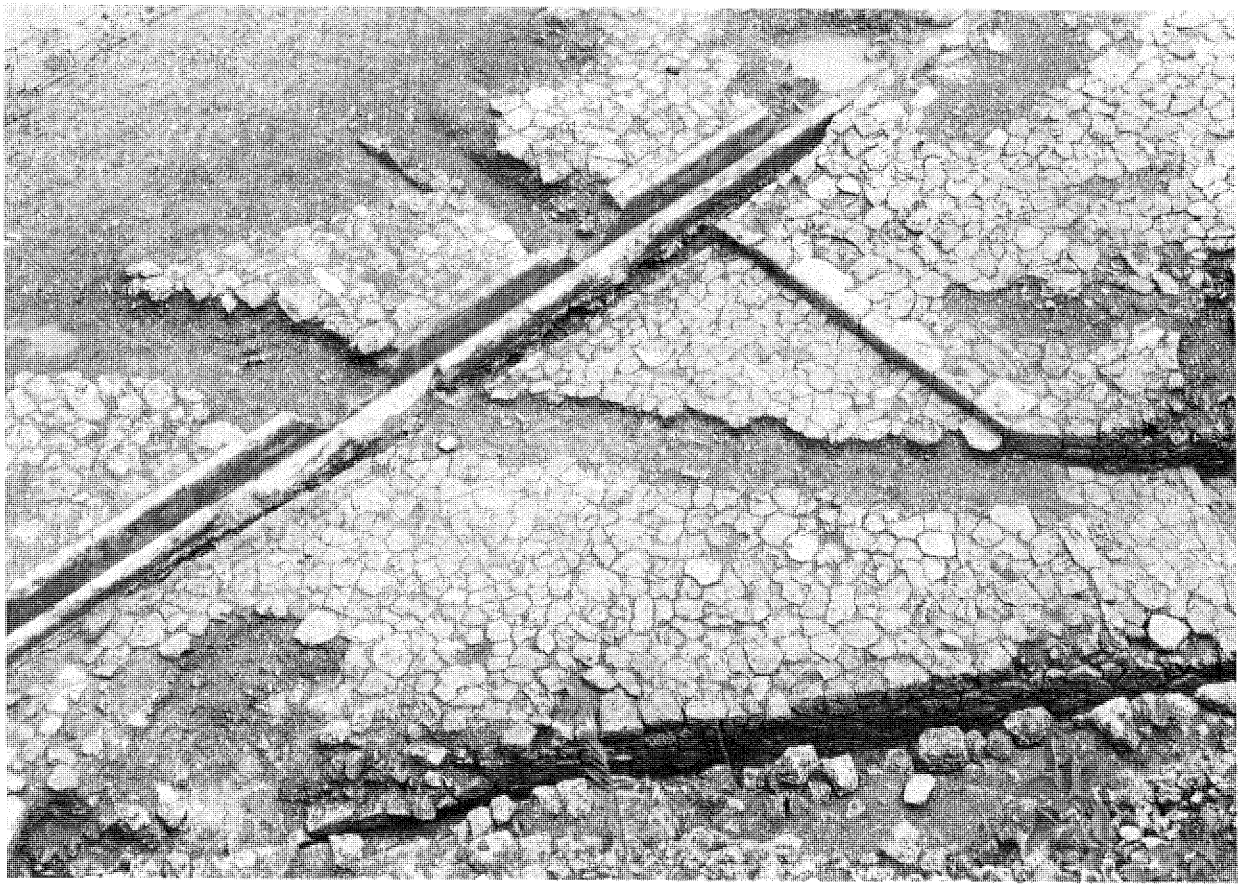
図版22　調査地近景　上：歓会門内側地域　　下：久慶門内側地域

図版23　寒水川井戸　上：寒水川井戸南側より望む。下：井戸内の水をくみ出した状況



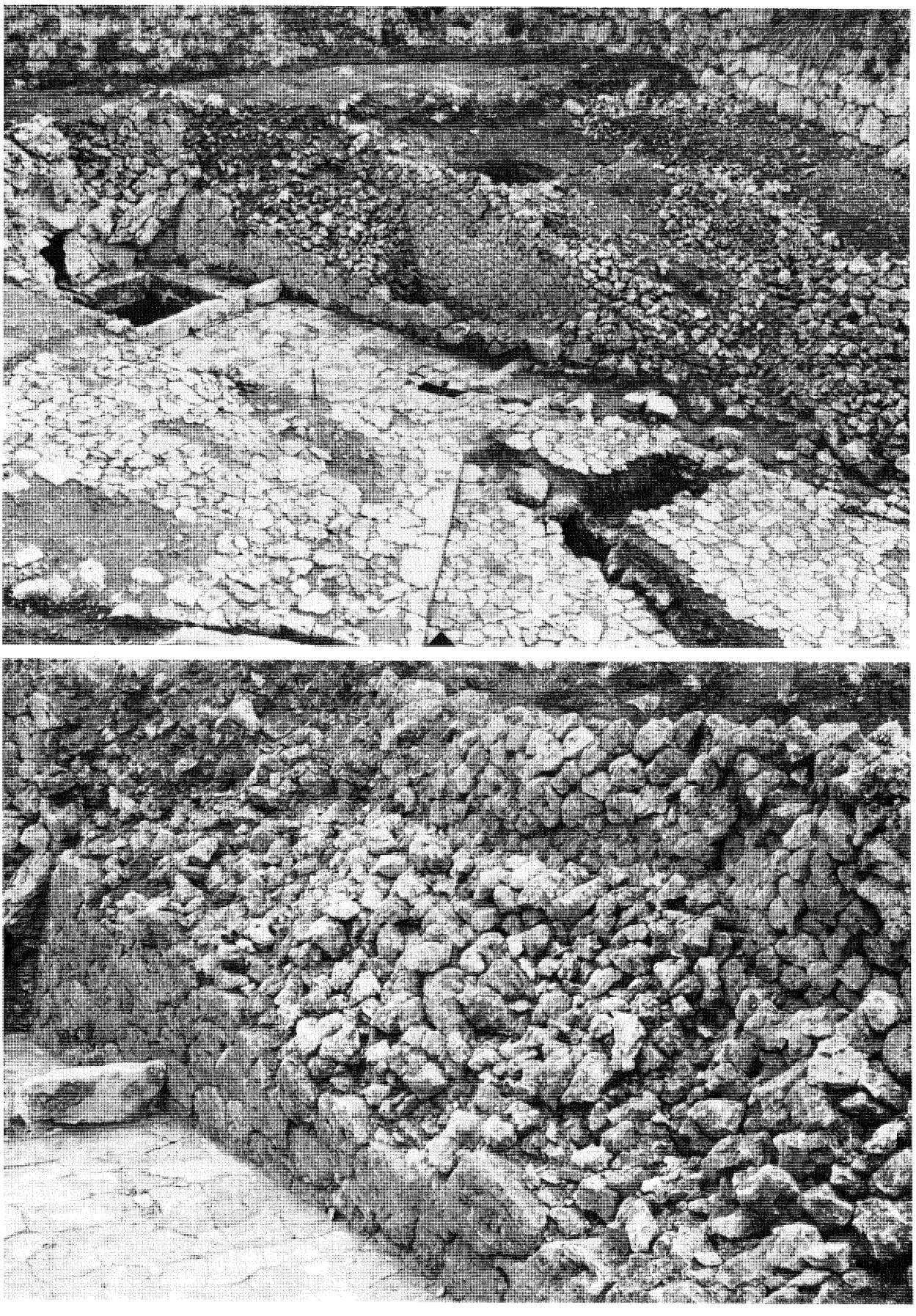
図版24　上：寒水川井戸前方の石畳　下：寒水川井戸地域の石畳



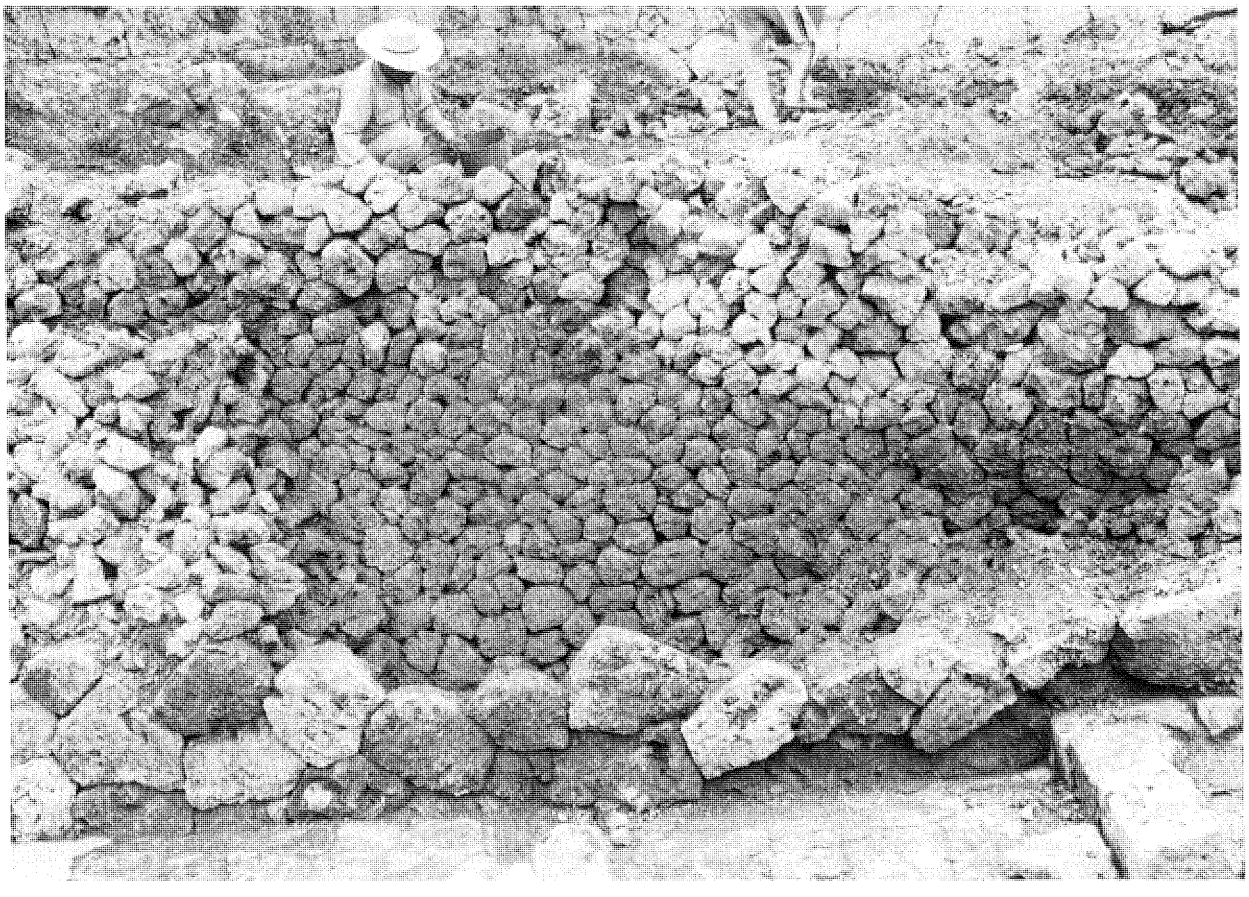


図版25　上下：久慶門前を横切って右脇門に向かう石畳

図版26　上下：孔子廟前の石畳とコンクリート製階段

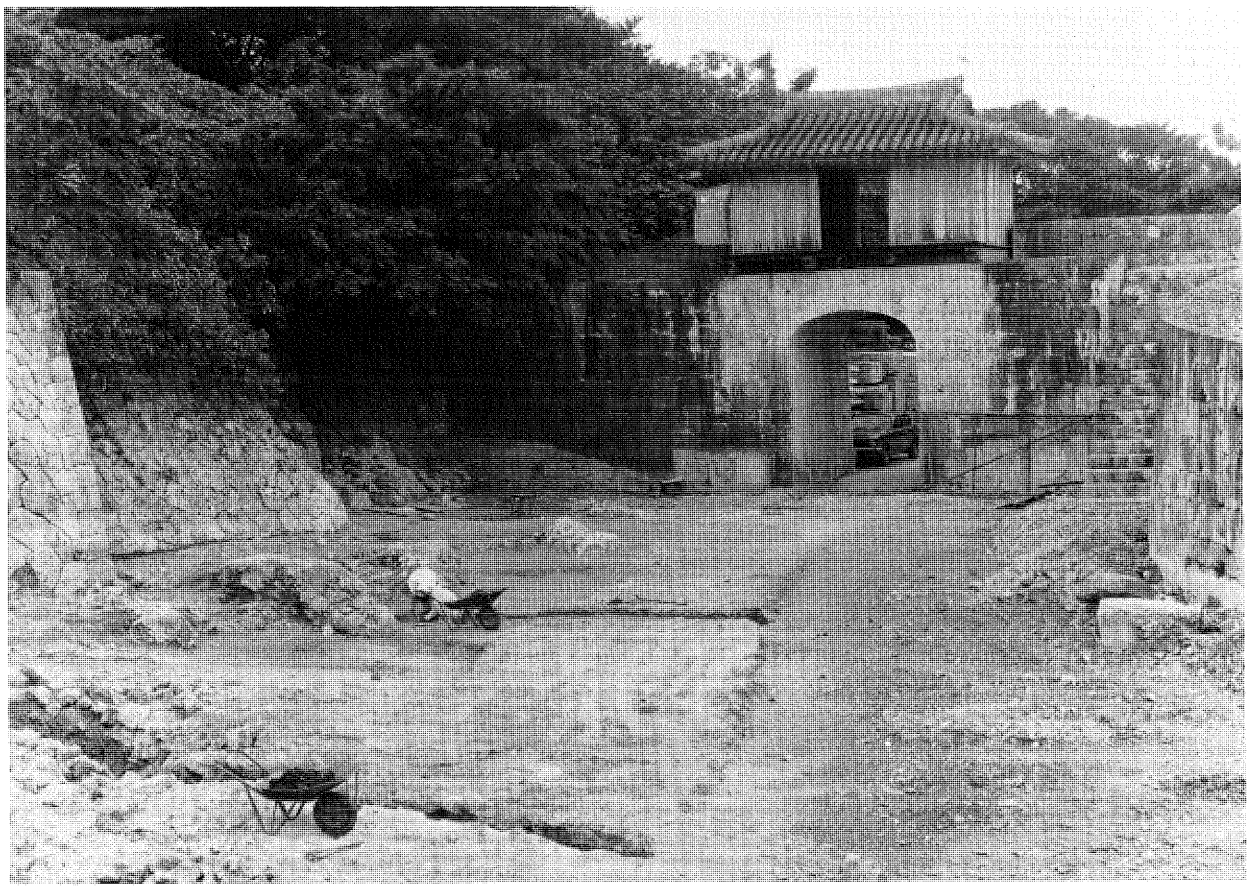


図版27　上：調査区南側土留石垣　　下：寒水川井戸地域の南側土留石垣

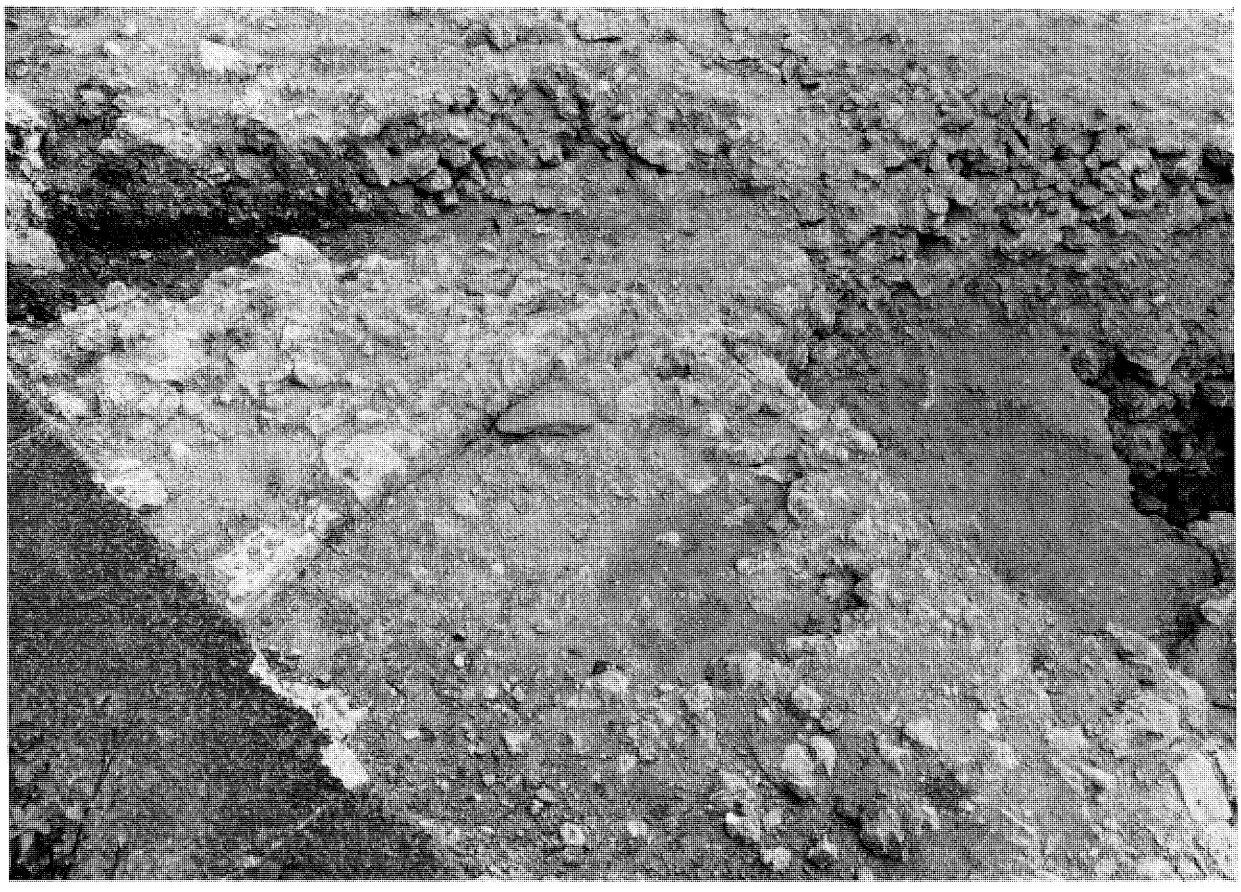


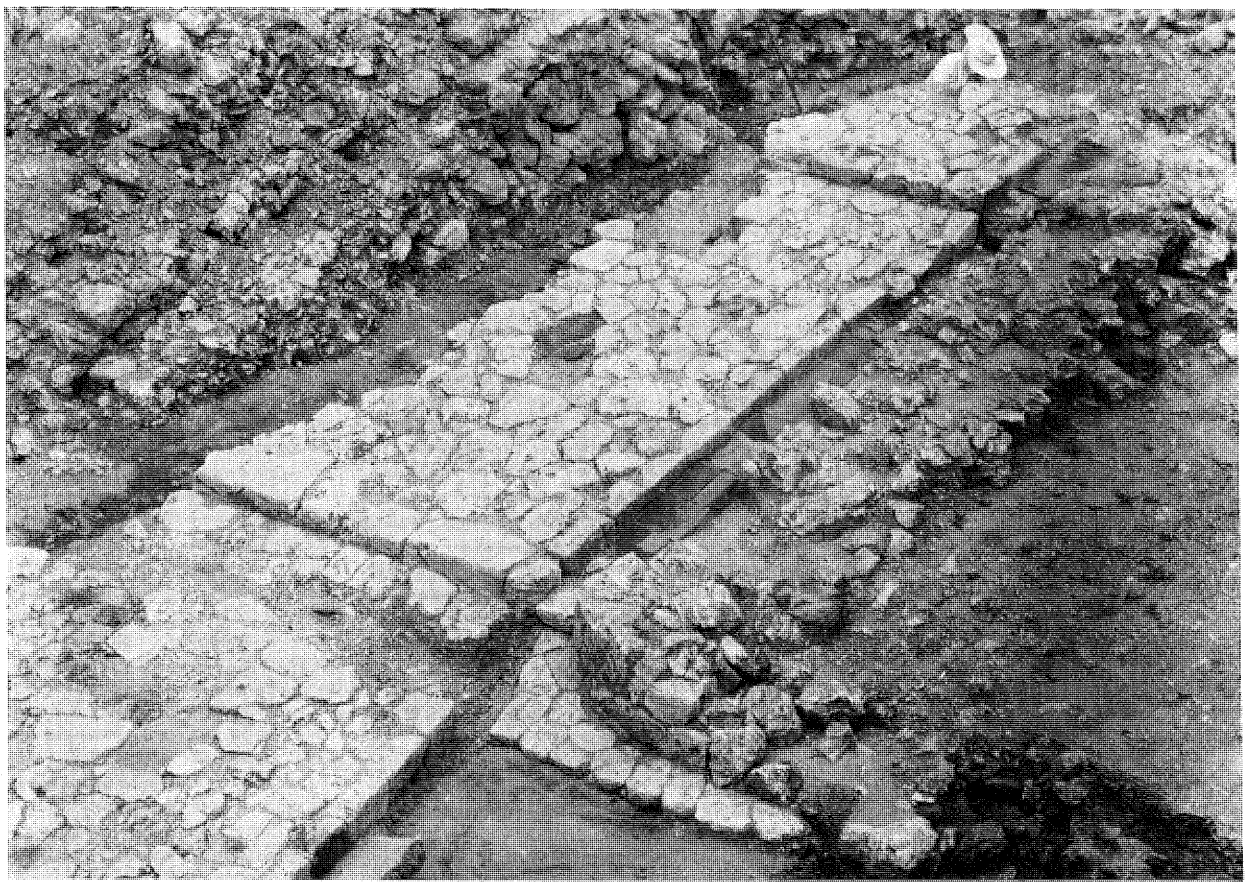
図版28　上：寒水川井戸正面石垣　下：寒水川井戸南側土留石垣

図版29　石垣　上：久慶門東側土留石垣
　　下：久慶門西側土留石垣と隣接するコンクリート製水槽　（2号水槽）

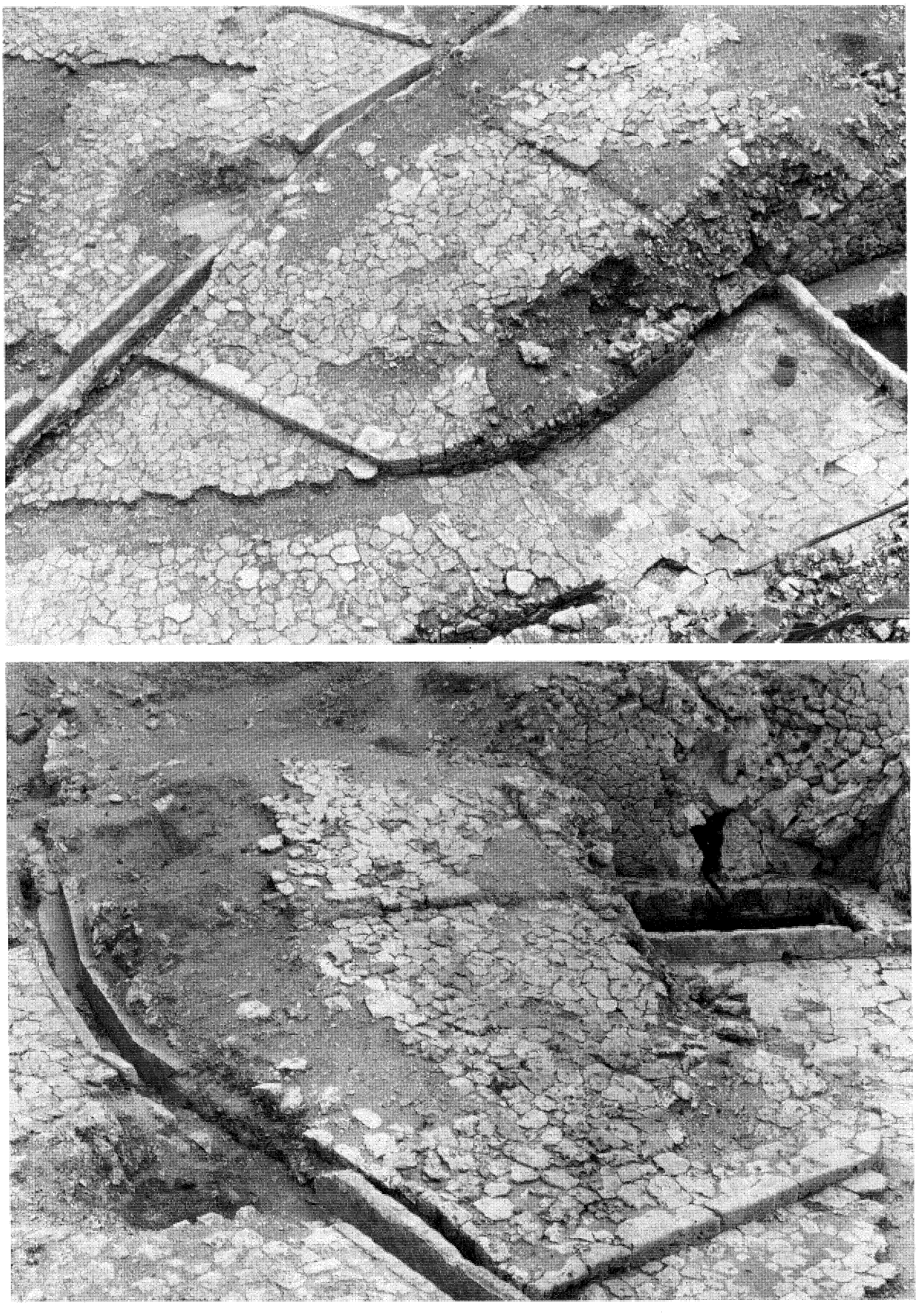


図版30　上：歓会門内側地域の調査状況　　下：歓会門内側の南脇石垣



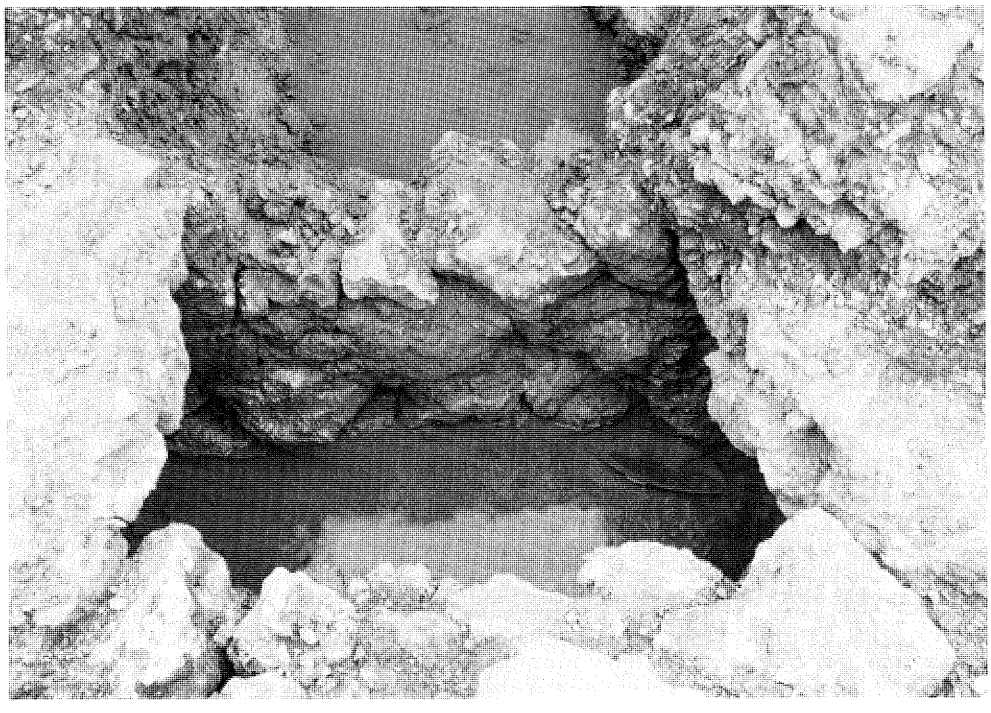


図版31　上：瑞泉門に上がる階段根石　　下：歓会門～久慶門に至る石階段



図版32　上下：久慶門の前から寒水川井戸の脇を通る石階段

図版33　上：久慶門前の石畳、排水溝　　下：寒水川井戸前の石畳、排水溝

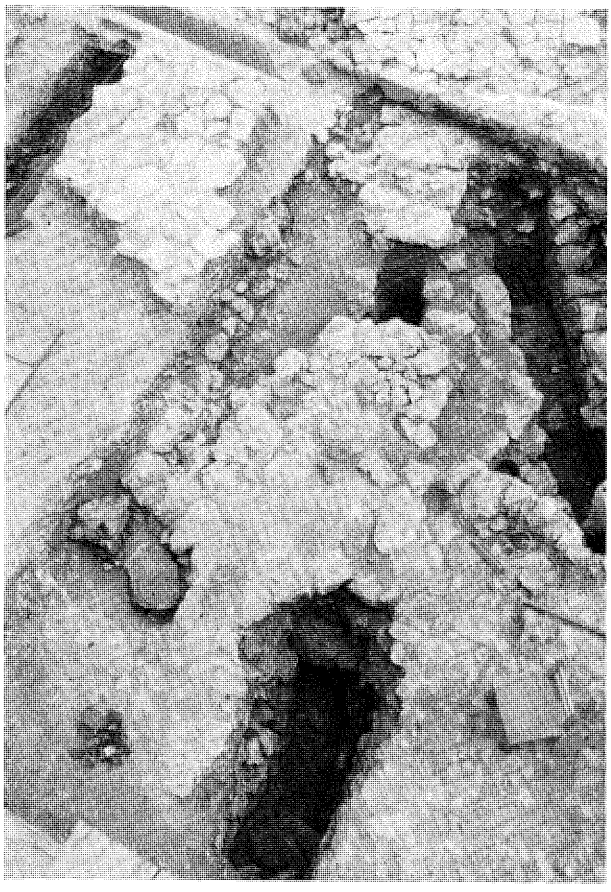


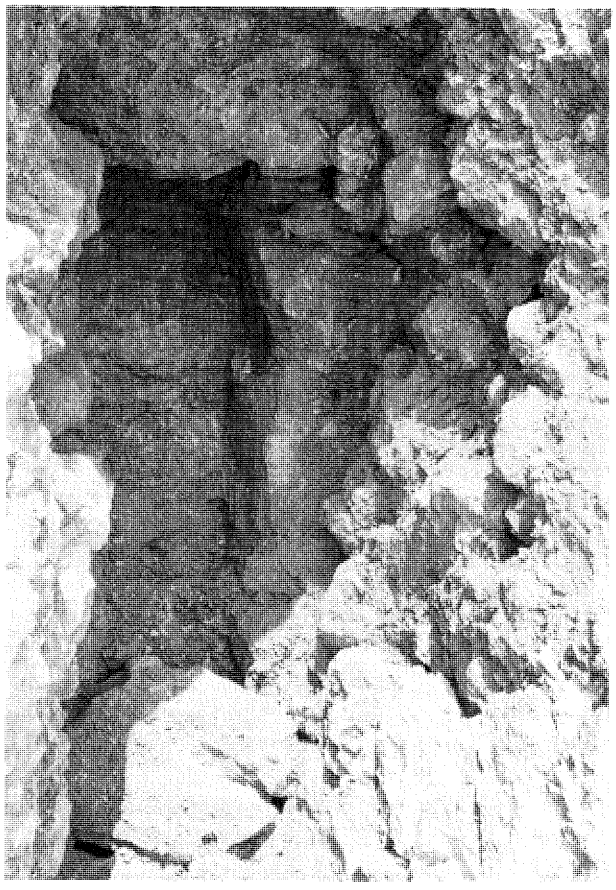
上左：排水溝２号遺構の検出中

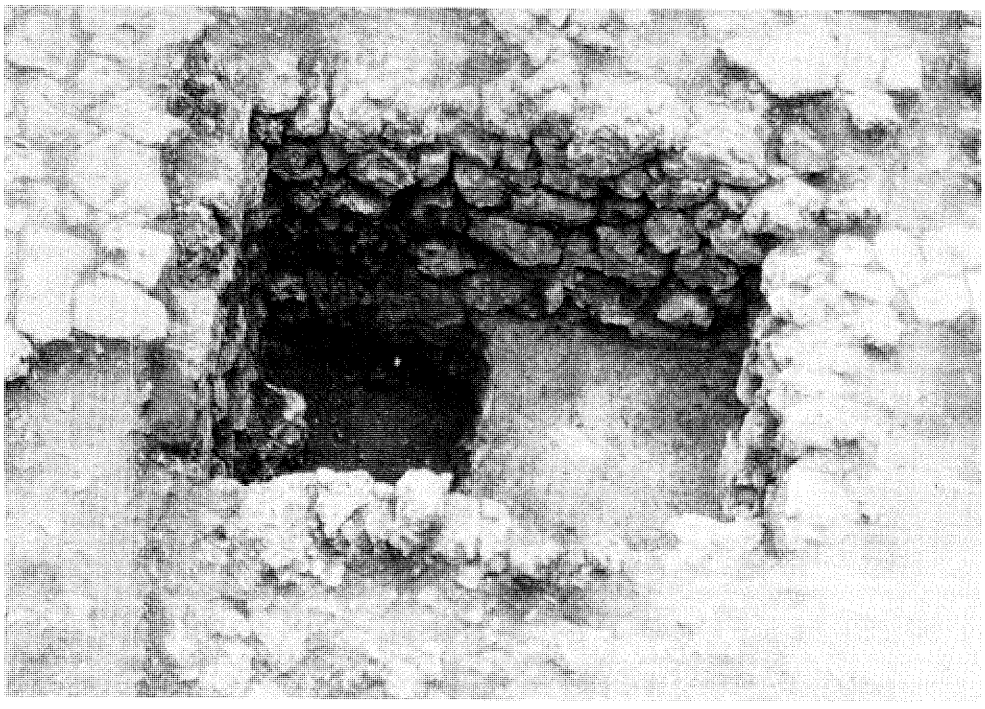
上右：２号排水溝

左：寒水川井戸近の石畳
下３号排水溝

図版34　排水溝





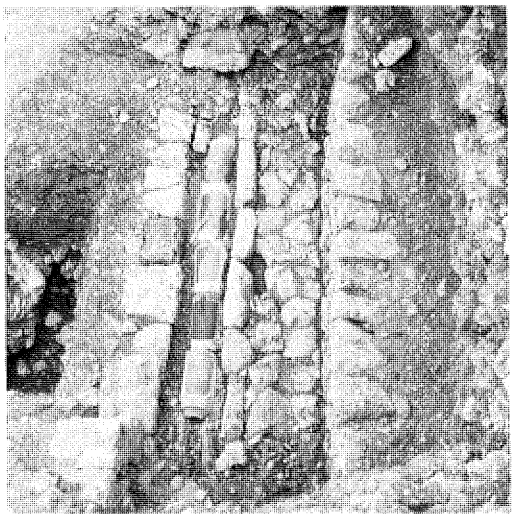


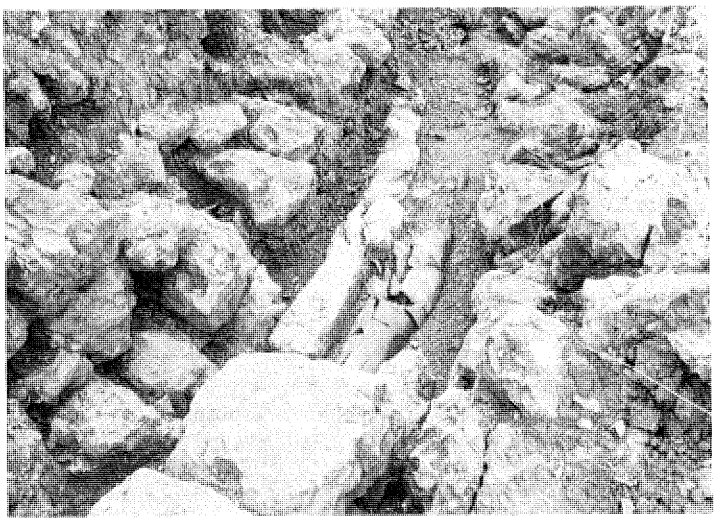
上左：排水溝３号

上右：城壁下にみちびかれる３号排水溝

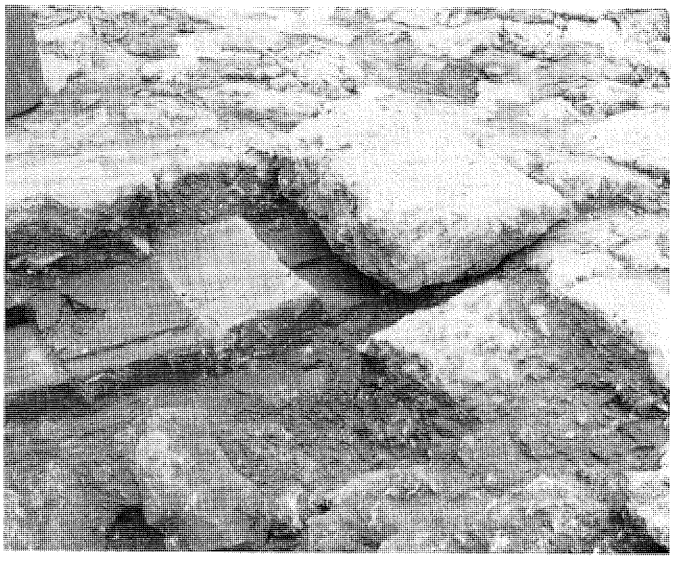
久慶門前に検出された石組遺構
床面の断割調査中

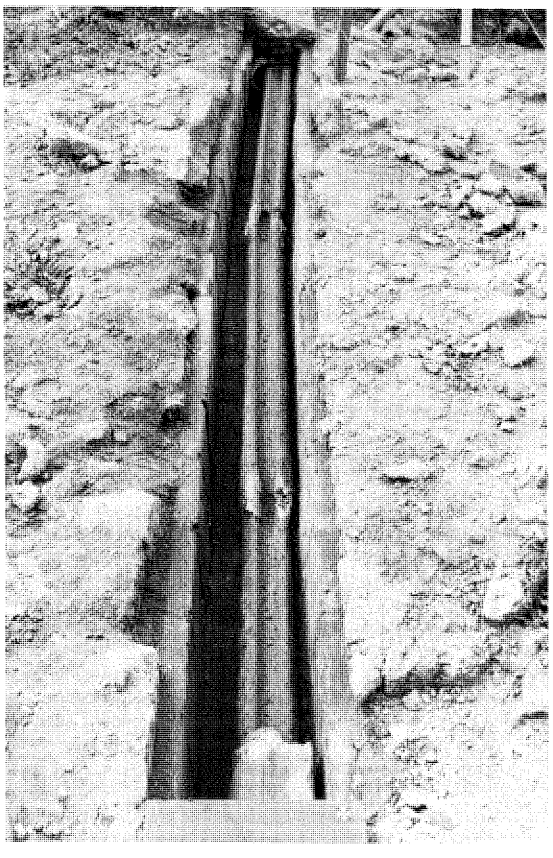
図版35　排水溝

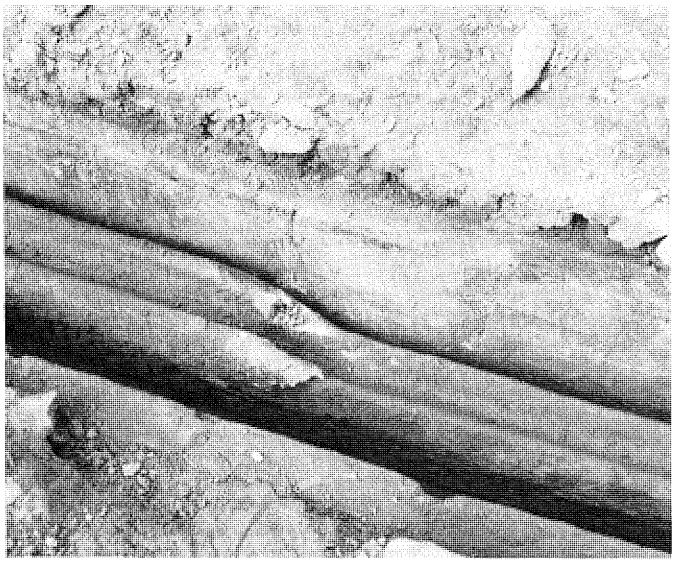




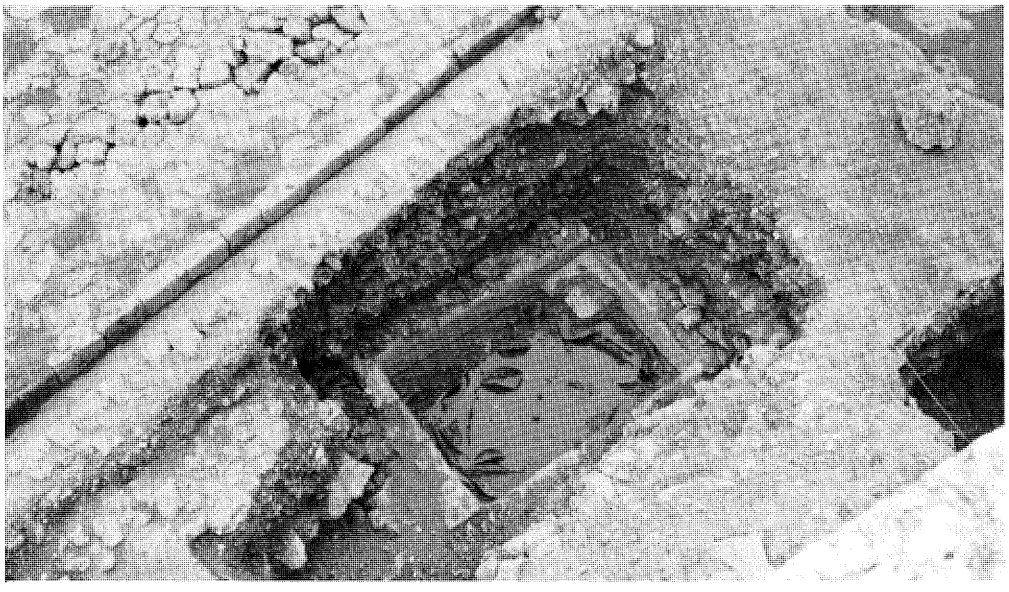
図版36　調査地区南側土留石垣裏に検出された上水道石管施設



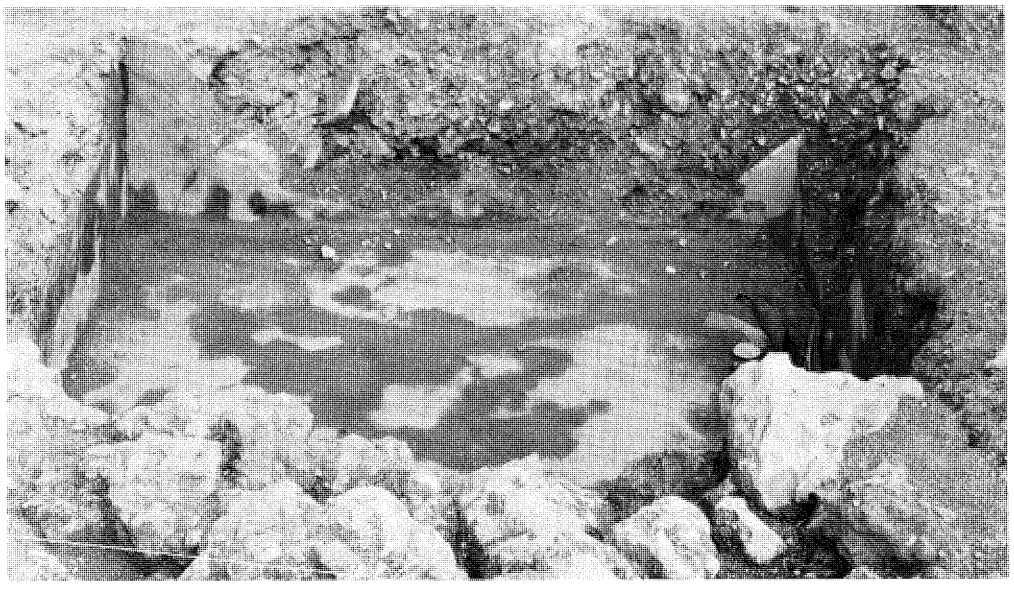




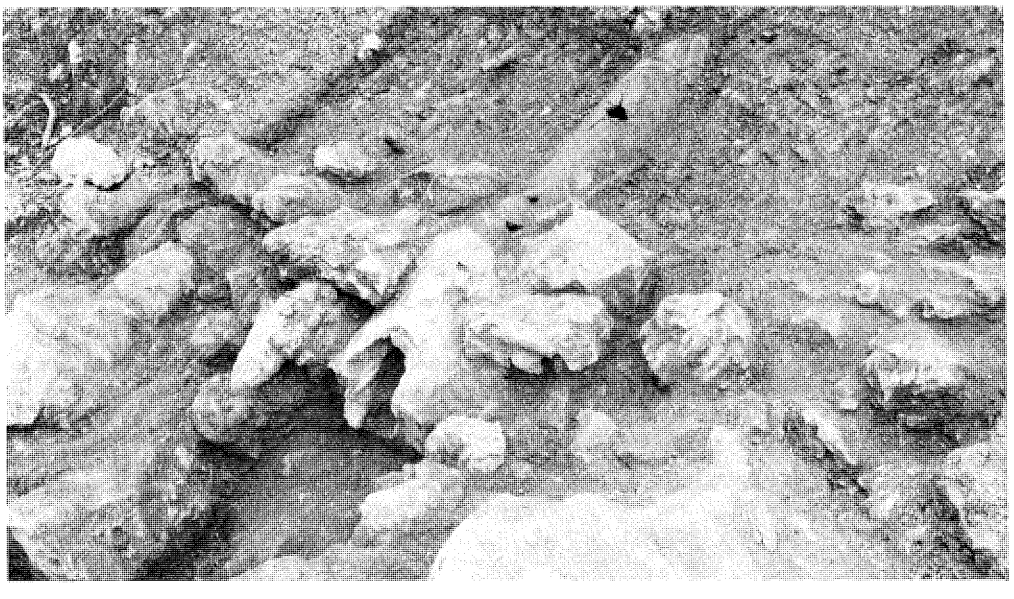
図版37　久慶門前石畳下に検出された上水道石管施設



1号水槽

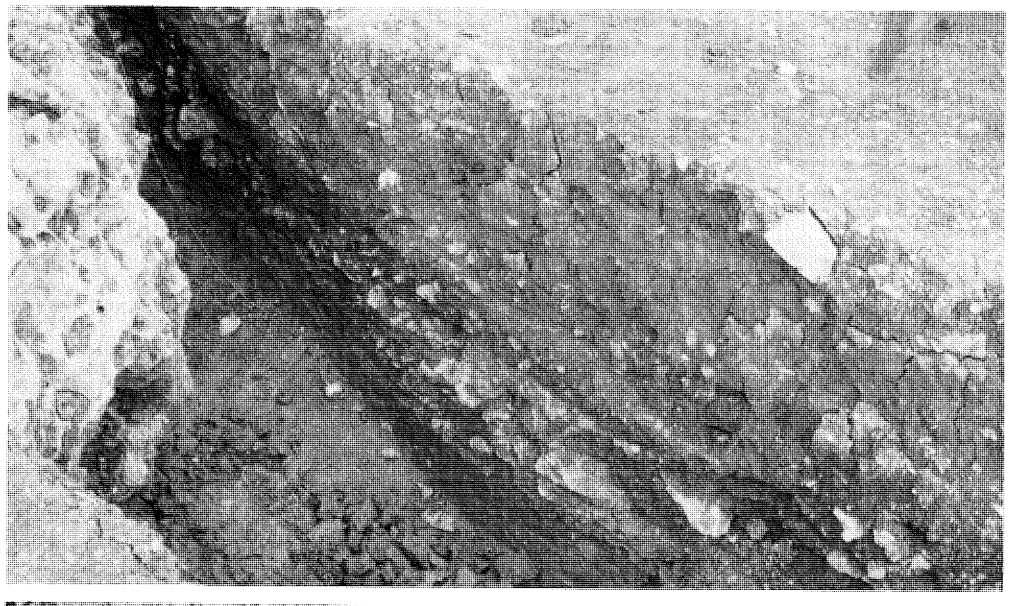


2号水槽

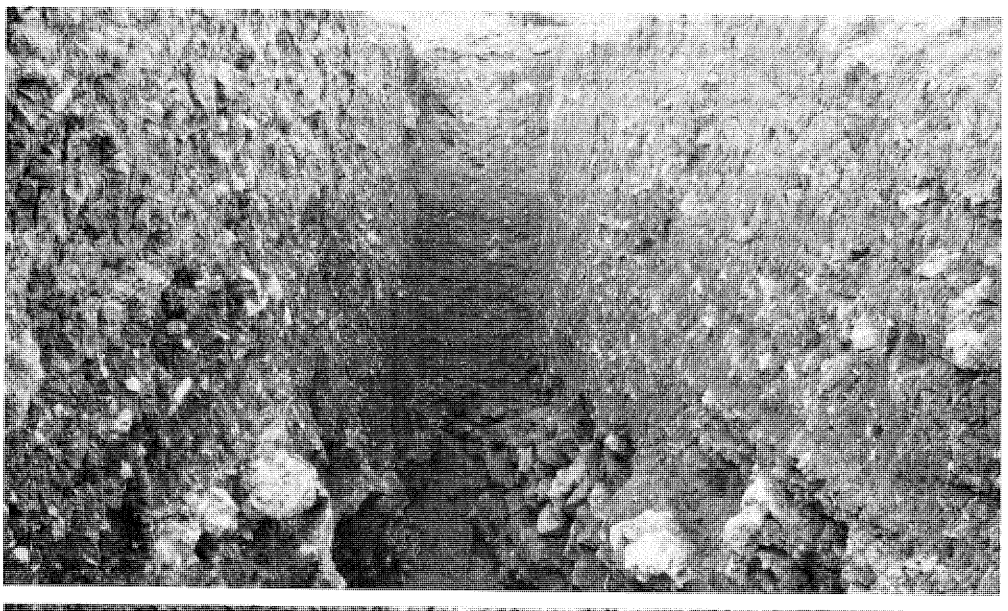


龍泉から1号水槽にみちびかれている陶管

図版38　水槽と陶管



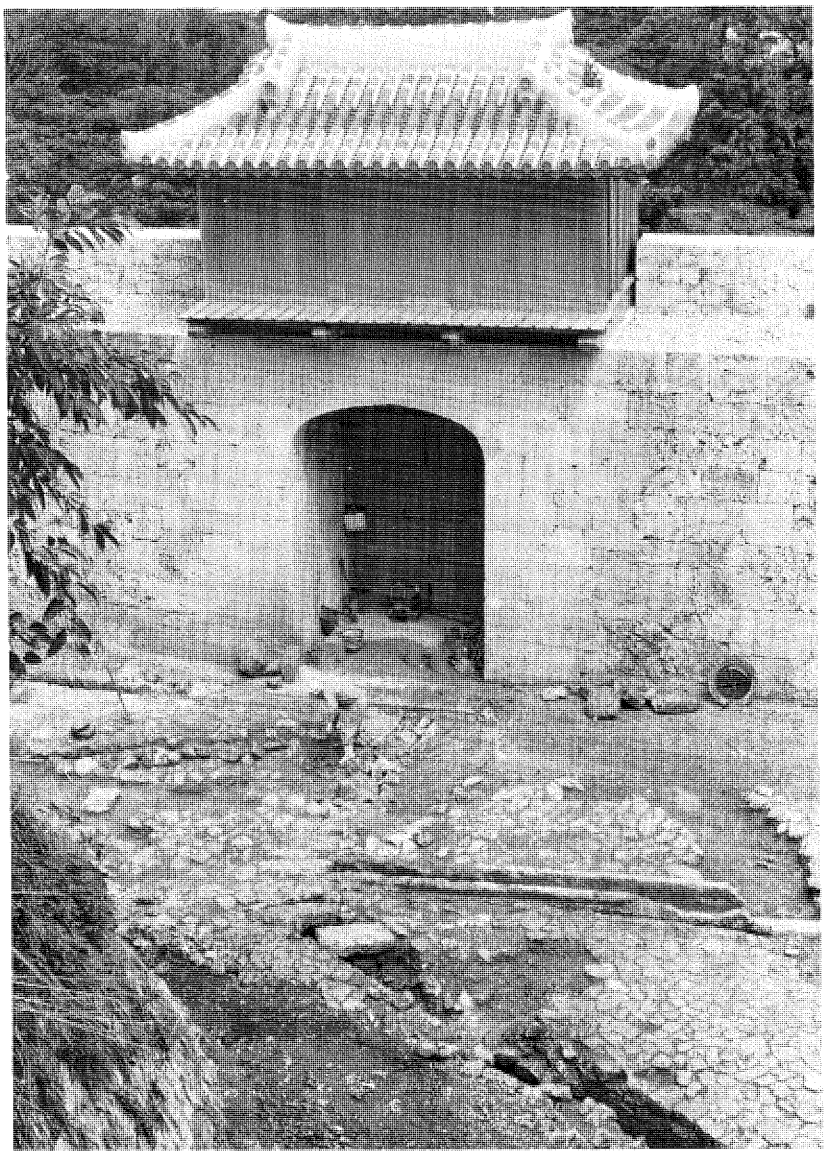
Hトレンチ南壁



Hトレンチ北側壁
上位層面

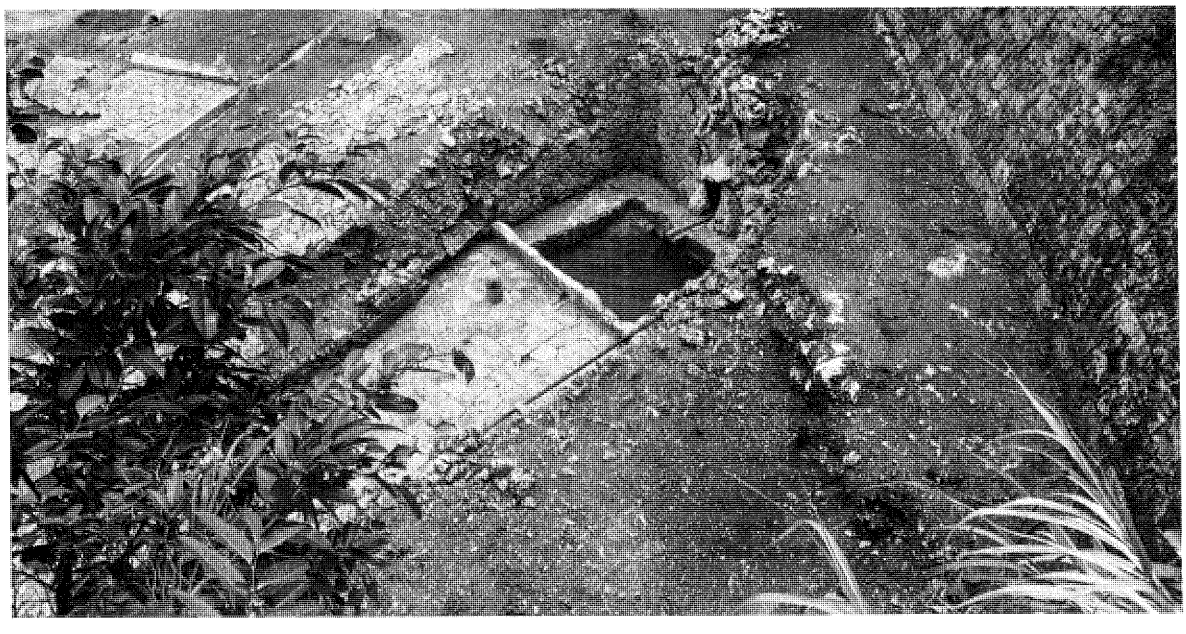
Hトレンチ北側壁
と東壁面下位層面

図版39　造成層

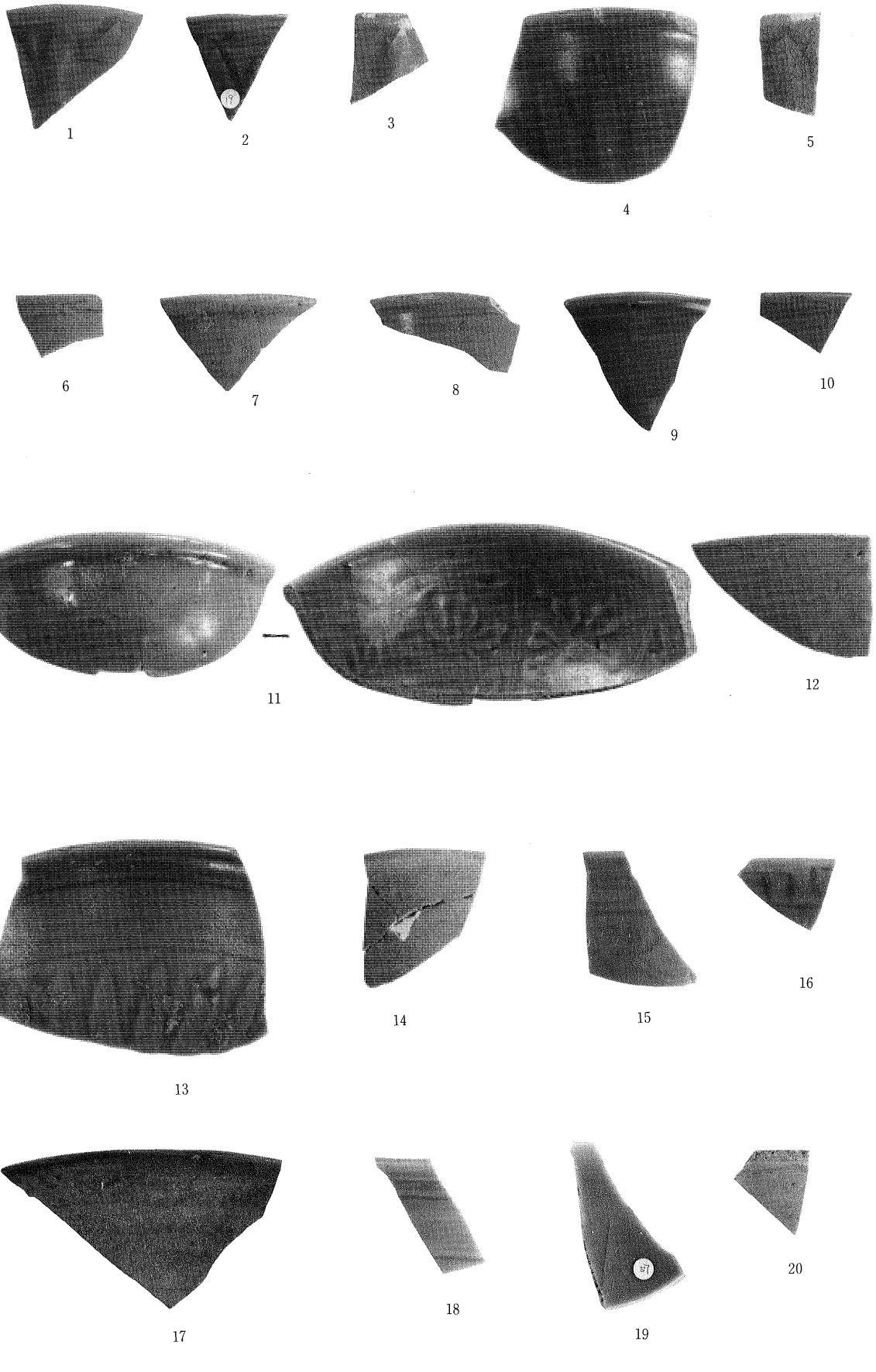


左：久慶門前の検出状況

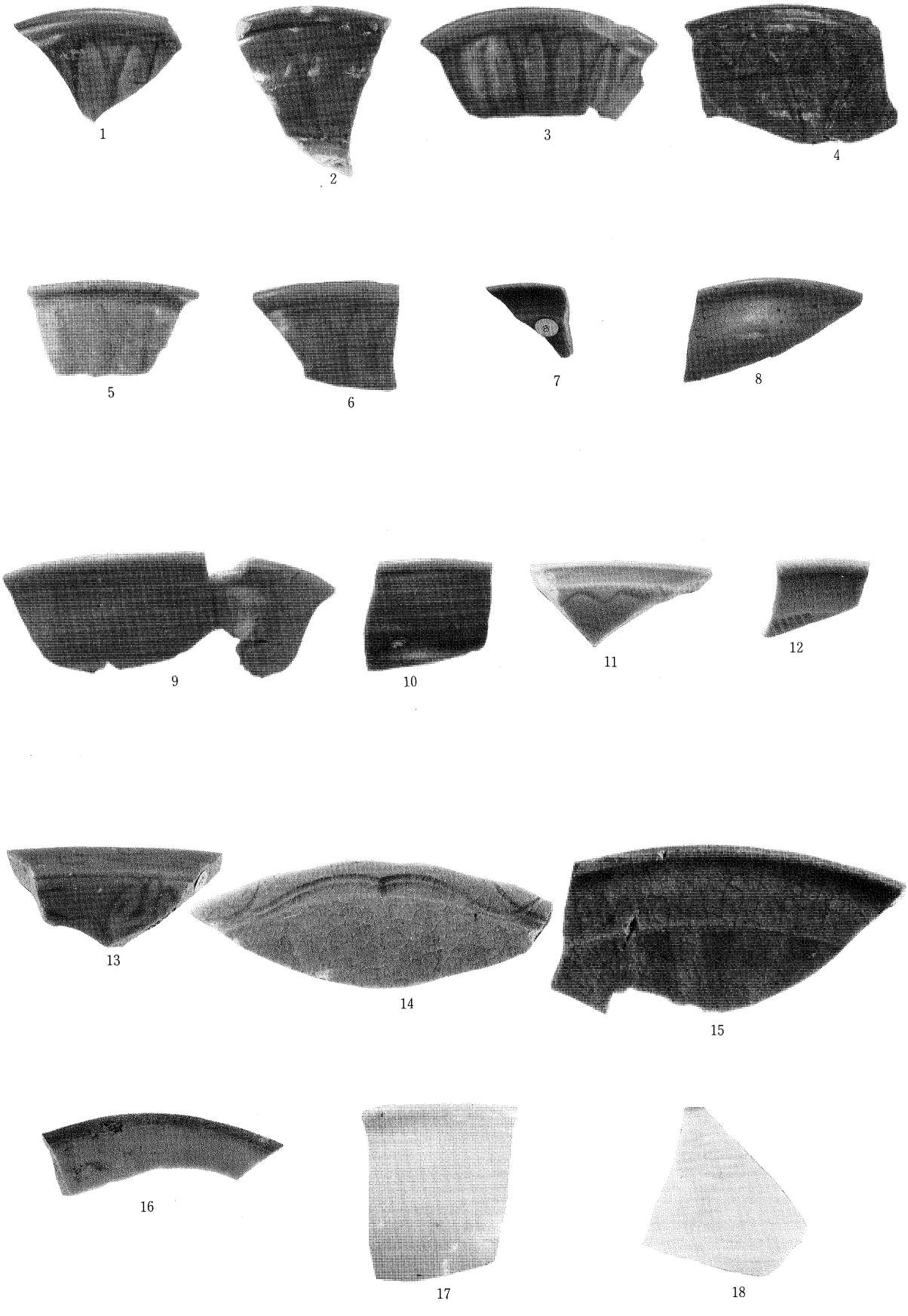
下：寒水川井戸周辺の状況



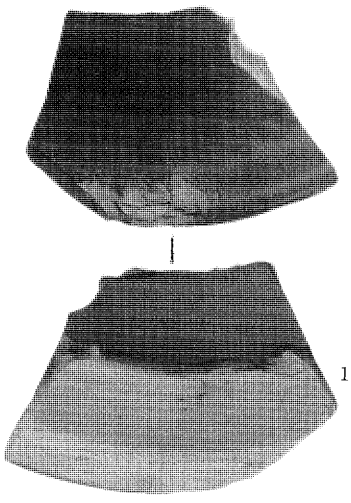
図版40　調査状況



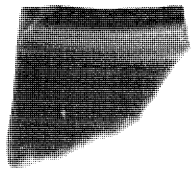
図版41　青磁器



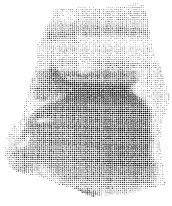
図版42　青磁器１～15　白磁16～18



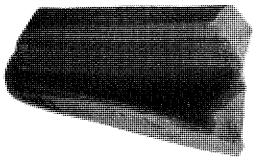
1



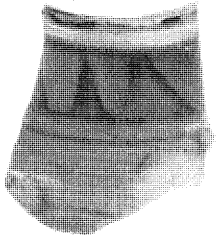
2



3

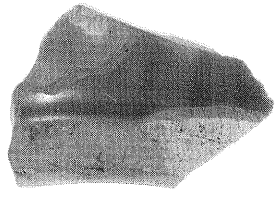


4

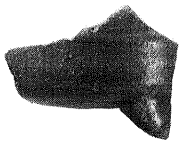


5

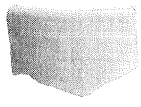
6



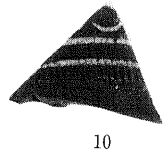
7



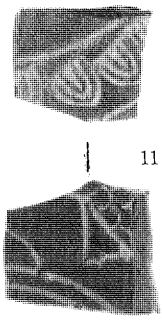
8



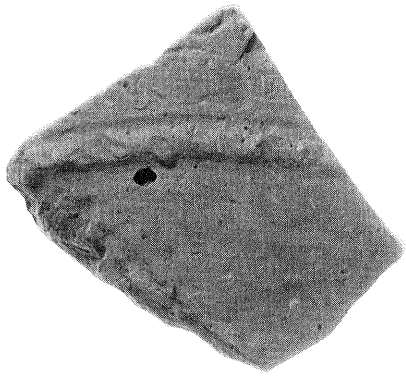
9



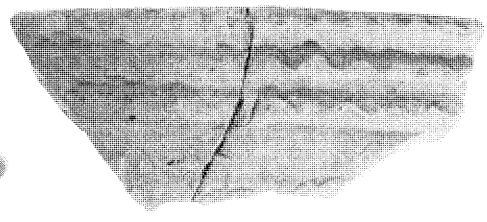
10



11

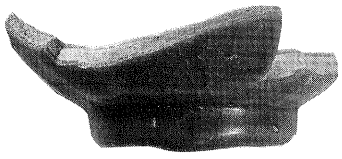


12



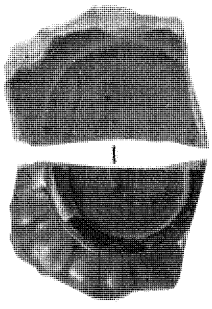
13

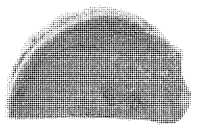
図版43　青磁器１～11、瓦質土器12・13

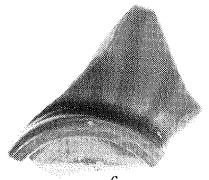

1

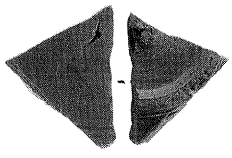
2

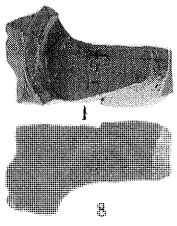
3

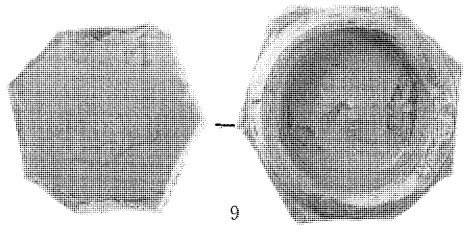

4

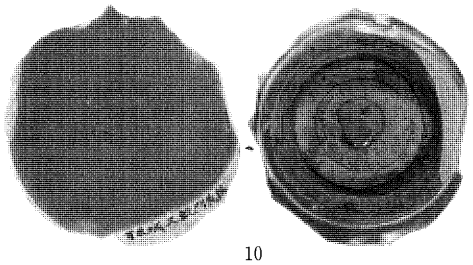

5

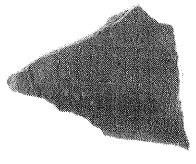

6

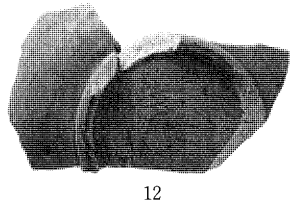

7

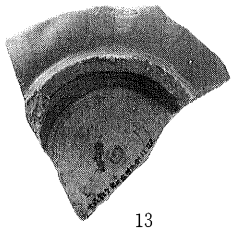

8


9

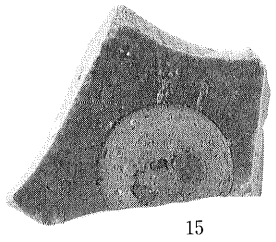

10

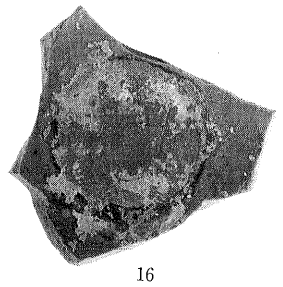

11

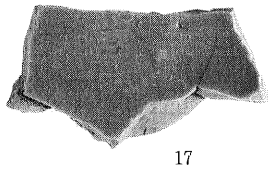

12

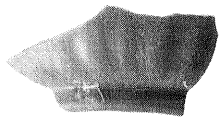

13

14

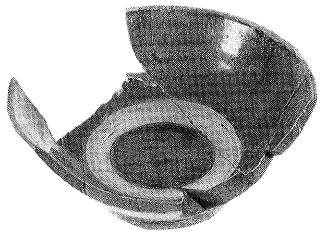

15


16


17

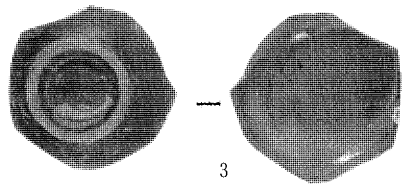

18

図版44　青磁器

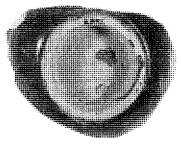


1

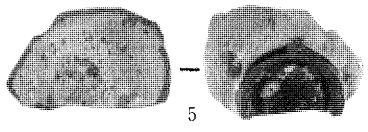
2



3

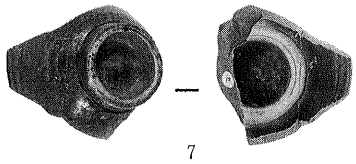


4

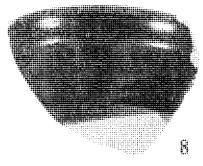


5

6

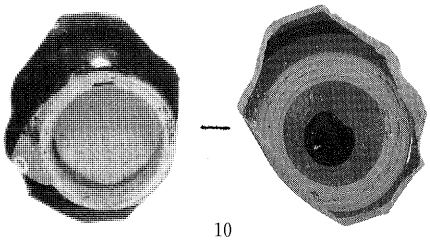


7

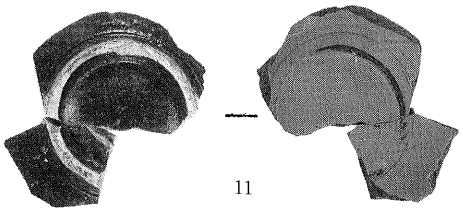


8

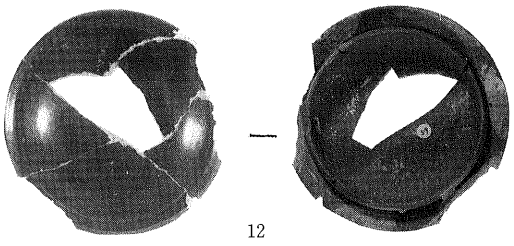
9



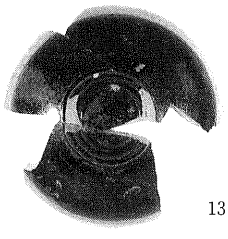
10



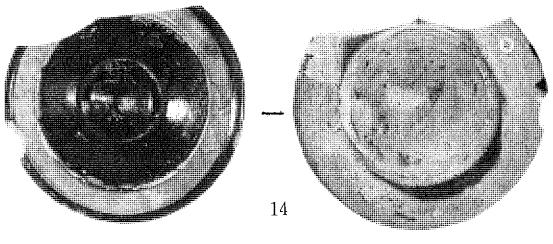
11



12



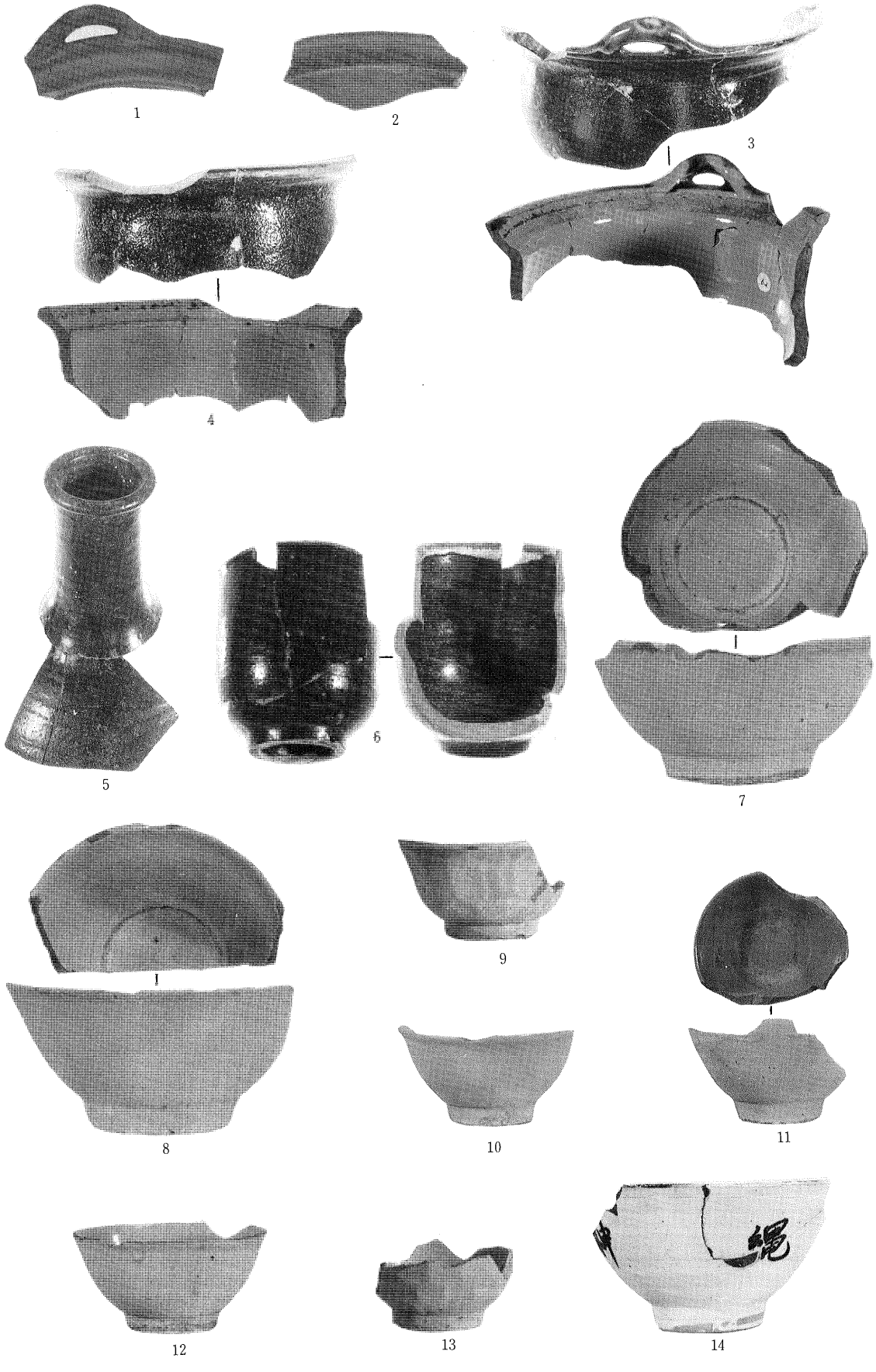
13



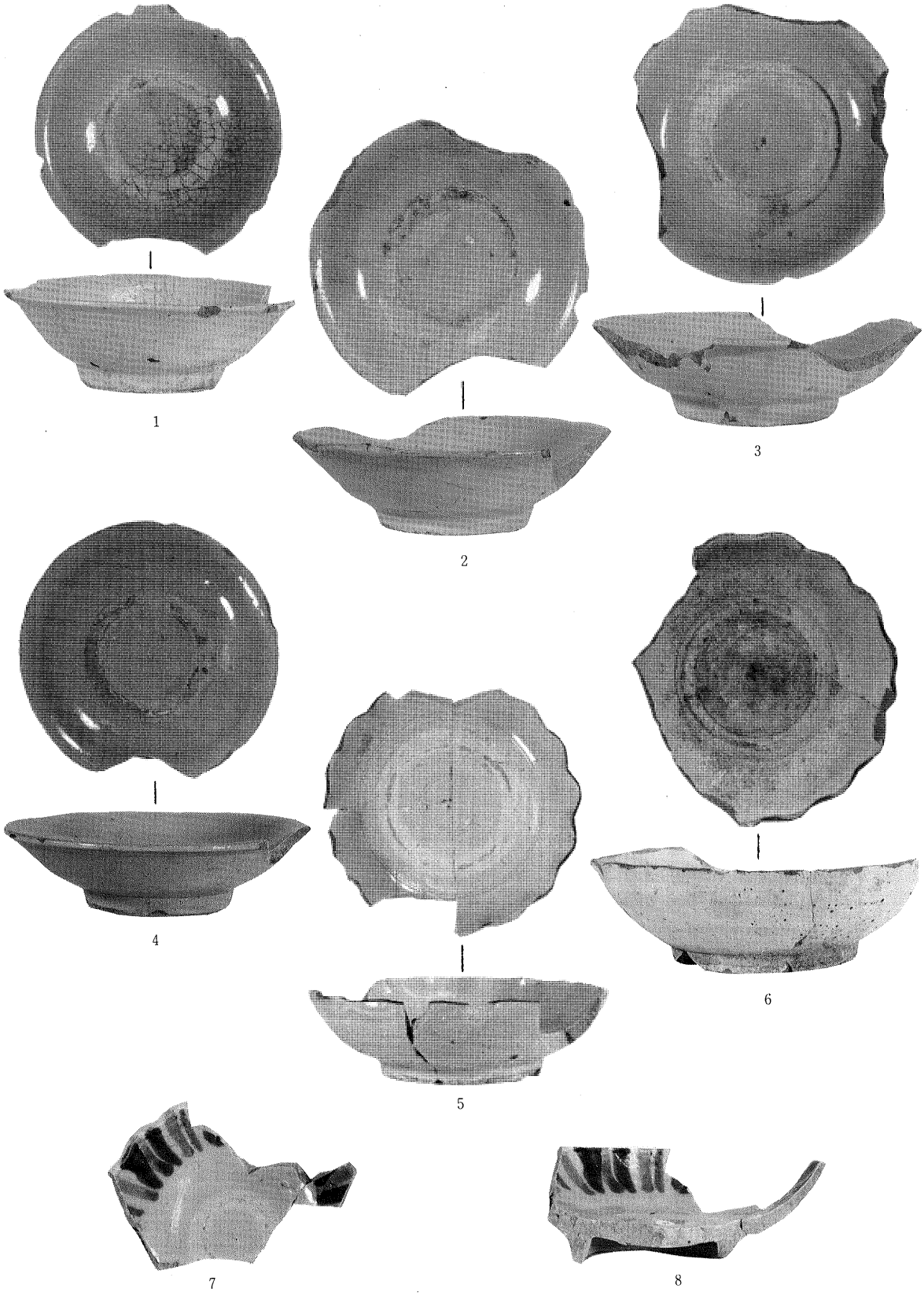
14

15

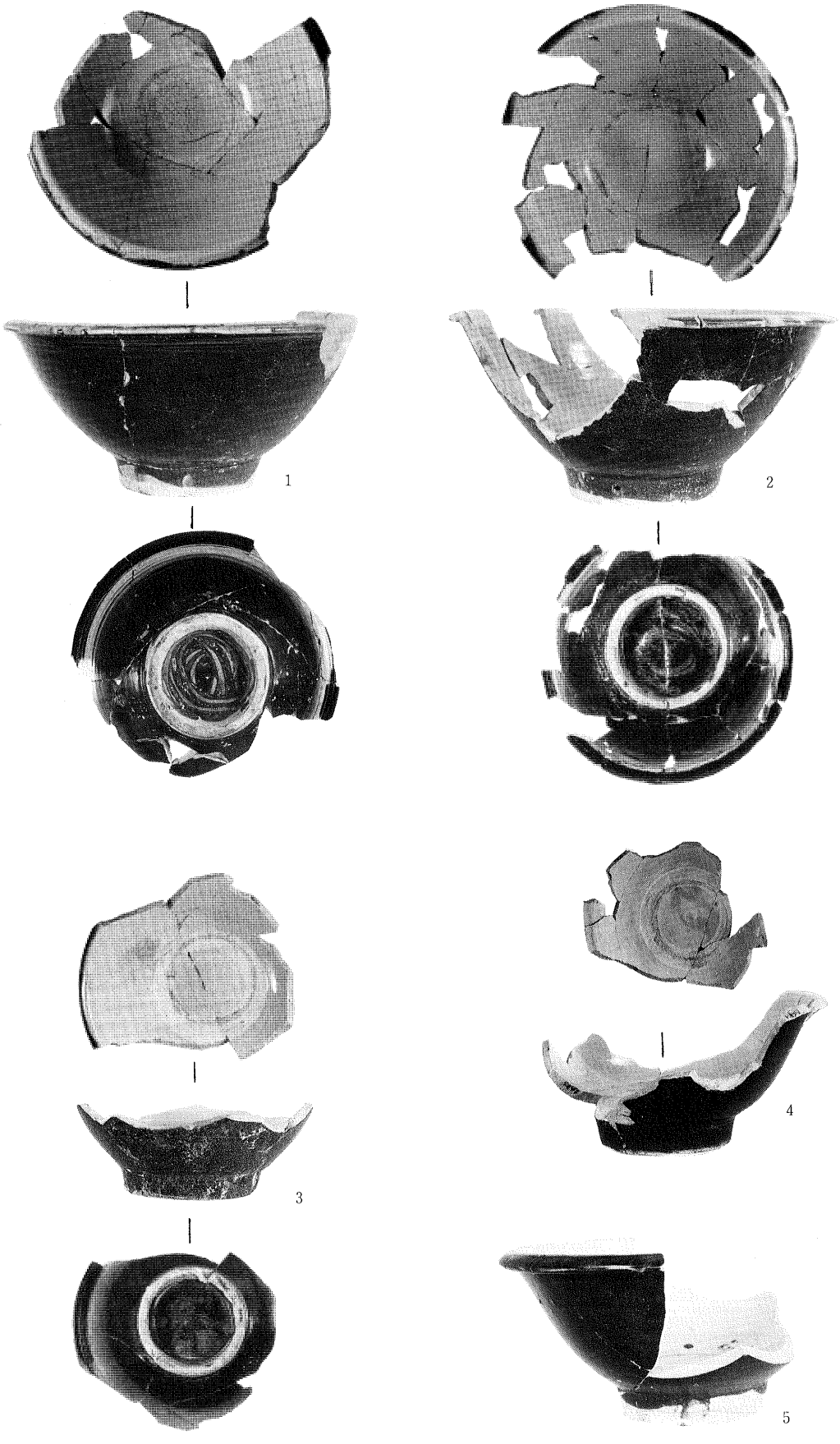
図版45　沖縄産陶器



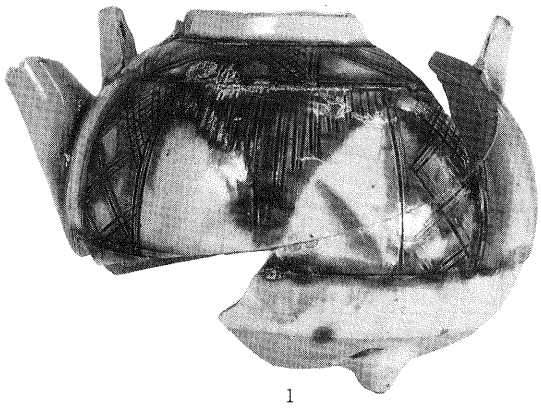
図版46　沖縄産陶器



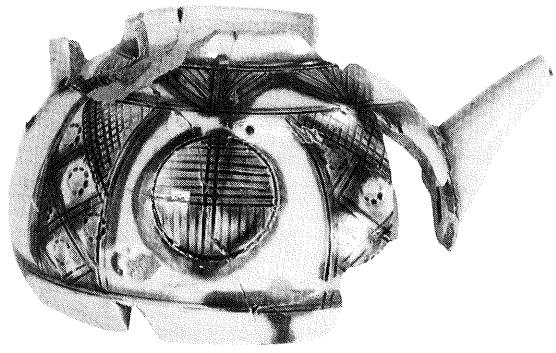
図版47　沖縄産陶器



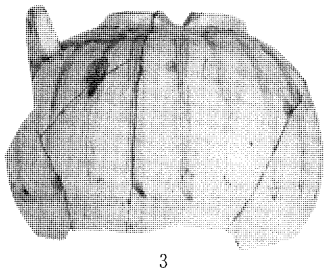
図版48　沖縄産陶器



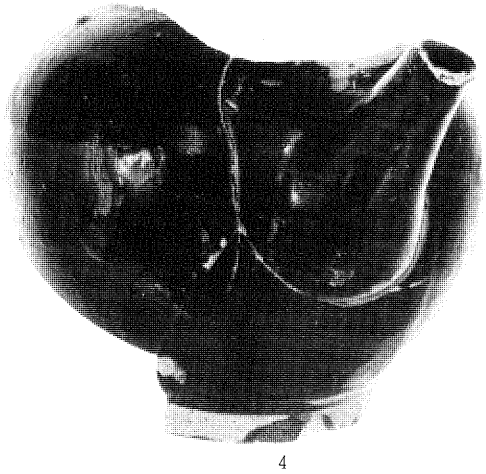
1



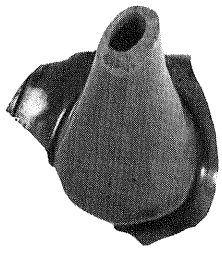
2



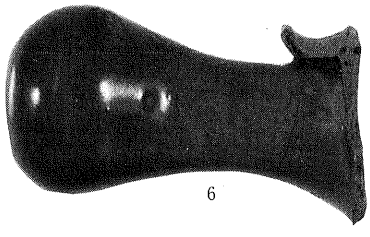
3



4



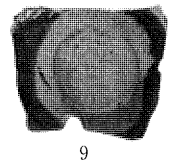
5



6

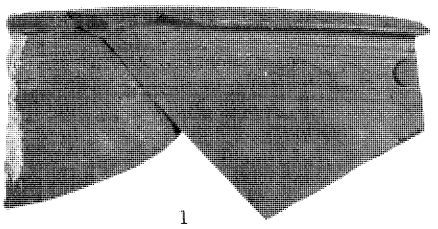
7

8

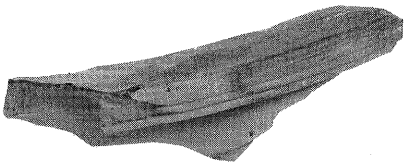


9

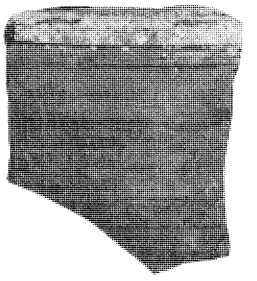
図版49　沖縄産陶器



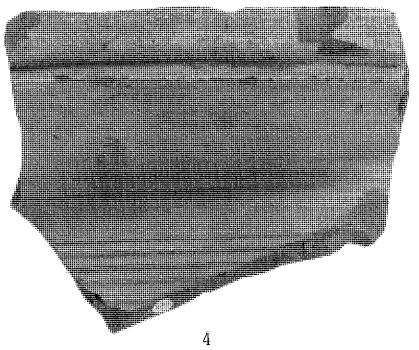
1



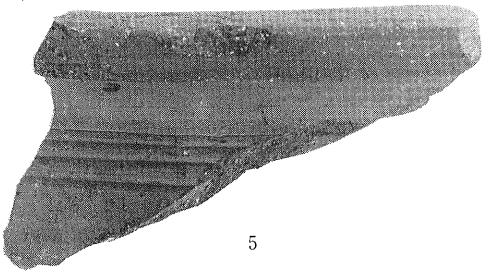
2



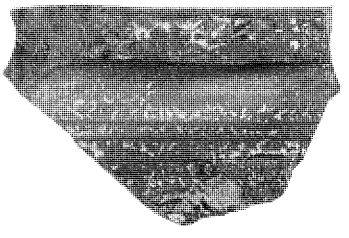
3



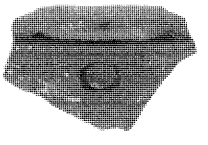
4



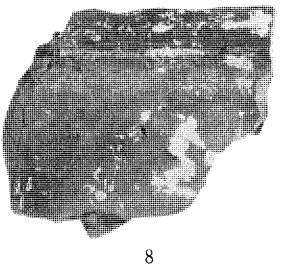
5



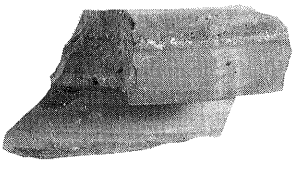
6



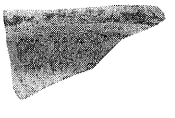
7



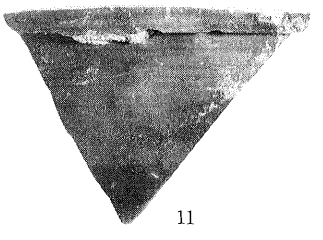
8



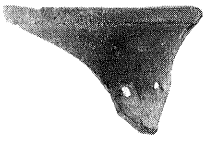
9



10

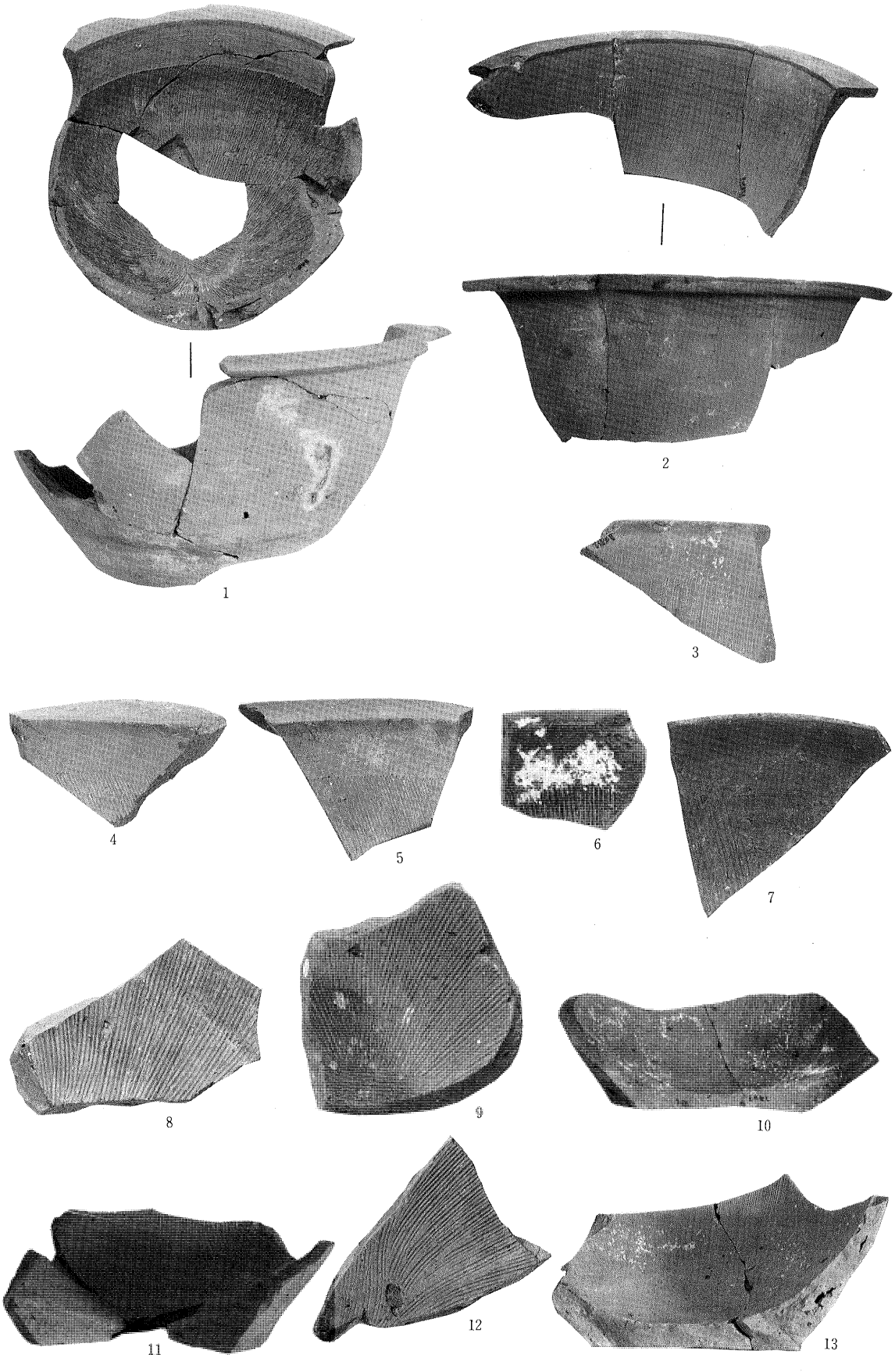


11

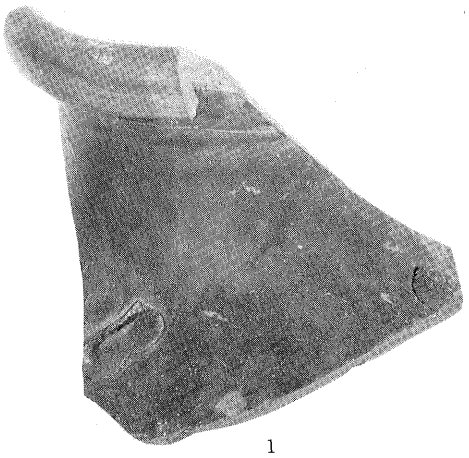


12

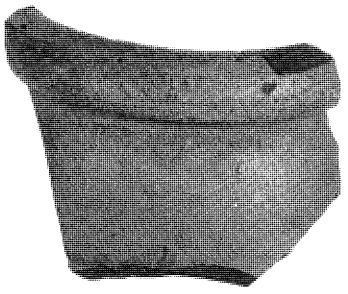
図版50　沖縄産陶器



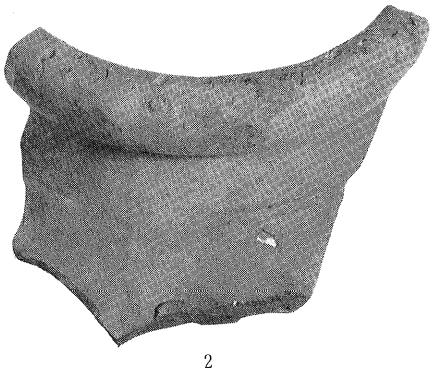
図版51　沖縄産陶器（摺鉢）



1

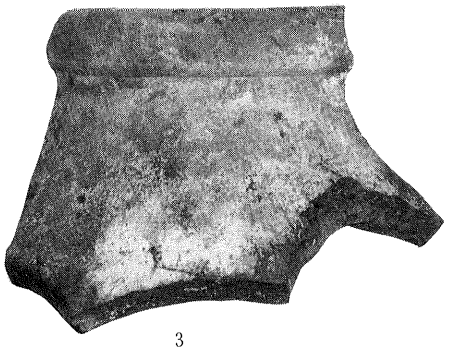


4

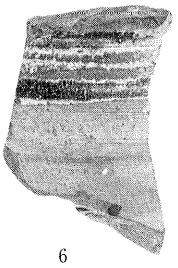


2

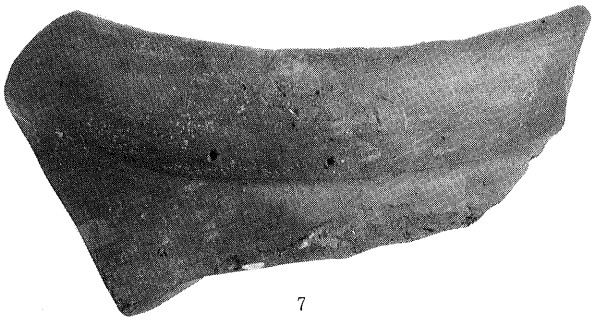
5



3



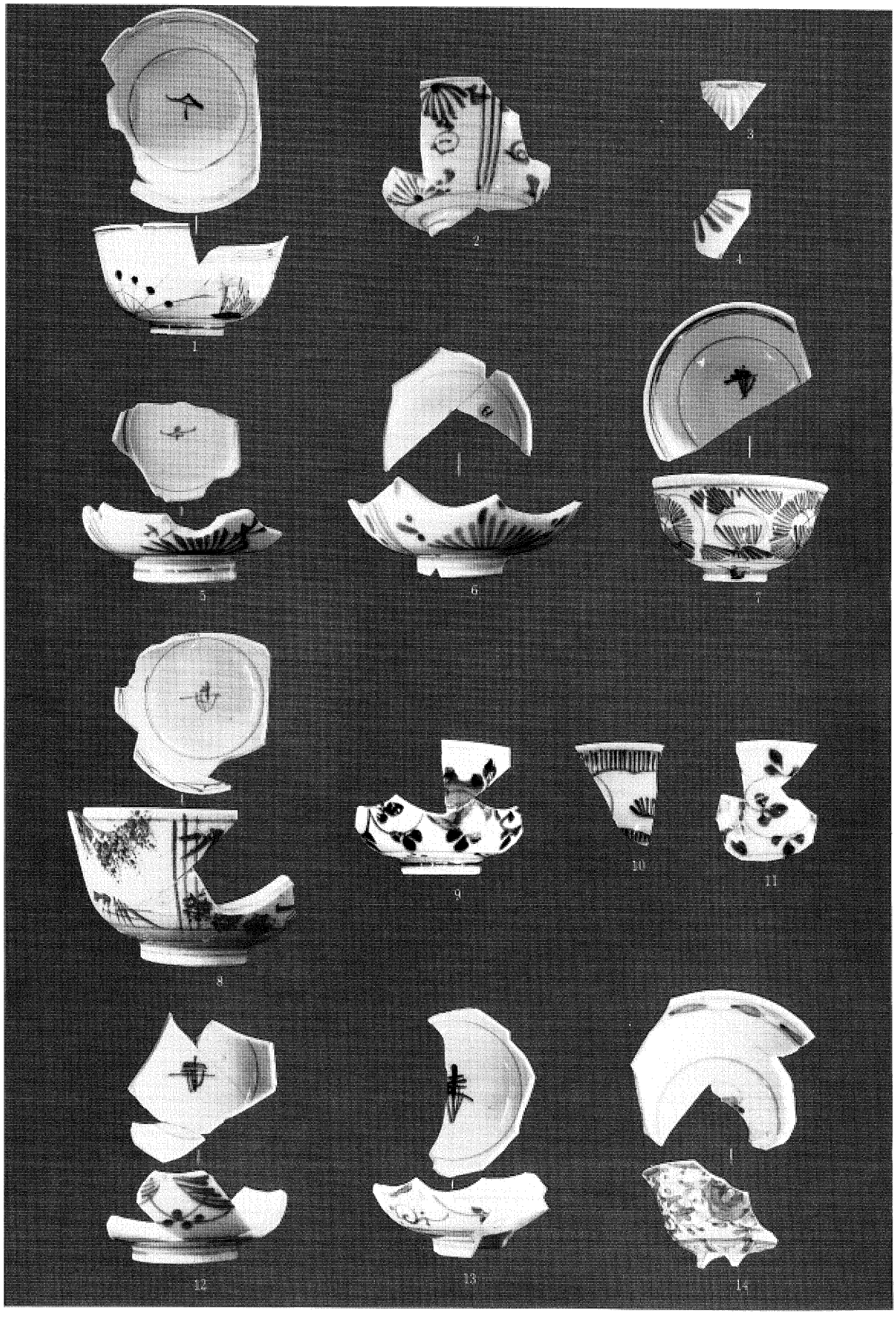
6



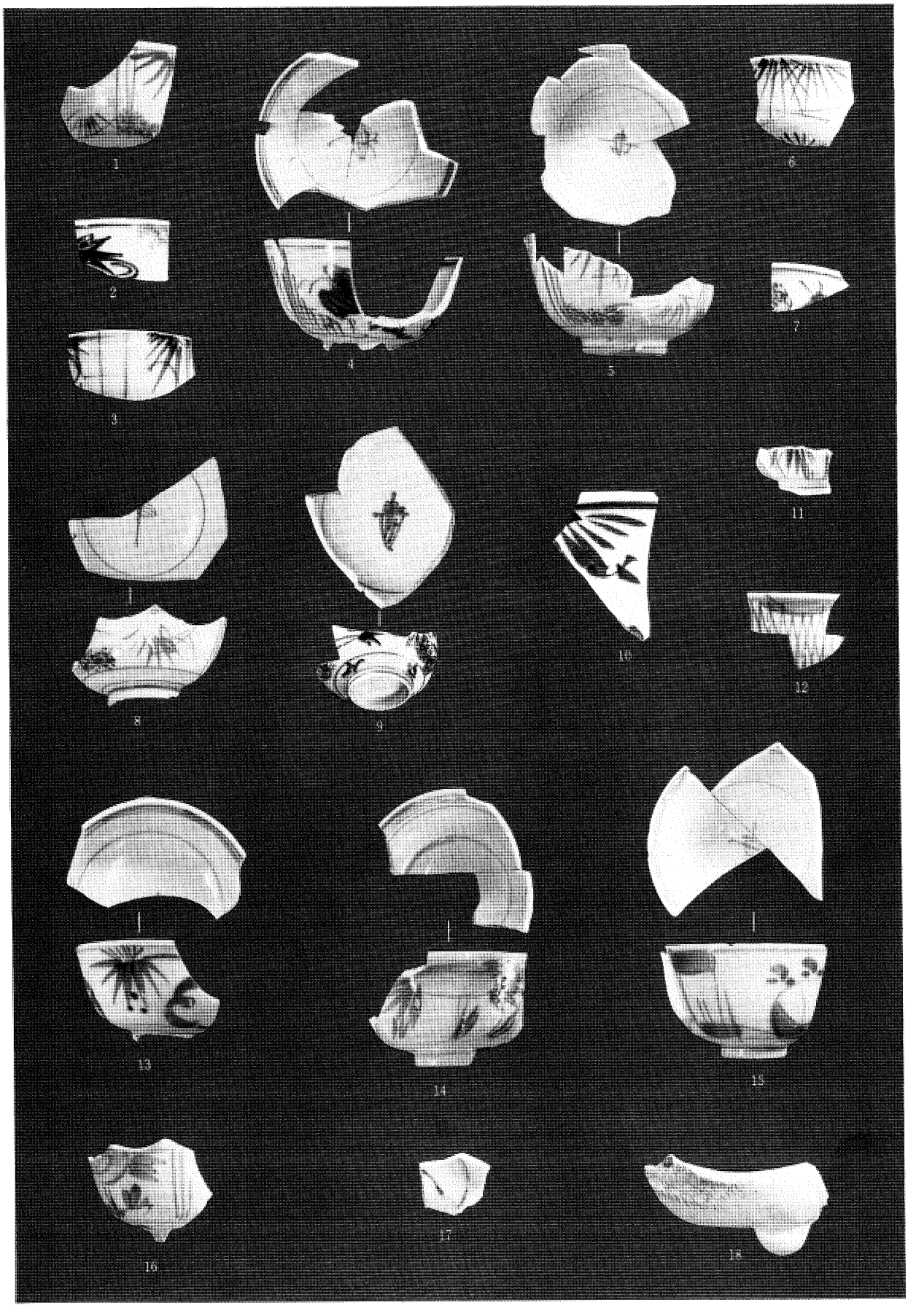
7

8

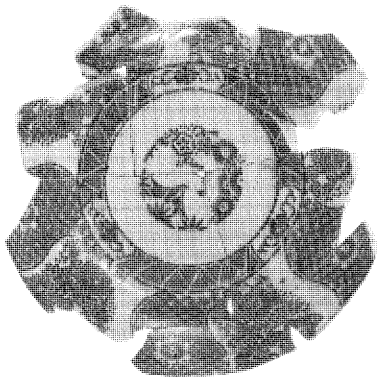
図版52　沖縄産陶器



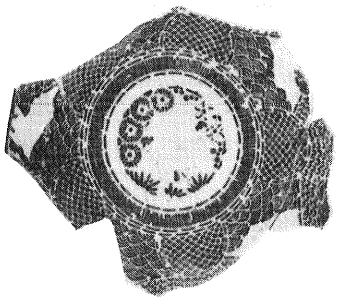
図版53　印判染付磁器



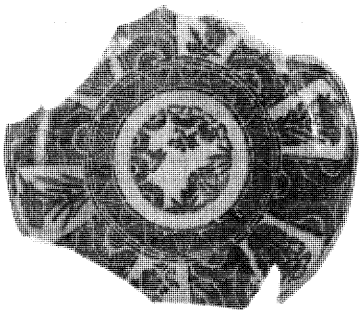
図版54　印判染付磁器



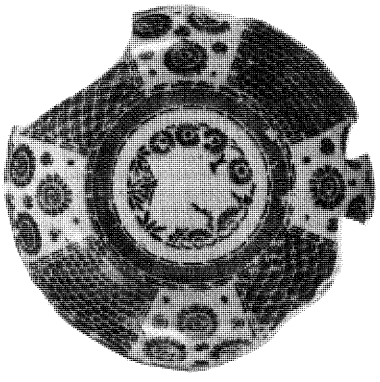
1



2

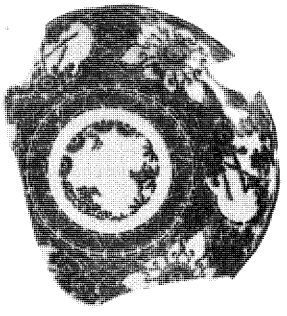


3



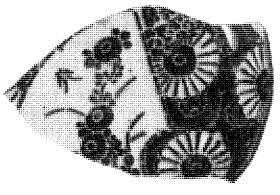
4

5

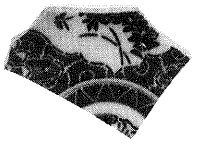


6

7

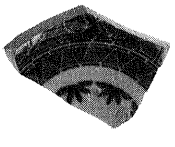


8

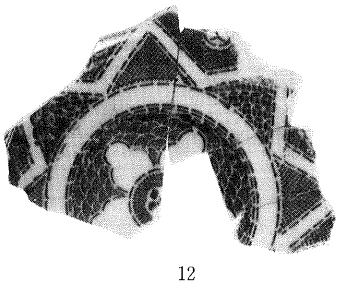


9

10

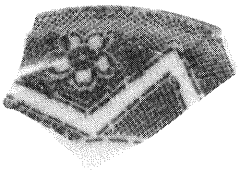


11

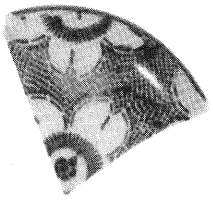


12

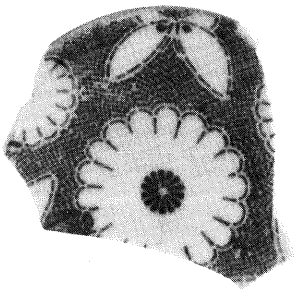
図版55　印判染付磁器



1

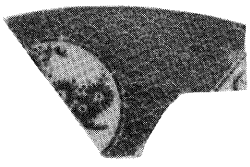


2



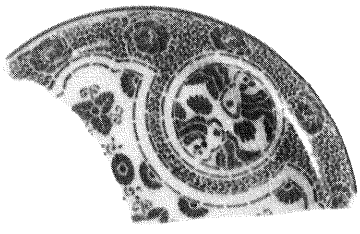
3

4

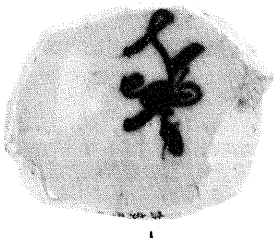


5

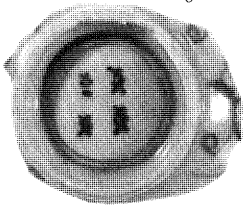
7



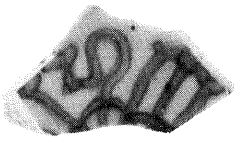
6



8

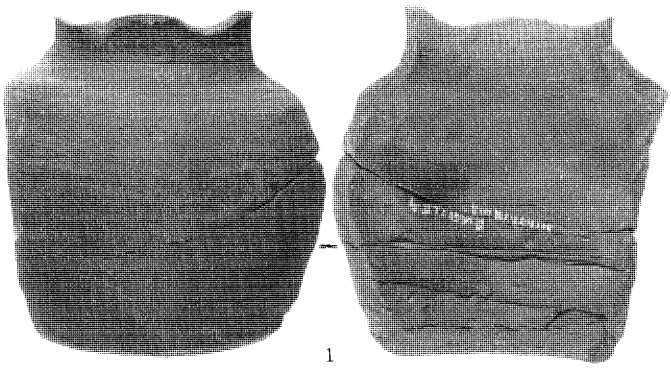


9

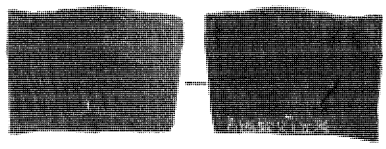


10

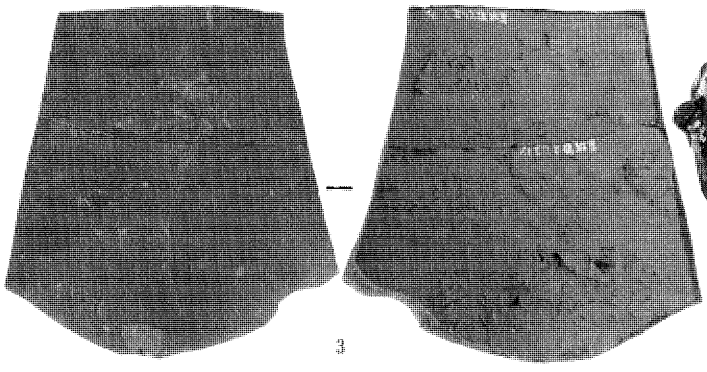
図版56　染付磁器



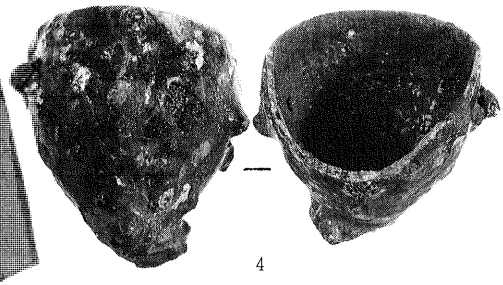
1



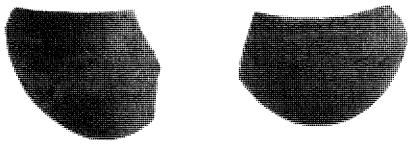
2



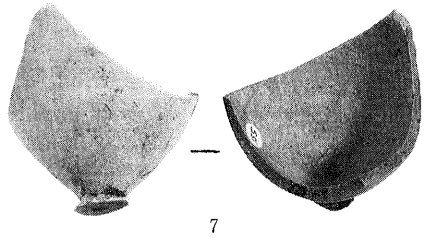
3



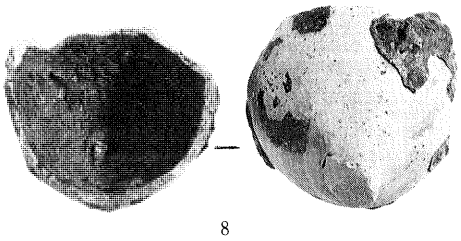
4



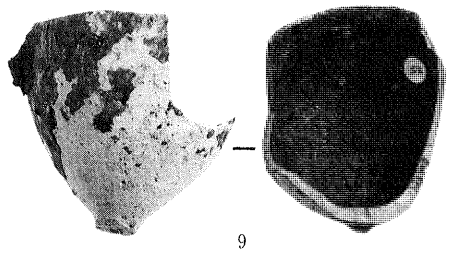
5 6



7

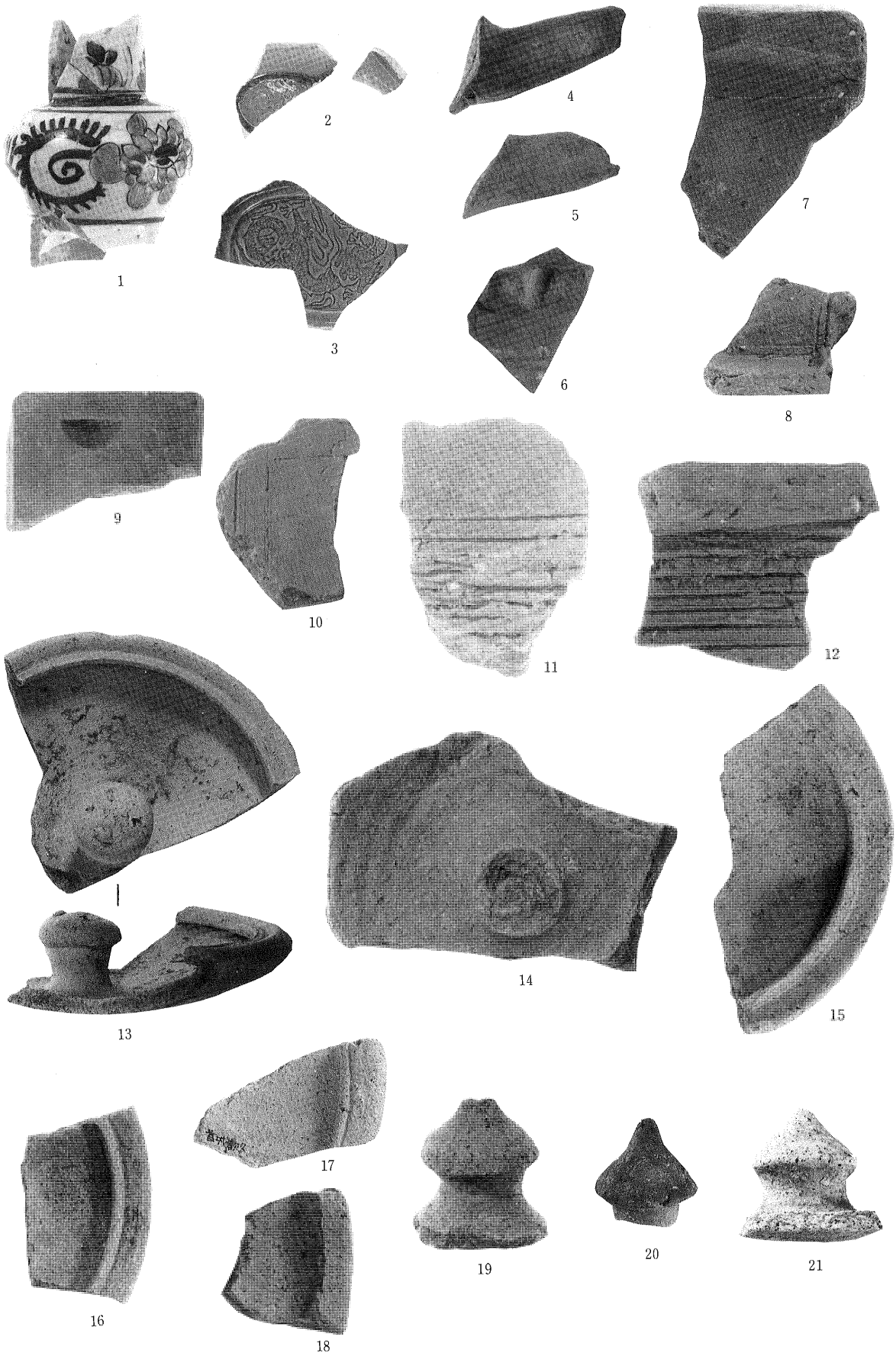


8

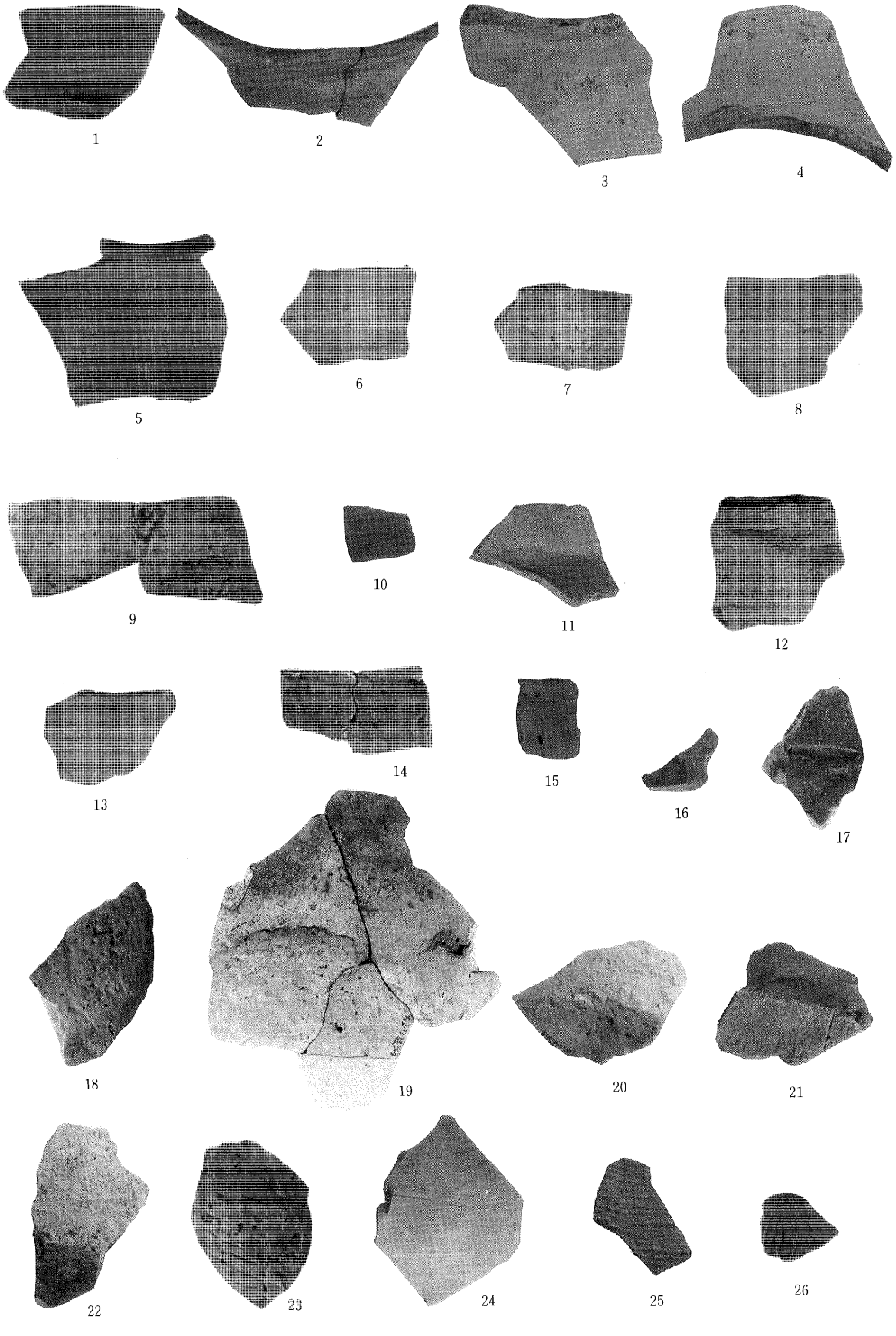


9

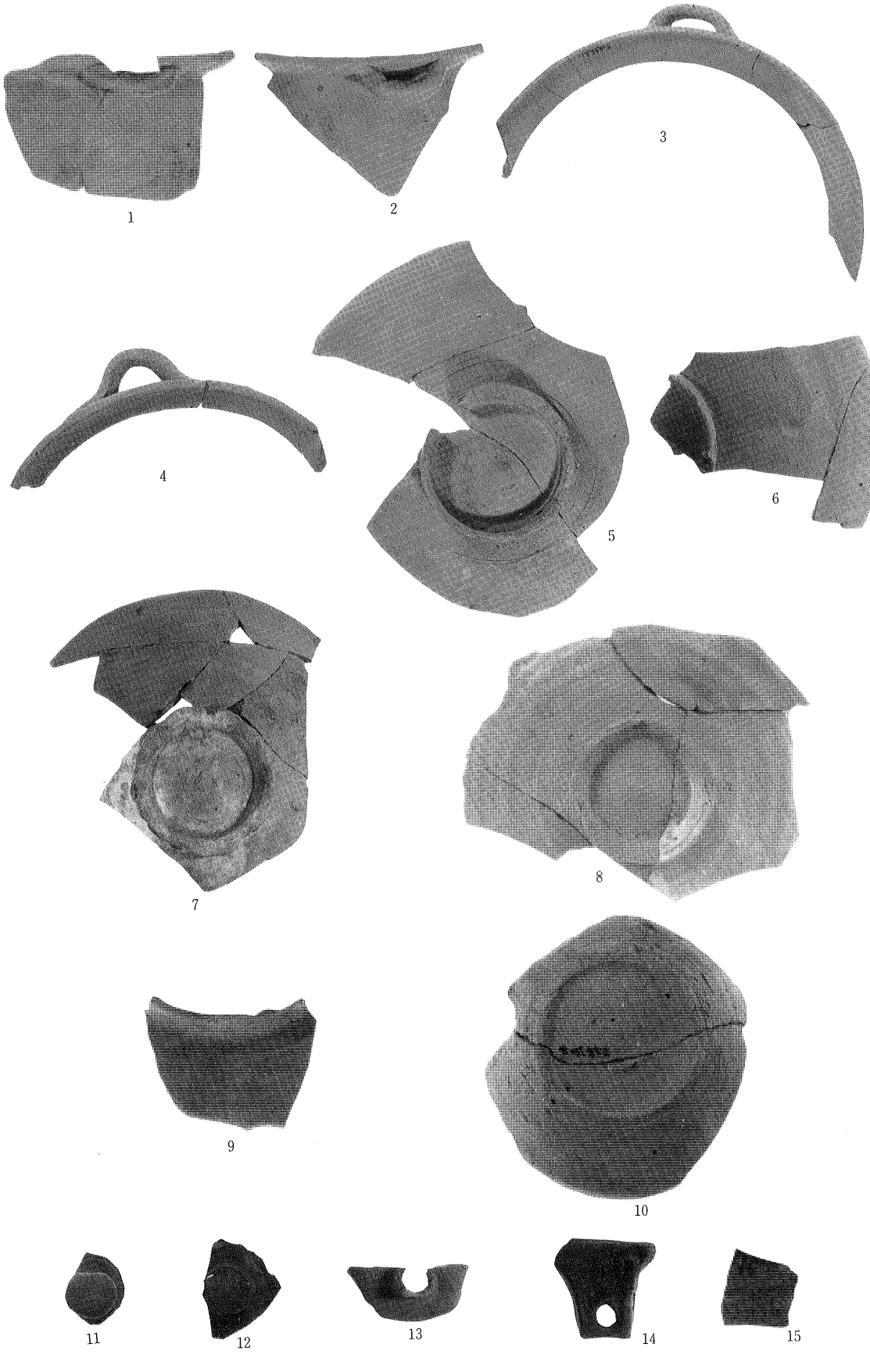
図版57　須恵器１～３、坩堝（るつぼ）４～９



図版58　磁器１～３、陶質土器４～12、土器13～21

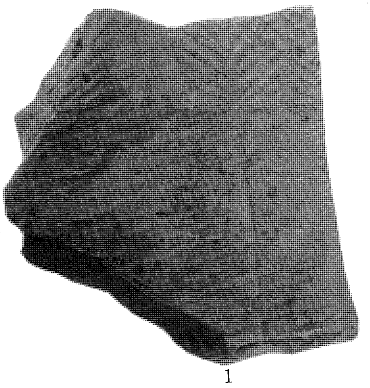


図版59　土器口縁部片１～15、底部片24、叩きのある胴部片25・26

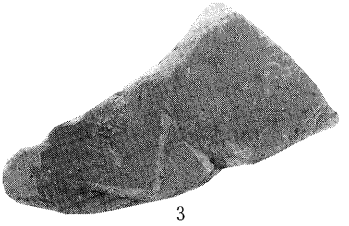


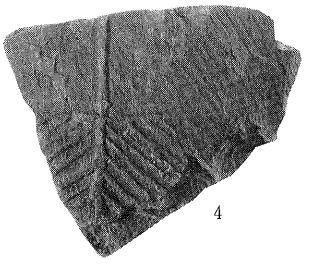
図版60　陶質土器、土ナベ１～４、蓋５～８、壺９～10、水注11～15

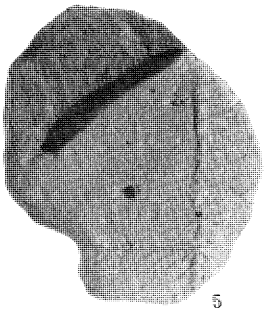
図版61　瓦（軒平瓦１・２、軒丸瓦３～８、丸瓦９・10）


1

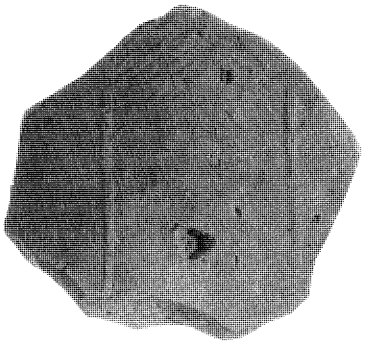
2

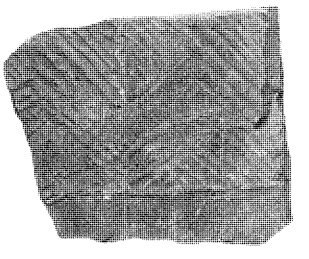

3


4

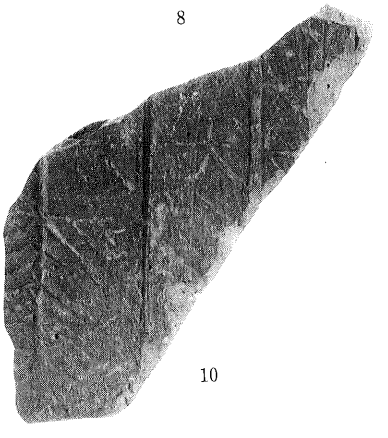

5

6

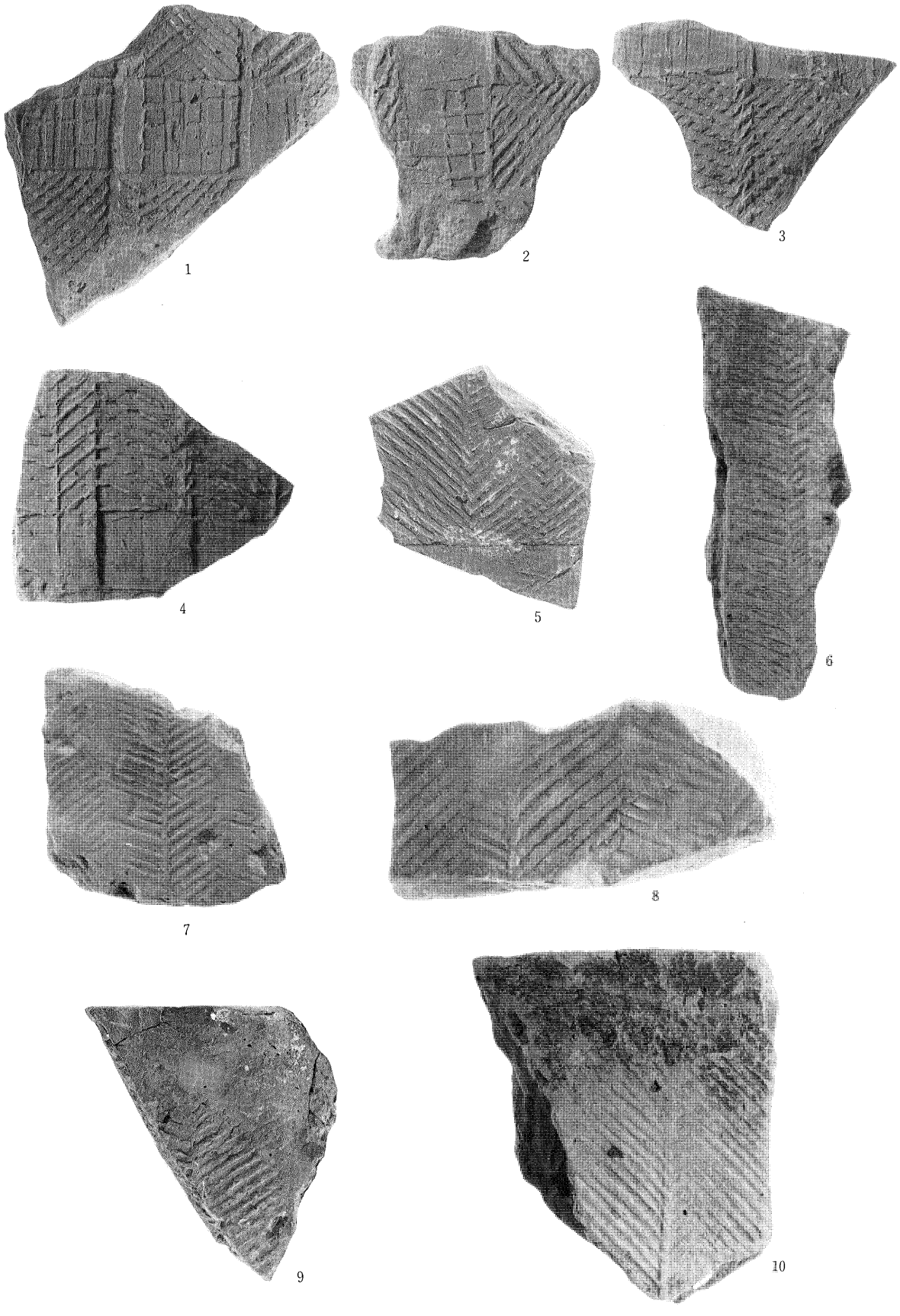

7


8

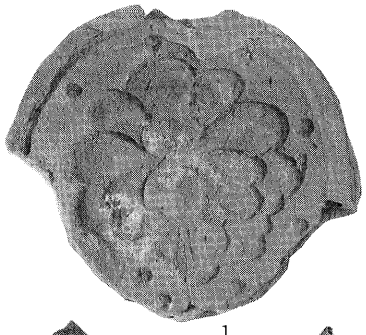
9

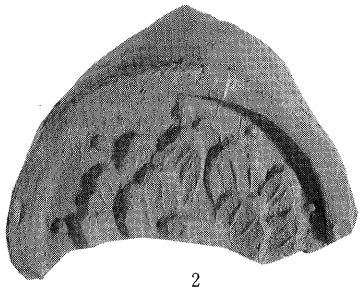

10

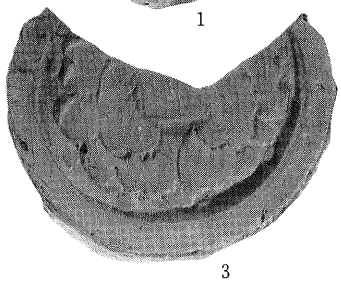
図版62　瓦

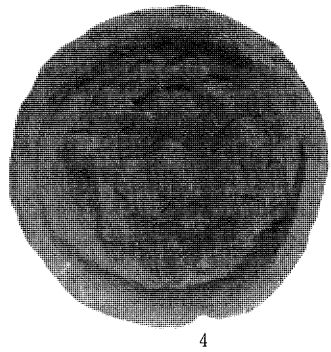


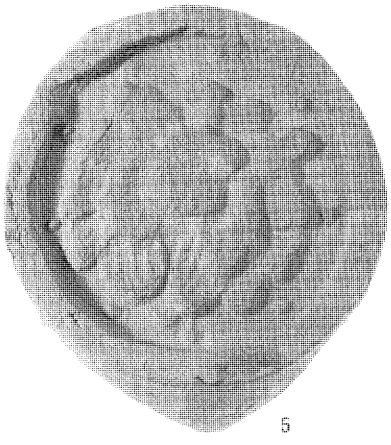
図版63　瓦

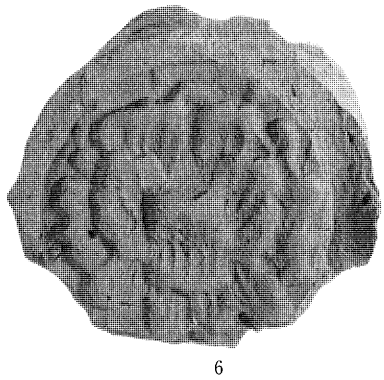

1

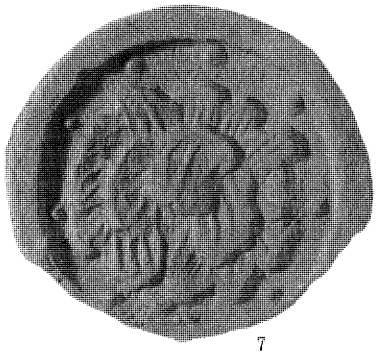

2

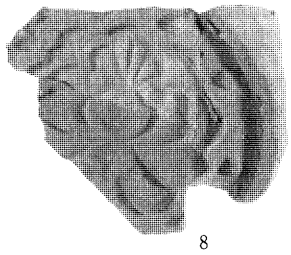

3


4

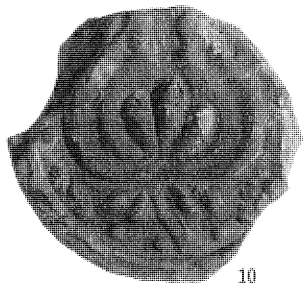

5

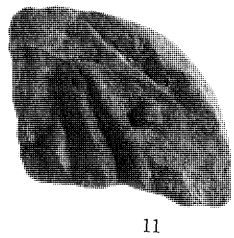

6


7


8

9

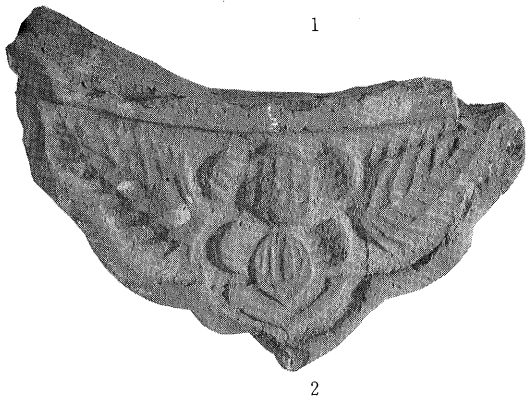

10


11

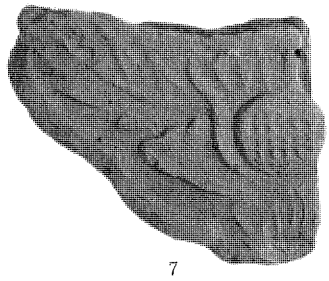
図版64　瓦（軒丸瓦）

1

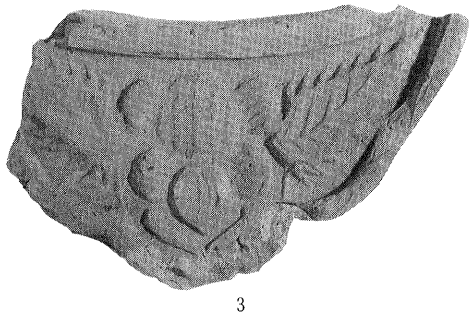
6



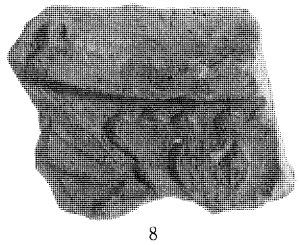
2



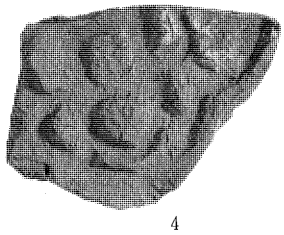
7



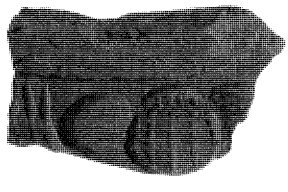
3



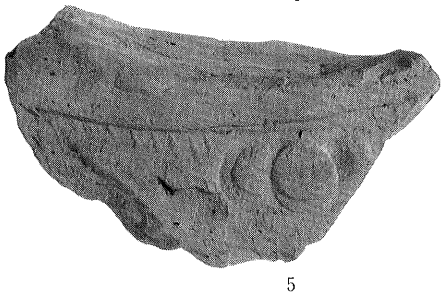
8



4

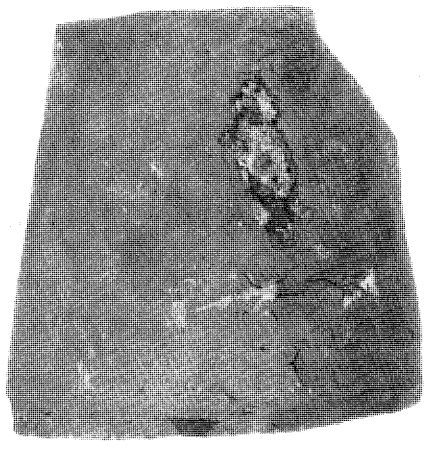


9



5

図版65　瓦（軒平瓦）



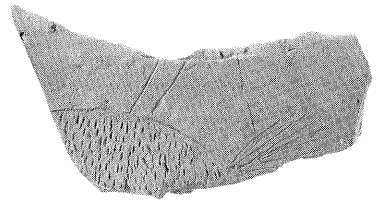
1

2

3

4

5



6

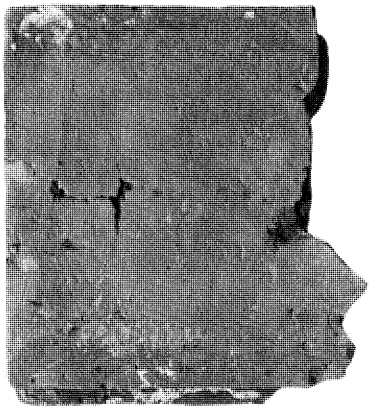
図版66　瓦（平瓦１・２、丸瓦３～５、線描のある瓦片）

1

2

3

4

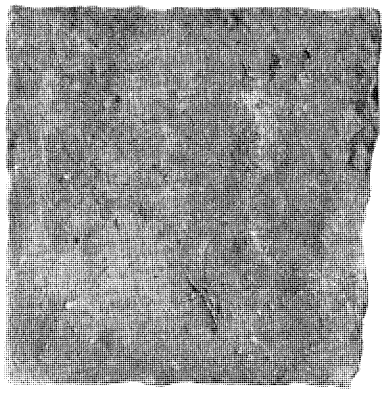


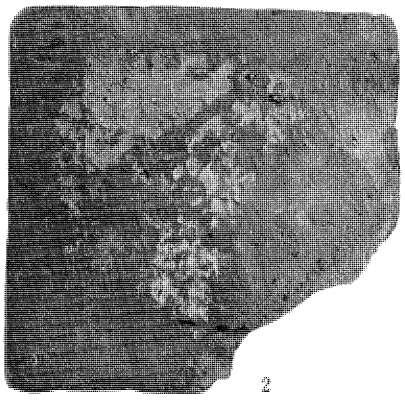
5

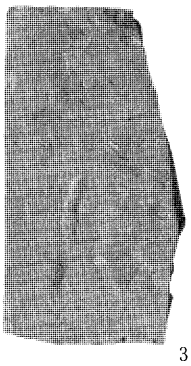
6

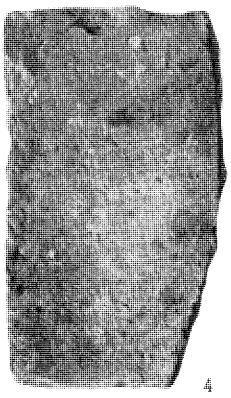
7

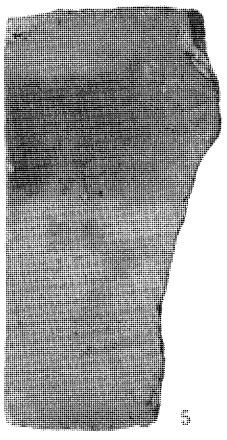
図版67　塼


1


2

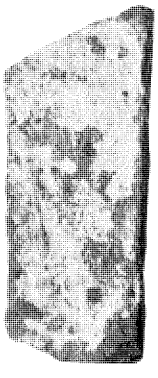

3

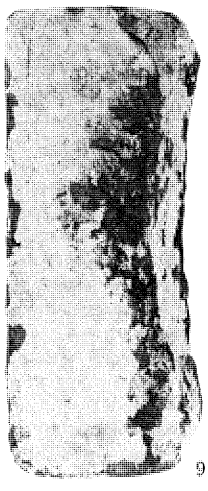

4

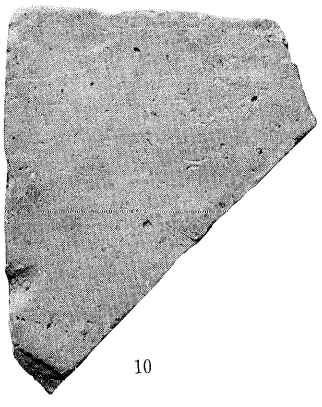

5

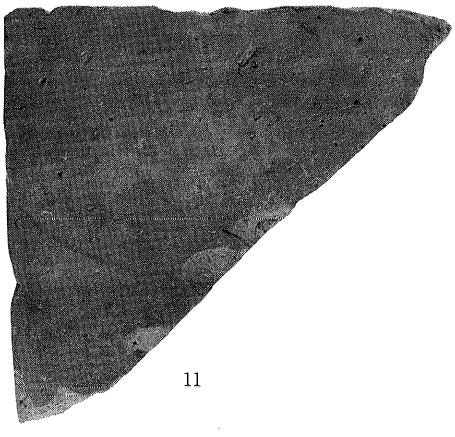
6

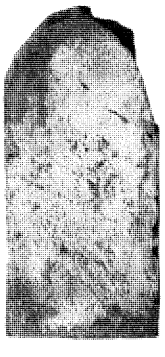
7


8

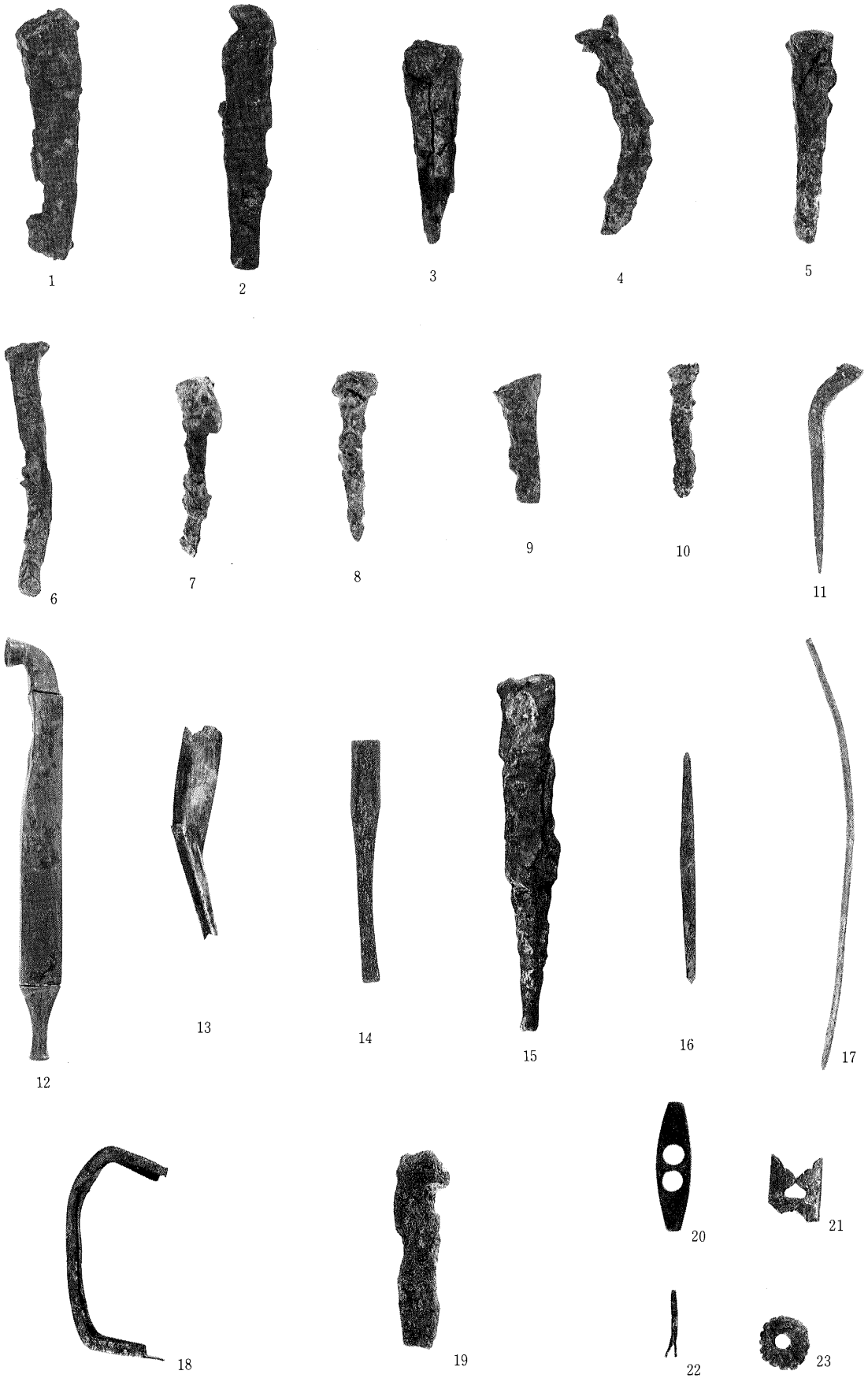

9


10

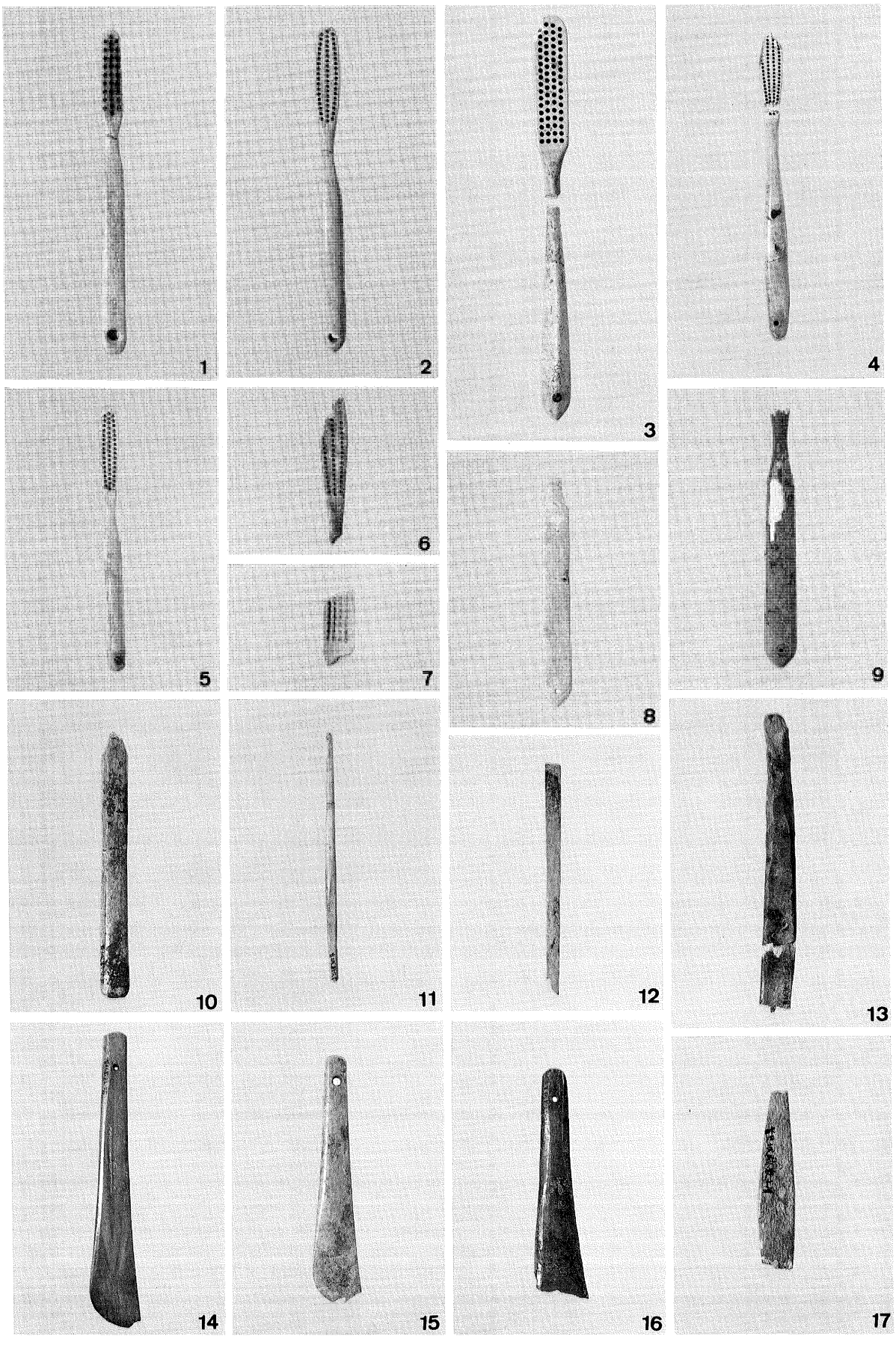

11


12

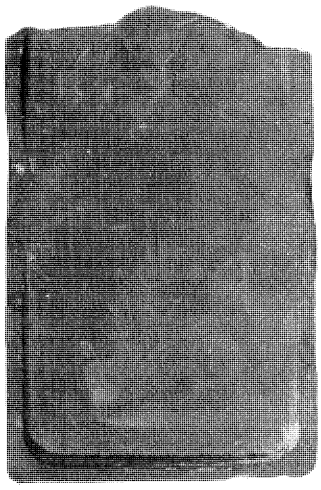
図版68　埼1～7・10・11、レンガ8・9・12



図版69　金属製品



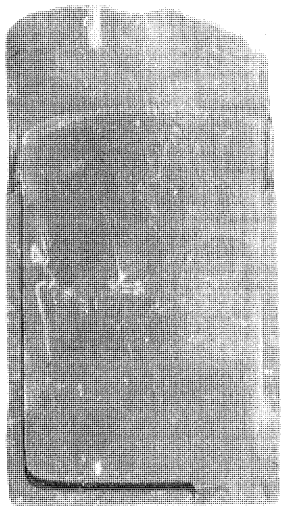
図版70　骨製品



1

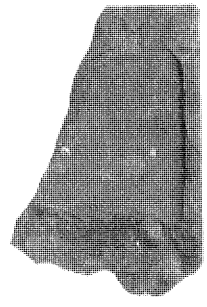
2

3

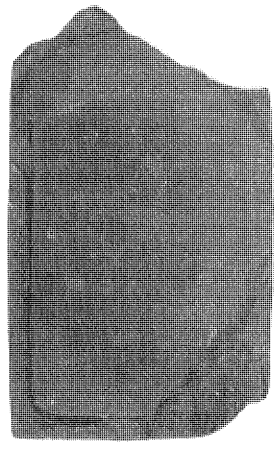


4

5

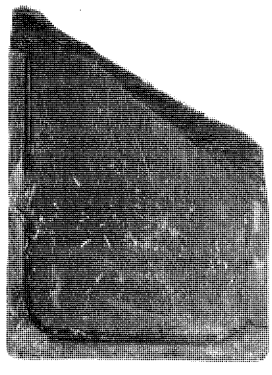


6

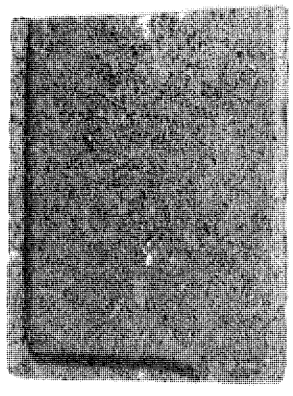


7

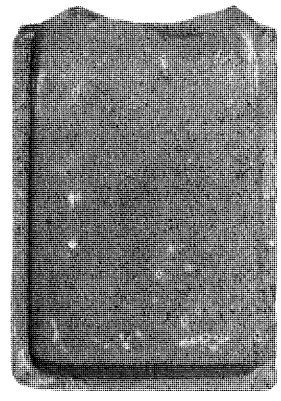
8



9

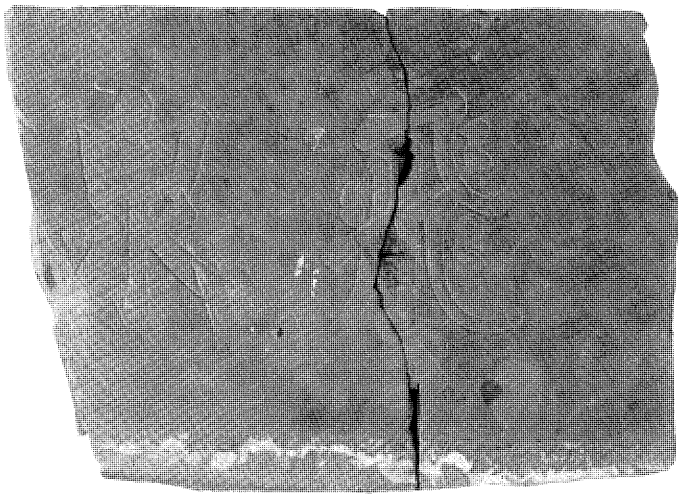


10



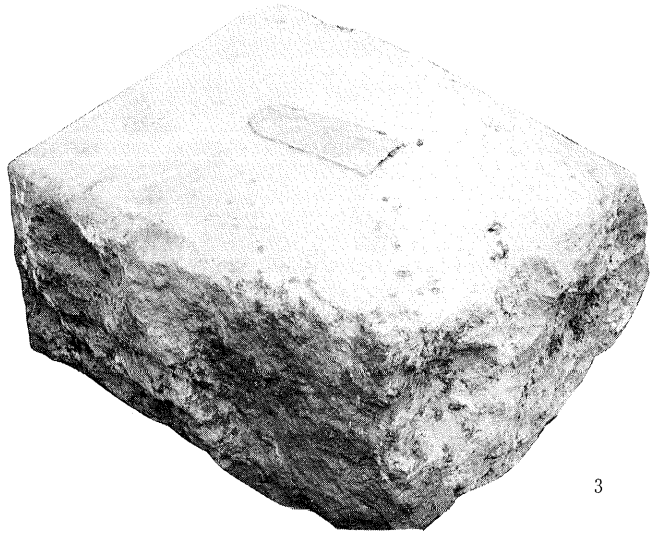
11

図版71　硯



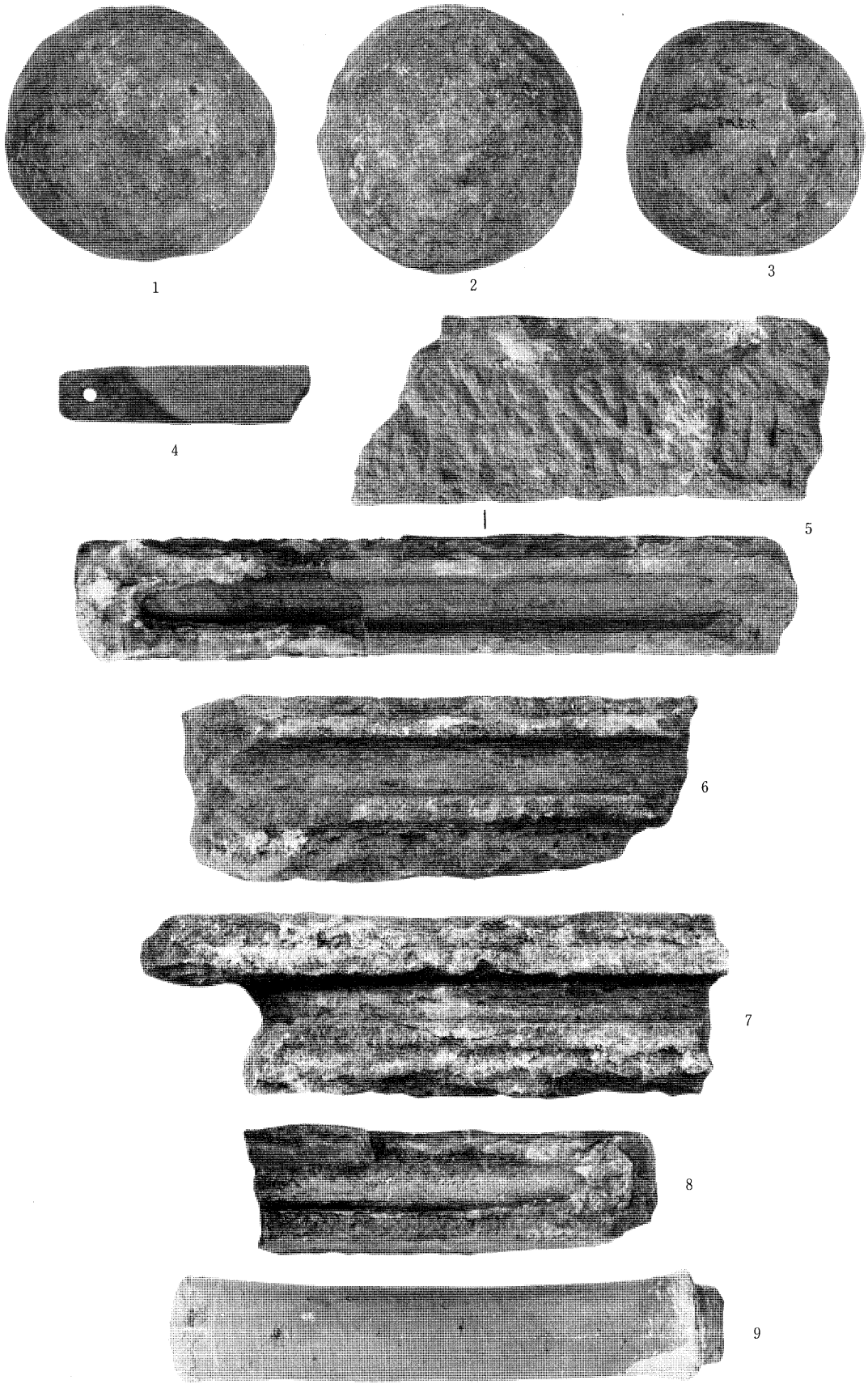
1

2

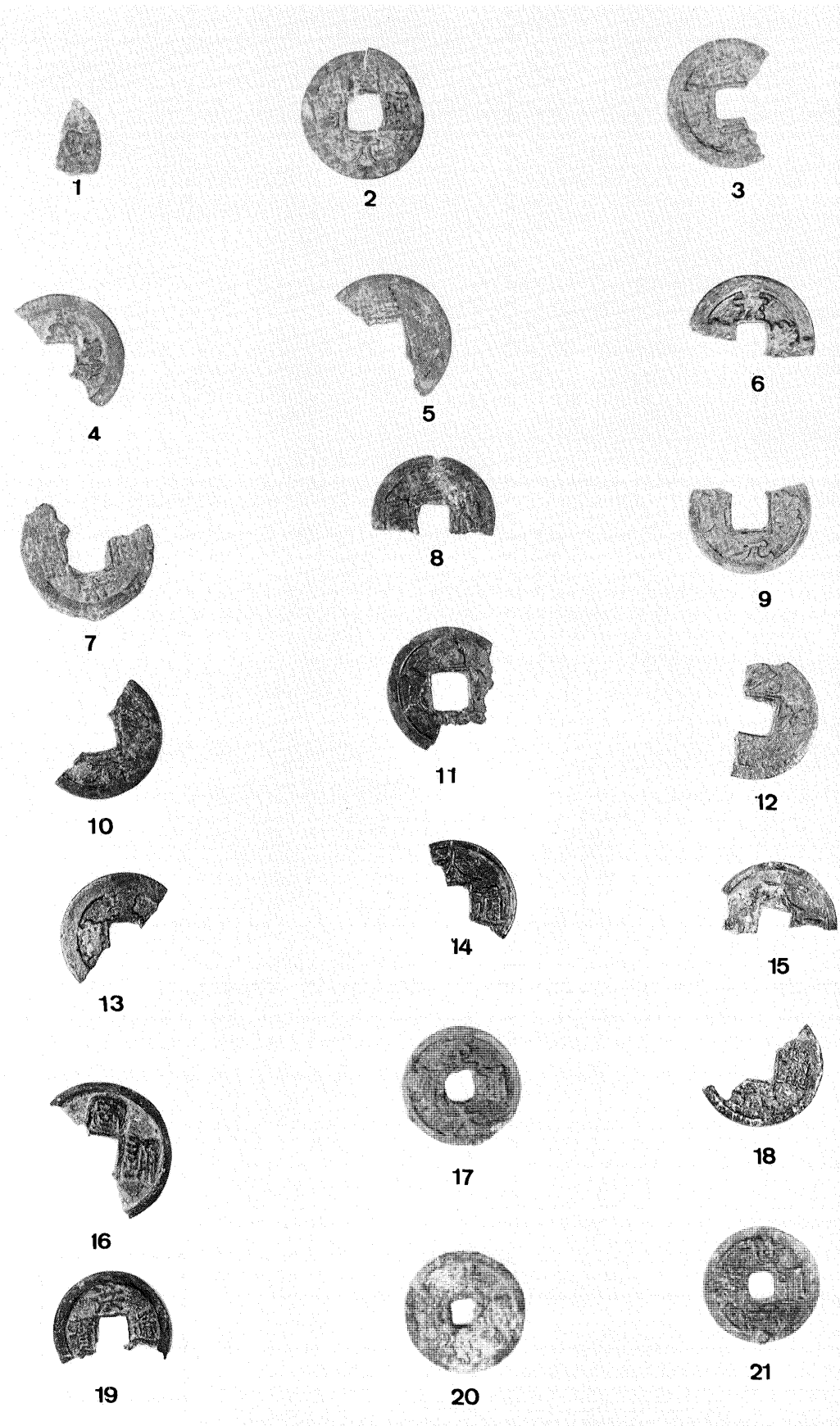


3

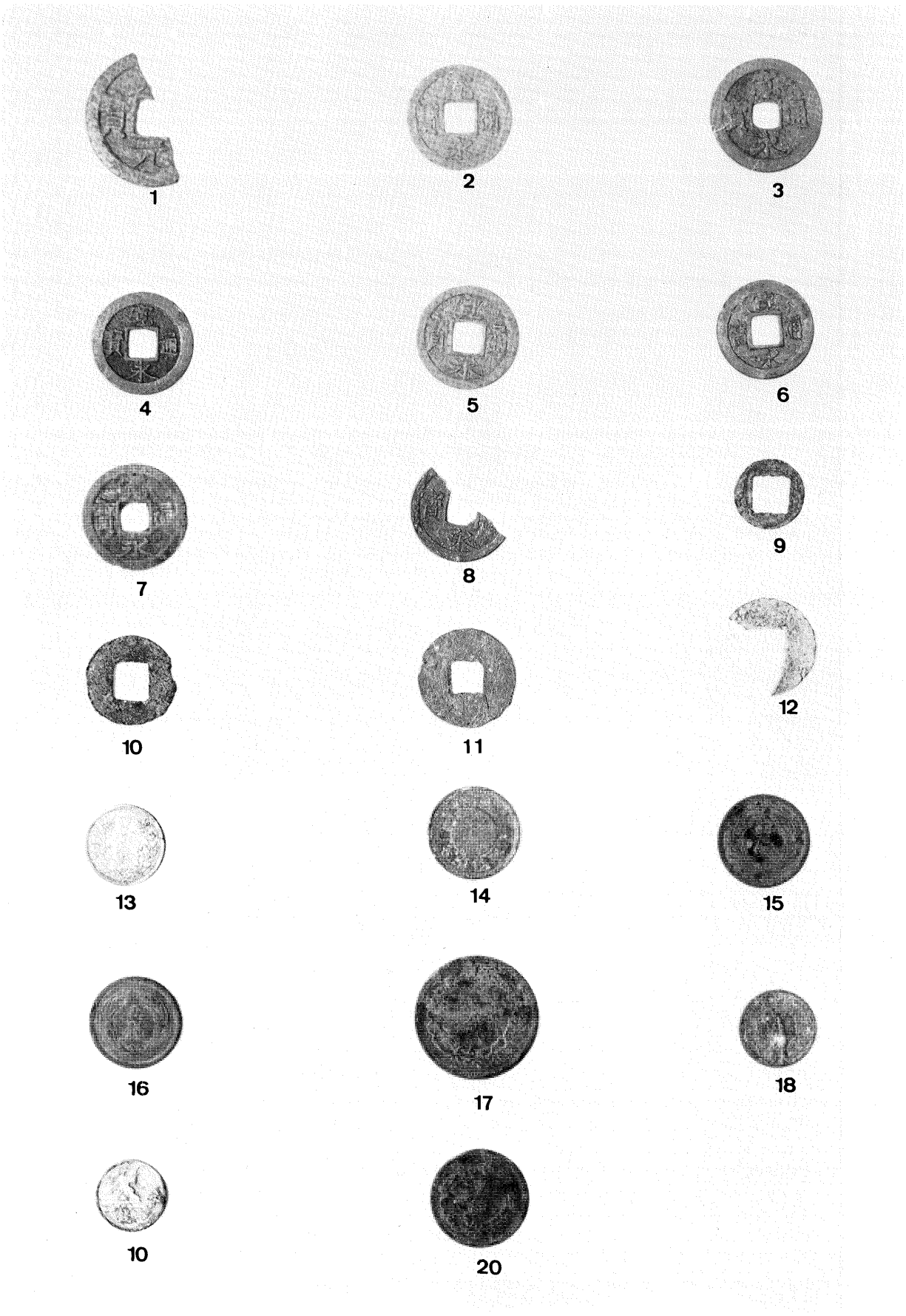
図版72　石碑１・２、台石３



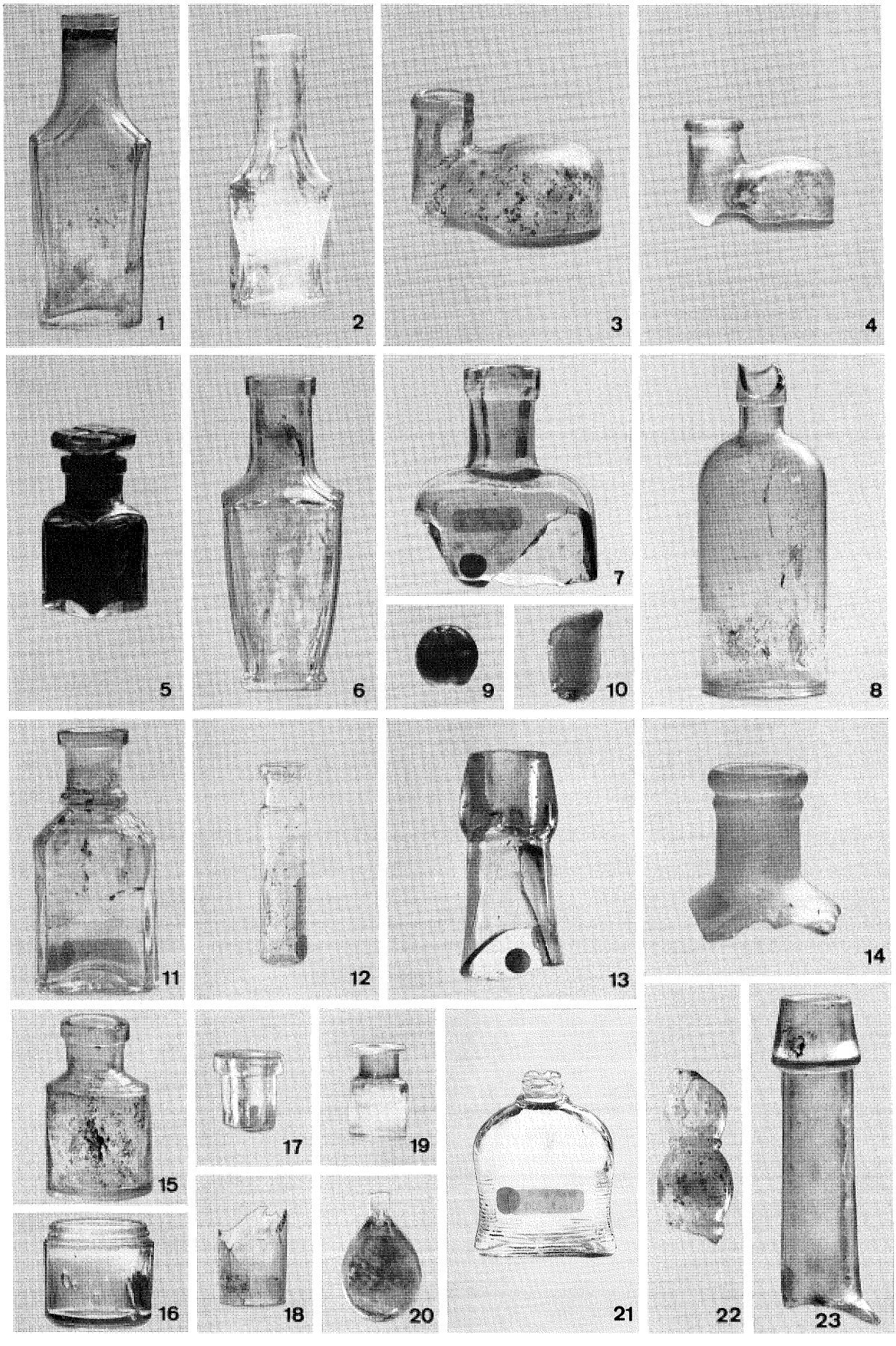
図版73　石球１～３、砥石４、石製樋（凝灰岩）５～８、陶製土管９



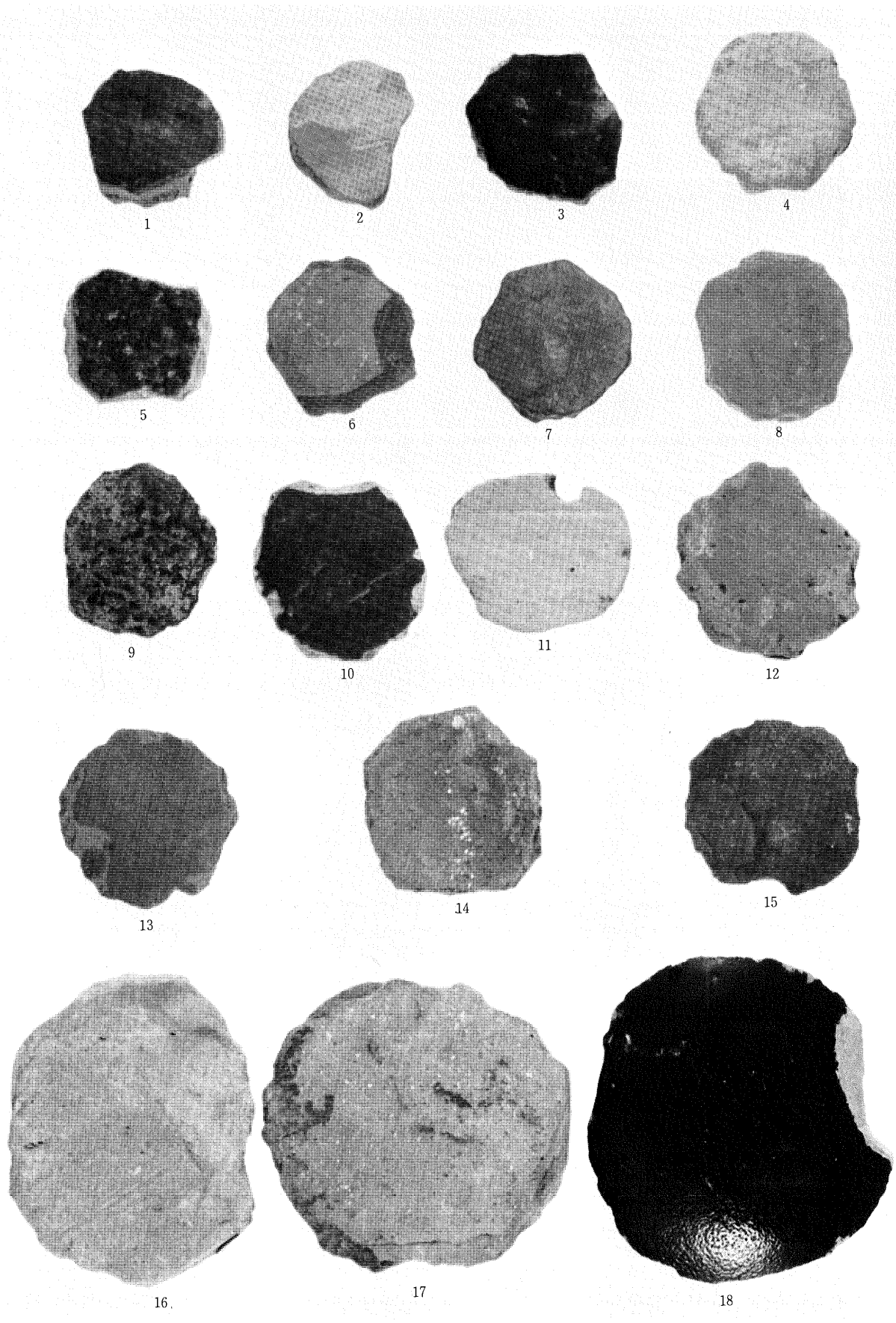
図版74　古銭



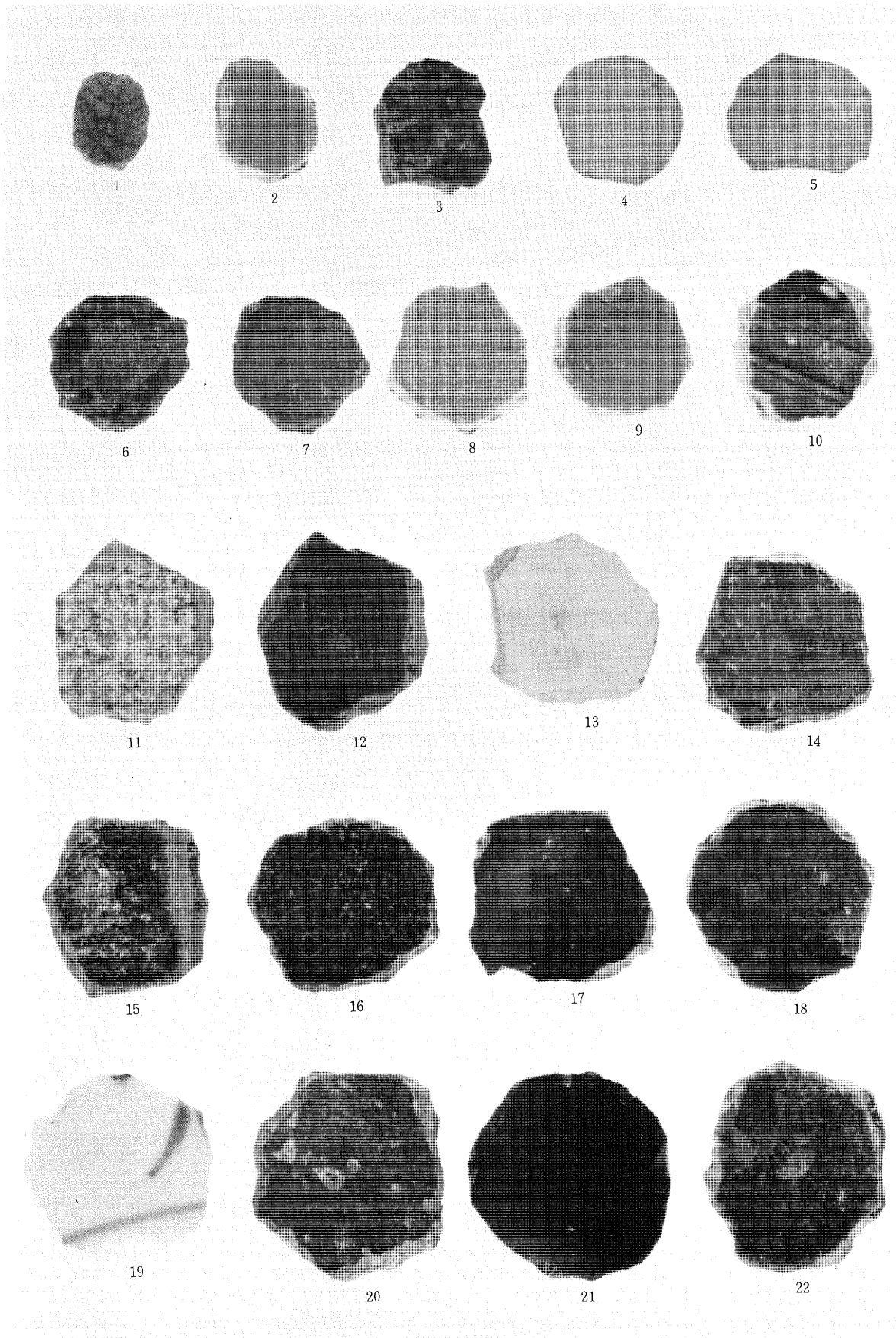
図版75　古銭



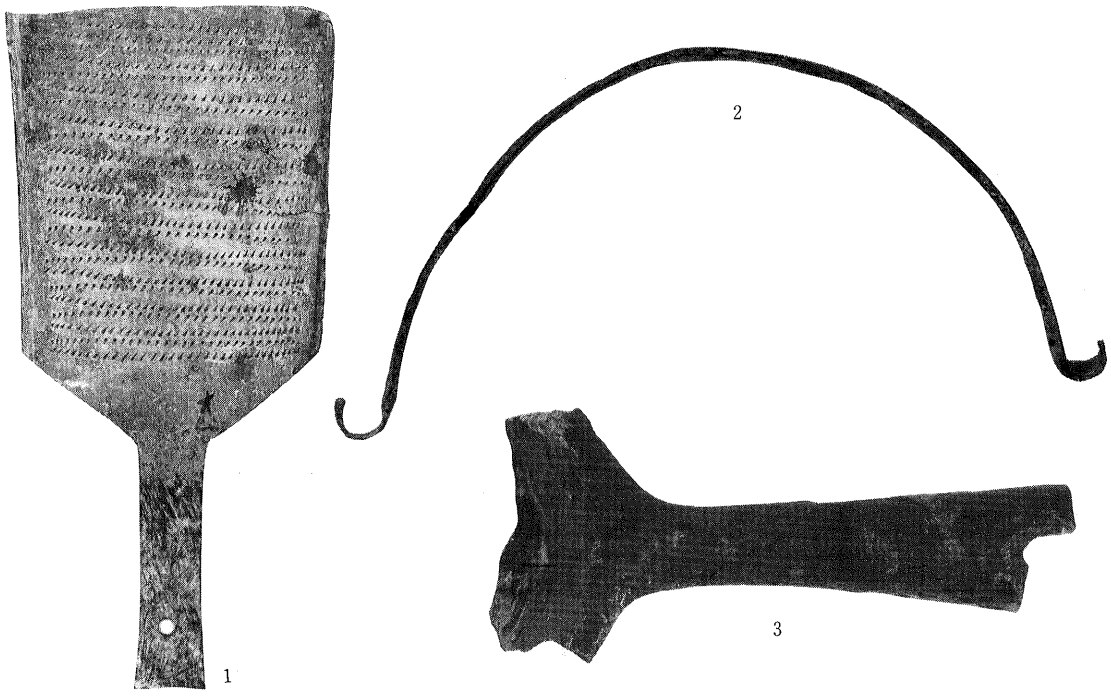
図版76　ガラス製品

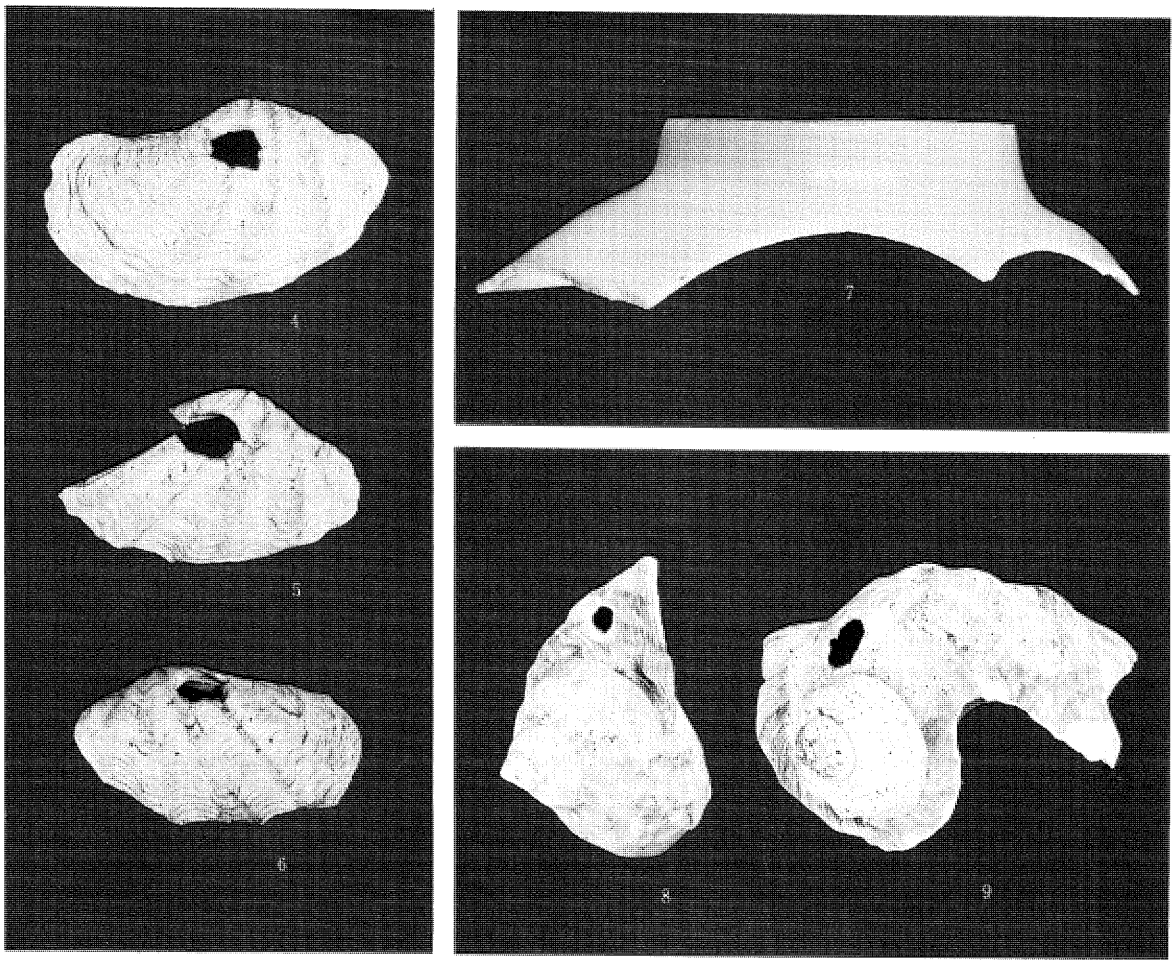


図版77　円盤状製品



図版78　円盤状製品





図版79　金属製品１～３、貝製品４～６・８・９、ガラス製品（ランプの傘）７

昭和63年３月　発行

首　里　城　跡

歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査

編集　沖縄県教育庁文化課　ＴＥＬ　0988(66)2731～３
発行　沖縄県教育委員会
印刷　文進印刷株式会社　ＴＥＬ　0988(55)２３２３